高松市埋蔵文化財調査報告　第80集

都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第１冊

西ハゼ土居遺跡

2005年３月

高 松 市 教 育 委 員 会

西ハゼ土居遺跡遠景（東から）

例　言

1　本報告書は，都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第１冊で，西ハゼ土居（にしはぜどい）遺跡の報告を収録した。

2　発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。

調 査 地　高松市西ハゼ町 179 － 5 ほか

調査期間　試掘調査　　平成 8 年 8 月 5 日～ 12 日
　　平成 9 年 6 月 6 日～ 9 月 17 日
　　平成 10 年 5 月 22 日～ 8 月 3 日
　防火水槽埋設工事立会　平成 9 年 9 月 18 日
　下水管埋設工事立会　　平成 10 年 4 月 7 日，5 月 6 日

3　発掘調査から整理作業，報告書執筆・編集まで高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員大嶋和則が担当した。

4　本調査に関して，以下の業務を業者委託発注により実施した。

発掘調査掘削工事　河西建設株式会社（平成 9 年度），大一工業株式会社（平成 10 年度）
航空写真測量業務　アジア航測株式会社
遺物写真撮影業務　西大寺フォト

5　発掘調査及び遺物整理・本報告書刊行にあたって，下記の関係諸機関ならびに方々から貴重なご教示・ご指導を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順，敬称略）

香川県教育委員会，（財）香川県埋蔵文化財調査センター，勝賀城跡保存会，鶴尾地区老人会，
秋山忠，片桐孝浩，寒川旭，外山秀一，丹羽佑一，松本和彦

6　発掘調査及び遺物整理・本報告書刊行にあたって，下記の方々の協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順，敬称略）

末光甲正・中西克也（讃岐文化遺産研究会），山内康郎（徳島文理大学大学院），坂東祐介（徳島文理大学），
十河佐千子・松原敬太・吉本和哉（香川大学），今西康代（佛教大学），鍋坂佑紀子（京都橘女子大学）

7　挿図として，国土地理院発行の 1/25,000 地形図「高松南部」を一部改変して使用した。

8　本報告の高度値は海抜高を表し，方位は国土座標第Ⅳ系（日本測地系）の北を示す。

9　本書で用いる遺構の略号は次の通りである。

ＳＡ……柵列　　ＳＢ……掘立柱建物　　ＳＤ……溝　　ＳＥ……井戸　　ＳＫ……土坑
ＳＰ……柱穴　　ＮＲ……自然河道

10　調査は複数年次，複数調査区，複数遺構面になることから，遺構番号は調査区番号，遺構面番号，３桁の遺構番号の順で，合計５桁の数字で記載した。（例 Ⅳ区・第２遺構面・土坑 109 ＝ SK42109）

なお，自然河道については調査区をまたがるものもあることから，２桁の番号で記載した。

11　発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

本文目次

巻頭図版

第1章　調査の経緯と経過
　第1節　調査に至る経緯……1
　第2節　調査の経過……3
　第3節　整理作業の経過……3

第2章　地理的・歴史的環境
　第1節　地理的環境……4
　第2節　歴史的環境……4

第3章　調査の成果
　第1節　Ⅰ区の調査……7
　第2節　Ⅱ区の調査……19
　第3節　Ⅲ区の調査……22
　第4節　Ⅳ区の調査……45
　第5節　Ⅴ区の調査……46
　第6節　Ⅵ区の調査……58
　第7節　Ⅶ区の調査……82

第4章　まとめ
　第1節　遺構の変遷について……85
　第2節　屋敷地の居住者について……101

観察表……113

写真図版……121

報告書抄録……135

挿図目次

第 1 図　西ハゼ土居遺跡位置図…… 1
第 2 図　試掘トレンチ及び調査区位置図…… 2
第 3 図　周辺の遺跡分布図（S=1/25,000）…… 5
第 4 図　Ⅰ区南壁土層断面図及び包含層出土遺物実測図… 8
第 5 図　Ⅰ区平面図①…… 9
第 6 図　Ⅰ区平面図②…… 10
第 7 図　Ⅰ区検出噴砂平･断面図…… 11
第 8 図　NR02 平・断面図及び遺物実測図 …… 13
第 9 図　SK12001 平・断面図 …… 14
第 10 図　SK12002 平・断面図 …… 14
第 11 図　SO12001 平・断面図 …… 14
第 12 図　SB12001 ～ SB12006 平・断面図 …… 15
第 13 図　SB12001・SB12002 平・断面図 …… 16
第 14 図　SB12003・SB12004 平・断面図 …… 17
第 15 図　SB12005・SB12006 平・断面図 …… 18
第 16 図　Ⅱ区南壁土層断面図及び包含層出土遺物実測図… 20
第 17 図　Ⅱ区平面図及び NR03・NR04 出土遺物実測図…… 21
第 18 図　Ⅲ区包含層出土遺物実測図…… 22
第 19 図　Ⅲ区南壁土層断面図…… 23
第 20 図　Ⅲ区第 1 遺構面平面図①…… 24
第 21 図　Ⅲ区第 1 遺構面平面図②…… 25
第 22 図　Ⅲ区第 1 遺構面平面図③…… 26
第 23 図　Ⅲ区第 2 遺構面平面図①…… 27
第 24 図　Ⅲ区第 2 遺構面平面図②…… 28
第 25 図　Ⅲ区第 2 遺構面平面図③…… 29
第 26 図　Ⅲ区噴砂平・断面図…… 30
第 27 図　NR06 平・断面図 …… 31
第 28 図　NR06 出土遺物実測図 …… 32
第 29 図　SK32001 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 33
第 30 図　SK32002 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 34
第 31 図　NR04 出土遺物実測図① …… 36
第 32 図　NR04 出土遺物実測図② …… 37
第 33 図　NR07 出土遺物実測図 …… 37
第 34 図　SK31001 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 38
第 35 図　SA31001・SA31002 平・断面図 …… 38
第 36 図　SB31001 平・断面図 …… 38
第 37 図　SB31002 平・断面図 …… 40
第 38 図　SB31003 平・断面図 …… 40
第 39 図　SB31004 平・断面図 …… 40
第 40 図　SB31005 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 41
第 41 図　SB31006 平・断面図 …… 41
第 42 図　SB31007 平・断面図 …… 42
第 43 図　SB31008 平・断面図 …… 42
第 44 図　SB31009 平・断面図 …… 44
第 45 図　SB31010 平・断面図 …… 44
第 46 図　SB31011 平・断面図 …… 44
第 47 図　Ⅳ区平面図及び南壁土層断面図…… 45
第 48 図　Ⅴ区平面図…… 46
第 49 図　Ⅴ区南壁土層断面図…… 47
第 50 図　NR09 出土遺物実測図 …… 48
第 51 図　SE51001 平・断面図及び出土遺物実測図① …… 49
第 52 図　SE51001 出土遺物実測図② …… 50
第 53 図　SD51001 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 52
第 54 図　SD51006 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 52
第 55 図　SD51018 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 53
第 56 図　SK51001 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 54
第 57 図　SK51010 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 55
第 58 図　SK51017 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 55
第 59 図　SK51020 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 56
第 60 図　SK51025 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 56
第 61 図　SK51030 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 57
第 62 図　SK51031 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 57
第 63 図　Ⅵ区平面図①…… 58
第 64 図　Ⅵ区平面図②…… 59
第 65 図　SD61002 平・断面図 …… 60
第 66 図　SD61012 平・断面図及び出土遺物実測図① …… 61
第 67 図　SD61012 出土遺物実測図② …… 62
第 68 図　SD61020 平面図 …… 63
第 69 図　SD61020 断面図及び出土遺物実測図① …… 64
第 70 図　SD61020 出土遺物実測図② …… 65
第 71 図　SD61020 出土遺物実測図③ …… 66
第 72 図　SD61021 断面図及び出土遺物実測図 …… 67
第 73 図　SD61022 断面図及び出土遺物実測図 …… 67
第 74 図　SD61023 平・断面図 …… 68
第 75 図　SD61023 出土遺物実測図 …… 69
第 76 図　SE61001 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 70
第 77 図　SE61002 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 71
第 78 図　SK61005 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 72
第 79 図　SK61011 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 72
第 80 図　SK61012 平・断面図及び出土遺物実測図① …… 73
第 81 図　SK61012 出土遺物実測図② …… 74
第 82 図　SK61020 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 75
第 83 図　SK61021 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 75
第 84 図　SK61033 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 76
第 85 図　SK61035 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 77
第 86 図　SK61079 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 78
第 87 図　SK61081 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 78
第 88 図　SK61085 平・断面図 …… 79
第 89 図　SK61086 平・断面図 …… 80
第 90 図　SK61094 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 81
第 91 図　SK61122 平・断面図及び出土遺物実測図 …… 81
第 92 図　Ⅶ区平面図…… 82
第 93 図　SB71001 平・断面図 …… 83
第 94 図　SB71002 平・断面図 …… 83
第 95 図　弥生時代前期の主要遺構…… 87
第 96 図　弥生時代中期後半～後期初頭の主要遺構…… 89

第 97 図　弥生時代終末期～古墳時代初頭の主要遺構…… 91
第 98 図　古墳時代末～古代の主要遺構…… 93
第 99 図　古代末～中世初頭の主要遺構…… 95
第 100 図　中世末～近世初頭の主要遺構…… 97
第 101 図　近世の主要遺構…… 99
第 102 図　屋敷地復元図（地籍図と合成）…… 102
第 103 図　室山城跡縄張り図…… 103
第 104 図　周辺城跡分布図…… 105

挿表目次

第 1 表　整理作業工程表…… 3
第 2 表　水田一覧表…… 12
第 3 表　古記録に見る坂田郷内城主一覧…… 104

写真図版目次

写真 1　Ⅰ・Ⅱ区全景（南から）…… 122
写真 2　Ⅰ～Ⅲ区全景（南から）…… 122
写真 3　Ⅳ・Ⅴ区全景（南から）…… 123
写真 4　Ⅵ・Ⅶ区全景（南から）…… 123
写真 5　作業風景（Ⅲ区東から）…… 124
写真 6　Ⅰ区南壁土層（東から）…… 124
写真 7　Ⅰ区南壁土層（北から）…… 124
写真 8　Ⅰ区第 2 遺構面完掘状況（西から）…… 124
写真 9　Ⅰ区小区画水田（南から）…… 124
写真 10　Ⅰ区検出噴砂（西から）…… 124
写真 11　Ⅰ区検出噴砂（北から）…… 124
写真 12　Ⅰ区検出噴砂（西から）…… 124
写真 13　Ⅱ区第 1 遺構面完掘状況（東から）…… 125
写真 14　Ⅱ区第 2 遺構面完掘状況（南から）…… 125
写真 15　Ⅲ区 NR04 及び掘立柱建物群（西から）…… 125
写真 16　Ⅲ区 NR06 西肩（北から）…… 125
写真 17　Ⅲ区 NR05 西肩（南から）…… 125
写真 18　Ⅲ区 SK32004（東から）…… 125
写真 19　Ⅲ区 SK32002（東から）…… 125
写真 20　Ⅲ区検出噴砂（西から）…… 125
写真 21　Ⅲ区 NR06 完掘状況（南から）…… 126
写真 22　Ⅲ区 NR06 木器出土状況（北から）…… 126
写真 23　Ⅲ区 NR06 木器出土状況（北から）…… 126
写真 24　実測風景（南から）…… 126
写真 25　Ⅴ区完掘状況（南から）…… 126
写真 26　Ⅴ区 SE51001 上面（東から）…… 126
写真 27　Ⅴ区 SE51001 断面（西から）…… 126
写真 28　Ⅴ区 SE51001 完掘状況（南から）…… 126
写真 29　Ⅵ区完掘状況（西から）…… 127
写真 30　Ⅵ区 SD61020（西から）…… 127
写真 31　Ⅵ区 SD61020 遺物出土状況（北から）…… 127
写真 32　Ⅵ区 SD61020 遺物出土状況（南から）…… 127
写真 33　Ⅵ区 SD61020（西から）…… 127
写真 34　Ⅵ区 SD61023（西から）…… 127
写真 35　Ⅵ区 SD61023 断面（北から）…… 127
写真 36　Ⅵ区 SD61023 内ピット群（西から）…… 127
写真 37　Ⅵ区屋敷地 A・B（西から）…… 128
写真 38　Ⅵ区屋敷地 C（南から）…… 128
写真 39　Ⅵ区 SE61002 上面（南から）…… 128
写真 40　Ⅵ区 SE61002 完掘（西から）…… 128
写真 41　Ⅵ区 SE61001 断面（北から）…… 128
写真 42　井戸掘削状況（西から）…… 128
写真 43　Ⅵ区 SE61001 完掘（南から）…… 128
写真 44　Ⅵ区 SK61051 土器出土状況（南から）…… 128
写真 45　Ⅵ区 SD61012 土器出土状況（東から）…… 129
写真 46　Ⅵ区 SD61012 土器出土状況（東から）…… 129
写真 47　Ⅵ区 SK61086 土器出土状況（南から）…… 129
写真 48　Ⅵ区 SK61033 遺物出土状況（北から）…… 129
写真 49　Ⅵ区 SK61011 断面（南から）…… 129
写真 50　Ⅵ区 SK61011 遺物出土状況（南から）…… 129
写真 51　Ⅶ区 SB7101・SB71002（西から）…… 129
写真 52　Ⅵ区から室山城跡を望む（南から）…… 129
写真 53　西ハゼ土居遺跡出土遺物①…… 130
写真 54　西ハゼ土居遺跡出土遺物②…… 131
写真 55　西ハゼ土居遺跡出土遺物③…… 132
写真 56　西ハゼ土居遺跡出土遺物④…… 133
写真 57　西ハゼ土居遺跡出土遺物⑤…… 134

第1章 調査の経緯と経過

第1節　調査に至る経緯

高松市では市内木太町と鬼無町を東西に結ぶ都市計画道路木太鬼無線が計画された。特に県道川東高松線～県道勅使室新線区間は，高松自動車道建設工事の際の迂回道路として使用する目的から，早期の完成が望まれていた。平成8年4月，事業者である高松市都市開発部都市計画課より高松市教育委員会に対して道路建設予定地における埋蔵文化財有無の照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが，周辺には国史跡である石清尾山古墳群をはじめ多数の遺跡が存在し，建設予定面積が約10,000㎡と広大であることから，事前に道路建設予定地内について試掘調査を実施することで合意した。

これを受け，高松市教育委員会では平成8年8月5日～12日に道路建設予定地内の用地買収完了地について試掘調査を実施した。第2図に掲載したとおり，19箇所のトレンチ調査を行った。このうち調査対象地の中央部分にあたる第12～15トレンチについては遺物を含まない自然河道が見られたものの，その他のトレンチにおいては弥生時代～江戸時代にかけての遺構・遺物を確認することができた。第19トレンチ以東については未買収で調査ができなかったため，平成8年度時点では，約5,500㎡が埋蔵文化財包蔵地と考えられた。

この試掘調査結果をもとに都市計画課と協議を行った結果，第19トレンチ以東の状況が不明であるが，道路建設前に遺跡の所在する部分については発掘調査を実施し，記録保存を行うことで合意した。平成9年度下半期から工事が開始されるため，当該5,500㎡については9年度上半期で発掘調査を実施することとし，第19トレンチ以東については後日の試掘調査を待ち，改めて協議を行うこととした。その後，平成9年9月18日に約20㎡の防火水槽埋設工事に伴い立会調査を実施し，中世～江戸時代の遺構・遺物を検出したことから，第19トレンチ以東の約2,500㎡についても遺跡であることが判明した。そこで，再度都市計画課と協議を行い，第19トレンチ以東の2,500㎡については平成10年度上半期に調査を実施することで合意した。

第1図　西ハゼ土居遺跡位置図

第２図　試堀トレンチ及び調査区位置図

第2節　調査の経過

前節で記した協議結果のとり，発掘調査は，平成9・10年度の2ヵ年に分けて実施することとなった。

平成9年度調査については埋蔵文化財包蔵地約5,500㎡のうち，現有道路や水路の保全，住宅への進入路や安全確保上調査が不能な部分を除く約3,700㎡について6月6日から9月17日の間で実施した。調査地には市道，私道，水路等保全しなければならない構造物があったため，これらを境として5区分し，調査区の西端のⅠ区から東進しながら，順次Ⅴ区まで調査を進めた。

平成10年度調査地についても，前段と同様の理由から，2,500㎡の埋蔵文化財包蔵地に対し，約2,300㎡の調査を予定していたところ，調査に先立つ4月7日と5月6日の両日，下水道管埋設工事（約180㎡）が実施されることが判明した。そこで，事業者の高松市土木部下水道建設課と協議をし，当該掘削地については工事立会調査対応としたため，10年度調査面積は2,100㎡となり，水路を境にⅥ・Ⅶ区に分け，5月22日から8月3日の間で発掘調査を実施した。

なお，調査成果の公開のため，調査終了直前の8月2日に，約170名の参加を得て遺跡現地説明会を開催した。

第3節　整理作業の経過

本報告書の整理作業は，整理作業員1名で行ったため，長期間に及んだ。平成11・12年度に土器洗浄，注記作業，接合等の基礎整理を行い，13・14年度において実測，15年度にトレース，16年度には報告書の執筆を行った。工程表は以下のとおりである。

第1表 整理作業工程表

	平成11年度		平成12年度		平成13年度		平成14年度		平成15年度		平成16年度	
	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期
土器洗浄												
注　記												
接合・復元												
実　測												
遺物写真撮影												
トレース												
レイアウト												
報告書執筆												

第2章　地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し，市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野が広がっている。気候が温暖なこともあって，讃岐三白（綿・塩・砂糖）の産出が有名であった。南部に讃岐山脈の北縁がかかり，東西に日妻山，上佐山，実相寺山，由良山が続く。東部に屋島，立石山塊，西部に石清尾山，浄願寺山，白峰，堂山の山系が連なる。いずれも讃岐山脈の基盤である洪積台地と同じ地層からなるメサ，あるいはビュート型の溶岩台地で，塩江町との境（標高532.9ｍ），白峰山塊の青峰（449.3ｍ）以外は20～300ｍの低い山地である。北方はひらけ，瀬戸内海に面し，男木島，女木島，大槌島，小槌島などの島をも市域に含み，備讃瀬戸を挟んで岡山県と対峙する。

高松平野は，讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。高松平野には，西から本津川，香東川，御坊川，詰田川，春日川，新川といった河川が北流しているが，なかでも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており，現存の春日川以西が香東川による沖積平野といわれている。現在，石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は17世紀初めの河川改修によるもので，それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐した後，石清尾山塊の南側から回り込んで，平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は，現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが，空中写真等から，林から木太地区にかけての分ヶ池，下池，長池，大池，ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており，発掘調査でもその痕跡が確認されている。林から木太地区にかけての流路はしだいに機能停止し平準化し，西側へ流路が移っていったと考えられる。なお，17世紀の廃川直前の流路は，御坊川として今でもその名残りをとどめている。

西ハゼ土居遺跡は高松平野の中央部に位置し，ビュート地形の典型例である石清尾山塊の南麓に位置する。鶴尾神社へ伸びる尾根と室山の尾根の先端に位置し，遺跡北側にはこれら尾根を結んで貯水した奥の池が所在する。また，平野の形成に大きな役割を果たした香東川の旧流路帯の西端に位置しており，遺跡の東半は旧香東川氾濫原内に位置する。現標高は遺跡の西端で約13.7ｍ，東端で約11.9ｍである。

第2節 歴史的環境

高松平野では，ここ10数年間の大規模な開発事業（高松東道路建設事業，空港跡地開発事業等）の事前調査により，遺跡数が飛躍的に増大しつつある。

旧石器時代では，高松平野及び周辺丘陵部で，表採や混入で発見された久米池南遺跡，雨山南遺跡と，ＡＴ火山灰上層からナイフ型石器等を出土した中間西井坪遺跡が知られている。また，石清尾山塊の南西に所在する中森遺跡において原位置をとどめた石器ブロックの存在が4箇所で確認されている。

次に，縄文時代では，大池遺跡で草創期の有舌尖頭器2点の採集が報告されている。また，井手東Ⅰ遺跡では現地表下約70cmでアカホヤ火山灰の堆積層があり，縄文中期における平野の形成過程をうかがうことができる。草創期から後期にかけての遺跡は少ないが，晩期になると，近年の平野部の発掘調査により発見例が相次ぎ，林・坊城遺跡，　浴・松ノ木遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，井手東Ⅱ遺跡，居石遺跡，上天神遺跡，東中筋遺跡から新たな資料が提示されている。

弥生時代前期になると，天満・宮西遺跡，空港跡地遺跡，大池遺跡，松縄下所遺跡等が新たに登場してくる。このうち，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡ではこの時期から小区画の水田が営まれており，早い時期から稲作文化が受け入れられていたことがうかがえる。また，汲仏遺跡，鬼無藤井遺跡等の調査では多重環濠を持つことが分かった。なお，隣接する松並・中所遺跡においても環濠の可能性のある溝が検出されている。

これに続く弥生時代中期では，多肥松林遺跡，日暮・松林遺跡，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡が見られる。いずれの遺跡も環濠を持たず，中期には環濠が廃絶してしまう傾向が見られる。隣接する松並・中所遺跡においても中期後半の竪穴住居が多数検出されている。なお，松並・中所遺跡の西方には，近年の試掘調査によって北山浦遺跡が確認されており，松並・中所遺跡より先行する集落の可能性が考えられる。また，中期後半になると久米池南遺跡に代表されるように丘陵上に集落を営む例が多い。

石清尾山塊においても頂部から緩斜面にかけて中期後半～末を中心とした時期の遺物が出土した摺鉢谷遺跡が知られているほか，近年の試掘調査によって御殿貯水池南遺跡の存在も確認された。

弥生時代後期になると遺跡数は増大する。平野部では，上天神遺跡，天満・宮西遺跡，凹原遺跡，空港跡地遺跡のように十数棟の住居跡と多量の廃棄土器を伴う集落の他に太田下・須川遺跡，蛙股遺跡，日暮・松林遺跡，井手東Ⅰ遺跡などの集落遺跡がある。

古墳時代の集落遺跡は前期段階では確認できていない。中期以降についても少なく，中期の竪穴住居を検出し，韓式系土器が出土した六条・上所遺跡と中期～後期の竪穴住居や掘立柱建物を検出した太田下・

1 西ハゼ土居遺跡	2 松並・中所遺跡	3 北山浦遺跡	4 東中筋遺跡	5 大田下・須川遺跡
6 上天神遺跡	7 稲荷山北古墳群	8 稲荷山姫塚古墳	9 室山城跡	10 奥ノ池遺跡
11 奥ノ池古墳群	12 鶴尾神社４号墳	13 北山浦古墳群	14 北大塚西古墳	15 北大塚古墳
16 北大塚東古墳	17 石船塚古墳	18 鏡塚古墳	19 小塚古墳	20 姫塚古墳
21 摺鉢谷遺跡	22 摺鉢谷９号墳	23 猫塚古墳	24 片山城跡	25 野山古墳群
26 浄願寺山古墳群	27 南山浦古墳群	28 片山池１号窯跡	29 坂田廃寺	30 南山浦１号窯跡
31 がめ塚古墳	32 御殿貯水池南遺跡			

第３図　周辺の遺跡分布図（国土地理院発行 S=1/25,000 地形図「高松南部」を使用）

須川遺跡が知られているに過ぎない。集落遺跡の稀少性に比して古墳の築造は顕著なものがある。前方後円墳出現期の鶴尾神社4号墳をはじめ，双方中円墳の猫塚，舟形石棺をもつ石船塚等，前期の積石塚の古墳群として著名な石清尾山古墳群が遺跡の背後の石清尾山頂部尾根に見られる。中期古墳としては平野西部に今岡古墳が築かれ，その土製棺の製作地とされる中間西井坪遺跡との関係が注目される。これに後続する中期古墳は皆無に等しい。後期になると，浄願寺山古墳群や南山浦古墳群に代表されるように，石清尾山塊に数多くの横穴式石室を持つ小円墳が築造されている。

古代では，条里遺構と寺院関連遺跡が注目される。浴・長池遺跡，浴・松ノ木遺跡，井手東Ⅰ遺跡，蛙股遺跡，上天神遺跡，凹原遺跡，松縄下所遺跡等で条里坪界線と考えられる遺構を検出している。遺構の多くは平安時代から鎌倉時代の遺物を含み，一般に条里の施行期とされる奈良時代とはかなりの時期の隔たりがあるが，蛙股遺跡，松縄下所遺跡のように奈良時代を中心とした遺物の出土を見た遺跡もあり，条里地割の施行時期と存続期間を解明できるデータが揃いつつある。また，石清尾山塊と御坊川に挟まれた西ハゼ町，松並町，西春日町，峰山町を含む一帯は，『和名抄』の香川郡坂田郷の郷名を継ぐ中世郷に比定されている。この坂田郷では浄願寺山の東麓において坂田廃寺が調査され，基壇や礎石とともに白鳳期に遡る瓦も出土している。その背後の片山池北岸に位置する片山池瓦窯は6基以上の瓦窯が並列しており，1号窯は平安時代中期の半地下式有床式平窯で，5条のロストルが作り付けられている。出土瓦のうち坂田廃寺出土瓦と同笵のものが見られる。今回の調査でもこれと同笵の瓦が出土している。なお，空海への大師号追賜運動を展開した観賢は坂田郷出身の僧である。

坂田郷は平安時代末期から鎌倉前期に白河上皇の勅旨田が設けられ，その一部は立荘されて野原庄となり，次いで坂田庄が成立したが，これ以外の部分は公領として存続したと考えられる。なお，室町時代に現れる坂田郷はその後身にあたる。遺跡としては，隣接する松並・中所遺跡において12世紀後半～13世紀中葉にかけて集落が営まれており，中には屋敷地を区画する溝を有するものも見られる。今回の調査でも同時期の掘立柱建物が検出されている。また，空港跡地遺跡では溝に区画された建物跡が中世を通じて確認されており，当時の村落のあり方が判明している。なお，城館の伝承を持つ神内城跡（木太町）や佐藤城跡（キモンドー遺跡）等の調査も実施されている。調査地周辺には太田氏の坂田城跡，片山氏の片山城跡などが知られているが，その具体的な比定地は諸説があり不確定である。また，背後の室山頂部には土塁をもつ山城の室山城跡がある。今回の調査でも堀で囲まれた屋敷跡を検出しており，これらの城館との関連が注目される。

近世では，近年高松城跡の発掘調査が相次ぎ，絵図等との比較により徐々にではあるが屋敷地の変遷過程が判明しつつある。また，石清尾山塊の東側に高松藩主松平頼重によって別荘である栗林荘が整備されている。なお，同時期の町家としては紺屋町遺跡，農村としては川南・東遺跡，川南・西遺跡，東山崎・水田遺跡等が知られている。今回の調査においても，陶磁器類が多量に出土している。

≪西ハゼ土居遺跡関連既刊報告書≫

山元敏裕 1997「西ハゼ土居遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度』香川県教育委員会
大嶋和則 1999「西ハゼ土居遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成9年度』香川県教育委員会
大嶋和則 2000「西ハゼ土居遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成10年度』香川県教育委員会
塩崎誠司 1995「川東高松線（都市計画道路錦町国分寺線）」『埋蔵文化財試掘調査報告Ⅸ』香川県教育委員会
塩崎誠司 1996「松並・中所遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度』香川県教育委員会
松本和彦ほか 1998『都市計画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度 松並・中所遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
松本和彦ほか 1999『都市計画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度 松並・中所遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
松本和彦 2000『都市計画道錦町国分寺綾南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 松並・中所遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

≪主要参考文献≫

秋山忠 1982『古城跡を訪ねて』高松市歴史民俗協会ほか
梅原末治 1933『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝国大学
大嶋和則 2002「北山浦遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報 －平成13年度国庫補助事業－ 』高松市教育委員会
小川賢 2004「御殿貯水池南遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報 －平成15年度国庫補助事業－ 』高松市教育委員会
川畑聰 1996『讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館
藤井雄三ほか 1983『鶴尾神社4号墳調査報告書』高松市教育委員会
香川県教育委員会 2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』

第３章　調査の成果

第１節　Ｉ区の調査

調査区の概要と基本層序（第４～６図）

Ｉ区は調査地の西端にあたり，（財）香川県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した松並・中所遺跡（松本 2000）に隣接する。調査区の南壁において断面図を作成し，第４図に掲載した。層序は 12 層に分層できた。第１層は花崗土で現代の客土層である。第２層は現代の耕作土，第３層は床土である。第４層は灰白色のシルト層である。第５層以下第 11 層までは全体がシルト質粘土の堆積層である。このうち遺構埋土である第６・７層以外は旧河道ないしその後背湿地状の堆積と考えられる。第 12 層はオリーブ灰色のシルト～細砂層で，遺物を含まないことから地山とした。

各層序の出土遺物は第４図に掲載した。１～９は第４層出土遺物で古代～中世のものが混在している。１は土師器の甕で，口縁部外面にタテハケが認められる。２は白磁碗で，高台無釉となっている。３は須恵器坏である。４は須恵器坏蓋で，内面にヘラ記号が認められる。５は須恵器坏である。６は須恵器壺の底部である。７は須恵器高杯脚柱部である。８は須恵器坏蓋である。９は須恵器坏である。10・11 は第５層出土遺物である。10 は須恵質の平瓦で，布目が認められ，中世のものと考えられる。11 は弥生後期の器台の口縁部である。口縁部を上下に拡張し，外面には凹線３条を巡らし，棒状浮文を施し，内面には波状文を施している。12 は第６層出土遺物で，弥生後期の甕で，外面タテハケ，内面指頭圧である。13 及び S1・S2 は第８層出土遺物である。13 は弥生中期末～後期初頭の高杯脚部である。脚柱部に沈線３条，脚裾部に沈線４条を巡らし，脚裾部には鋸歯文も施している。S1・S2 は抉りを持つ石庖丁である。14～16 は第 10 層出土遺物である。14 は弥生前期末～中期前半の甕口縁部で，体部外面に櫛描直線文，口縁端部に刻目を施している。15 は弥生土器の底部で，外面ナデ，内面指頭圧である。16 は弥生土器の底部で，底部外面指頭圧である。

遺構面は４面検出した。第４層上面において，淡黄色シルト層の溝１条と土坑１基が掘り込まれており，第１遺構面とした。第４層は中世の遺物までを含み，土坑埋土中から陶磁器片が出土したことから，概ね近世の遺構面と考えられる。

第４面以下の層序は旧河道または後背湿地状の堆積層であるが，第８層上面において掘立柱建物掘立柱建物跡１棟と旧河道１条，土坑，柱穴を多数検出し，第２遺構面とした。弥生終末期～古代の遺物が出土した NR02 以外の遺構については，遺物が出土していないため，同時期の遺構面と考えた。しかしながら，第２遺構面の下層では 13 の弥生中期末～後期初頭の高杯が出土し，上層では中世の遺物を含んでいることから，もう少し長期にわたる弥生後期～中世の遺構面とも考えられる。いずれにせよ，後背湿地状の地形ながらも比較的地盤が安定した時期であったことがうかがえる。

また，第９層上面では畦畔を検出し，第３遺構面とした。出土遺物は無いが，第３遺構面直上から 13 の高杯が出土しており，概ね弥生中期後半～末の遺構面と考えられる。

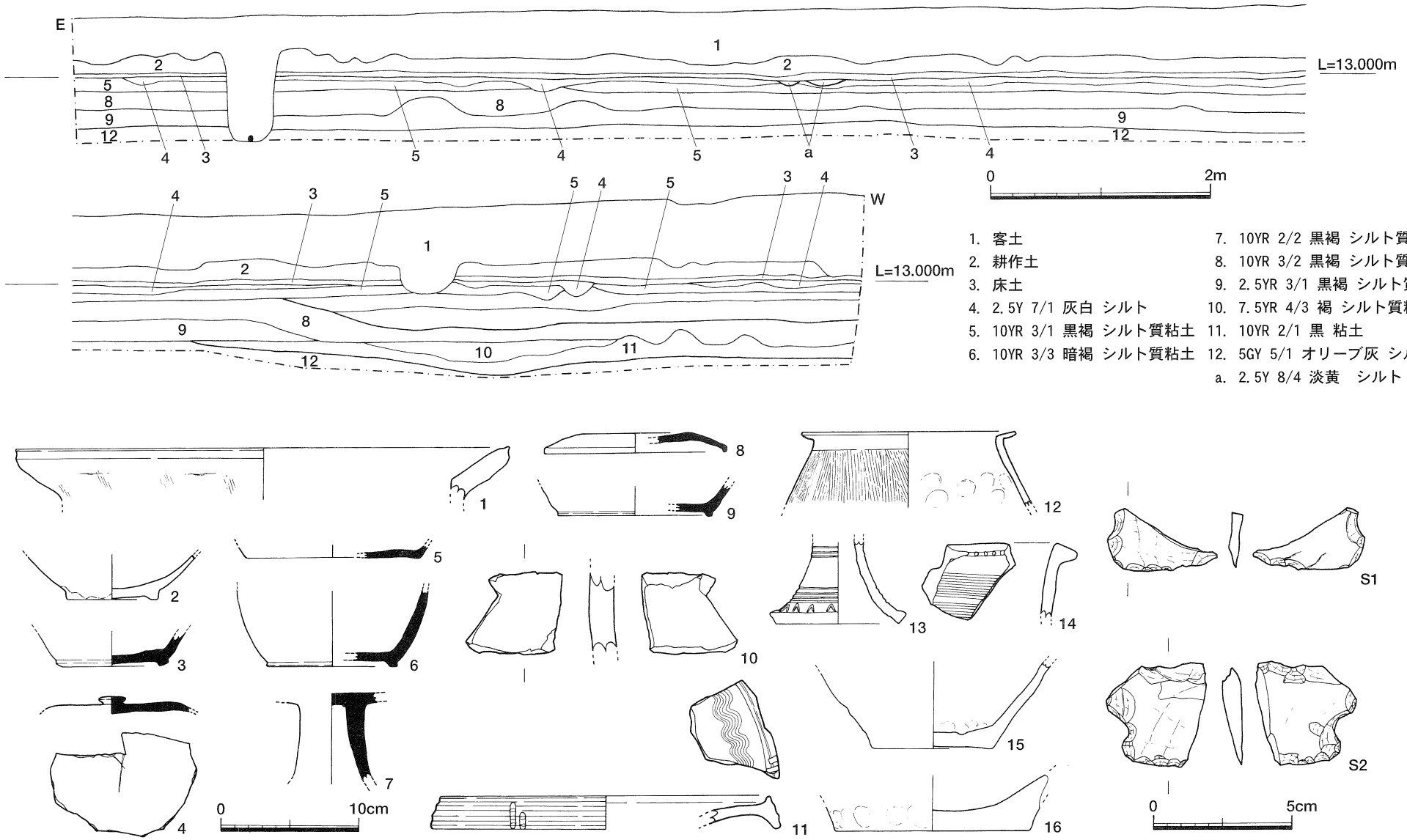
遺物を含まない第 12 層の上面においても，旧河道を検出しており，第４遺構面とした。旧河道埋土から 14 の弥生前期末～中期初頭の甕口縁部が出土しており，同時期の遺構面と考えられる。

第４遺構面の遺構

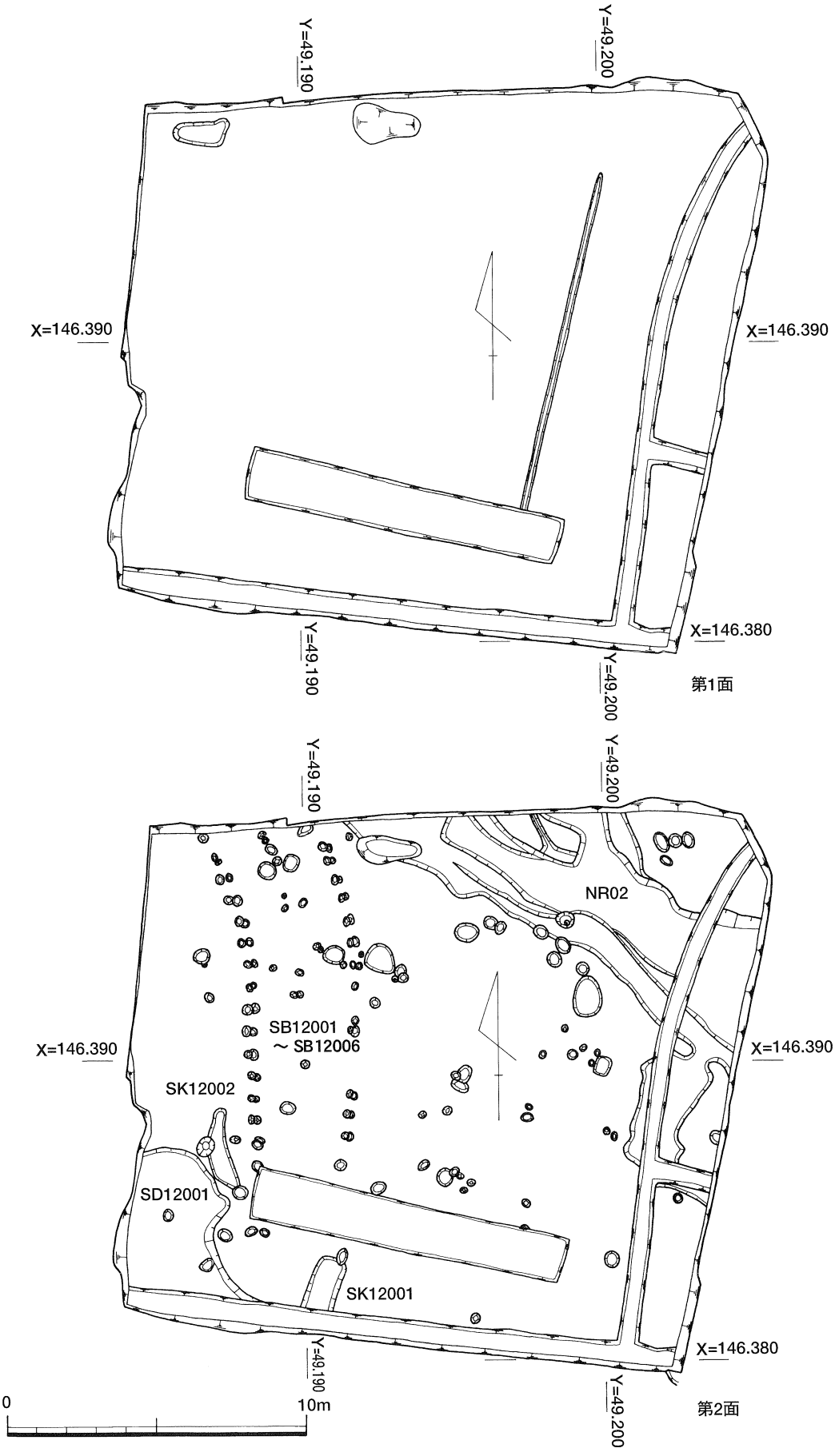
NR01（第６図）

第４遺構面で検出した南北方向の旧河道である。明瞭な落ち込みが無く，西に向かって緩やかに落ち込んでいる。幅は不明であるが，検出できた部分での最深部は約 40cm を測る。隣接する松並・中所遺跡Ⅶ区 ASR01 につながると考えられる。検出した部分の埋土は２層に分層でき，基本層序の 10・11 層にあたる。基本層序で示した第４図 14～16 が出土遺物で，弥生時代前期～中期初頭の埋没時期が考えられる。

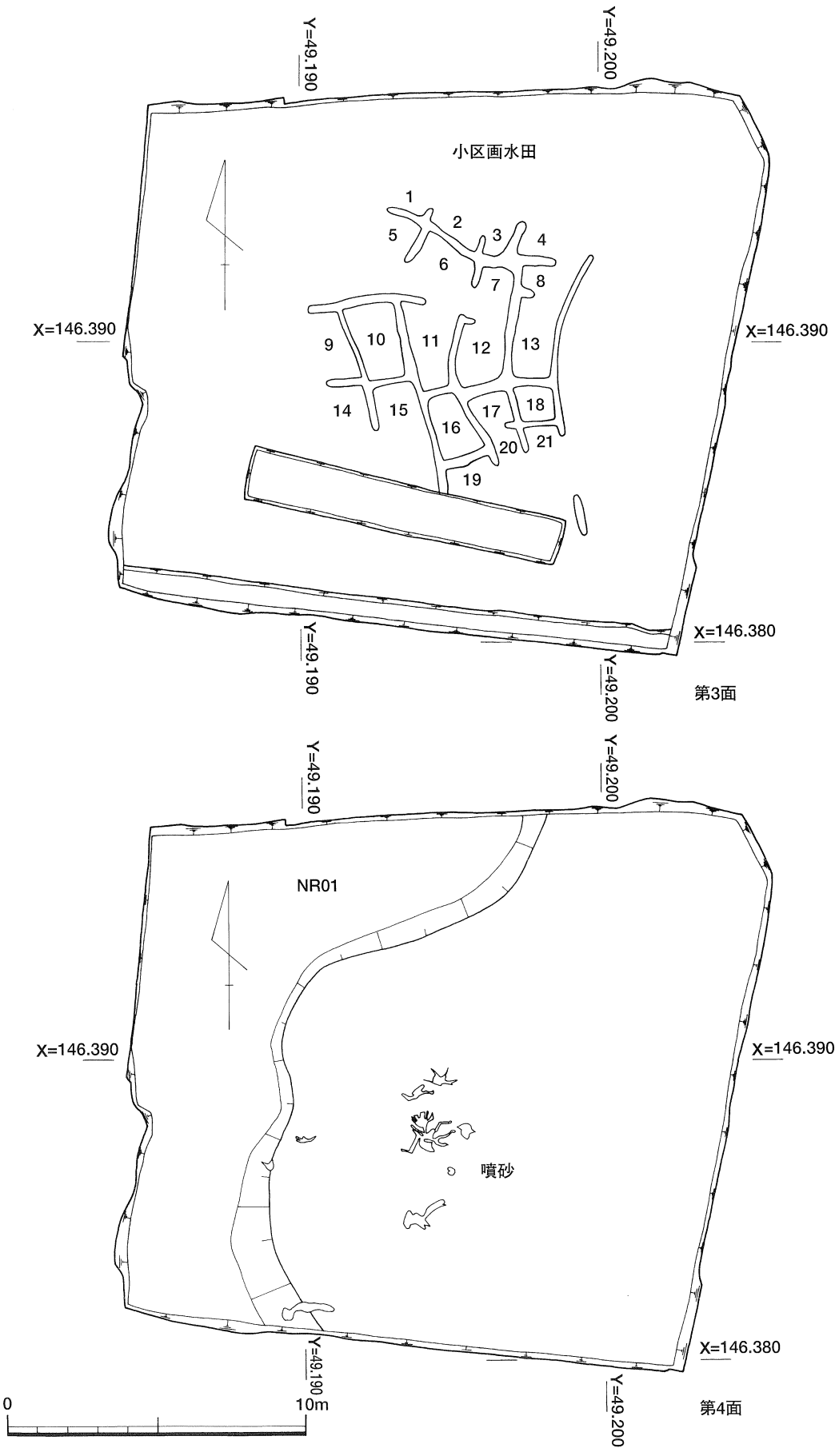
なお，松並・中所遺跡Ⅶ区 ASR01 は弥生時代前期前半末と中期後葉の２時期の河川としてとらえられている（松本 2000）。Ｉ区の基本層序は，第５層以下が旧河道埋土または後背湿地状の堆積層であり，このうち第８層において弥生中期末～後期初頭の遺物を含んでおり，第 10・11 層との間にある第９層が概ね弥生中期に堆積していることがうかがえる。松並・中所遺跡の調査成果と合わせて考えると，第 10・11 層が弥生前期前半末～中期初頭，第９層が弥生中期後葉の旧河道埋土になる可能性が考えられる。中期後葉の



第４図　Ｉ区南壁土層断面図及び包含層出土遺物実測図（１～９＝第４層　10.11＝第５層　12＝第６層　13＝第８層　14～16＝第10層　S1.S2＝第８層）


Y=49.190
Y=49.200
X=146.390
X=146.390
X=146.380
Y=49.190
Y=49.200
第1面
Y=49.190
Y=49.200
NR02
SB12001
～ SB12006
X=146.390
X=146.390
SK12002
SD12001
SK12001
X=146.380
Y=49.190
Y=49.200
第2面
0
10m

第5図　Ⅰ区平面図①

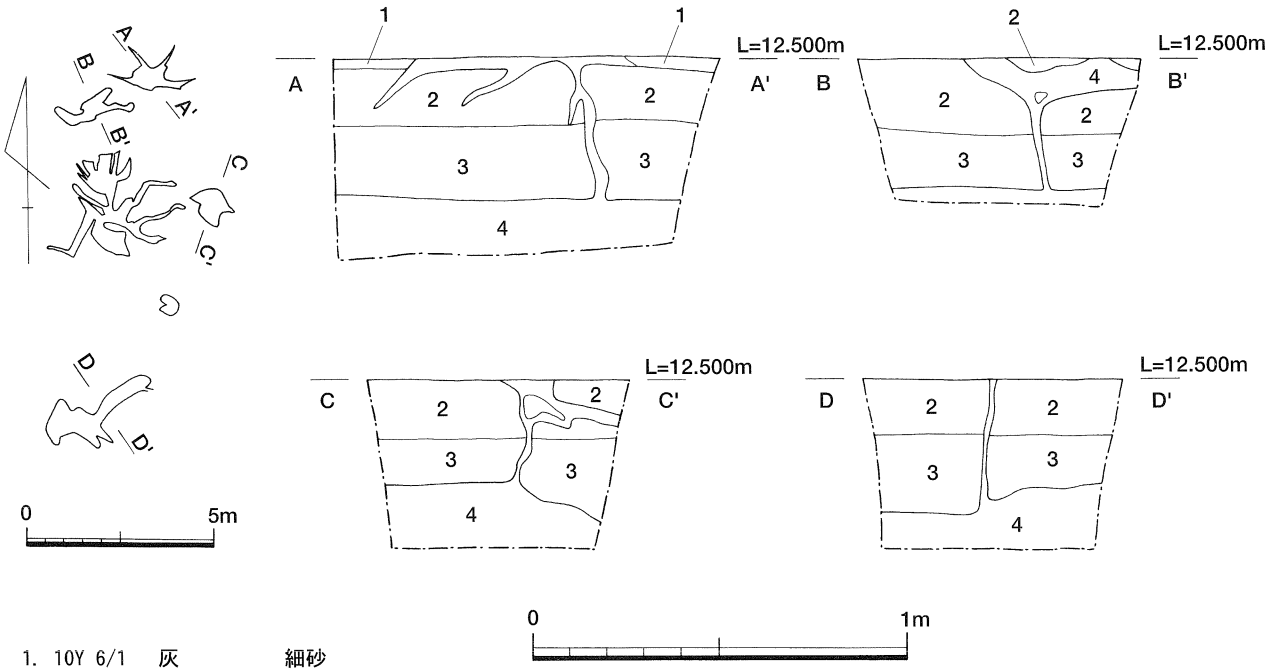

Y=49.190
Y=49.200
小区画水田
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
X=146.390
X=146.390
X=146.380
Y=49.190
Y=49.200
第3面
Y=49.190
Y=49.200
NR01
X=146.390
X=146.390
噴砂
X=146.380
Y=49.190
Y=49.200
第4面
0
10m

第６図　Ｉ区平面図②

旧河道である第9層はⅠ区全域に見られる層序で，旧河道幅が広がっていることがうかがえる。

噴砂（第7図）

第4遺構面で確認した地震痕跡である。調査区の中央部から南西部にかけて9箇所で検出した。平面形態は線状になるものは少なく，点的に認められるものや，放射状に伸びるものが多い。砂脈は地山のシルト～細砂層より2層下の灰白色細砂層から噴き上がっている。砂脈は幅2～5cm，高さ25～40cmを測る。弥生前期前半末～中期初頭に埋没したNR01に切られていることから，埋没以前の地震痕跡であり，弥生時代前期以前の地震によって形成されたものと考えられる。



1. 10Y 6/1　灰　細砂
2. 5GY 5/1　灰オリーブ　シルト～細砂
3. 5Y 6/2　灰オリーブ　シルト～細砂
4. 5Y 8/1　灰白　細砂

第7図　Ⅰ区検出噴砂平・断面図

第3遺構面の遺構

小区画水田（第6図）

NR01の最終埋没層である第9層上面で検出した小区画水田である。断面観察で9層上面において多数の畦畔が観察できたが，平面的には調査区の中央付近のみで21筆の水田を検出したに過ぎない。NR01の流路とほぼ同じカーブに沿って水田を検出しており，旧河道の流路を利用して水田が形成されたことがうかがえる。畦畔は，南北方向については連続しているが，東西方向は2～3筆ごとに食い違っている。水田の平面形態は南北に長い長方形のものが基本であるが，一部方形のものも見られる。一筆の面積は大きいもので4.44㎡，小さいものでは1.35㎡を測る。規模については，第2表に一覧表として掲載した。

出土遺物は無く，時期は不明であるが，水田面上層の第8層で第4図13の高杯が出土していることから，弥生中期末～後期初頭までには埋没した水田と考えられる。

なお，先述のとおり，第9層は松並・中所遺跡のSR01の弥生中期後葉の流路と同じと考えられる。松並・中所遺跡Ⅳ区CSR01最上層において稲作跡を推定する際の基準値である5,000個／gを上回る5,800個／gのプラントオパールが検出されており（松本2000），湿地状を呈した旧河道上面全域において稲作を行っていたことが考えられる。

第2表 水田一覧表

	南北(m)	東西(m)	面積(㎡)		南北(m)	東西(m)	面積(㎡)		南北(m)	東西(m)	面積(㎡)
1	0.40	1.30	0.52～	8	0.80	2.00	1.48	15	2.40	1.44	3.46～
2	0.60	1.80	1.08～	9	2.30	1.20	2.76～	16	2.10	1.50	2.42
3	1.40	0.80	1.12～	10	2.50	1.76	3.70	17	1.08	1.40	1.35
4	1.10	1.30	1.45～	11	3.06	2.00	4.44	18	1.20	1.30	1.56
5	1.30	1.30	1.69～	12	2.06	1.70	3.50	19	0.80	1.60	1.28～
6	1.30	2.00	2.60	13	2.66	1.40	3.72	20	0.80	0.90	0.72～
7	1.78	1.10	1.96	14	1.60	1.20	1.92～	21	0.80	1.16	0.93～
										合計	43.66～

第2遺構面の遺構

NR02（第8図）

調査区北東隅で検出した自然河道で，北東から南西方向にむけて流れており，最大幅約5mを測る。川の両岸とも2段落ちになっており，最深部では約30cmを測る。隣接する松並・中所遺跡Ⅶ区BSR03から続くものと考えられ，埋土の観察からⅡ区のNR04につながるものと考えられる。埋土は5層に分層できる。第1層は黒褐色粘土層，第2層は黒色粘土層，第3層は拳大の礫が混じる褐灰色粘土層，第4層は黒褐色粘土層，第5層は灰褐色砂混粘土層である。遺物は第3層が最も多く，第5層からも多く出土したが，その他の層ではほとんど出土しなかった。

出土遺物は第8図に掲載した。17～19は第1・2層出土遺物で，17は土師器甕の口縁部である。古代の遺物と考えられる。18は弥生土器の底部で，底部外面に指頭圧が見られる。19は弥生土器の底部で，外面タテヘラミガキ，内面指頭圧である。20～37は第3層出土遺物である。20は弥生中期の広口壺で，頸部に押圧突帯が施されている。21は弥生土器の甕で，球形の体部に短い口縁部がつく。内面はケズリ後指頭圧である。22・23は弥生土器の甕である。24・25は土師器の甕で，外方に直線的に開く口縁部を持つ。26～32は弥生土器の底部である。33～40は下層出土遺物である。33は弥生終末期の大型鉢である。34は弥生中期後半の高杯で，口縁部外面に凹線2条をめぐらせている。36～37は弥生終末期の高杯で，35の外面にはヨコヘラケズリが認められる。38～42は5層出土遺物である。38は弥生土器の甕で，口縁端部を上部に拡張し，凹線2条が施されている。39は弥生中期の高杯で，口縁部上面に2条，外面に3条の凹線が施されている。40は弥生終末期の高杯である。41は弥生土器の細頸壺の口縁部で，外面に凹線2条が施されている。42は弥生土器の広口壺である。

松並・中所遺跡Ⅶ区BSR03は弥生中期末の遺物が中心であるが，各層出土の最も新しい遺物から，第5層が弥生終末期，第3層が古墳時代前期，上層が古代に埋没したことがうかがえる。

SK12001（第9図）

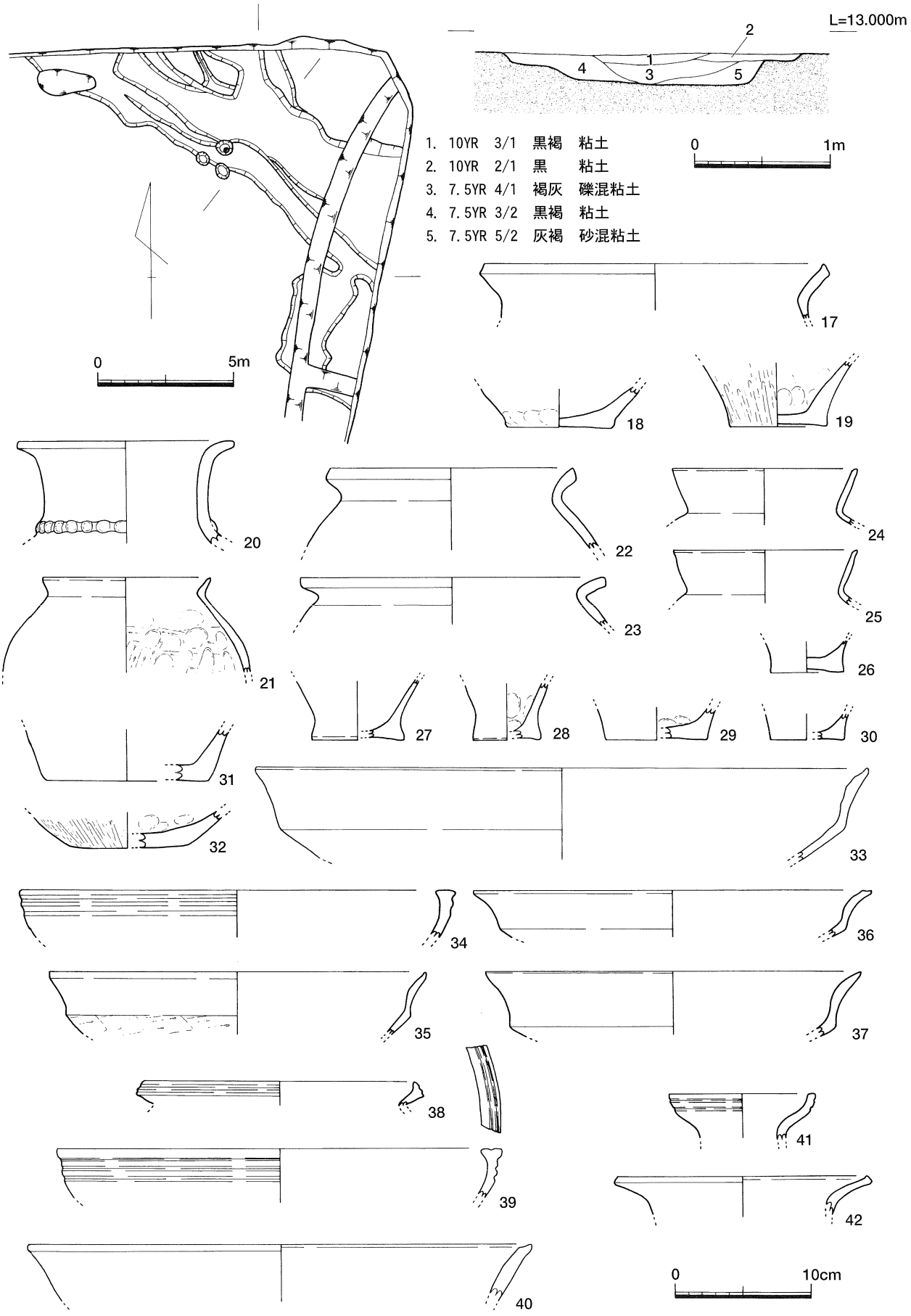
調査区南部で検出した土坑である。南側はサブトレンチ掘削のため，検出できなかったが，長辺1.9m以上，短辺1.05m，深さ15cmを測り，平面形態は長方形と考えられる。埋土は黒褐色のシルト質極細砂層の単層で，断面形態は浅いレンズ状の堆積である。遺物は出土しておらず，遺構の時期は不明である。

SK12002（第10図）

調査区南西部で検出した土坑である。長辺2.7m以上，短辺0.7m，深さ7cmを測り，平面形態は溝状を呈する。埋土は黒褐色のシルト質極細砂層の単層で，断面形態は浅い逆台形である。遺物は出土しておらず，遺構の時期は不明である。

SO12001（第11図）

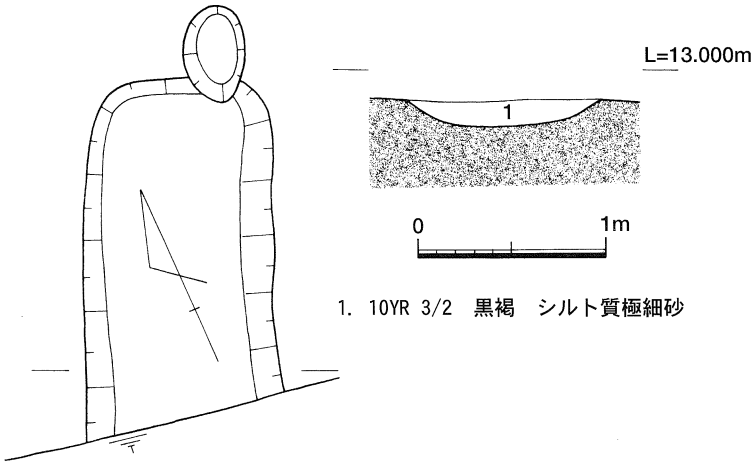
調査区南西端で検出した落ち込みである。遺構は調査区外に伸びるが，検出部分の規模は東西5.6m以上，南北5.6m以上，深さ30cmを測る。断面形態は浅い逆台形で，埋土は4層に分層できる。第1・2層は黒褐色の粘質シルト層，第3層は褐色の粘質シルト層，第4層は黒褐色の粘質シルト層である。遺物は出土しておらず，遺構の時期は不明である。



第８図　NR02 平・断面図及び遺物実測図（17 ～ 19 ＝ 1・2 層　20 ～ 37 ＝ 3 層　38 ～ 42 ＝ 5 層）

SB12001（第12・13図）

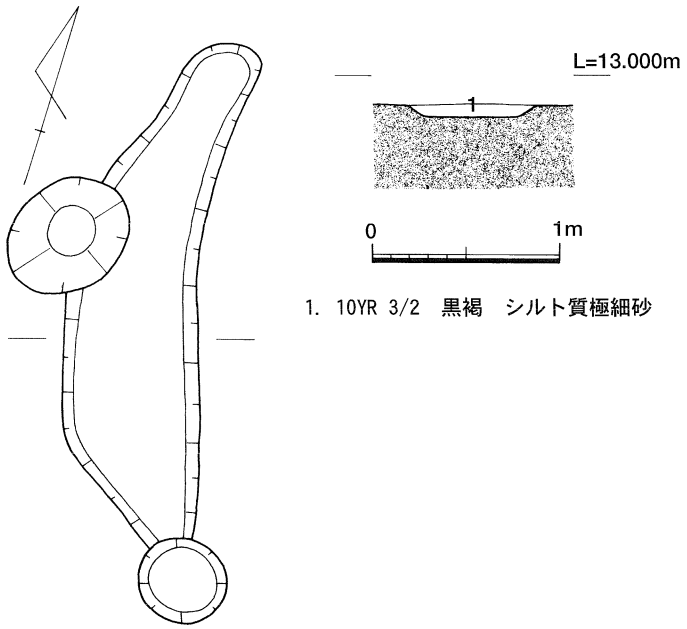
調査区の西部で検出した掘立柱建物である。第12図に掲載したように柱穴が切り合いを持ちながら南北方向に2列に並んでいる状態で検出した。全体がややカーブした2列の柵列とも考えられたが，柱穴の切り合いから考えると，柱芯が通らず全体が1つの構築物とは考えがたいことから，SB12001～SB12006の6棟の掘立柱建物に復元した。このうちSB12001は柱穴列の北部にあたる。建物の主軸方位はN－17°－Wで，東西1間（3.5m）×南北2間（1.7m）以上を測り，床面積は5.95㎡以上である。建物の西辺は2間で柱間は85cm，東辺は3間で柱間は50～65cmである。なお，西辺の北側延長部分には等間隔で柱穴が続き，建物が北に伸びる可能性が考えられる。遺物は出土しておらず，時期は不明である。



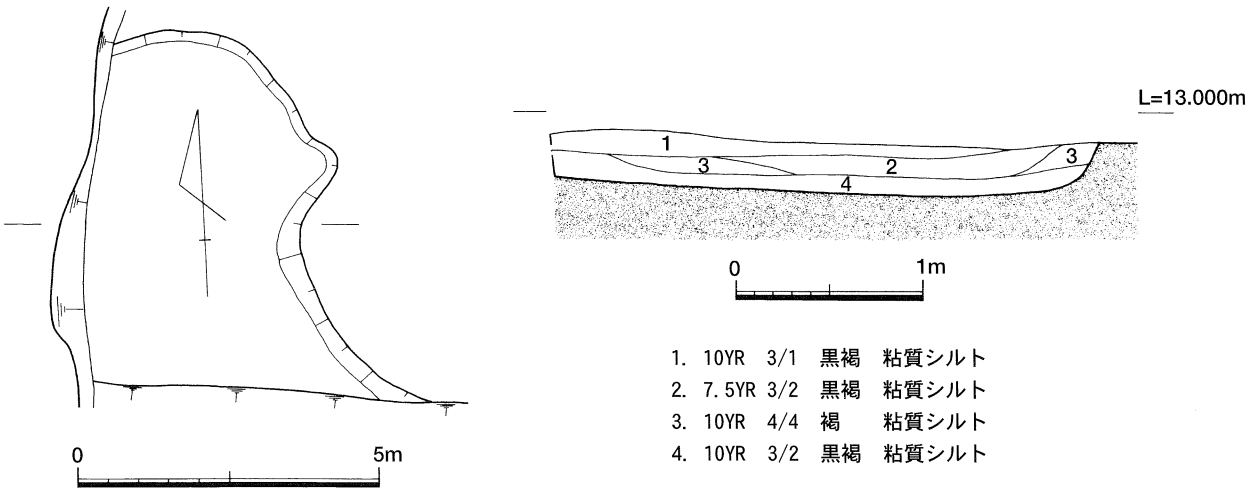
第9図 SK12001 平・断面図

SB12002（第12・13図）

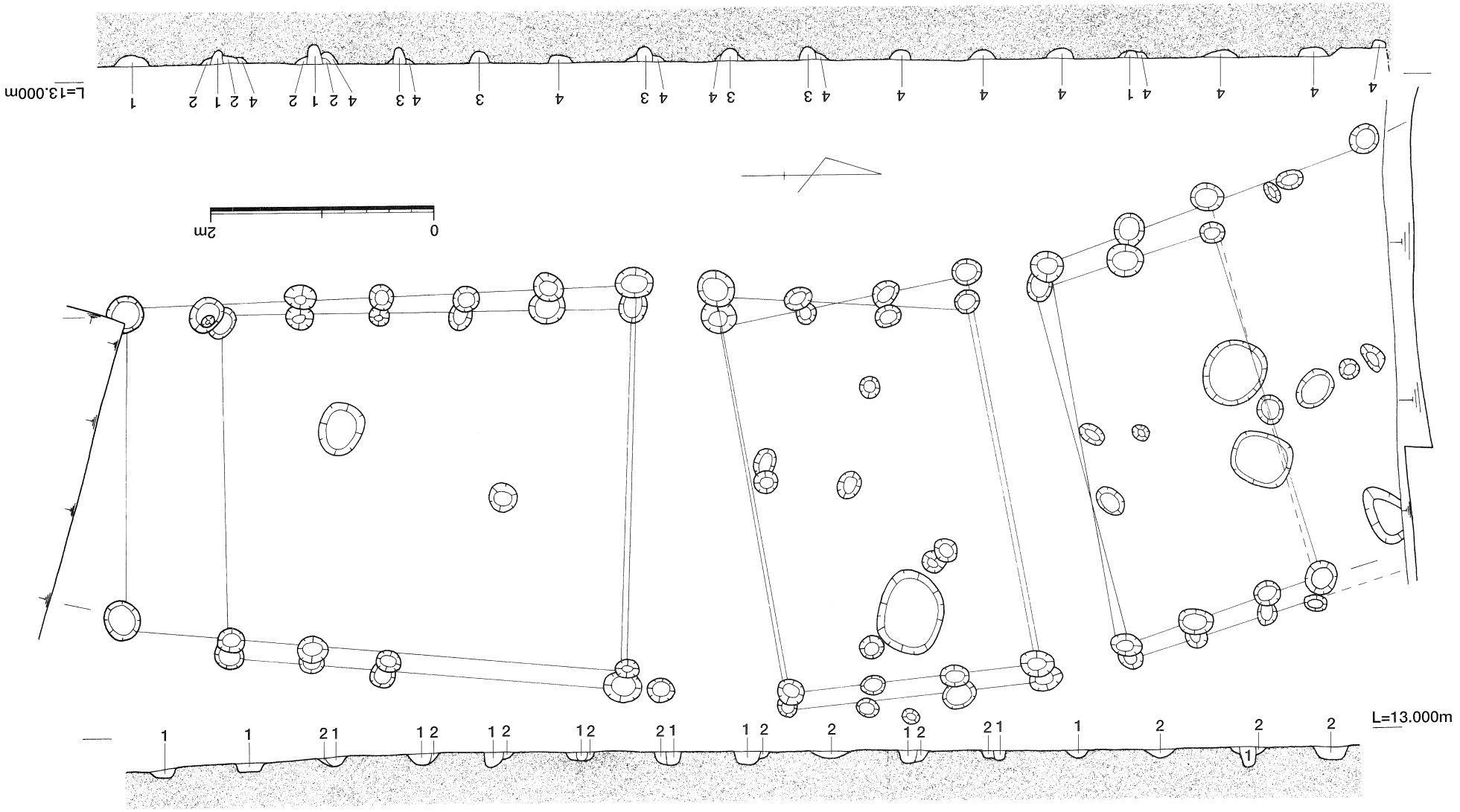
SB12002は検出した柱穴列の北部にあたり，SB12001を切り，ほぼ同じ位置で検出していることから，SB12001の建て直しと考えられる。建物の主軸方位はN－15°－Wで，東西1間（3.4m）×南北2間（1.85m）を測り，床面積は6.29㎡である。SB12001同様，建物の西辺は2間で柱間は80cm，東辺は3間で柱間は50～65cmである。遺物は出土しておらず，時期は不明である。



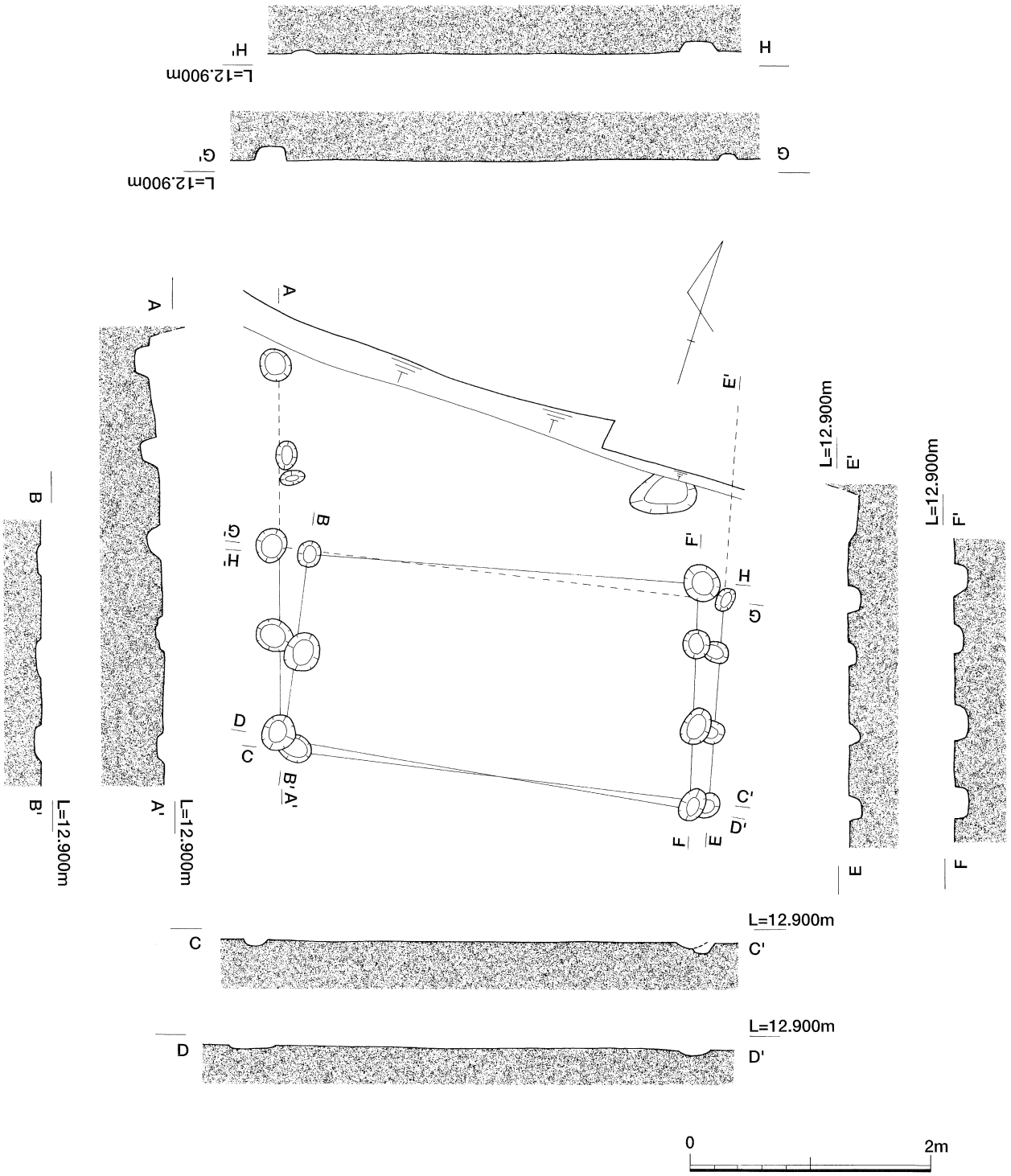
第10図 SK12002 平・断面図



第11図 SO12001 平・断面図



第12図 SB12001～SB12006 平・断面図



第13図　SB12001・SB12002平・断面図

SB12003（第12・14図）

SB12003は柱穴列の中央部にあたる。主軸方位はN－9°－Wで，東西1間（3.65m）×南北2間（2.4m）を測り，床面積は8.76㎡である。南北の柱間はほぼ均一で，75～80cmである。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

SB12004（第12・14図）

SB12004は柱穴列の中央部にあたり，SB12003を切り，ほぼ同じ位置で検出していることから，SB12003の建て直しと考えられる。建物の主軸方位はN－3°－Wで，東西1間（3.6m）×南北2間（2.2m）を測り，

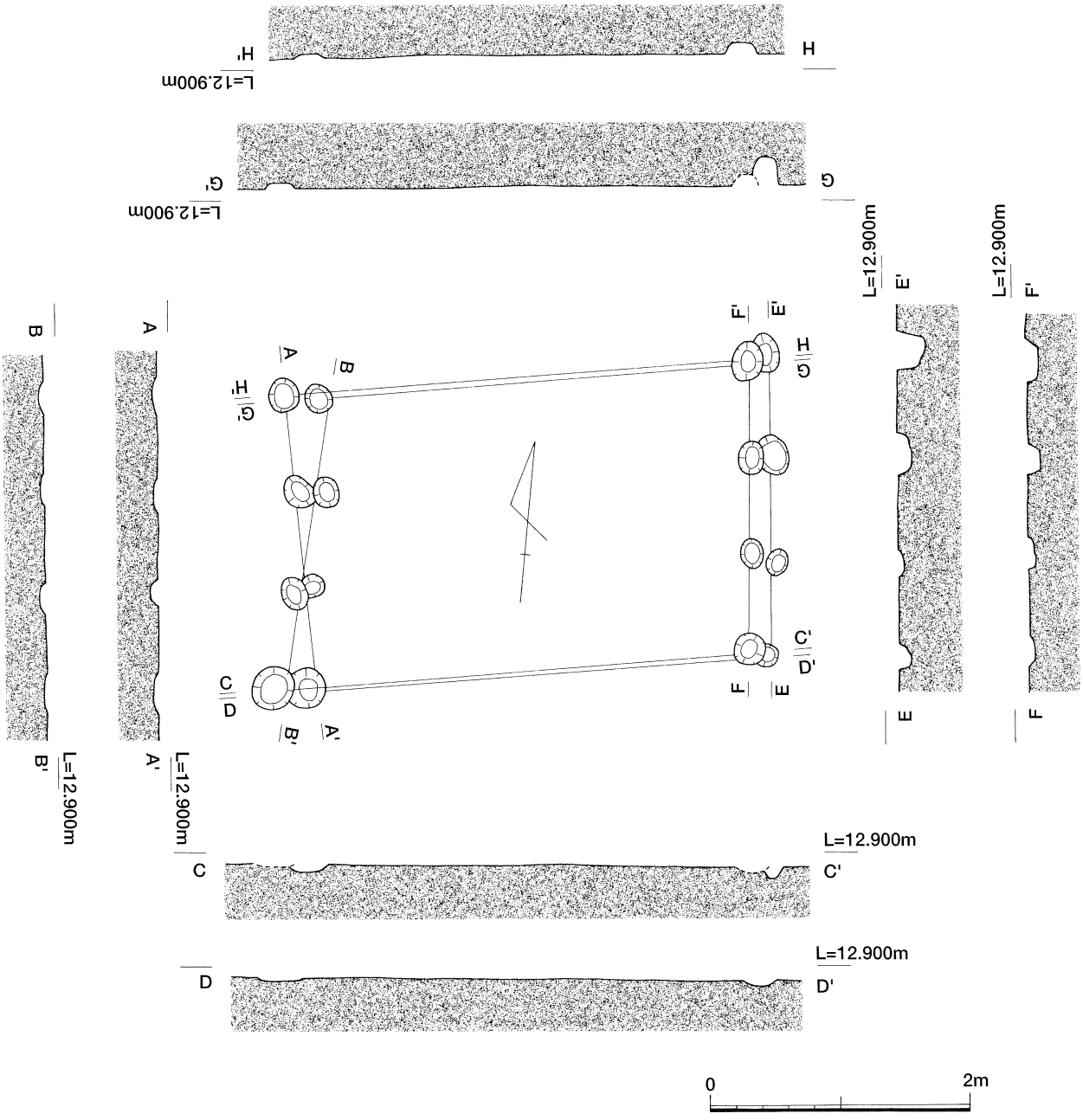
床面積は 7.92 ㎡である。南北の柱間はほぼ均一で，70 ～ 75cm である。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

SB12005（第 12・15 図）

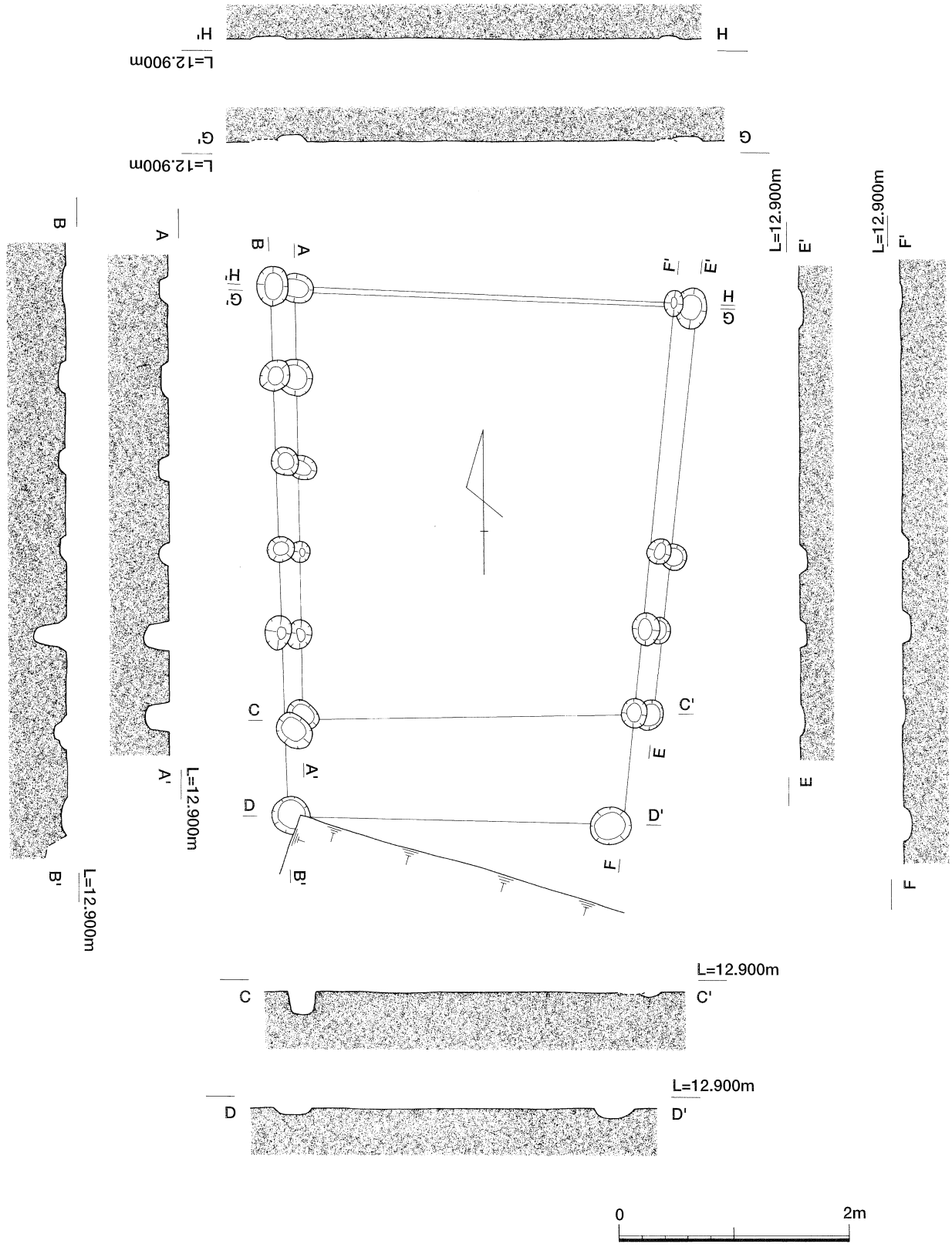
SB12005 は柱穴列の中央部にあたる。主軸方位はほぼ北で，東西 1 間（3.4m）×南北 5 間（3.7m）を測り，床面積は 12.03 ㎡である。西辺の柱穴 2 基が検出されなかったが，南北の柱間はほぼ均一で，70 ～ 75cm である。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

SB12006（第 12・15 図）

SB12006 は柱穴列の中央部にあたり，SB12005 を切り，ほぼ同じ位置で検出していることから，SB12005 の建て直しと考えられる。建物の主軸方位はほぼ北で，東西 1 間（3.6m）×南北 6 間（4.65m）以上を測り，床面積は 14.88 ㎡である。SB12005 同様，西辺の柱穴 2 基が検出されなかったが，南北の柱間はほぼ均一で，75 ～ 80cm である。遺物は出土しておらず，時期は不明である。



第 14 図　SB12003・SB12004 平・断面図



第 15 図　SB12005・SB12006 平・断面図

第2節　Ⅱ区の調査

調査区の概要と基本層序（第16・17図）

Ⅱ区は調査地の西部にあたる。調査区の南壁において断面図を作成し，第16図に掲載した。層序は11層に分層できた。第1層は花崗土で現代の客土層である。第2層は現代の耕作土，第3層は床土である。第4層は黒褐色のシルト質粘土層である。第5層以下第8層までは全体が粘質シルト～シルト質粘土の堆積層で，旧河道ないしその後背湿地状の堆積と考えられる。第9層の暗灰色シルト層，第10層の褐灰色シルト～細砂層，第11層の黄灰色シルト～細砂層は遺物を含まないことから地山とした。

各層序の出土遺物は第16図に掲載した。43の龍泉窯系青磁碗は第4層出土遺物で，中世頃の堆積と考えられる。44・45は第5層出土遺物である。44は弥生終末期の広口壺で，内面指頭圧である。45は弥生土器の底部で，内外面に指頭圧が見られる。第5層は弥生終末期の遺物しか含まないが，後述する遺構出土遺物との比較から，第5層は古代以降の堆積と考えられる。

遺構面は第7層上面と第9層上面の2面で検出した。第7層上面では，旧河道1条，土坑4基等を検出し，第1遺構面とした。旧河道の最終埋没は古代で，土坑出土遺物は近世のものであり，古代～近世の遺構面と考えられる。

また，第9層上面では旧河道1条と溝1条等を検出し，第2遺構面とした。旧河道出土遺物から概ね弥生終末期の遺構面と考えられる。

第2遺構面の遺構

NR03（第17図）

調査区の西半を南から北へ向かって流れる旧河道である。南半は削平が著しいことから，検出した川幅は北側ほど広く，最大幅12mを測り，深さは40cmを測る。川の肩は全体になだらかに落ち込んでいる。埋土は基本層序の第8層が該当し，黒褐色シルト質粘土層である。

出土遺物は第17図に掲載した。S3は刃部の端部に抉りをもつサヌカイト製の石匙である。52・53は弥生土器の高杯の杯部である。52の外面にはヨコヘラケズリが見られる。54～58は弥生土器の底部である。54・55・57には内面指頭圧，55は外面指頭圧が見られる。59は弥生土器の長頸壺で，外面タテハケ，内面指頭圧である。60は弥生土器の甕の口縁部である。出土遺物から概ね弥生終末期の埋没と考えられる。

流路の北西部分は上層の旧河道NR04によって切られており不明であるが，Ⅰ区NR02は弥生終末期から古代の流路であり，Ⅱ区に向かって流れていることから，合流する可能性が考えられる。

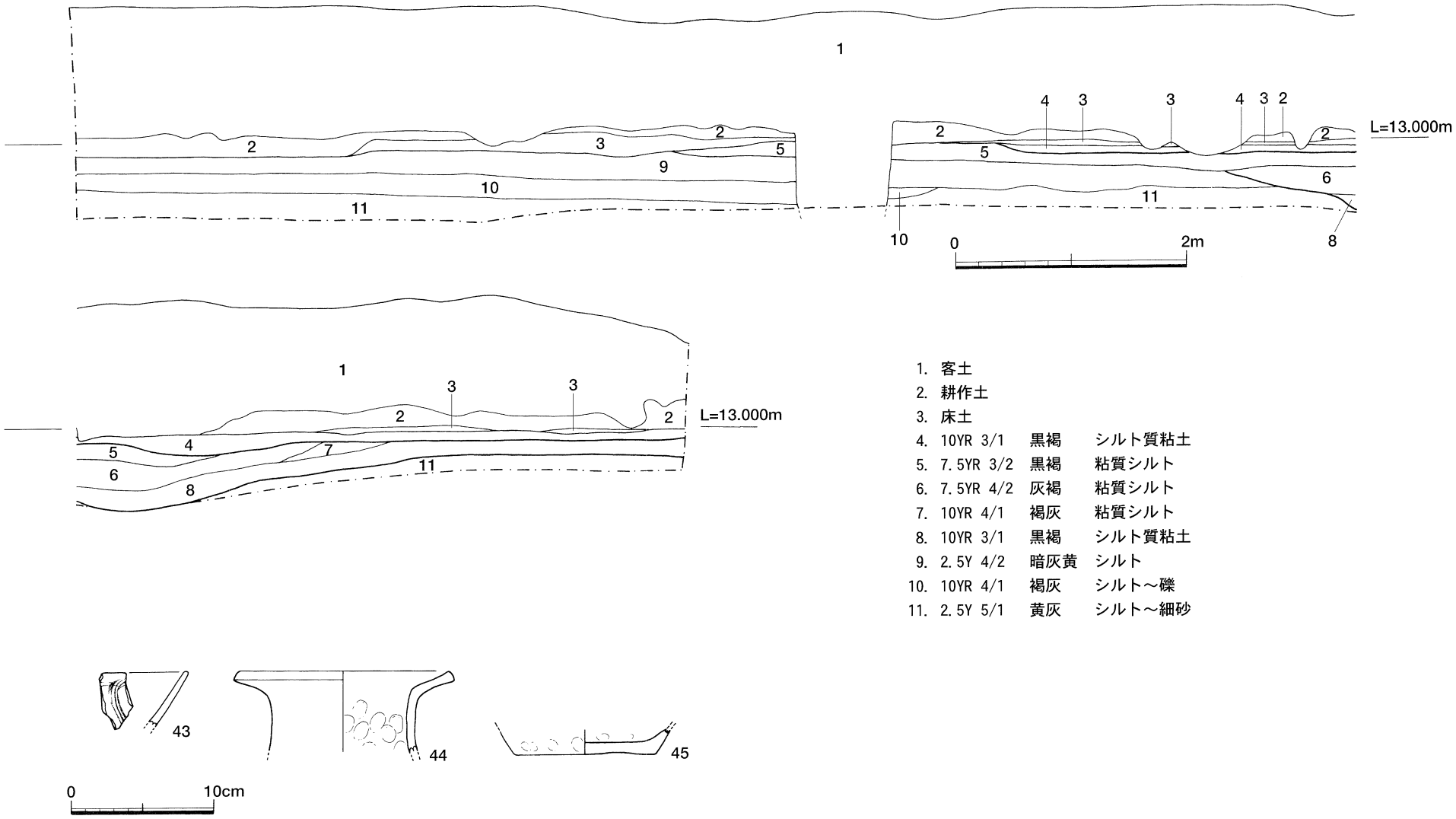
第1遺構面の遺構

NR04（第17図）

調査区の北半を東西方向に流れる旧河道である。北岸は調査区外であるため，川幅は不明である。埋土は基本層序の第6層が該当し，灰褐色粘質シルト層で，深さは40cmを測る。川の肩は全体になだらかに落ち込んでいる。下層においてほぼ同位置でNR03を検出しており，NR03が南から北へ流れるのに対し，NR04はⅠ区NR02から続く旧河道と考えられ，Ⅱ区において南からの流路が合流し，さらに東へ流れ，Ⅲ区NR04につながっていくものと考えられる。

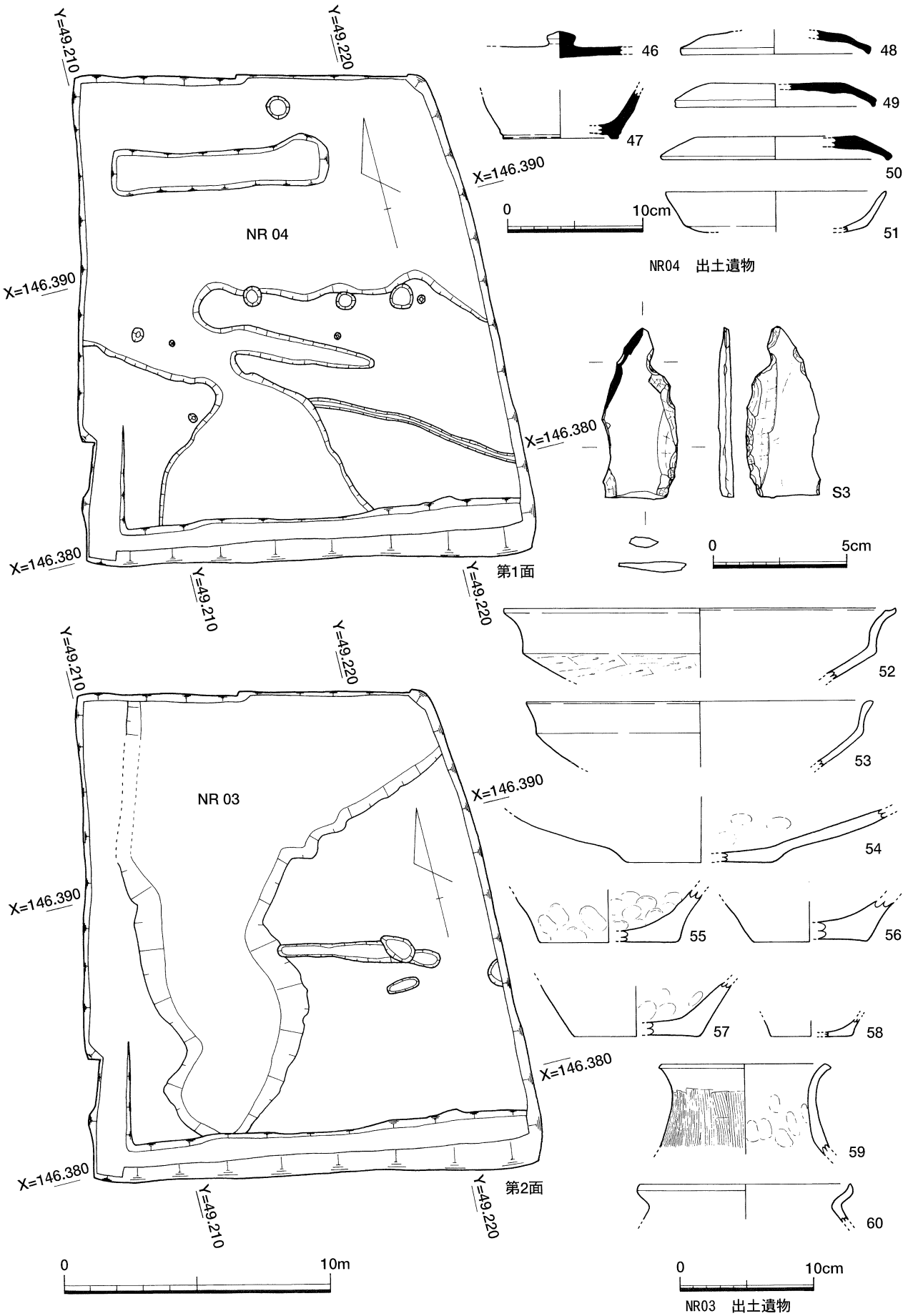
出土遺物は第17図に掲載した。46は須恵器坏蓋で，ツマミがつく。47は須恵器壺底部である。48～50は須恵器坏蓋である。51は土師器坏である。出土遺物から概ね8世紀の埋没と考えられる。

Ⅰ区NR02においては，層位によって弥生時代終末期，古墳時代前期，古代の3時期に分かれるが，NR04は単層であり，須恵器しか出土しておらず，NR02の最終埋没期のみ機能していたと考えられる。このため，NR02の弥生終末期から古墳時代前期の流路についてはNR03につながり，古代の流路はNR04につながるものと考えられる。



1. 客土
2. 耕作土
3. 床土
4. 10YR 3/1 黒褐 シルト質粘土
5. 7.5YR 3/2 黒褐 粘質シルト
6. 7.5YR 4/2 灰褐 粘質シルト
7. 10YR 4/1 褐灰 粘質シルト
8. 10YR 3/1 黒褐 シルト質粘土
9. 2.5Y 4/2 暗灰黄 シルト
10. 10YR 4/1 褐灰 シルト～礫
11. 2.5Y 5/1 黄灰 シルト～細砂

第16図　Ⅱ区南壁土層断面図及び包含層出土遺物実測図（43＝第4層　44・45＝第5層）



第 17 図　Ⅱ区平面図及び NR03・NR04 出土遺物実測図

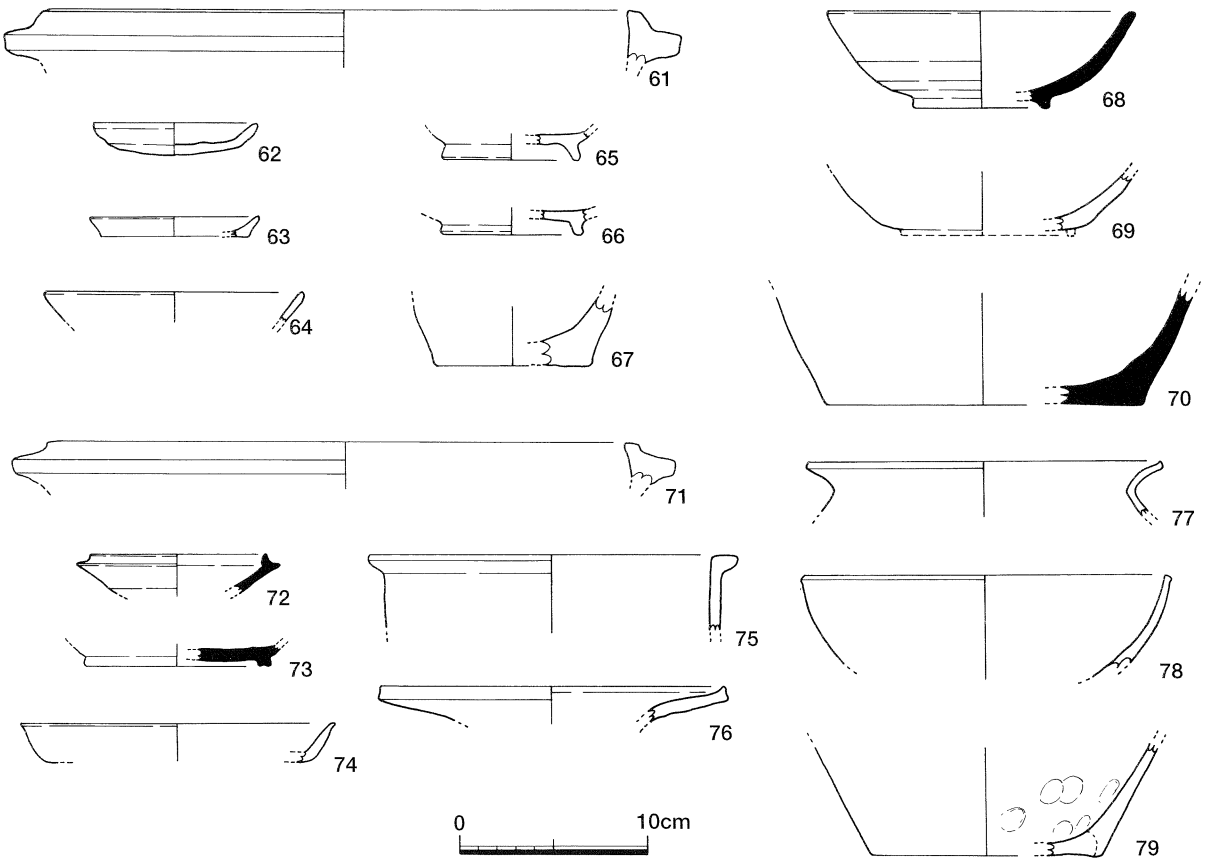
第3節　Ⅲ区の調査

調査区の概要と基本層序（第18～25図）

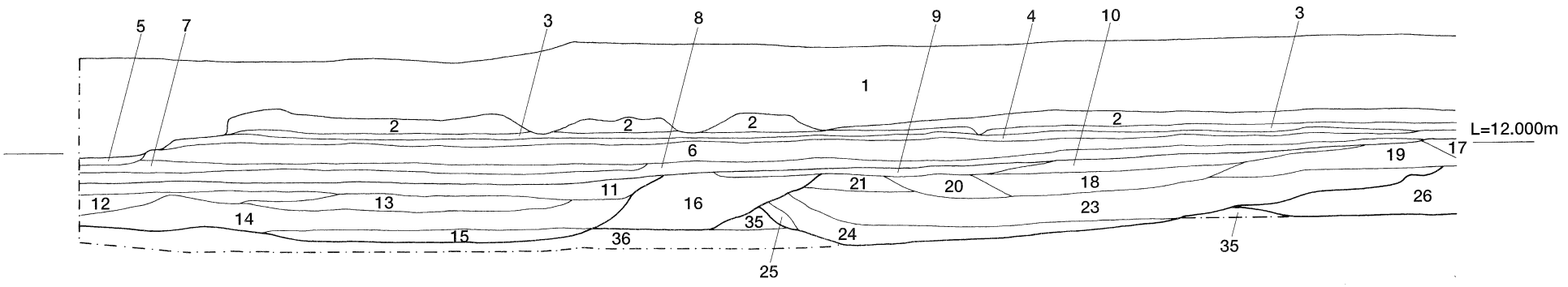
Ⅲ区は調査地西半の東部にあたる。調査区の南壁西半において断面図を作成し，第19図に掲載した。層序は36層に分層できた。第1層は花崗土で現代の客土層である。第2層は現代の耕作土，第3・4層は床土である。第5層は褐灰色の砂混粘土層で近世以降の遺構埋土と考えられる。第6層は灰白色シルト質極細砂層で，中世の遺物を多く含む。第7層は浅黄色シルト質極細砂層である。第8層以下第34層までは一部細砂～礫層も含まれるものの，概ね粘土質の土層となっており，全体が旧河道あるいは低湿地状の様相を示している。遺物はそれほど無く，第8層の黒褐色粘土層及び第9層の赤褐色粘土層にわずかに含まれる程度であった。第35層の灰黄褐色粘土層は遺物を含んでおらず，地山と考えられる。第35層は，Ⅲ区の西半しか認められず，中央部より東においては第36層の黄灰色細砂層を地山とした。

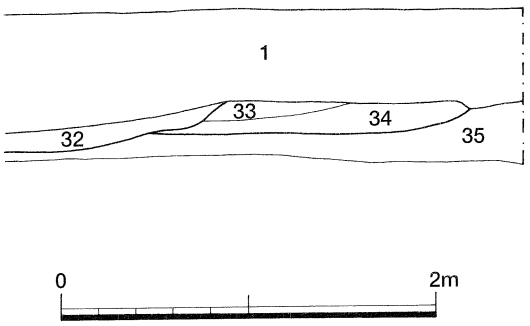
各層出土遺物は第18図に掲載した。61～70は機械掘削時に出土したもので，第6層上面のものがほとんどを占める。61は土師質土器釜である。62・63は土師器の皿である。64は瓦器埦である。65・66は黒色土器の埦である。67は弥生土器の底部である。68は須恵器の埦である。69は土師器の埦である。70は須恵器の壺である。71～77は第6層出土遺物である。71は土師質土器鍋である。72・73は須恵器の坏である。74は土師器の坏である。75は弥生土器の甕である。76は弥生土器の広口壺である。77は弥生土器の甕である。第6層出土遺物には弥生土器や須恵器も多く含まれているが，概ね中世の堆積層と考えられる。78・79は第8・9層出土遺物である。78は弥生土器の鉢である。79は弥生土器の底部である。第8・9層及び34層までの粘土層については遺物量が少なく詳細は不明であるが，弥生終末期以降の堆積層と考えられる。

遺構面は包含層直下の第8層上面と第35層上面の2面で検出した。第8層上面では，旧河道2条，土坑4基，掘立柱建物11棟等を検出し，第1遺構面とした。旧河道の埋没は古代と考えられ，その上面で中世前半の



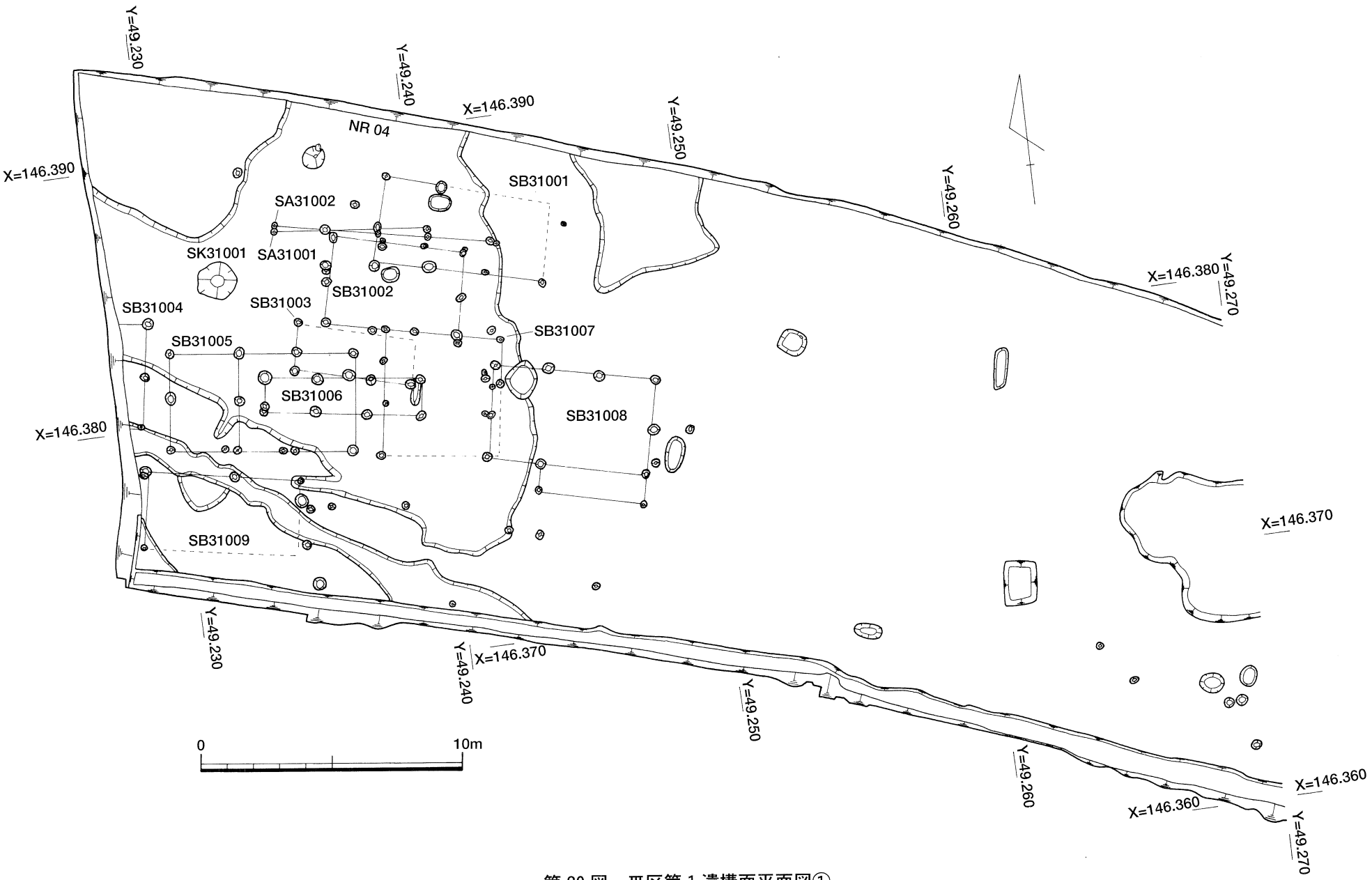
第18図　Ⅲ区包含層出土遺物実測図



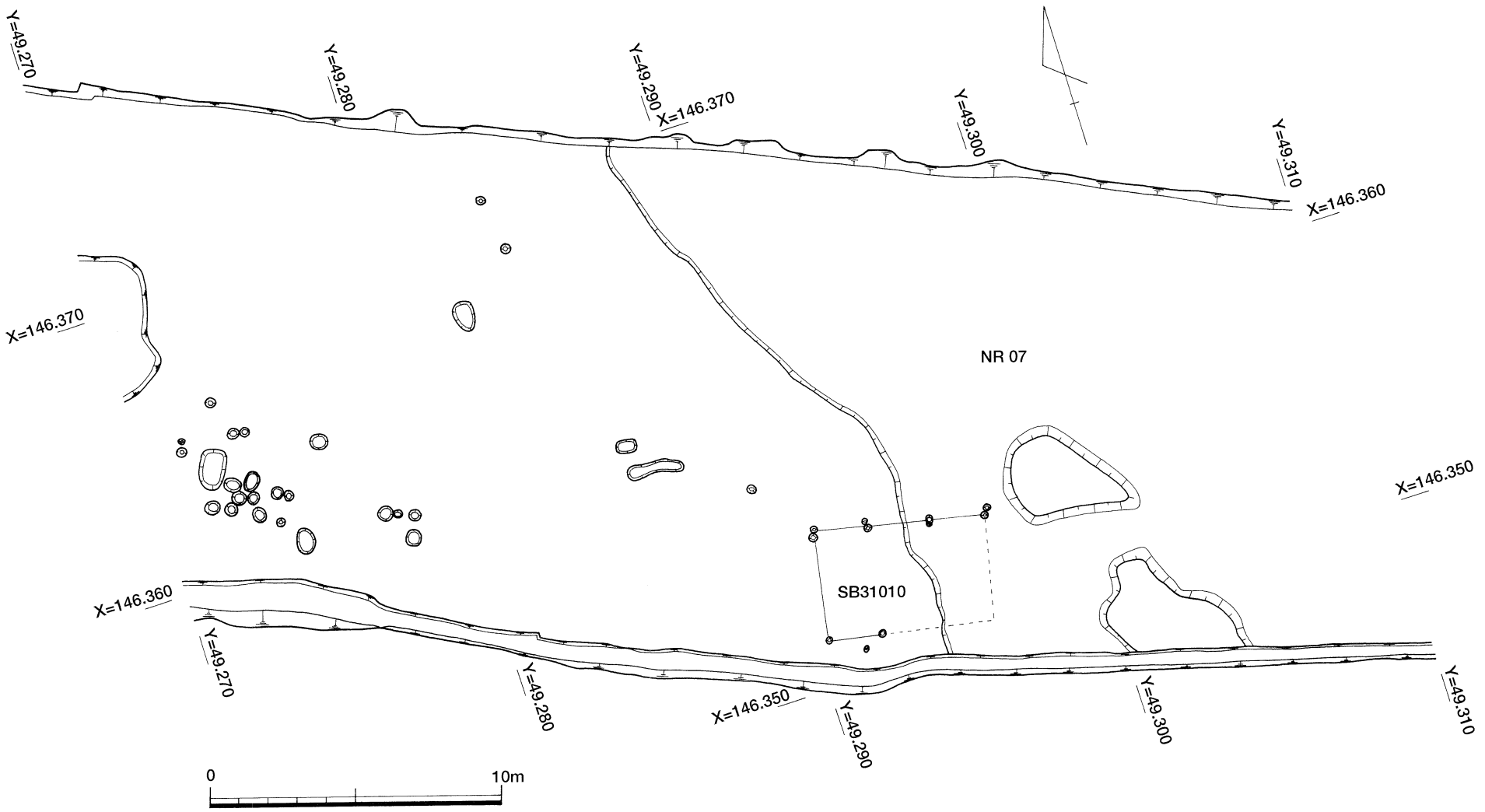


1.	花崗土				13.	7.5YR	3/2	黒褐	粘土	25.	10YR	5/4	にぶい黄褐	粘土
2.	耕作土				14.	7.5Y	3/1	黒褐	粘土	26.	5YR	2/4	極暗赤褐	礫
3.	7.5YR	8/6	浅黄橙	砂混粘質土	15.	10YR	2/1	黒	シルト質粘土	27.	10YR	5/1	褐灰	礫
4.	7.5YR	6/8	橙	砂混粘質土	16.	5YR	3/2	暗赤褐	粘土	28.	10YR	3/3	暗渇	細砂～礫
5.	10YR	5/1	褐灰	砂混粘土	17.	2.5Y	4/1	黄灰	砂混粘質土	29.	7.5YR	4/1	褐灰	砂混粘質土
6.	2.5Y	7/1	灰白	シルト質極細砂	18.	10YR	5/6	にぶい黄褐	礫混粘土	30.	10YR	4/3	にぶい黄褐	細砂～礫
7.	2.5Y	7/3	浅黄	シルト質極細砂	19.	10YR	2/3	黒褐	砂混粘質土	31.	10YR	5/2	灰黄褐	細砂～礫
8.	2.5Y	3/1	黒褐	粘土	20.	10YR	3/3	暗褐	砂混粘土	32.	10YR	4/1	褐灰	礫
9.	5Y	4/6	赤褐	粘土	21.	10YR	4/2	灰黄褐	砂混粘土	33.	10YR	6/1	褐灰	細砂
10.	7.5YR	5/4	にぶい褐	細砂～礫	22.	10YR	6/1	褐灰	砂混粘質土	34.	10YR	5/2	灰黄褐	砂混粘土
11.	10YR	4/1	褐灰	粘土	23.	7.5YR	2/3	極暗褐	砂混粘土	35.	10YR	4/2	灰黄褐	粘土
12.	7.5YR	4/3	褐	粘土	24.	10YR	5/1	褐灰	粘質シルト	36.	2.5YR	6/1	黄灰	細砂

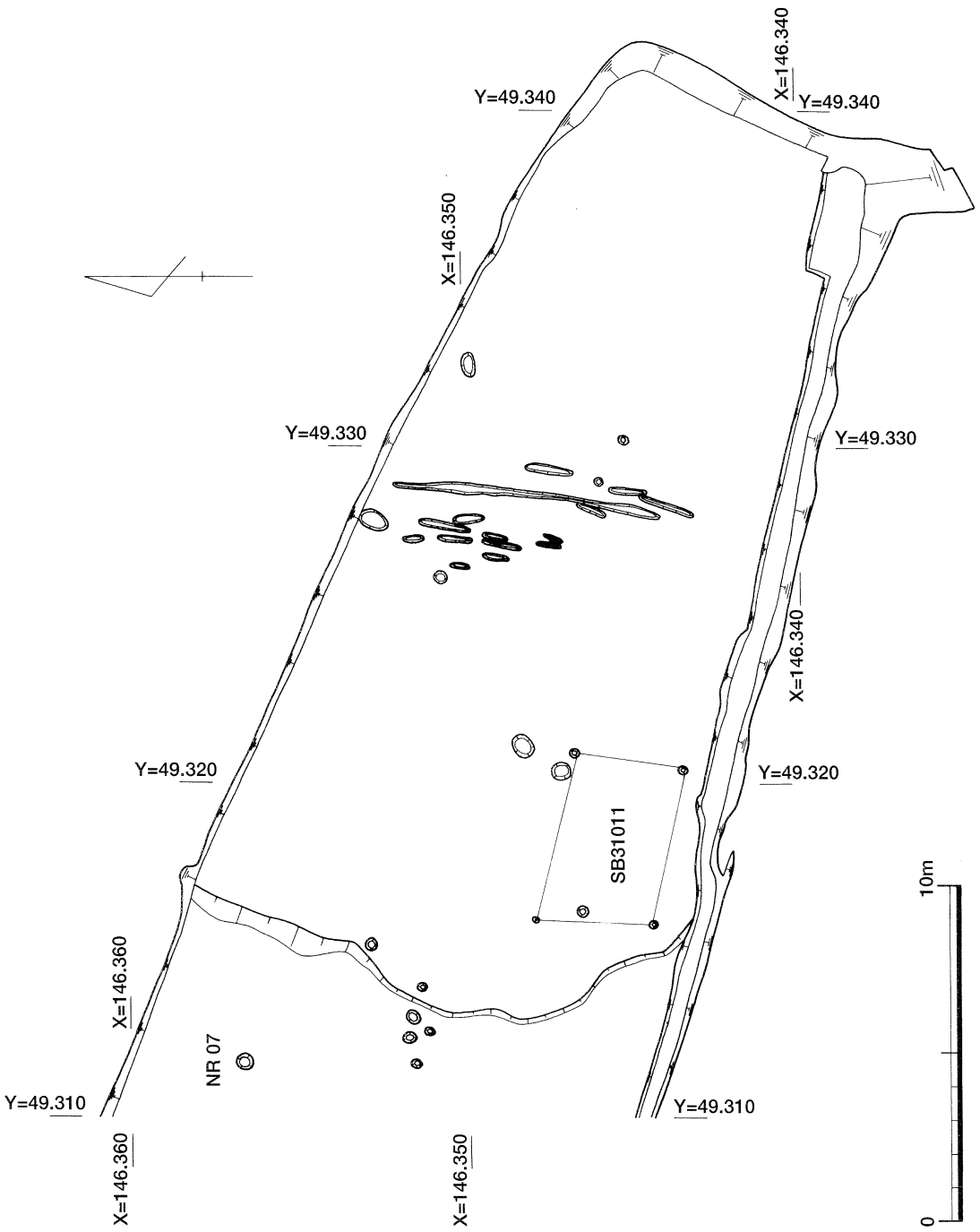
第19図　Ⅲ区南壁土層断面図



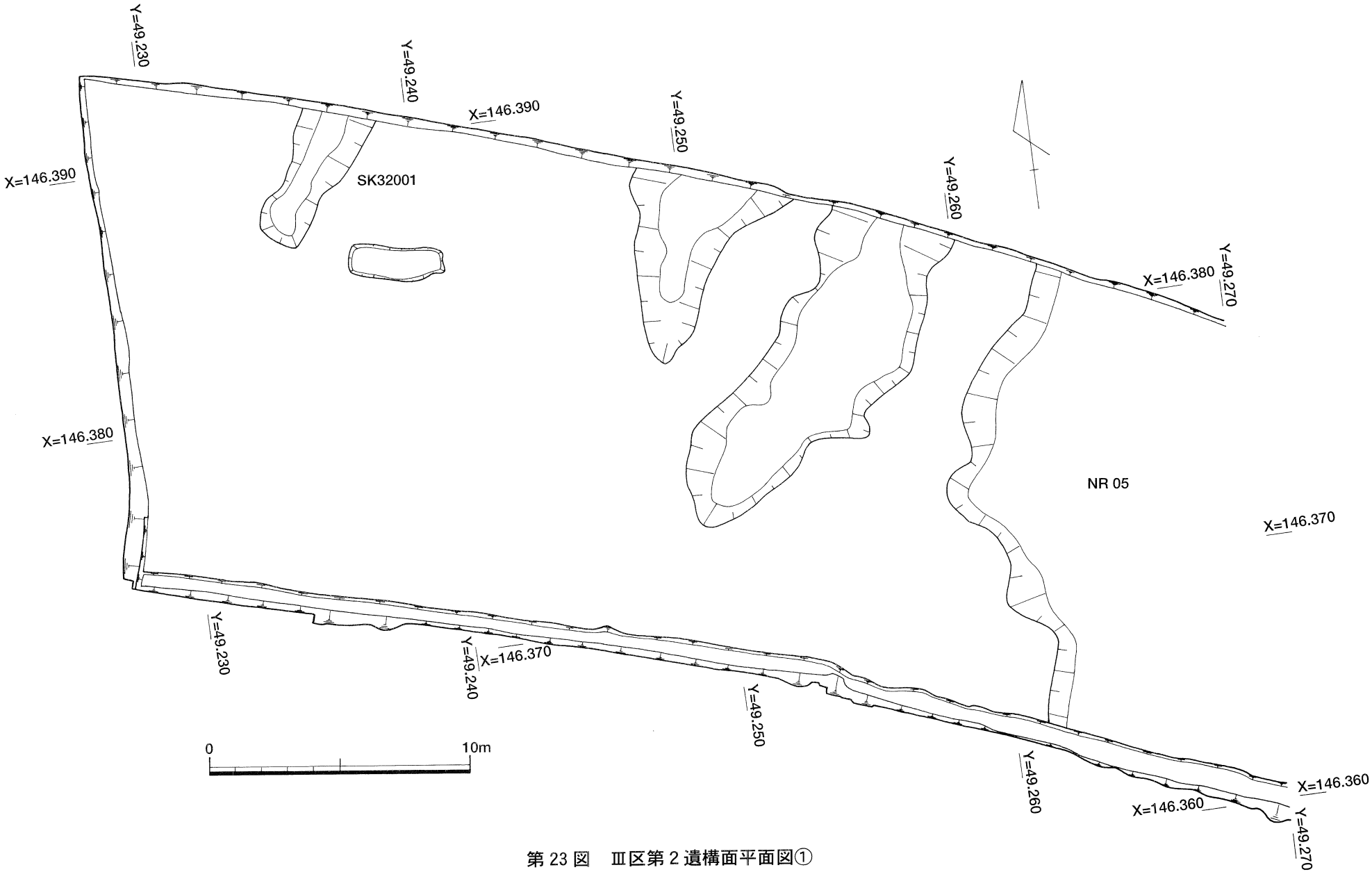
第 20 図　Ⅲ区第 1 遺構面平面図①



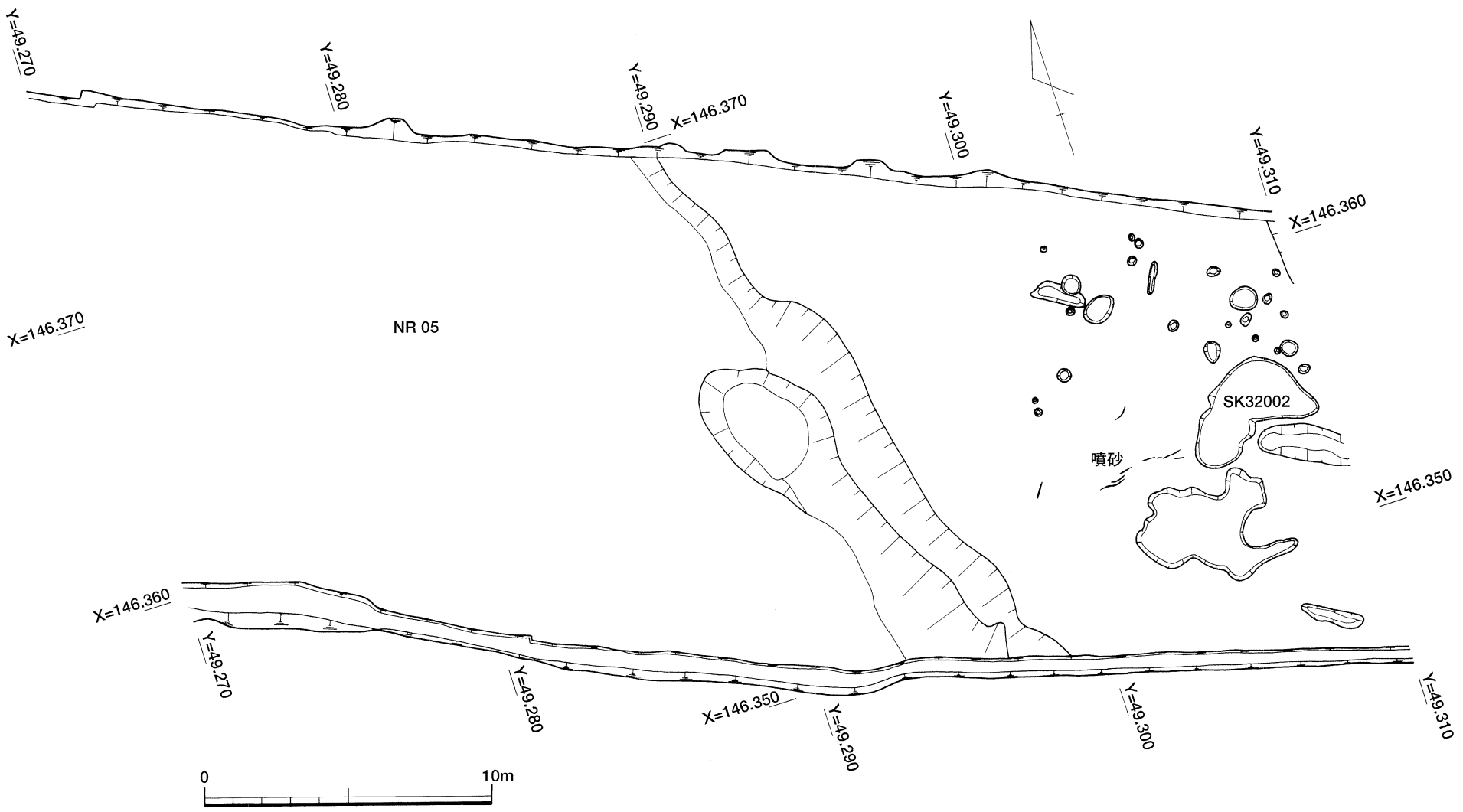
第 21 図　Ⅲ区第 1 遺構面平面図②



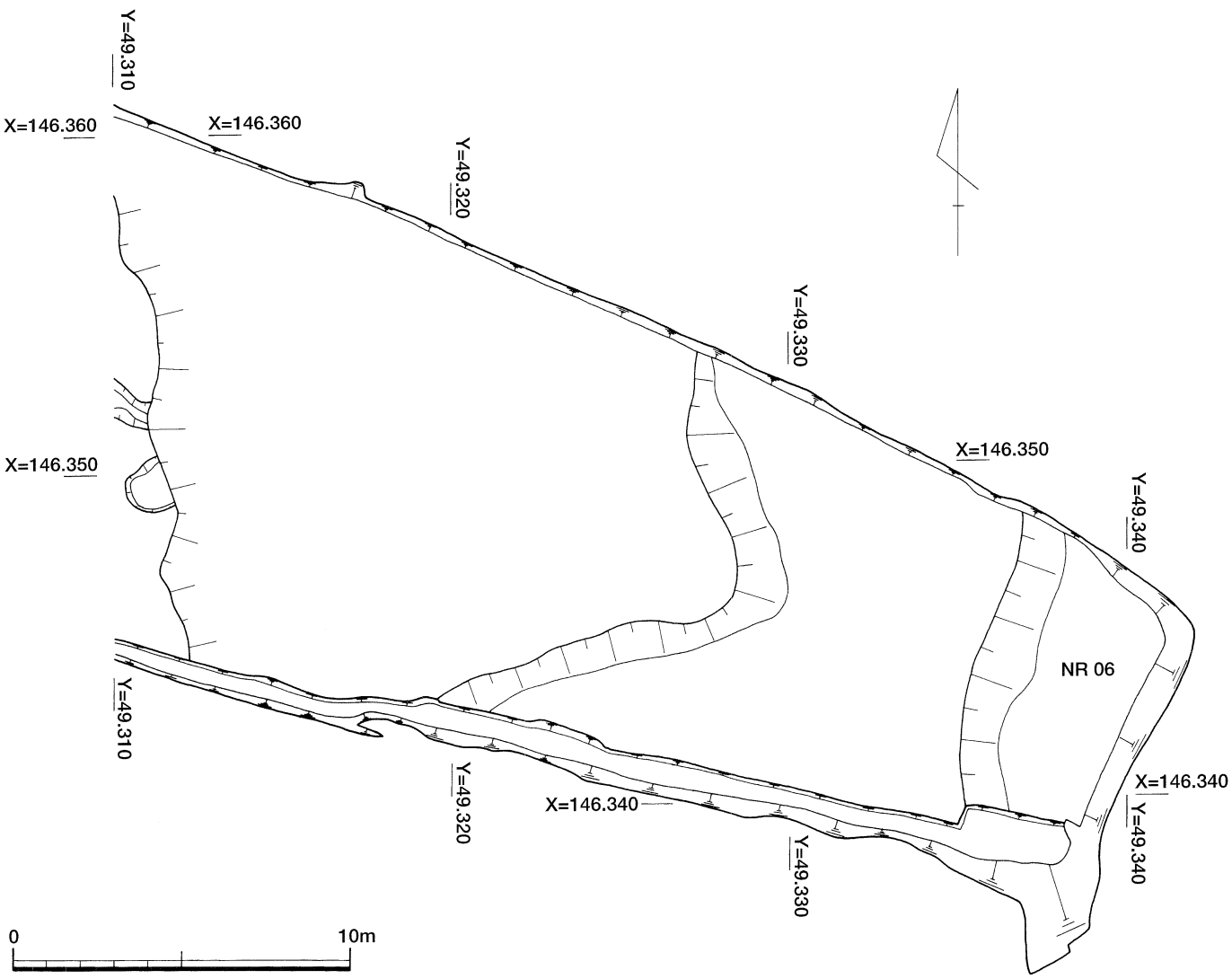
第 22 図　Ⅲ区第 1 遺構面平面図③



第 23 図　Ⅲ区第 2 遺構面平面図①



第 24 図　Ⅲ区第 2 遺構面平面図②



第 25 図　Ⅲ区第 2 遺構面平面図③

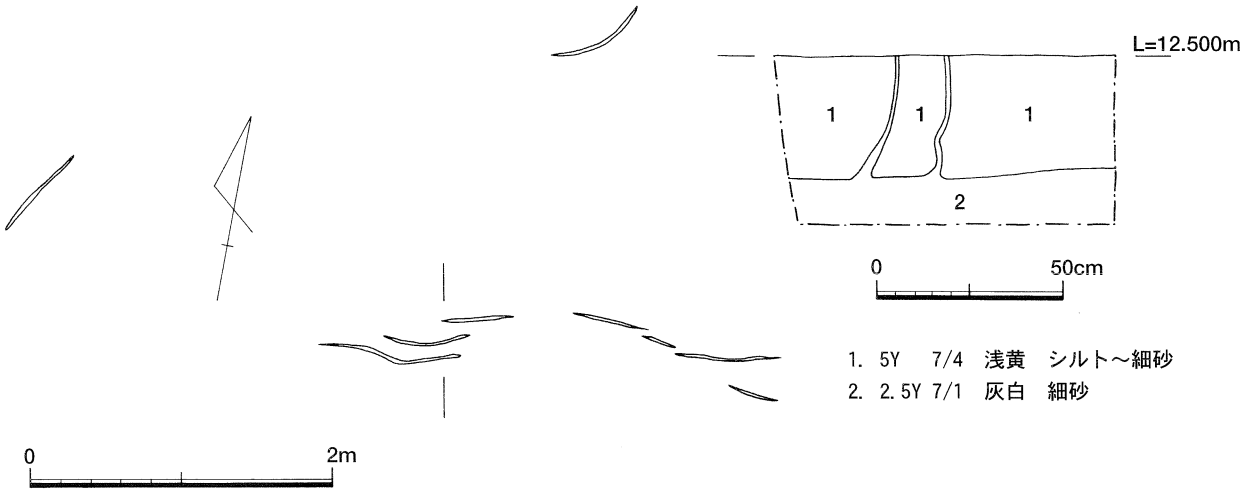
掘立柱建物を確認しており，上部の包含層中から中世までの遺物しか含まないことから，概ね古代から中世の遺構面と考えられる。

また，第35層上面では旧河道2条と土坑12基等を検出し，第2遺構面とした。遺構出土遺物から概ね弥生終末期の遺構面と考えられる。

第2遺構面の遺構

噴砂（第26図）

調査区中央部で検出した地震痕跡である。長さ25cm～1m，幅数cmの砂脈が断続的に9箇所で検出された。噴砂は地山の浅黄色シルト～細砂層直下の灰白色細砂層から噴き上がっており，その高さは30cmを測る。噴砂は遺構との切り合いが無いため，当該遺構面の埋没時期以前のものとしかわからない。遺構面の埋没時期については，基本層序の第8・9層出土遺物から弥生終末期頃と推定しており，当該噴砂を引き起こした地震の時期は弥生終末期以前のものと考えられる。



第26図　Ⅲ区噴砂平・断面図

NR05（第23・24図）

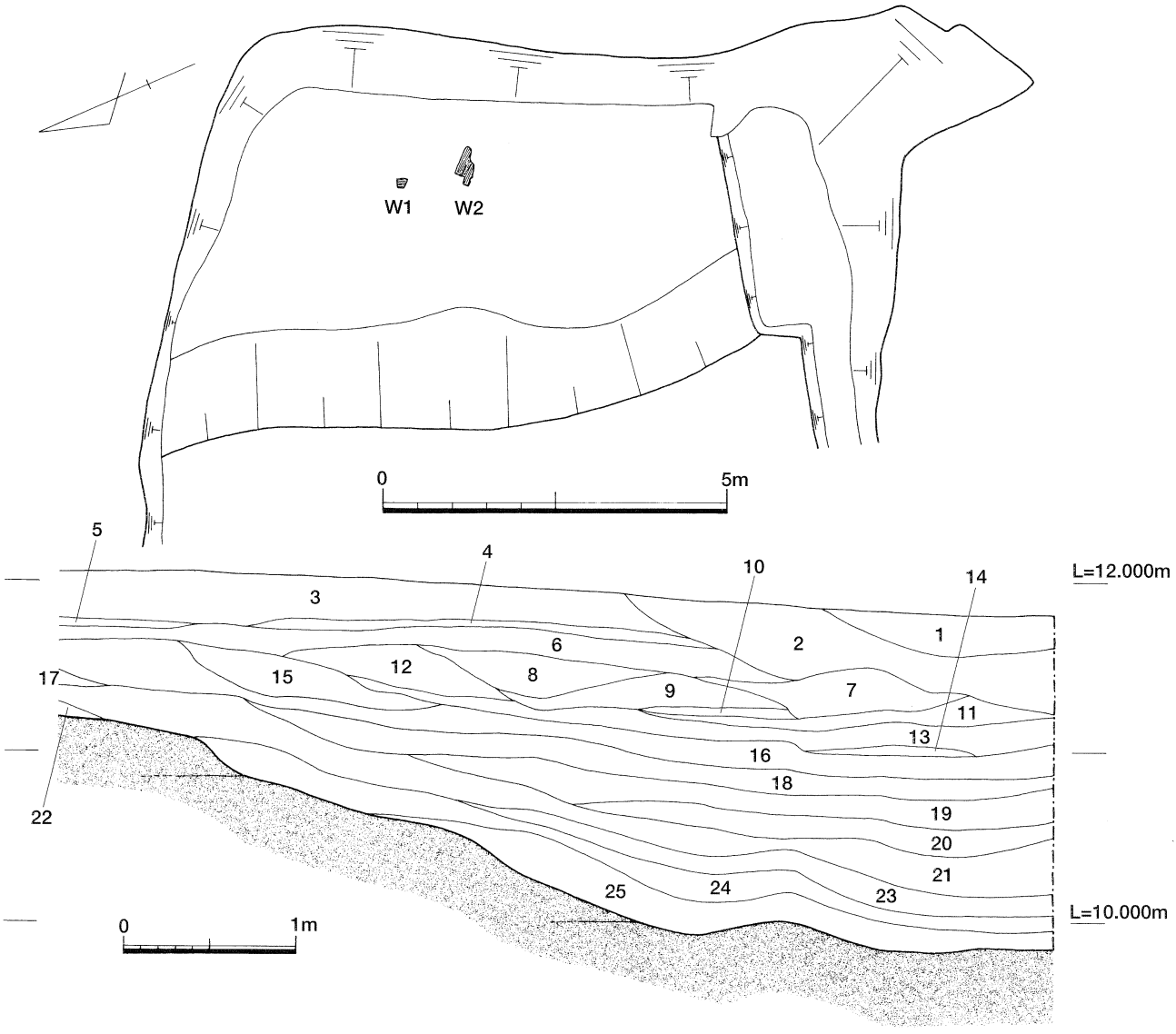
調査区の中央を南から北へ向かって流れる自然河道である。川幅32mを測り，深さは40cmを測る。川の西肩は全体になだらかに落ち込んでいるが，東肩は南部が2段落ちとなっている。2段落ちの最北部は長径5m，短径3.5m，深さ20cmの土坑状の落ち込みが認められる。埋土は黒褐色シルト質粘土層の単層である。遺物は弥生土器の小片がわずかに出土しただけで，時期は不明であるが，遺構面上部包含層の埋土が弥生終末期と考えられることから，弥生終末期以前の河川と考えられる。

NR06（第27・28図）

調査区の東端で検出した自然河道で，南から北へ向かって流れている。東肩が検出されていないため，川幅は不明であるが，深さは約2mを測る。西肩は約25mにわたって緩やかに落ち込んでおり，調査区東端でやや急に落ち込んでいる。第27図では落ち込み部分の平面図及び断面図を掲載した。埋土は25層に分層でき，第1・2層は細砂層である。第3層以下は粘土やシルト層が最下層まで続いている。

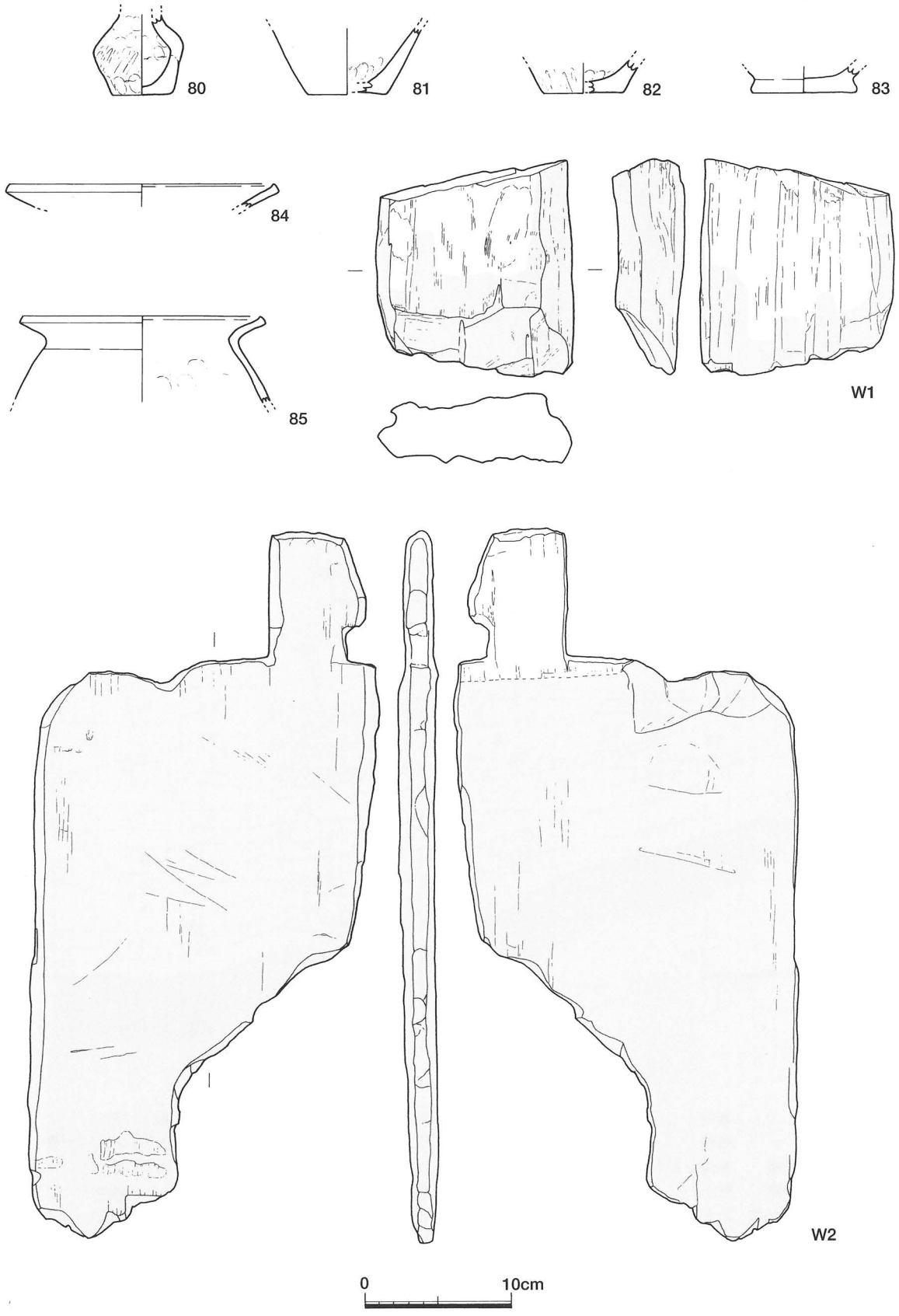
出土遺物は第28図に掲載した。第13層の炭を含む黒色粘土層から80～85の土器が出土し，最下層の第25層の黒褐色砂混粘土層からW1・W2の木器が出土している。80は弥生土器の壺のミニチュア土器である。外面指頭圧のちタテヘラミガキ，内面指頭圧である。81～83は弥生土器の底部である。84～85は弥生土器の甕である。W1は建築部材である。長さ15cm，幅12cm，厚さ4cmを測る。下部は片面から斜め方

向に切り落としており，上部は切断されている。部材の下部及び側面は焼け焦げている。W2 は板材である。長さ 39cm，幅 23cm，厚さ 2.5cm を測る板に長さ 9cm，幅 7cm の突起がついており，突起の付け根には抉り込みがある。全体に焼け焦げているが，突起部の片面は焼けておらず，他の部材との接合面であった可能性が考えられる。全面焼け焦げている面には線状の工具痕が多数認められる。板状の部材の端の片面にやや分厚い材が接合することから，椅子や台状の木製品の部材と推定できる。下層では土器は出土しておらず，第 13 層の土器から弥生終末期の旧河道と考えられる。



1.	2.5Y	7/2	灰黄	細砂	10.	10YR	1.7/1	黒	粘土	19.	5Y	4/1	灰	粘土
2.	10Y	6/1	灰	細砂	11.	2.5Y	5/1	黄灰	シルト質粘土	20.	5Y	3/1	オリーブ黒	粘土
3.	7.5YR	6/3	にぶい褐	粘質シルト	12.	2.5Y	2/1	黒	粘土	21.	2.5YR	2/1	黒	粘土
4.	7.5YR	5/3	にぶい褐	粘土	13.	10YR	1.7/1	黒	粘土（炭・土器含む）	22.	7.5YR	4/1	褐灰	砂混粘土
5.	5YR	4/4	にぶい赤褐	粘土	14.	10YR	4/1	褐灰	粘土	23.	10YR	4/1	褐灰	粘土
6.	7.5YR	6/2	灰褐	粘質シルト	15.	7.5YR	1.7/1	黒	粘土	24.	2.5Y	6/1	黄灰	シルト
7.	10YR	5/1	灰	シルト	16.	5Y	2/1	黒	粘土	25.	2.5YR	3/1	黒褐	砂混粘土
8.	10YR	3/1	黒褐	粘土	17.	7.5YR	3/4	暗褐	粘土					
9.	10YR	5/2	灰黄褐	シルト礫	18.	5G	6/1	緑灰	粘土					

第 27 図　NR06 平・断面図

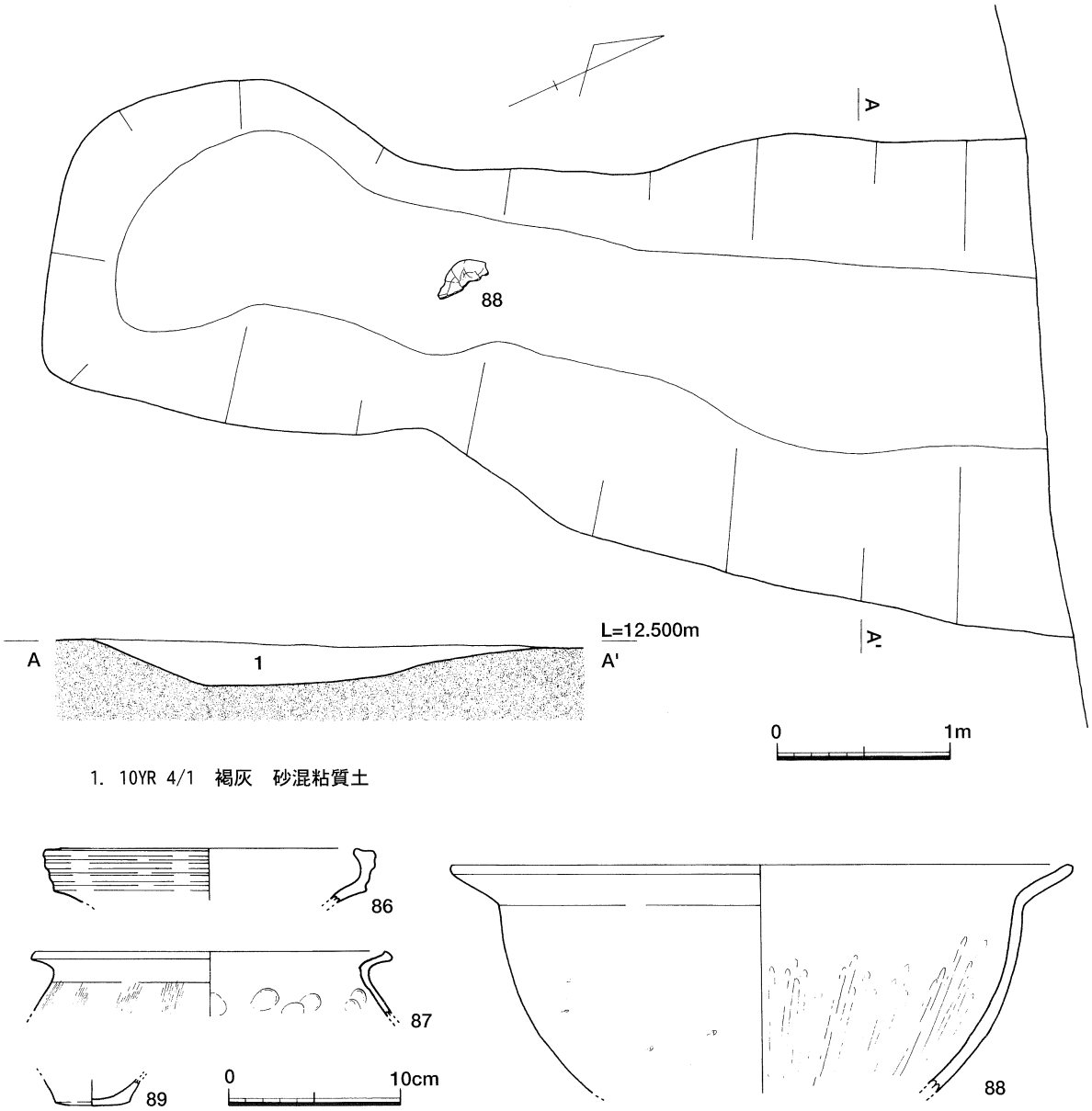


第 28 図　NR06 出土遺物実測図

SK32001（第29図）

調査区の北西端で検出した土坑である。北側が調査区外に延びるが，平面形態は溝状を呈するものと考えられ，長辺6.25m以上，短辺2.8m，深さ25cmを測る。埋土は褐灰色砂混粘質土の単層で，断面形態は浅い逆台形である。

出土遺物は第29図に掲載した。86は弥生土器の細頸壺の口縁部である。外面に凹線3条を巡らせている。87は弥生土器の甕である。外面タテハケ，内面指頭圧である。88は弥生土器の鉢である。半球状の体部に外方へ開く口縁部がついている。外面ヨコヘラケズリ，内面タテヘラミガキである。89は弥生土器の底部である。やや丸みを持った平底である。86の細頸壺は弥生中期後半まで遡るものであるが，その他の遺物から弥生終末期の遺構と考えられる。

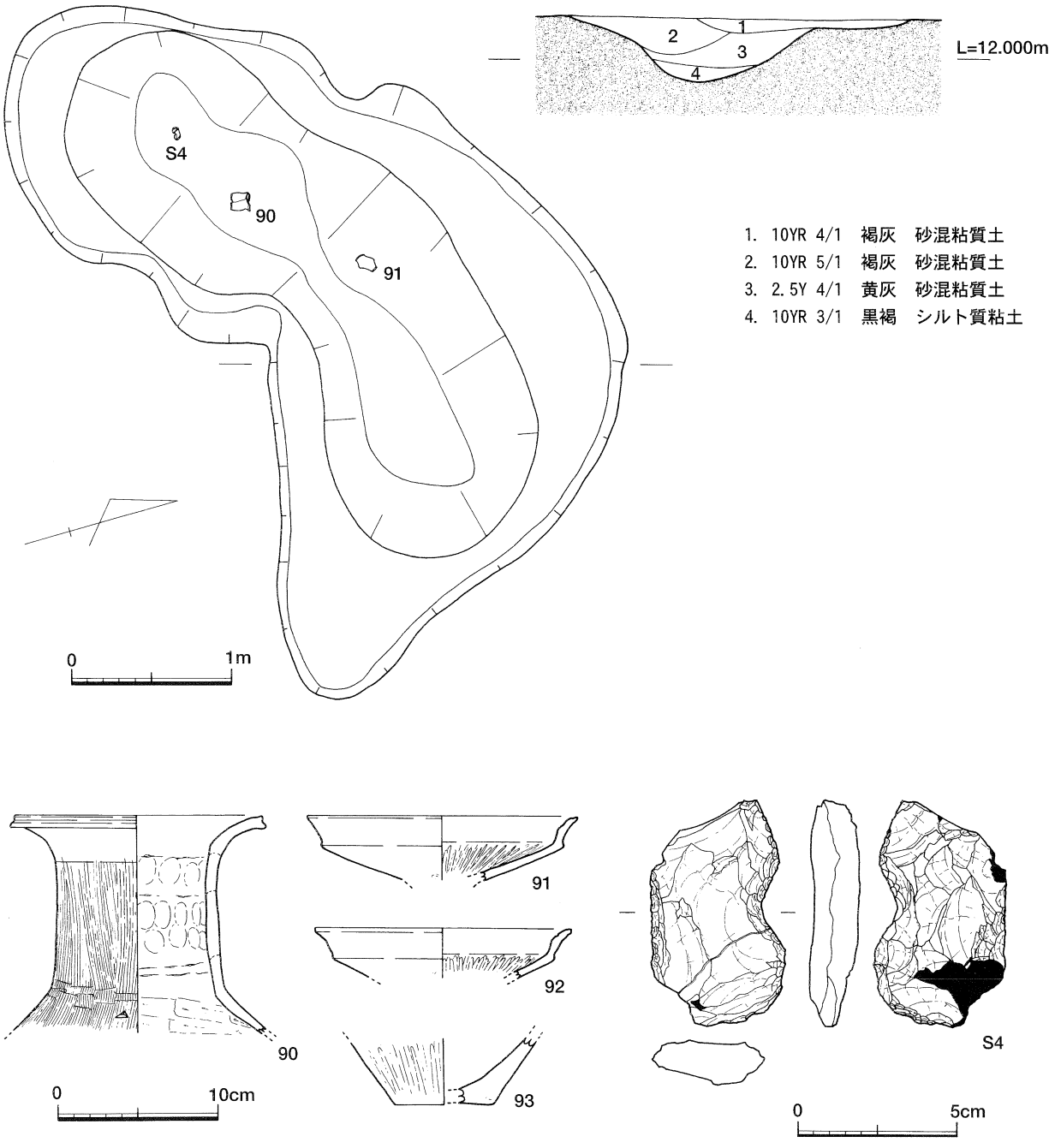


第29図　SK32001平・断面図及び出土遺物実測図

SK32002（第30図）

NR05とNR06の間の微高地上で検出した土坑である。平面形態は不整形であるがL字を呈し，長辺4.6m，短辺3.2mを測る。土坑は検出面より約5cmで平坦面が見られ，土坑の中心部分はさらに幅1.3m，長さ3.85m，深さ35cmの溝状に落ち込む。埋土は4層に分層でき，第1・2層は褐灰色砂混粘質土，第3層は黄灰色砂混粘質土，第4層は黒褐色シルト質粘土である。

出土遺物はすべて第3層から出土しており，第30図に掲載した。90は弥生土器の長頸壺である。長く垂直に延びる頸部に外反する口縁部がつく。口縁端部はやや上下に拡張させ，凹線文が施されている。外面はタテハケで，体部上部に刺突文が施される。内面は頸部が指頭圧，体部がヨコヘラケズリである。91・92は弥生土器の高杯である。内面タテヘラミガキである。93は弥生土器の底部である。外面タテヘラミガキ，内面ナデである。S4は削器である。刃部は両面より調整しており，背部は抉りを持つ。出土遺物から弥生後期後半の遺構と考えられる。



第30図　SK32002平・断面図及び出土遺物実測図

第1遺構面の遺構

NR04（第20・31・32図）

調査区の西端で検出した自然河道で，Ⅱ区から続いており，西から東へ流れ，北へ屈曲している。川幅は7mであるが，屈曲部は広くなっており，16mを測る。埋土は灰褐色粘質シルトの単層で，深さは40cmを測る。川の肩は全体になだらかに落ち込んでいる。

出土遺物は第31・32図に掲載した。S5は石鏃である。側縁部は一部自然面を残すものの，両面より調整されている。S6は石庖丁である。完形で，両側面に抉りをもち，刃部は細かく両面から調整が施されている。S7・S8は剥片である。94～100は弥生土器の甕である。98～100は内面指頭圧が見られる。101は弥生土器の広口壺である。直立する頸部から外方へ水平に広がる口縁部がついている。口縁端部は上方に拡張している。外面粗いタテハケ，内面ナデである。102・103は弥生土器の長頸壺である。104は弥生土器の紡錘車である。土器の体部片の転用で，土器内面側から穿孔しているものの，貫通はしていない。内外面ともマメツしている。105は弥生土器の高杯の脚柱部である。外面はマメツしており調整不明であるが，沈線1条を施している。内面はヨコヘラケズリである。坏部と脚部の接合面では円盤充填技法が見られる。106～117は弥生土器の底部である。106～108は外面タテヘラミガキが施されている。113は尖底気味，116・117は丸底である。118は弥生土器の鉢である。比較的浅く，やや大型の鉢である。外面ヨコヘラケズリのちタテハケのち指頭圧，内面ナデである。遺物は弥生終末期のものしか出土していないが，Ⅱ区においては古代の遺物が出土していることから，概ね古代の旧河道と考えられる。

NR07（第21・22・33図）

調査区の中央で南から北に流れる自然河道である。川幅25～30mを測り，深さは30cmを測る。川の肩は全体になだらかに落ち込んでおり，埋土は褐灰色シルト質粘土層の単層である。河川内には中洲上の盛り上がりが見られる。

出土遺物は第33図に掲載した。119・120は弥生土器の高杯脚部である。S9は削器である。弥生後期～終末期の遺物しか出土していないが，第1遺構面の他の遺構は古代以降のものであり，NR07についても古代以降の遺構の可能性が考えられる。

SK31001（第34図）

調査区北西部においてNR04の上面で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，直径1.45m，深さ50cmを測る。埋土は褐灰色砂混粘質土の単層で，断面形態は逆台形である。

出土遺物は第34図に掲載した。121は土師質土器の鍋である。外面粗いタテハケのち指頭圧，内面板ナデである。122は土師質土器の釜である。外面指頭圧，内面ナデである。出土遺物から12世紀頃の遺構と考えられる。

SA31001（第35図）

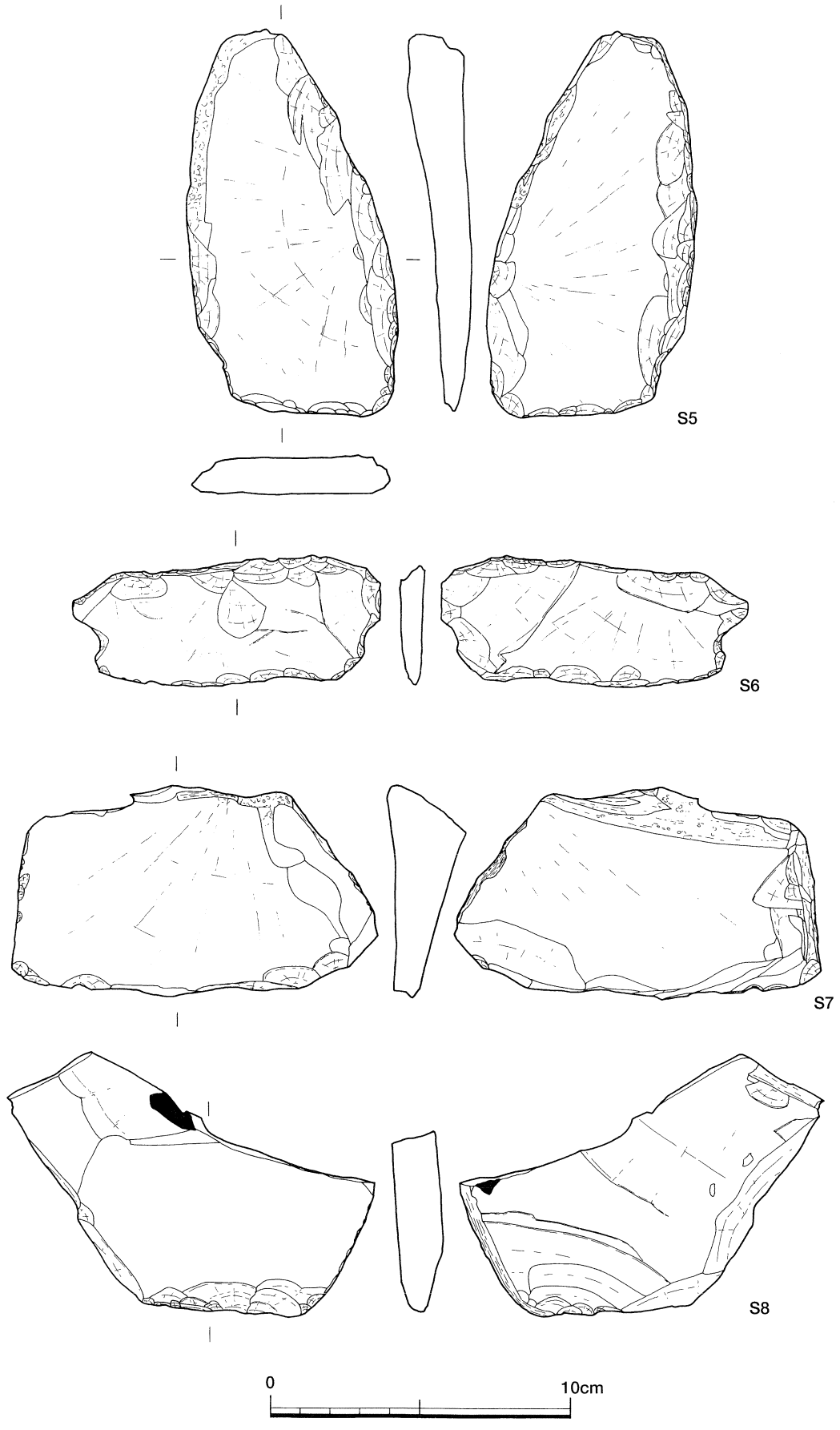
調査区の西部で検出した柱穴列である。柱穴4基からなり，主軸方位はN－83°－Eである。柱間は1m前後で均等である。柱穴列を構成する柱穴は直径10～20cmの円形で，深さは3～15cmを測る。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから，12世紀頃の遺構と考えられる。

SA31002（第35図）

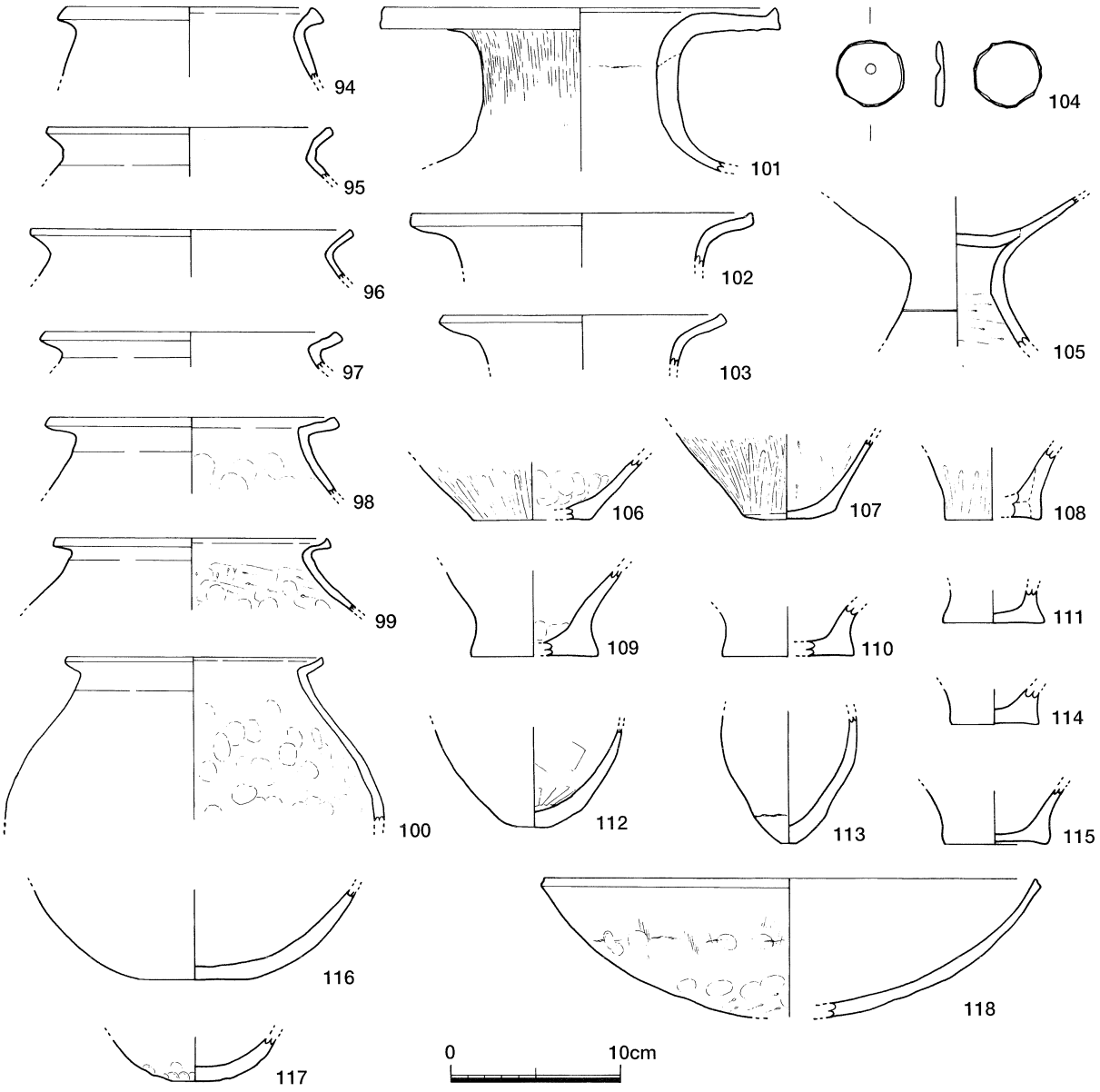
調査区の西部で検出した柱穴列である。柱穴5基からなり，主軸方位はN－88°－Wである。柱間は1m前後で均等である。柱穴列を構成する柱穴は直径10～20cmの円形で，深さは3～15cmを測る。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから，12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31001（第36図）

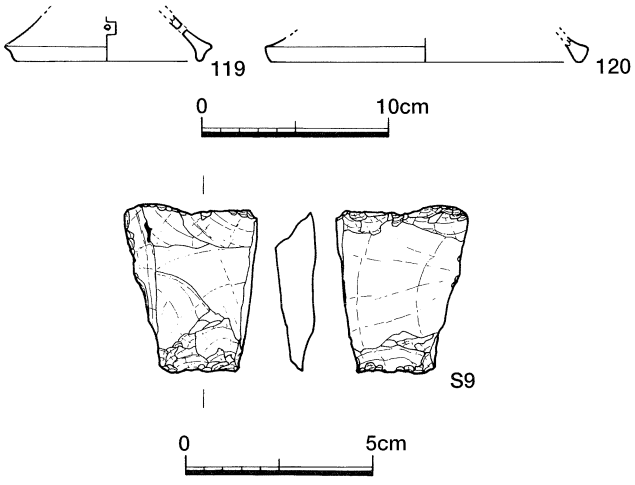
調査区の西部で検出した掘立柱建物である。北東側の柱穴2基が削平のため検出できなかったが，東西3間（3.2m），南北1間（1.6m），床面積5.12㎡で，主軸方位はN－75°－Wである。東西方向の柱間は



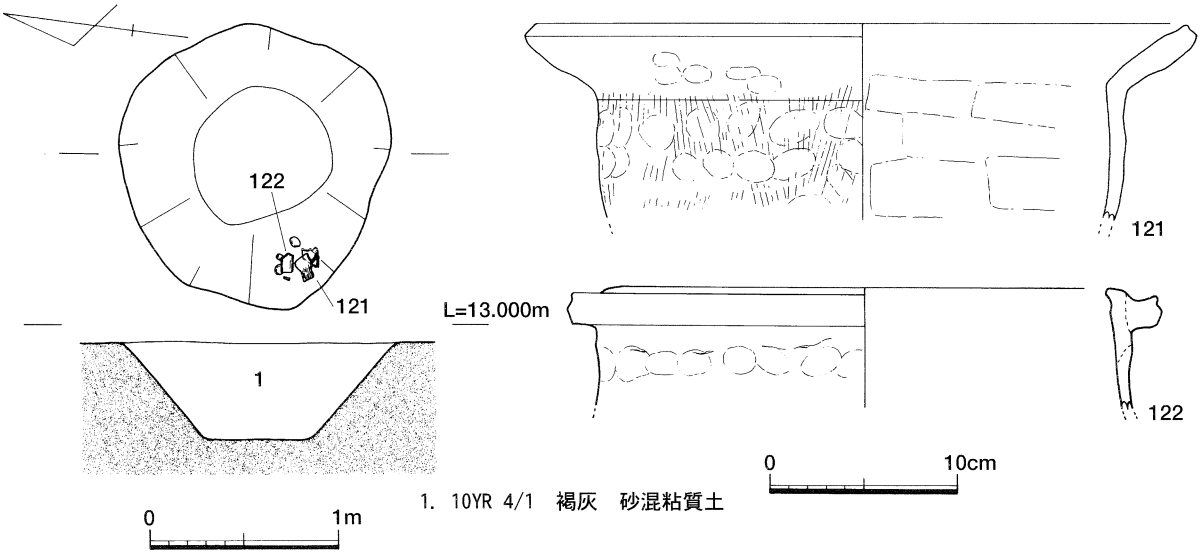
第 31 図　NR04 出土遺物実測図①



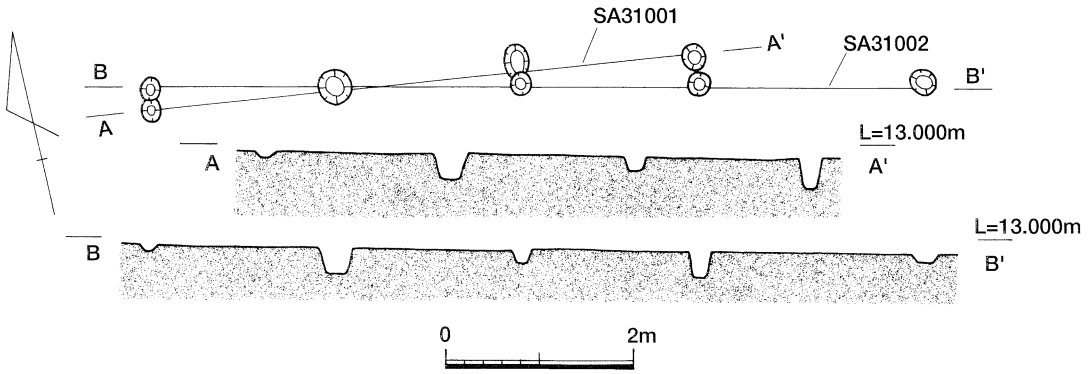
第 32 図　NR04 出土遺物実測図②



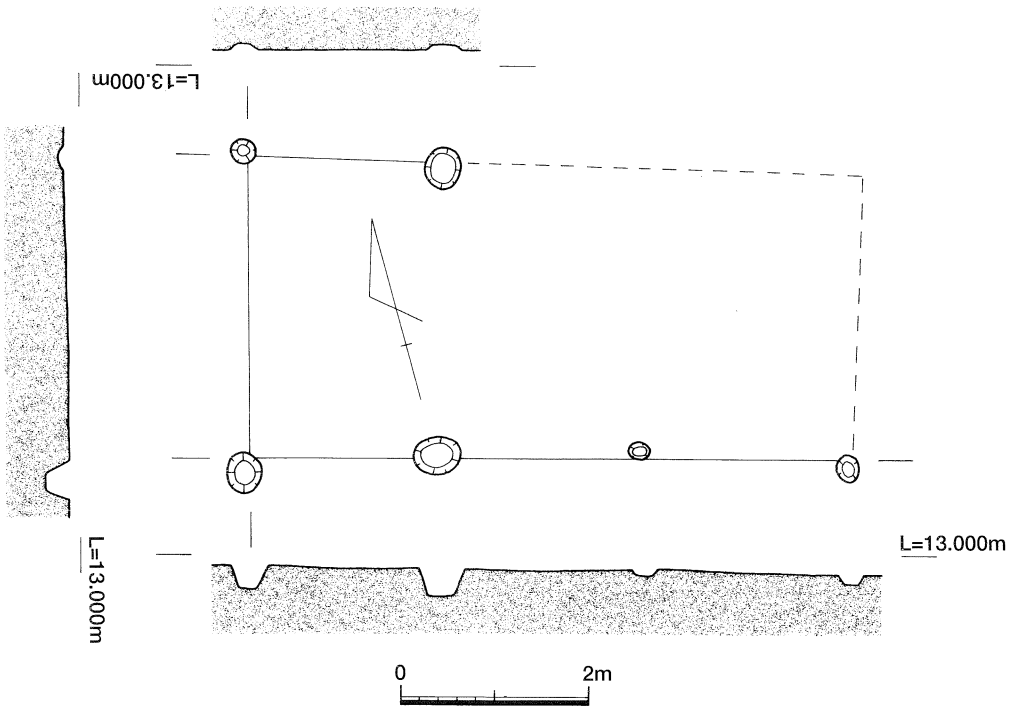
第 33 図　NR07 出土遺物実測図



第 34 図　SK31001 平・断面図及び出土遺物実測図



第 35 図　SA31001・SA31002 平・断面図



第 36 図　SB31001 平・断面図

1～1.1mとほぼ均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～25cmの円形で，深さは3～15cmを測る。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから，12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31002（第37図）

調査区の西部で検出した掘立柱建物である。東西3間（2.5m），南北1間（1.65m），床面積4.13㎡で，主軸方位はN－75°－Wである。柱間はすべて80～90cmとほぼ均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～20cmの円形で，深さは3～20cmを測る。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから，12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31003（第38図）

調査区の西部で検出した掘立柱建物である。北東側の柱穴2基が削平のため検出できなかったが，東西2間（2.2m），南北1間（90cm），床面積1.98㎡で，主軸方位はN－76°－Wである。東西方向の柱間は1.1mで均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径15～25cmの円形で，深さは5～15cmを測る。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから，12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31004（第39図）

調査区の西端で検出した掘立柱建物である。西側が調査区外であるため，建物東辺しか検出できていない。南北2間（2m），主軸方位はN－79°－Wである。柱間は1mで均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～20cmの円形で，深さは10～15cmを測る。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから，12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31005（第40図）

調査区の西部で検出した掘立柱建物である。東西3間（3.5m），南北2間（1.8m），床面積6.3㎡で，主軸方位はN－81°－Wである。建物は東西2室に分割でき，東側は2間，西側は1間である。柱間は東西方向は東側2間分は1.1mで，西側は1.3mとやや広くなっている。このため，床面積は東側が3.96㎡，西側が2.34㎡となっている。南北方向の柱間はほぼ90cmで均等であるが，東辺は中央の柱が検出されていない。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～25cmの円形で，深さは5～20cmを測る。柱穴埋土はSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土である。

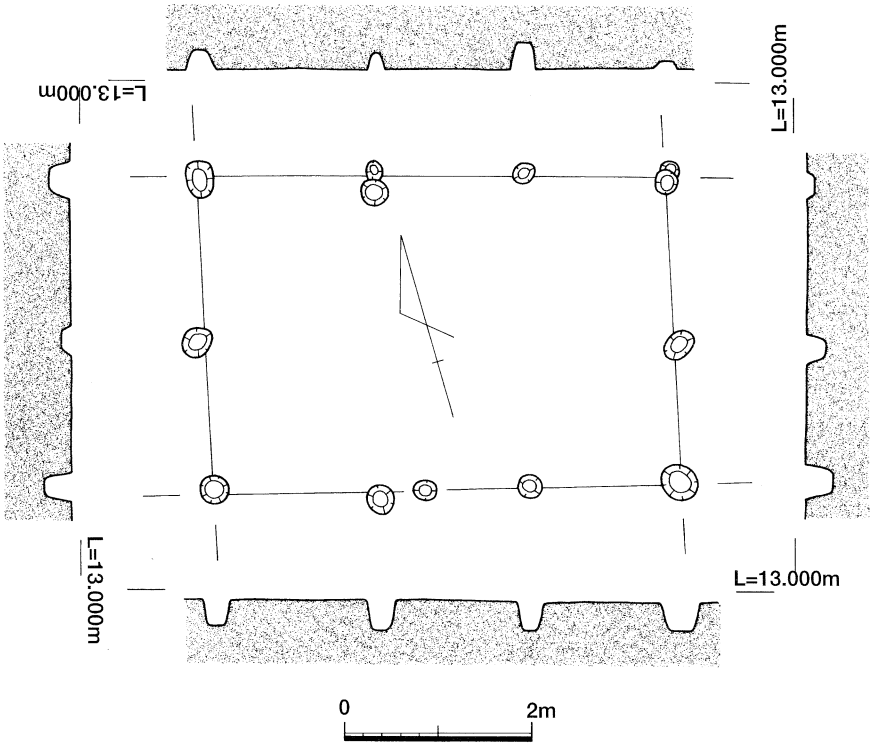
出土遺物は第40図に掲載した。建物北辺の中央に所在するSP3037から123・124，SP3038から125・126が出土した。123・124は土師器の埦である。125・126は土師器の坏である。出土遺物から12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31006（第41図）

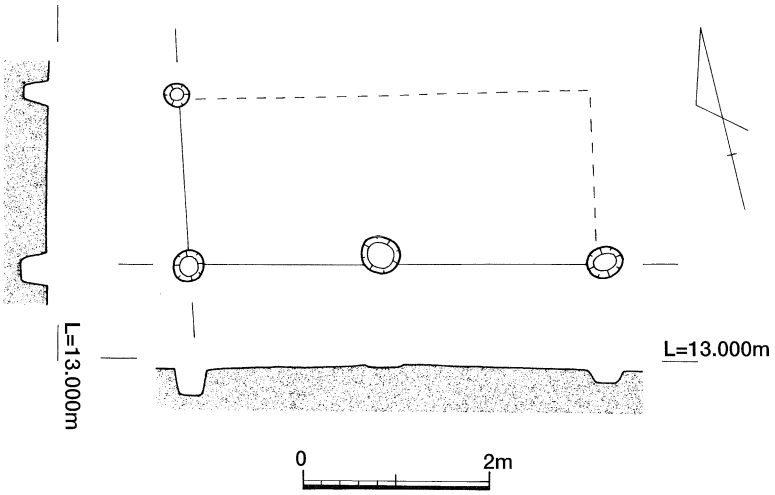
調査区の西部で検出した遺構である。東西3間（3m），南北1間（70cm），床面積2.1㎡で，主軸方位はN－81°－Wである。東西方向の柱間はすべて1mでほぼ均等である。南北の幅が70cmと狭いことからSB31006単独の掘立柱建物とは考えられない。SB31005と重なるようにして所在し，ほぼ同じ主軸方位であることから，SB31005の一部になる可能性も考えられる。掘立柱建物を構成する柱穴は直径15～25cmの円形で，深さは10～15cmを測る。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから，12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31007（第42図）

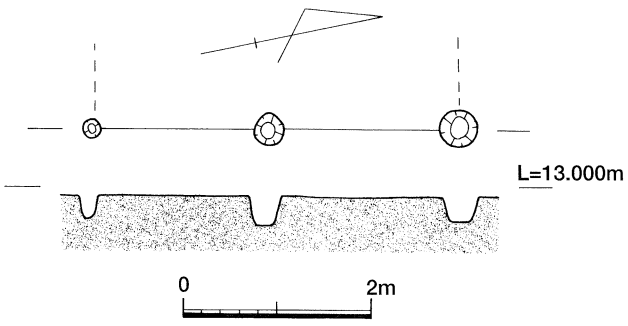
調査区の西部で検出した掘立柱建物である。南東部の柱穴は削平により検出できていないが，東西3間（2.2m），南北3間（2.4m），床面積5.28㎡で，主軸方位はN－76°－Wである。柱間は55cm～1mとかなりばらつきがある。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～20cmの円形で，深さは3～15cmを測る。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから，12世紀頃の遺構と考えられる。



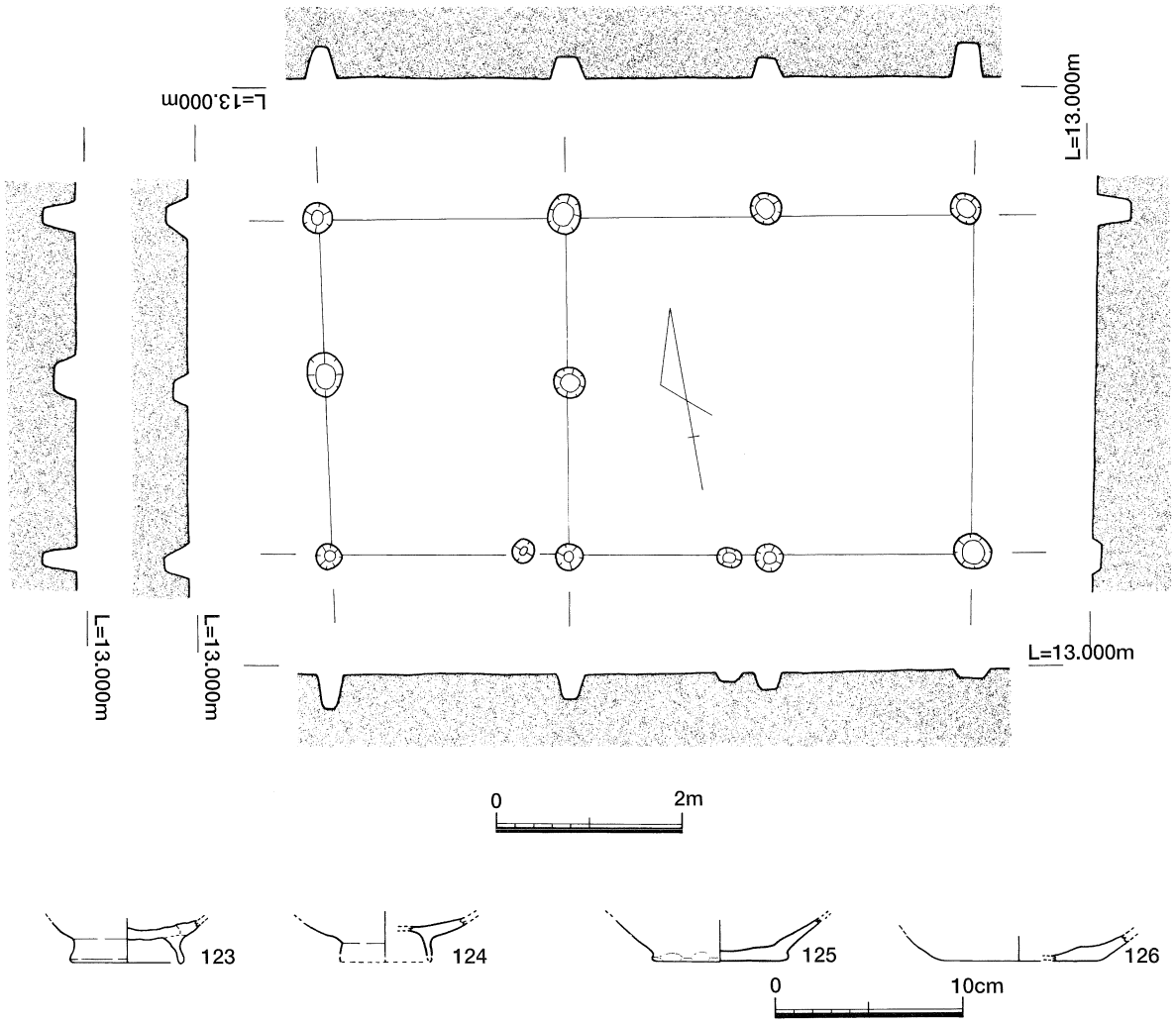
第 37 図　SB31002 平・断面図



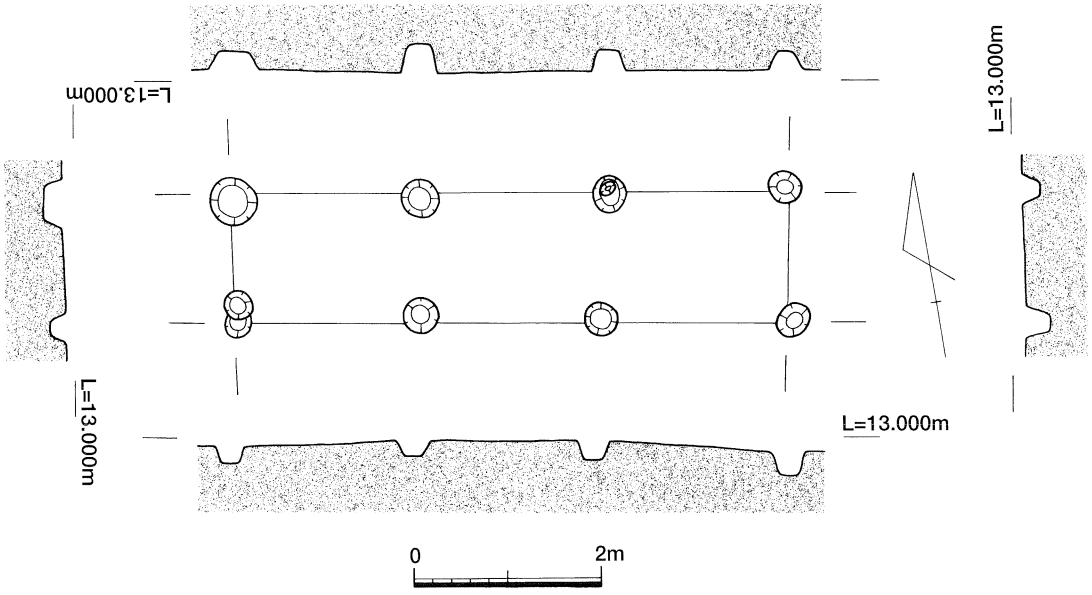
第 38 図　SB31003 平・断面図



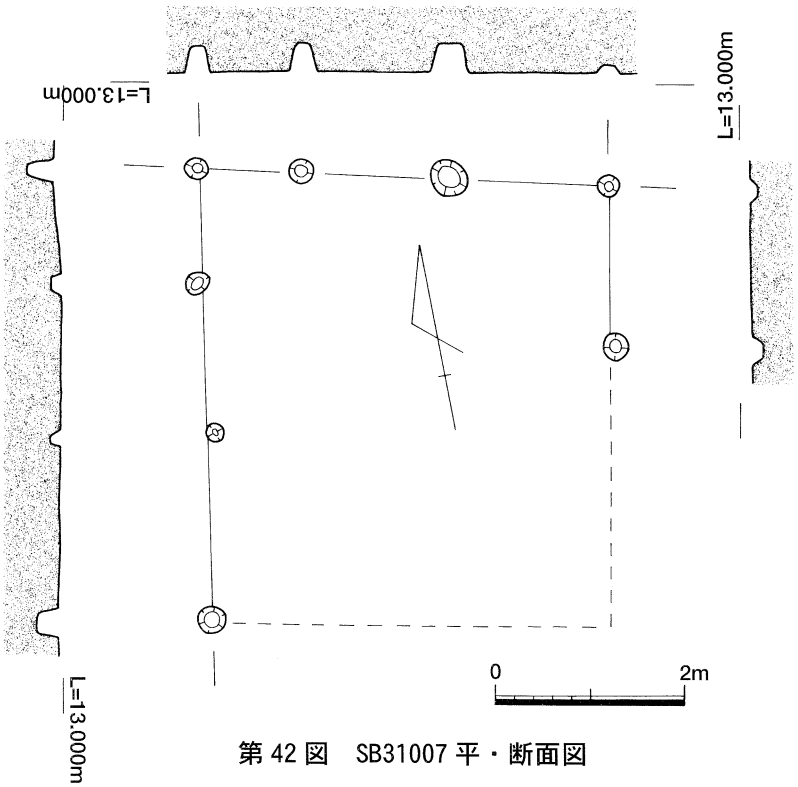
第 39 図　SB31004 平・断面図



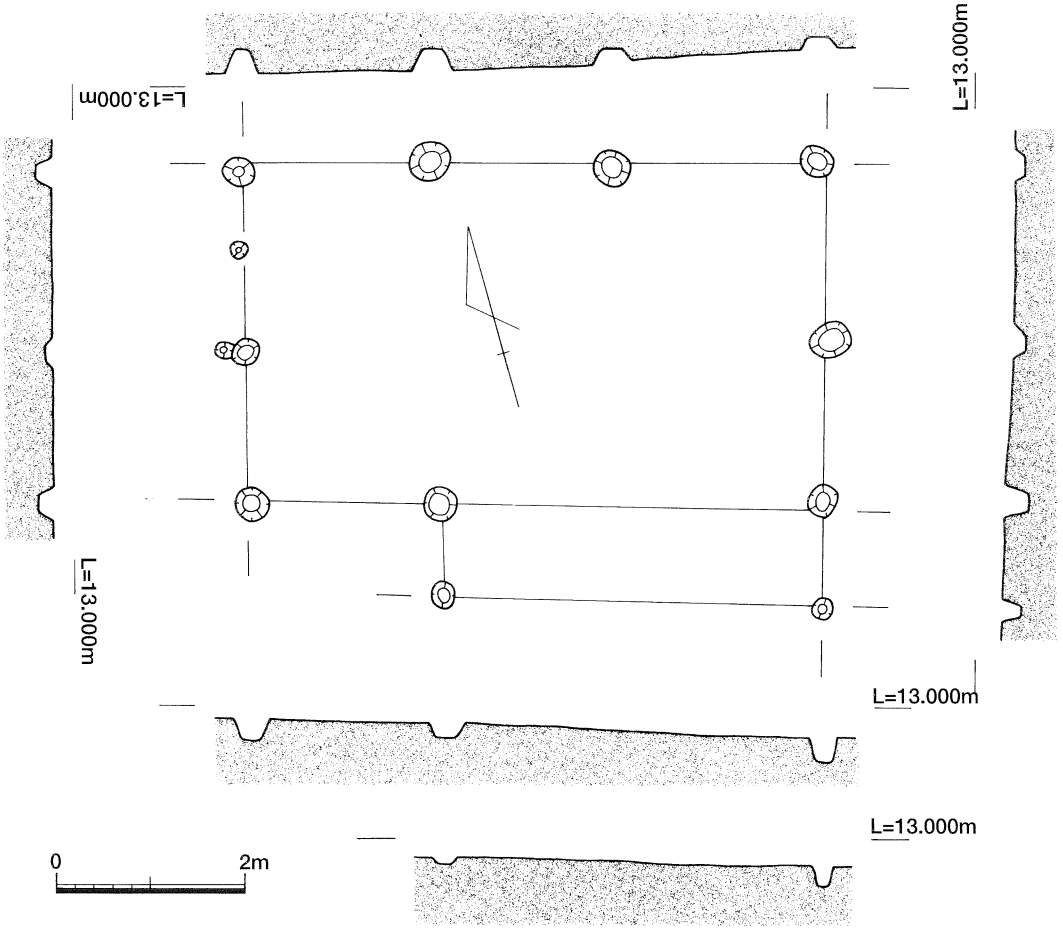
第 40 図　SB31005 平・断面図及び出土遺物実測図



第 41 図　SB31006 平・断面図



第 42 図　SB31007 平・断面図



第 43 図　SB31008 平・断面図

SB31008（第43図）

調査区の西部で検出した掘立柱建物である。東西3間（3.1m），南北2間（1.8m），床面積5.58㎡で，主軸方位はN－74°－Wである。建物の東側2間の南側には約50cmの庇状の張り出しが見られる。これをあわせた床面積は6.61㎡である。柱間は東西方向では1m前後で均等であるが，南北方向では北側が1m，南側が80cmである。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～20cmの円形で，深さは3～15cmを測る。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから，12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31009（第44図）

調査区の西部で検出した掘立柱建物である。南東部の柱穴は削平により検出できていないが，東西2間（3m），南北1間（1.45m），床面積4.35㎡で，主軸方位はN－77°－Wである。東西方向の柱間は東側が1.3m，西側が1.7mである。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～20cmの円形で，深さは3～20cmを測る。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから，12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31010（第45図）

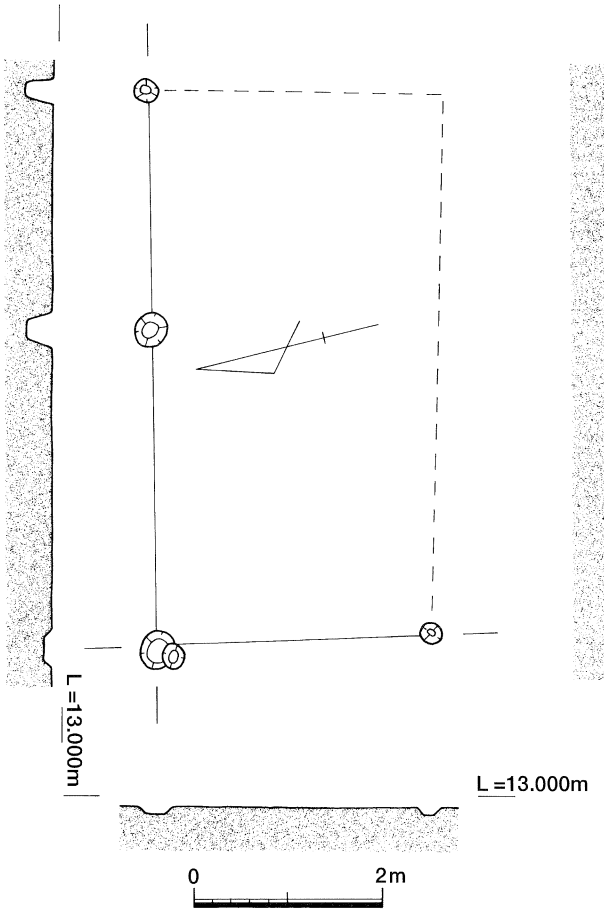
調査区の中央で検出した掘立柱建物である。南東部の柱穴は削平により検出できていないが，東西3間（2.9m），南北1間（1.9m），床面積5.51㎡で，主軸方位はN－77°－Wである。東西方向の柱間は1m前後でほぼ均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～20cmの円形で，深さは5～15cmを測る。建物の北辺の柱穴は2基ずつ見られることから，建て直しの可能性が考えられる。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから，12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31011（第46図）

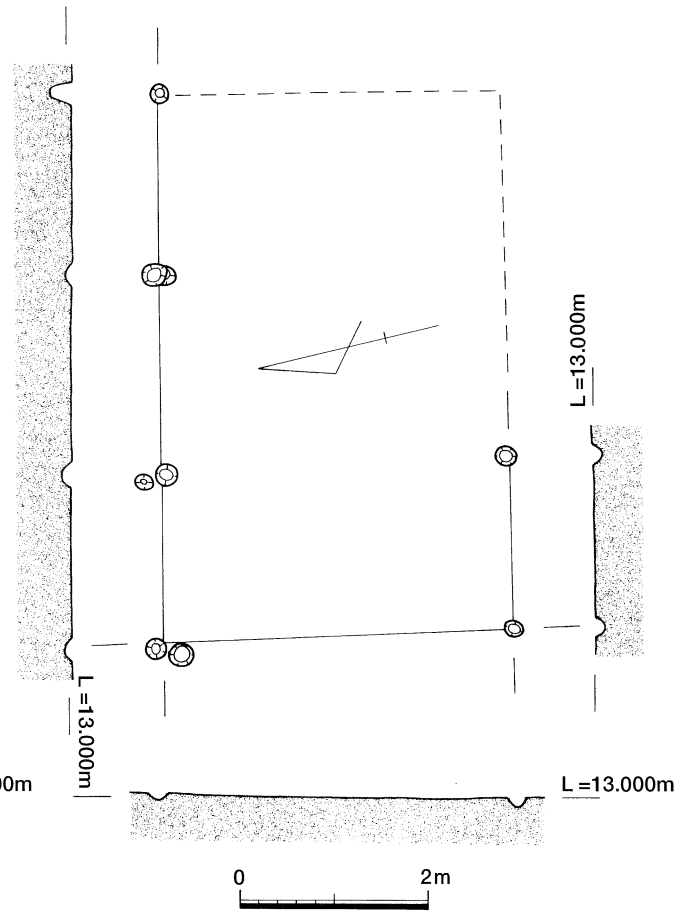
調査区の東部で検出した掘立柱建物である。東西1間（2.6m），南北1間（1.6m），床面積4.16㎡で，主軸方位はN－80°－Wである。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10cm程度の円形で，深さは3～10cmを測る。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから，12世紀頃の遺構と考えられる。

鋤溝群（第22図）

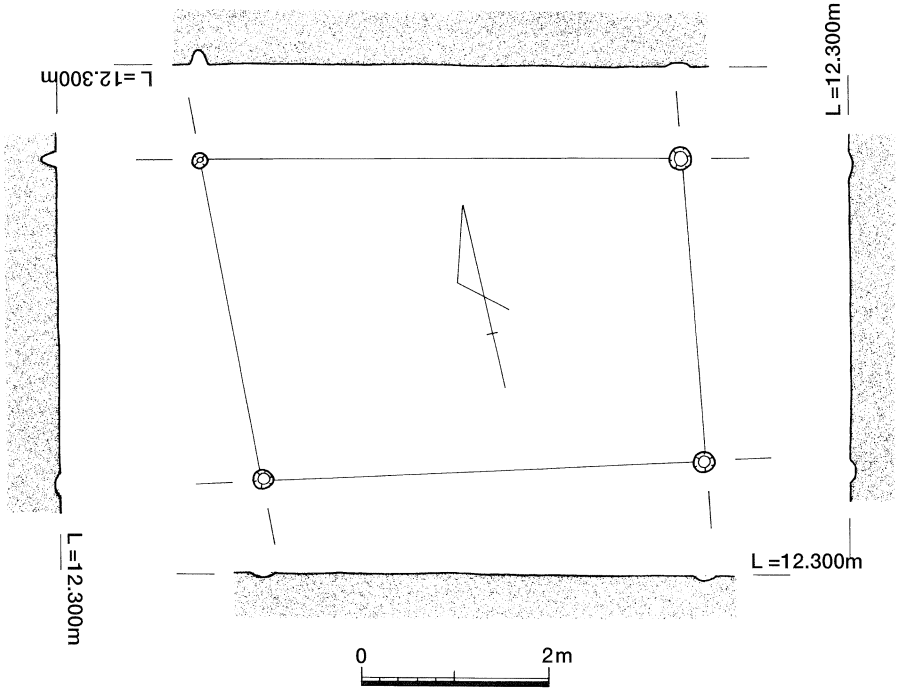
調査区の西端で幅20～30cm，深さ5cmの南北方向の溝を15条検出した。埋土はいずれも浅黄色シルトである。遺物は出土していないが，Ⅰ区の第1遺構面で検出した近世の遺構の埋土と同じであることから近世の遺構と考えられる。



第 44 図　SB31009 平・断面図



第 45 図　SB31010 平・断面図



第 46 図　SB31011 平・断面図

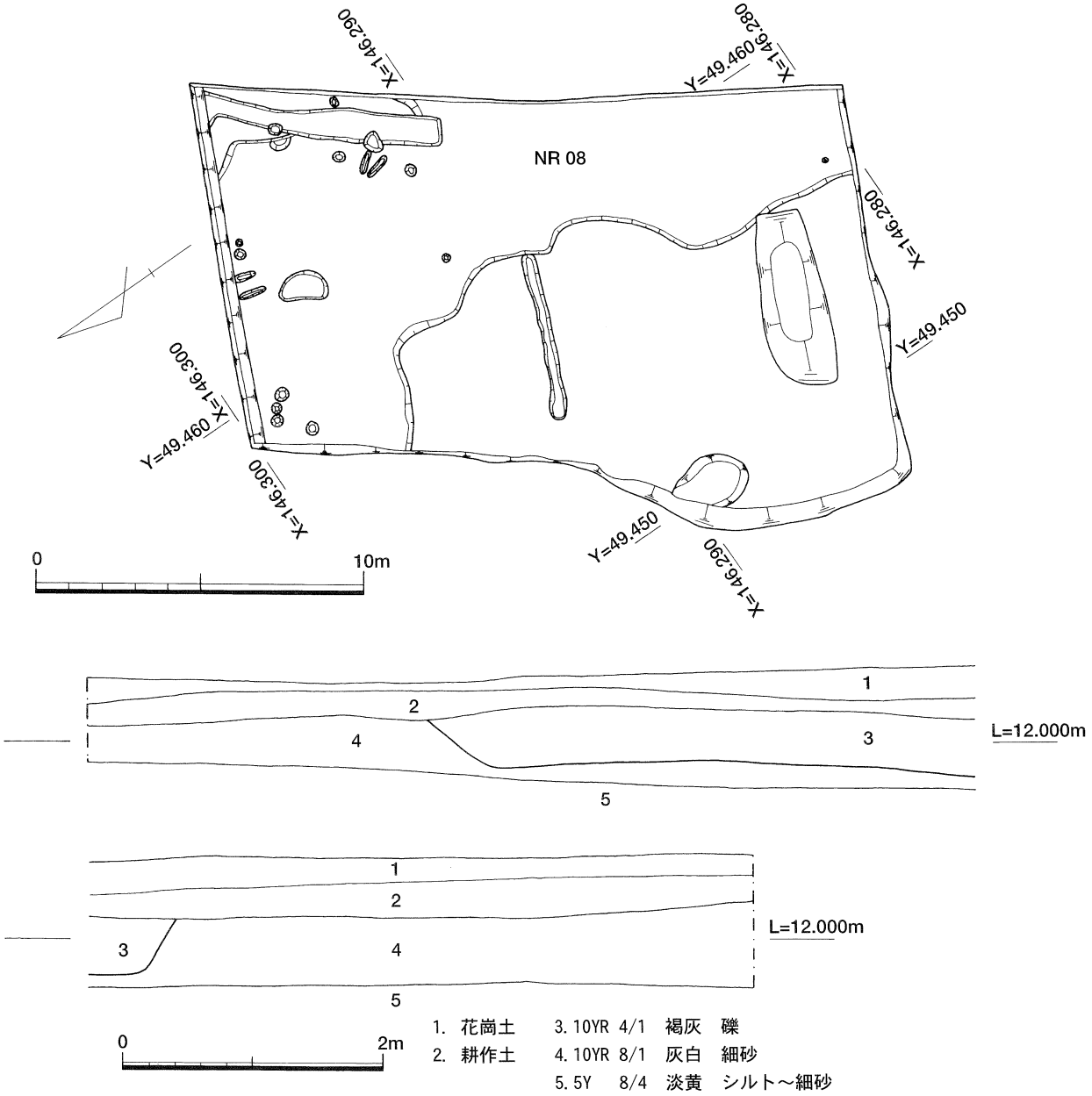
第4節　Ⅳ区の調査

調査区の概要と基本層序（第47図）

Ⅳ区は調査地の東部の西端にあたる。調査区の南壁において断面図を作成し，第47図に掲載した。層序は5層に分層できた。第1層は花崗土で現代の客土層，第2層は現代の耕作土である。第3層は褐灰色の礫層で，近現代の土坑と考えられる。第4層は灰白色細砂層である。第5層は淡黄色シルト～細砂層で，遺物を含まないことから地山とした。遺構面はこの地山の上面のみで，旧河道1条，土坑1基，溝2条等を検出した。出土遺物は無く遺構面の時期は不明であるが，隣接するⅤ区の遺構面と同一面であり，Ⅴ区では中世末～近世の遺構を検出していることから同時期の遺構面と考えられる。

NR08（第47図）

調査区の東半を南から北へ流れる自然河道である。川幅は7～10mで，深さ40cmを測る。埋土は褐灰色細砂で，肩は全体になだらかに落ち込んでいる。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

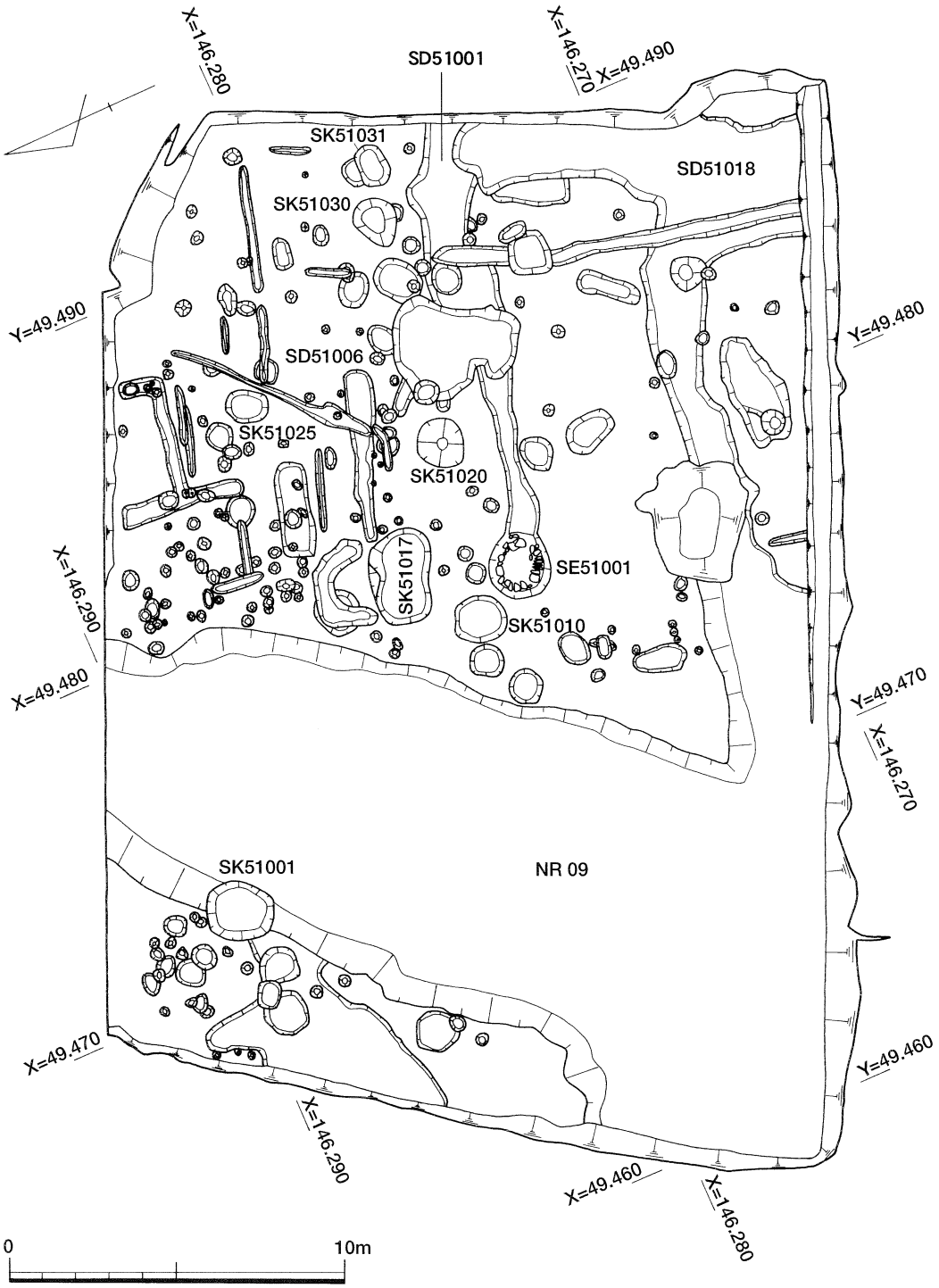


第47図　Ⅳ区断面図及び南壁土層断面図

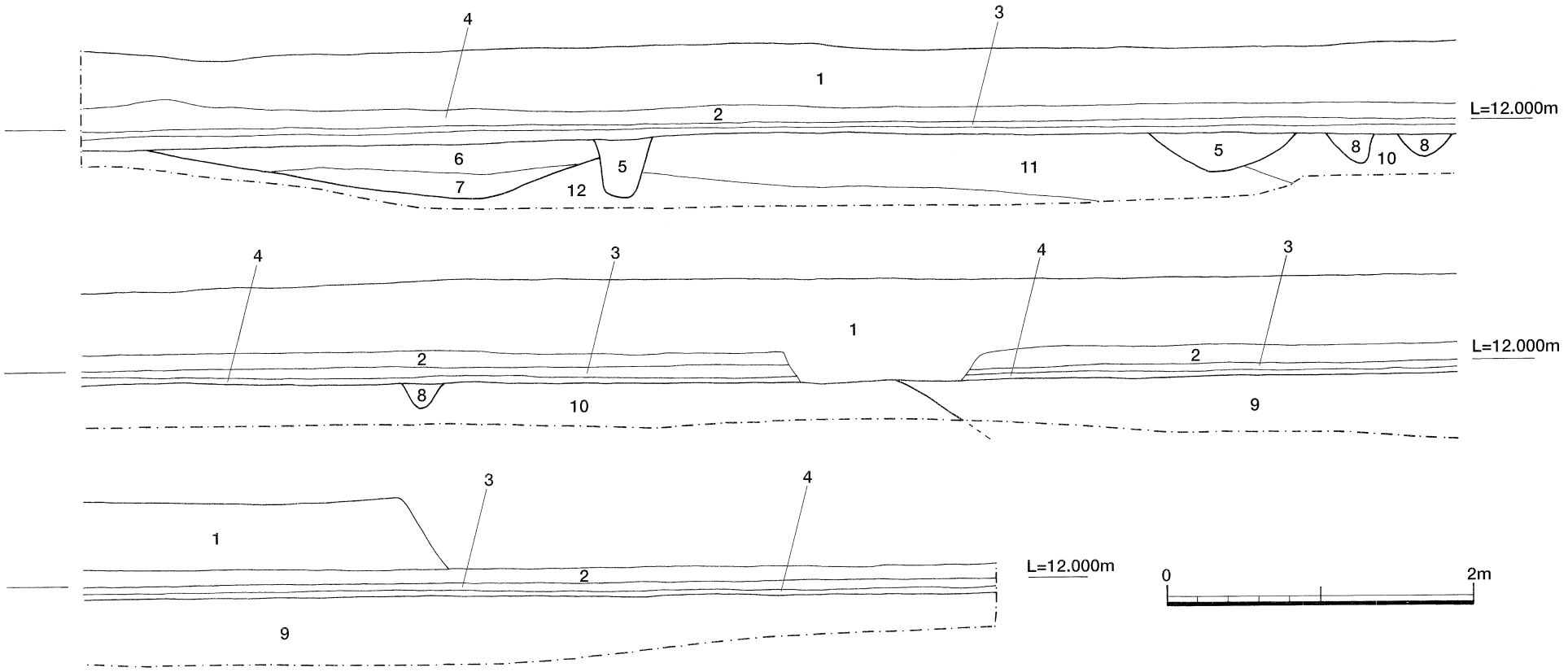
第5節　Ⅴ区の調査

調査区の概要と基本層序（第48・49図）

Ⅴ区は調査地東半の西部にあたる。調査区の南壁において断面図を作成し，第49図に掲載した。層序は12層に分層できた。第1層は花崗土で現代の客土層である。第2層は現代の耕作土，第3層は床土である。第4層は灰褐色シルト質極細砂層で，近世の遺物をわずかに包含する。第5～8層は遺構埋土と考えられる。第9層は淡黄色シルト～細砂層で，自然河道NR09の埋土である。第10・11層は礫層で，遺物を含まない

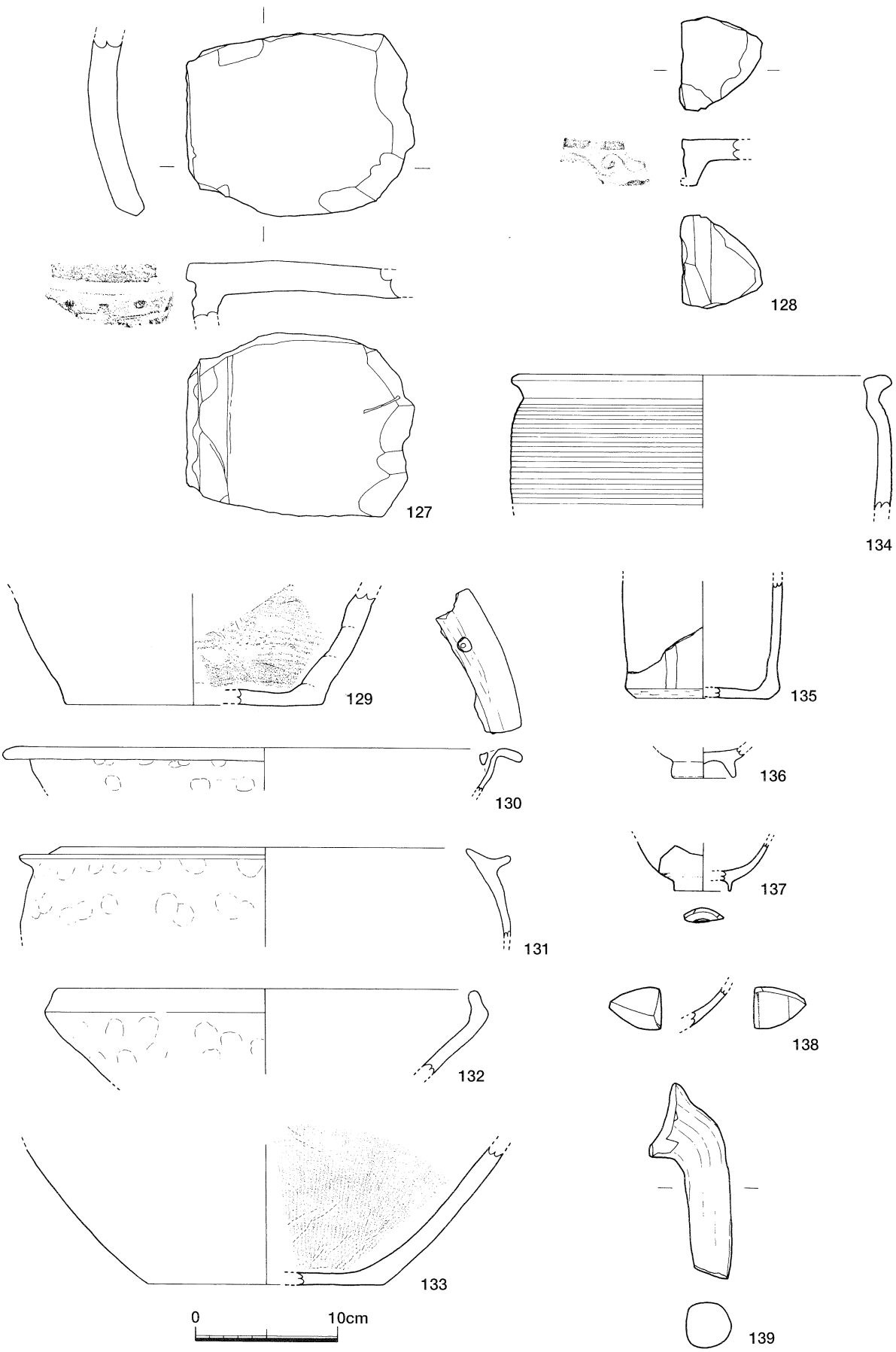


第48図　Ⅴ区平面図

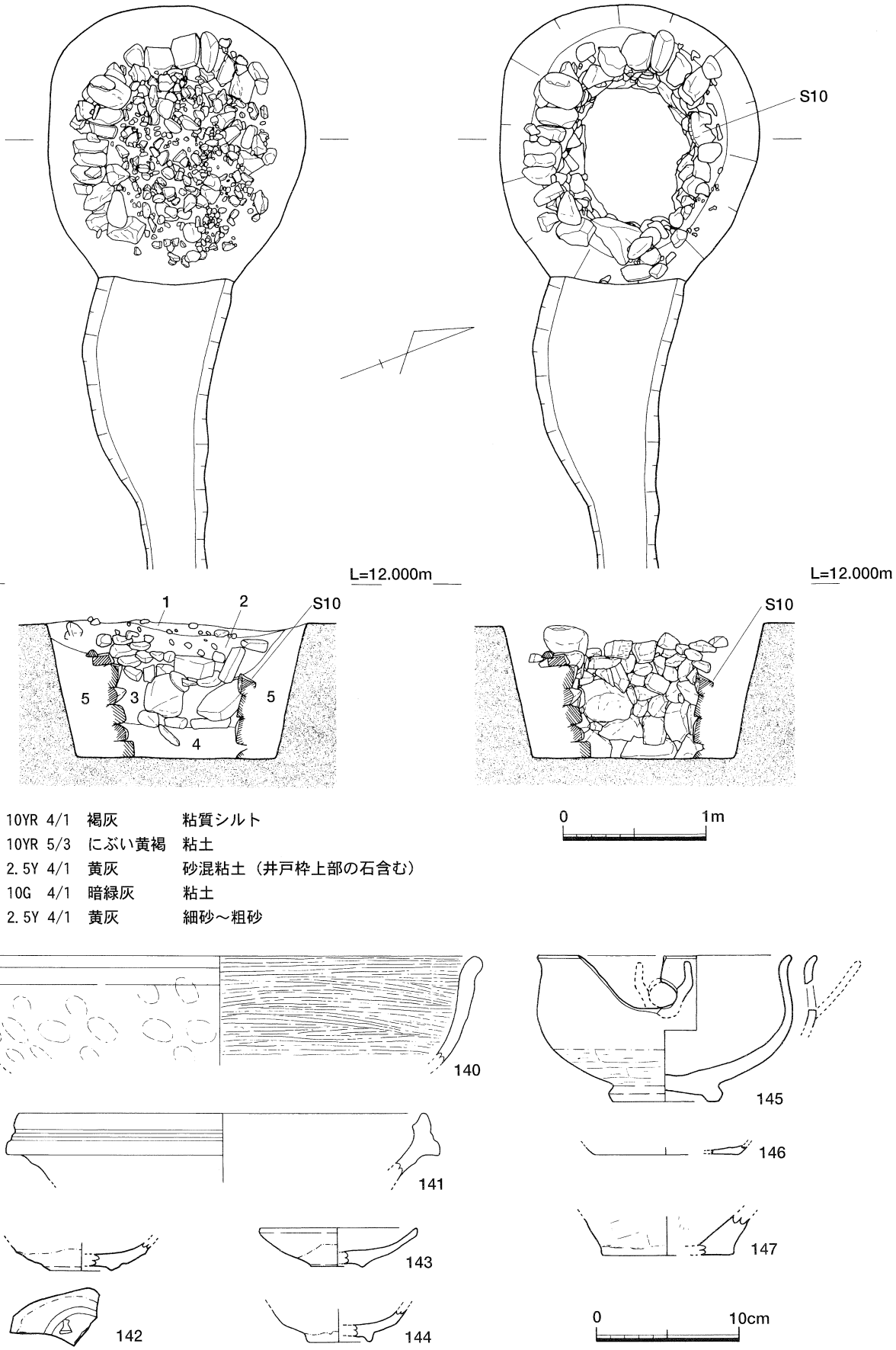


1. 花崗土
2. 耕作土
3. 7.5YR6/6　橙　砂混粘質土
4. 5YR4/2　灰褐　シルト質極細砂
5. 2.5Y3/1　黒褐　礫混粘土
6. 2.5Y5/1　黄灰　礫混粘土
7. 10YR　5/3　にぶい黄褐　粘質シルト
8. 10YR　4/2　灰黄褐　シルト質極細砂
9. 7.5Y　8/3　淡黄　シルト～細砂
10. 10Y　6/1　灰　礫
11. 2.5Y　6/1　黄灰　礫
12. 5Y　8/4　淡黄　シルト～細砂

第49図　V区南壁土層断面図



第 50 図　NR09 出土遺物実測図



第 51 図　SE51001 平・断面図及び出土遺物実測図①

ことから地山とした。しかしながら，第10・11層は南壁断面にしか認められず，平面では第12層の淡黄色シルト～細砂層を地山として認識した。

遺構面は地山上面の1面だけである。自然河道1条，土坑31基，溝19条等を検出した。遺構出土遺物から概ね中世末～近世の遺構面と考えられる。

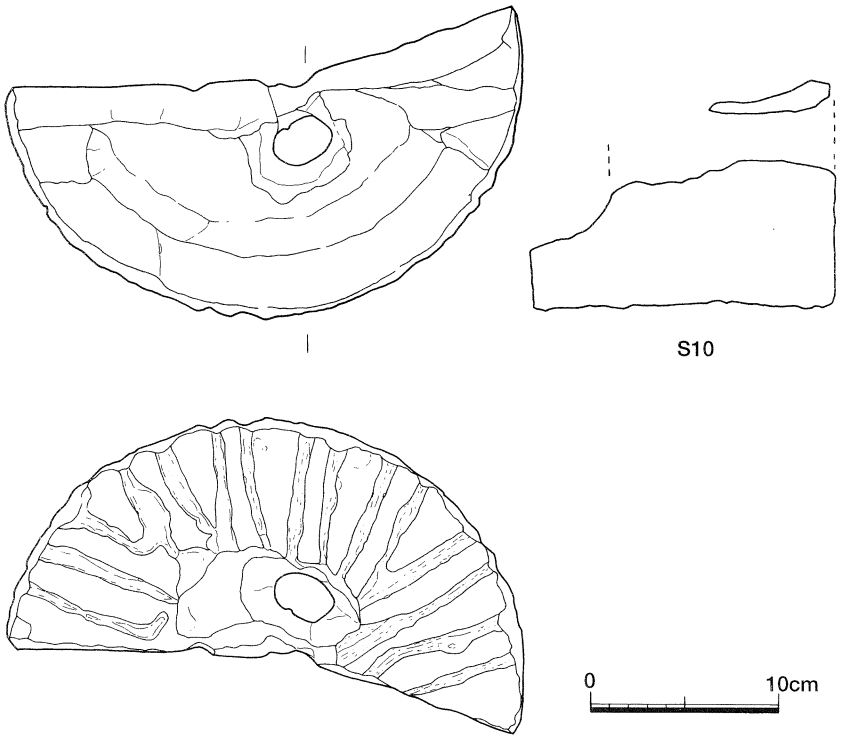
NR09（第48・50図）

調査区の西半を南から北へ向かって流れる自然河道である。川幅は南側では10m，北側では6.5mで，深さ50cmを測る。埋土は淡黄色シルト～細砂の単層である。

出土遺物は第50図に掲載した。127は軒平瓦である。比較的厚いつくりで，面取りもしっかりしている。凸面はケズリ状の板ナデである。瓦当面には連珠文が見られる。128は軒平瓦である。やや薄く，瓦当面には唐草文が見られる。129は信楽焼の甕である。内面に格子目タタキが認められる。130は土師質土器の焙烙である。内耳を持ち，孔は貫通している。外面指頭圧，内面ナデである。131は土師質土器の釜である。外面指頭圧，内面ナデである。132は土師質土器の擂鉢である。外面指頭圧，内面ナデである。133は備前焼の擂鉢である。134は産地不明の陶器甕である。135は備前焼の鉢である。136は肥前系陶器の京焼風陶器碗である。137は肥前系磁器の碗である。138は龍泉窯系青磁碗で，鎬連弁が見られる。139は土師質土器鍋の脚部である。出土遺物のうち127の瓦は13世紀に遡るものであるが，中世後半～近世のものが多く，最終埋没は19世紀頃と考えられる。

SE51001（第51・52図）

調査区の中央で検出した井戸である。平面形態は楕円形を呈し，長径2m，短径1.8m，深さ95cmを測る。井戸枠は石組みであり，検出面では長径1m，短径90cm，底面では長径90cm，短径75cmの楕円形である。石組みは高さ75cmまで残っている。井戸枠の石積みに使用された石材は砂岩が多く，一部安山岩が使用されている。また，第52図S10の石臼が転用されていた。また，石積み方法は，基底部の石材は長辺を井戸の中心に向けるものの，2段目以上の石は小口を井戸の中心に向けて積まれている。井戸の断面形態は逆台形を呈し，埋土は井戸枠内4層と掘方部分の計5層に分層できる。第1層は褐灰色粘質シルト層，第2層はにぶい黄褐色粘土層で，この上部2層には数cm～20cm程度の礫が多く混じる。第3層は黄灰色砂混粘質土層で井戸枠上部の石材が転落していた。第4層は暗緑灰色粘土層である。第5層とした掘方は黄灰



第52図　SE51001出土遺物実測図②

色の細砂～粗砂層である。断面の状況から井戸は第4層堆積後に上部石積みを破却され，さらに礫によって上部を埋め戻されたと考えられる。また，井戸から溝SD51001が東へ延びている。

遺物は人工的な埋め戻しの土と考えられる第1・2層から出土しており，第51・52図に掲載した。140は土師質土器の鍋である。口縁部はわずかに外反する。外面指頭圧，内面ヨコハケである。141は備前焼擂鉢である。重ね焼痕が残る。142～144は肥前系陶器の皿である。すべて高台無釉としており，142の外面には胎土目が残る。145は瀬戸美濃系陶器片口鉢である。片口部分は欠損しているものの，注ぎ口には円孔が穿たれている。体部下半以下の無釉部分はヨコヘラケズリが残る。146は土師器の皿である。147は土師質土器の擂鉢である。S10は凝灰岩製の石臼である。中央から放射状の線刻が見られる。出土遺物から17世紀前半に井戸が埋め戻されたことがうかがえる。

SD51001（第53図）

SE51001から東へ向かって流れる溝である。最大幅1.95m，検出長13.4m，深さ20cmを測る。埋土は褐灰色粘質シルトの単層で，断面形態は逆台形である。SE51001から溝が始まっていることから，この井戸から水を配水していた溝の可能性が考えられる。

出土遺物は第53図に掲載した。148～150は土師器の皿である。151は土師質土器鍋の脚部である。152は肥前系陶器の皿である。高台無釉で，砂目が内外面に残る。内面には鉄絵により文様が描かれている。出土遺物から17世紀前半の遺構と考えられる。

SD51006（第54図）

調査区中央で検出した東西方向の溝である。最大幅90cm，検出長5.2m，深さ20cmを測る。埋土は褐灰色砂混粘質土の単層で，断面形態はU字である。

出土遺物は第54図153の肥前系陶器の皿だけである。153は高台無釉で，内外面に砂目を残す。出土遺物から17世紀前半の遺構と考えられる。

SD51018（第55図）

調査区南東隅で検出した溝である。最大幅4.8m，検出長12.5mの南北方向の溝から，西側へ最大幅2.5m，長さ17mの溝が分岐し，NR09に流れ込んでいる。埋土は黄灰色粘質シルトの単層で，断面形態は逆台形である。

出土遺物は第55図に掲載した。154は肥前系陶器の皿である。高台無釉で，見込みに胎土目が残る。155は肥前系磁器の皿である。見込みに染付けが見られる。156は肥前系陶器の皿である。157は肥前系磁器の瓶である。158は肥前系磁器の紅猪口である。外面には雨降り文と圏線が施されている。159は土師質土器の火鉢である。体部は肩が張り，短い口縁部は直立する。外面ナデ，内面ヨコヘラケズリである。160は土師質土器の鍋である。外面指頭圧，内面板ナデである。161は土師質土器の甕である。162～164は備前焼の擂鉢である。最も新しい遺物から18世紀の遺構と考えられるが，18世紀の遺物は旧河道との合流点付近に集中しており混入の可能性も考えられる。その他の場所では17世紀の遺物しか出土しておらず，17世紀の屋敷地を囲む溝の可能性も有る。

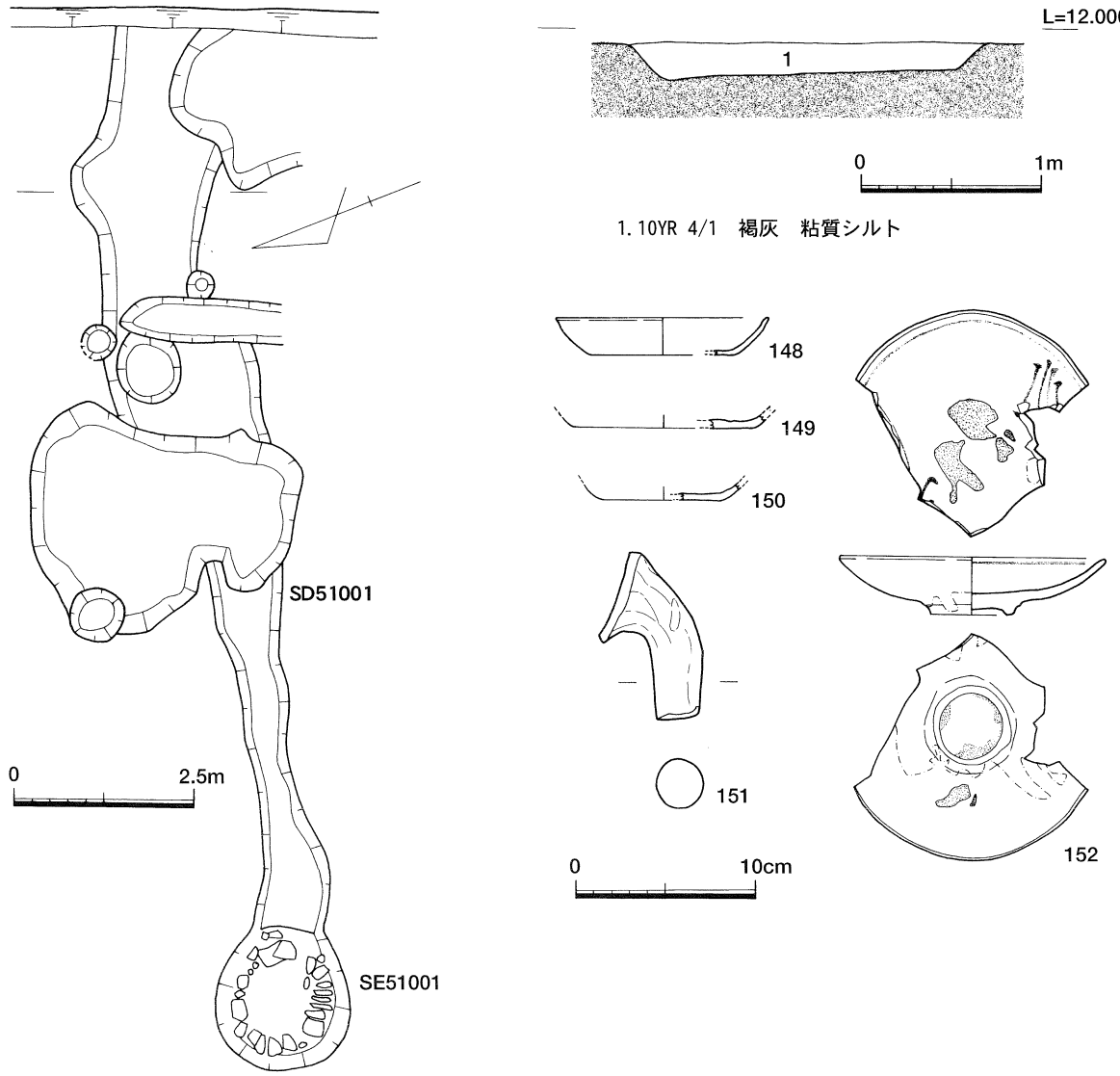
SK51001（第56図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径2m，短径1.8m，深さ25cmを測る。埋土は炭を含んだ黄灰色粘質シルトの単層で，断面形態は逆台形である。

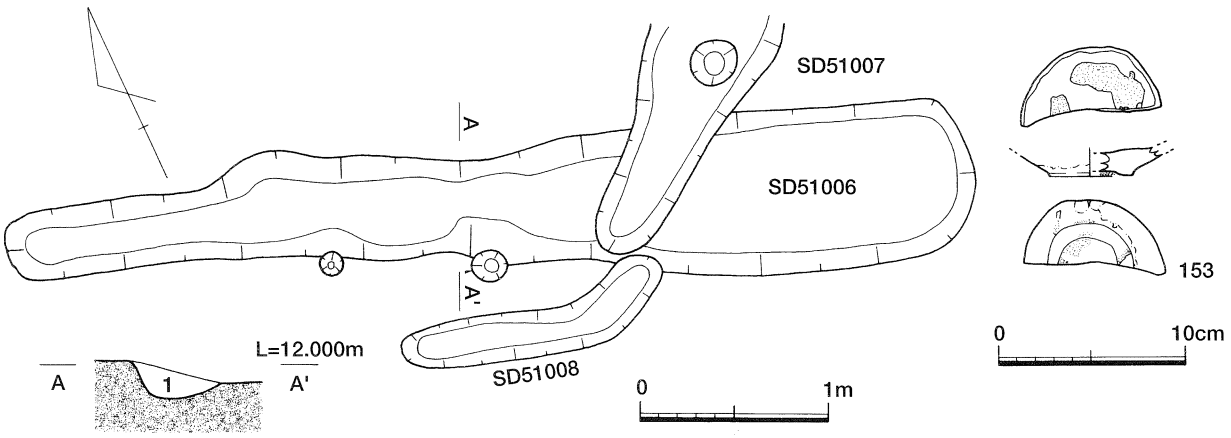
出土遺物は第56図に掲載した。165は備前焼の鉢である。底面に窯記号が見られる。166は備前焼の擂鉢である。167は堺焼の擂鉢である。削出高台がわずかに残る。168～176は土師質土器の焙烙である。内耳に2個の孔を持ち，貫通している。出土遺物から18世紀前半頃の遺構と考えられる。

SK51010（第57図）

調査区中央で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径1.5m，短径1.4m，深さ75cmを測る。断面形態は逆台形である。土坑の底面と壁面には厚さ10～20cmの黄灰色の粘土を貼り付けており，水溜

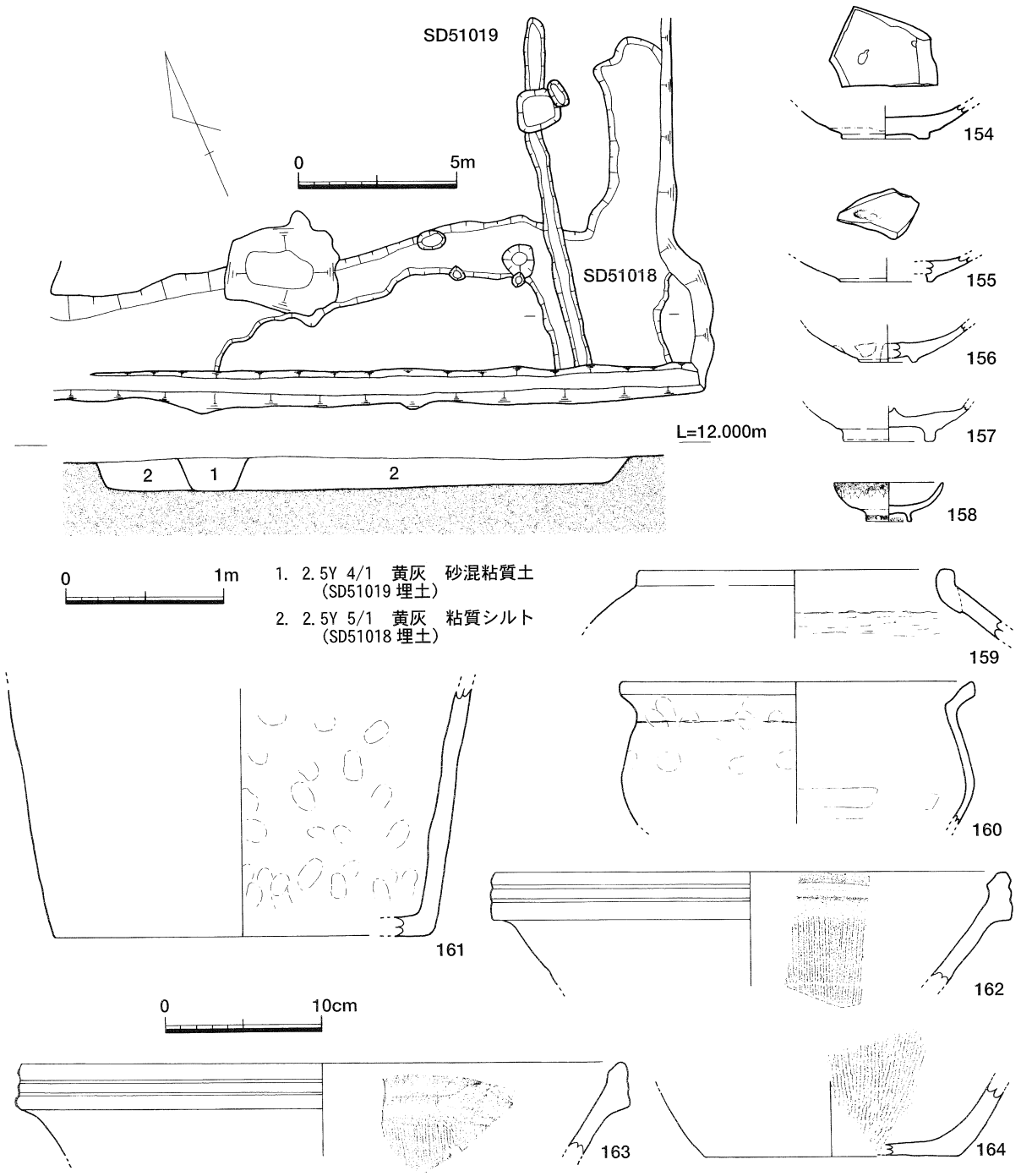


第 53 図　SD51001 平・断面図及び出土遺物実測図



1. 10YR 5/1　褐灰　砂混粘質土

第 54 図　SD51006 平・断面図及び出土遺物実測図



第 55 図　SD51018 平・断面図及び出土遺物実測図

め等に利用した可能性が高い。粘土内の埋土は黄褐色の礫混じりの細砂層である。

出土遺物は第 57 図に掲載した。177 は肥前系磁器の小盃である。外面に染付と圏線が見られる。178 は肥前系磁器碗で，外面の文様は菊花散らしである。179 は瀬戸美濃系磁器仏飯具である。180 は産地不明陶器の皿である。181 は信楽焼の鉢である。出土遺物から 19 世紀の遺構と考えられる。

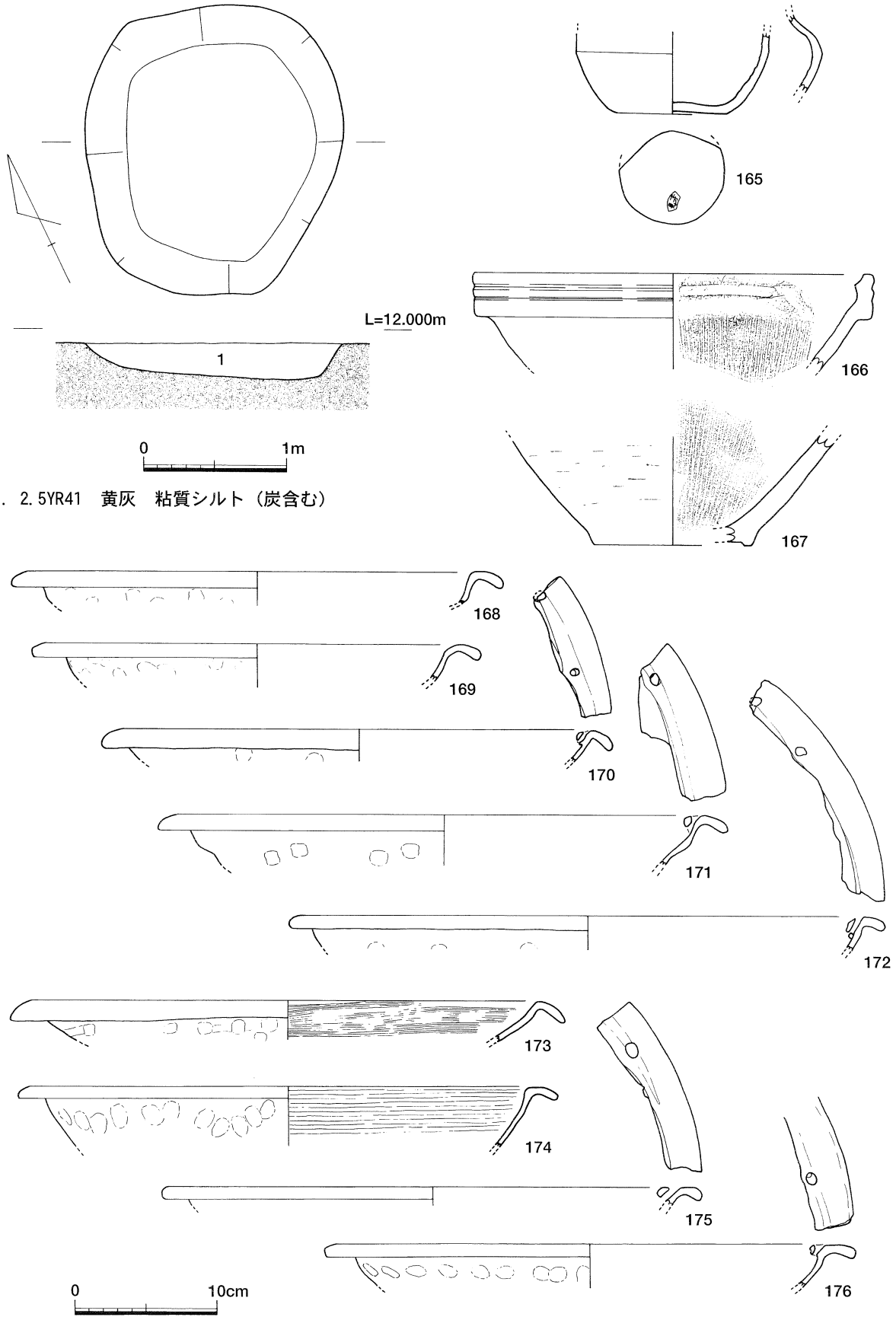
SK51017（第 58 図）

調査区中央で検出した土坑である。平面形態は隅丸の長方形を呈し，長辺 2.8m，短辺 1.8m，深さ 30cm を測る。埋土は拳大の礫を含んだ褐灰色粘質シルトの単層で，断面形態は逆台形である。

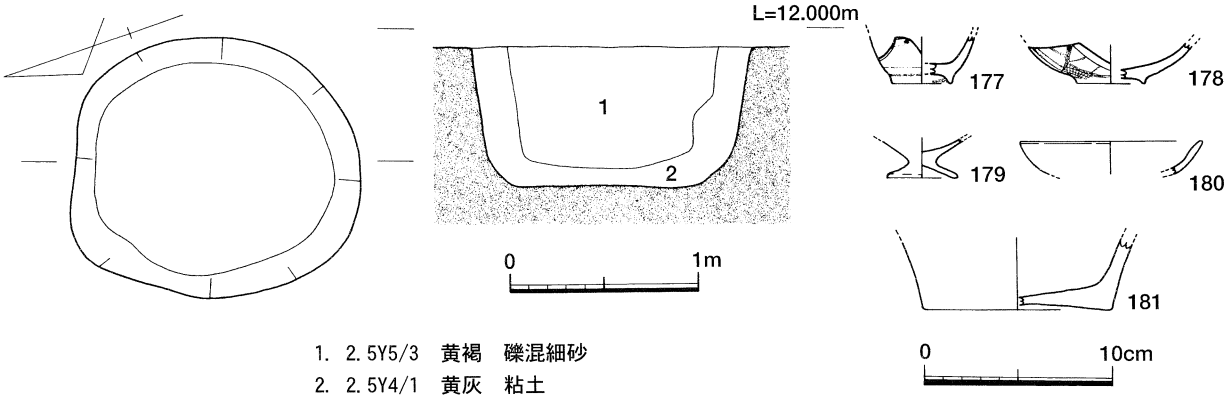
出土遺物は第 58 図 183 の火鉢 1 点だけで，遺構の詳細な時期は不明である。

SK51020（第 59 図）

調査区中央で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，直径 1.4m，深さ 55cm を測る。埋土は 2 層

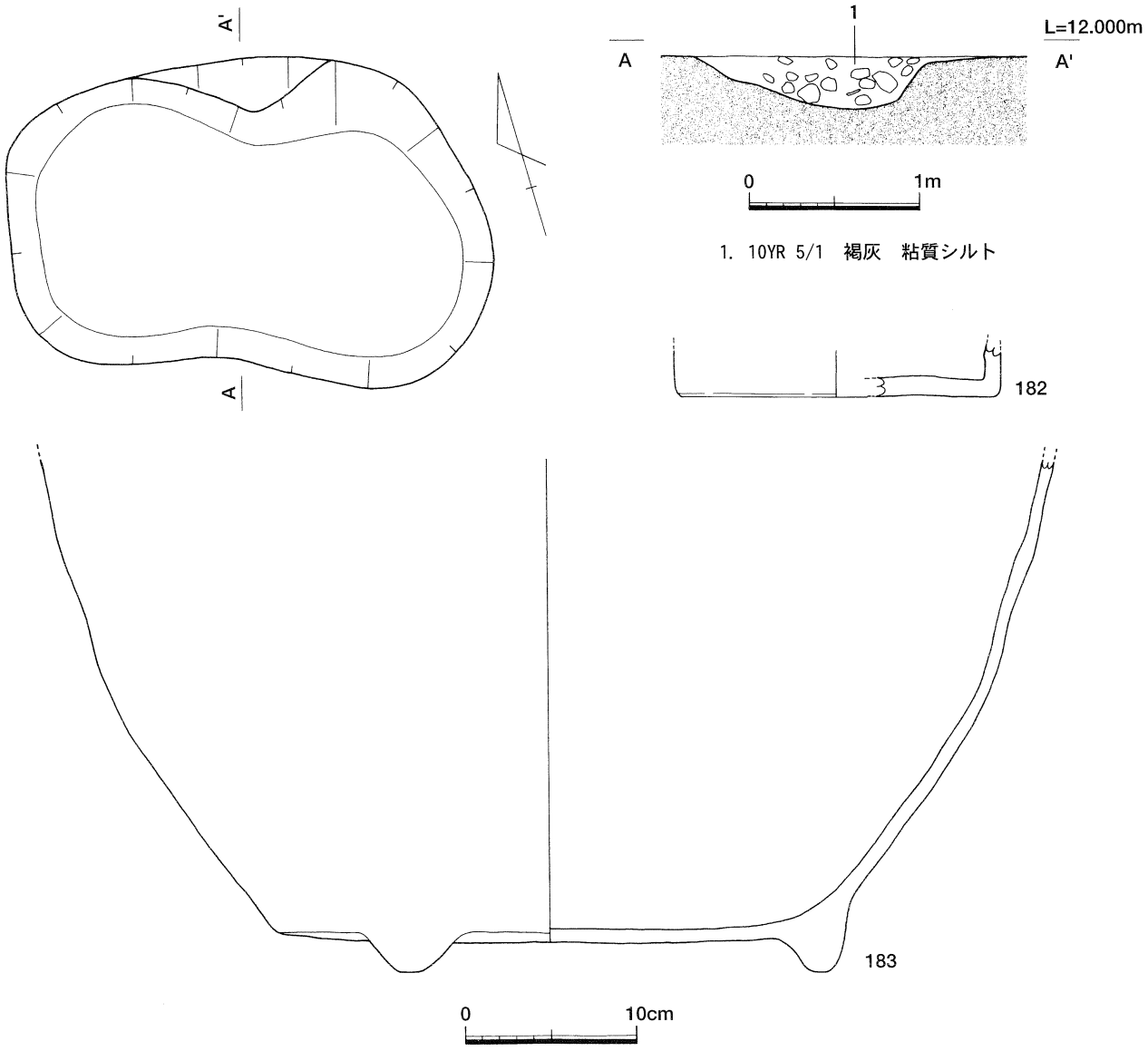


第 56 図　SK51001 平・断面図及び出土遺物実測図



1. 2.5Y5/3　黄褐　礫混細砂
2. 2.5Y4/1　黄灰　粘土

第 57 図　SK51010 平・断面図及び出土遺物実測図



1. 10YR 5/1　褐灰　粘質シルト

第 58 図　SK51017 平・断面図及び出土遺物実測図

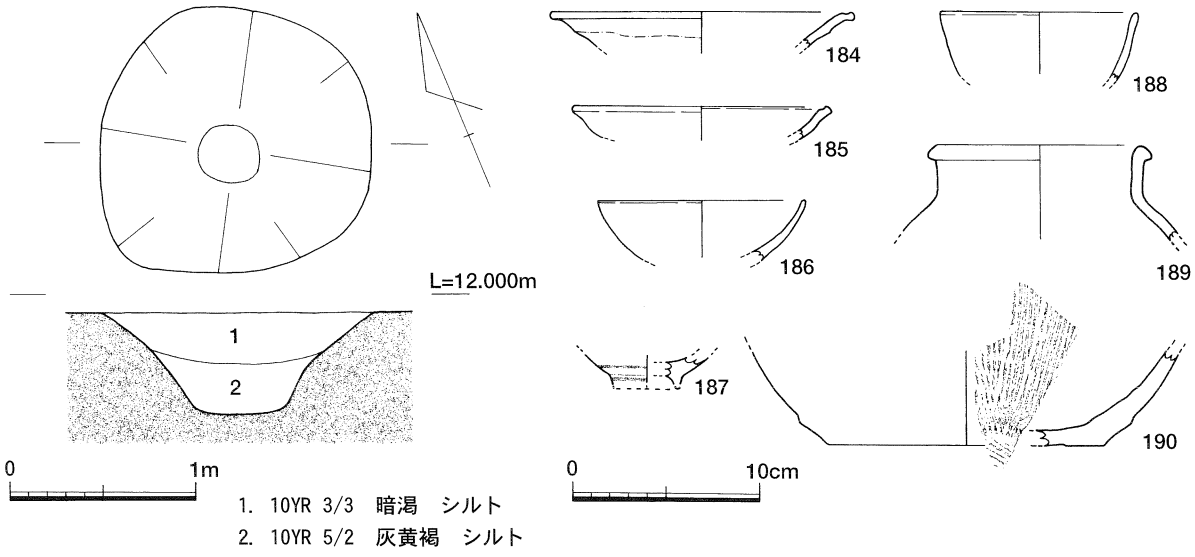
に分層でき，上層は暗褐色シルト，下層は灰黄褐色シルトで，断面形態は逆台形である。

出土遺物は第59図に掲載した。184・185は肥前系陶器の皿である。186・187は肥前系磁器碗である。188は京信楽系陶器の碗である。189は備前焼の壺である。190は堺焼の擂鉢である。出土遺物中には17世紀前半の遺物も含むが，18世紀の遺構と考えられる。

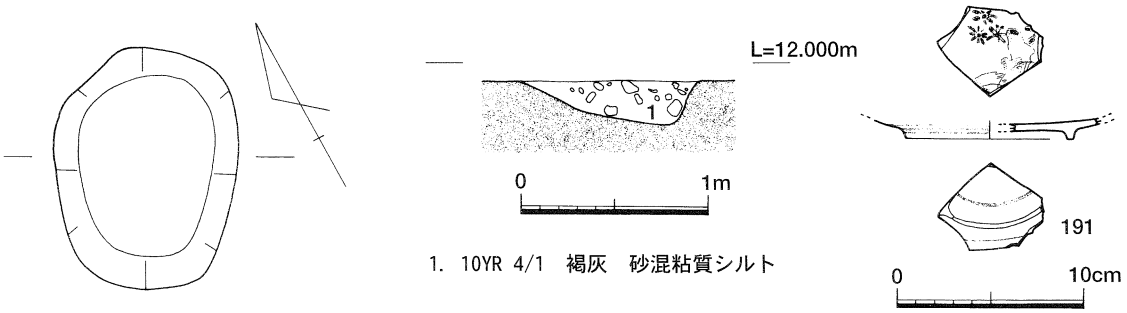
SK51025（第60図）

調査区北東部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径1.3m，短径1m，深さ25cmを測る。埋土は拳大の礫を含んだ褐灰色粘質シルトの単層で，断面形態は逆台形である。

出土遺物は第60図191の肥前系磁器の皿1点のみで，遺構の詳細な時期は不明である。



第59図　SK51020平・断面図及び出土遺物実測図



第60図　SK51025平・断面図及び出土遺物実測図

SK51030（第61図）

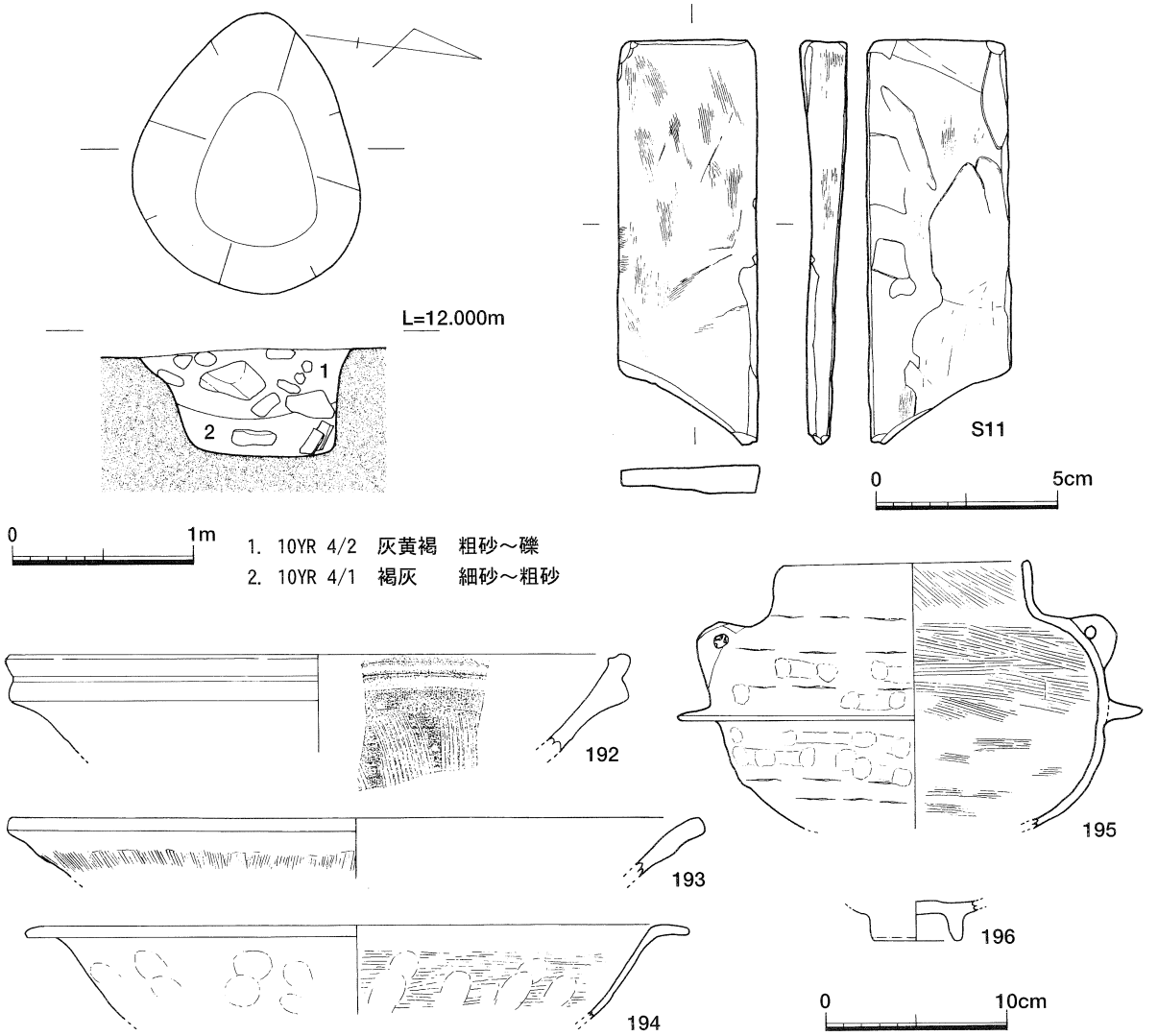
調査区東部で検出した土坑である。平面形態は卵形を呈し，長径1.55m，短径1.3m，深さ60cmを測る。埋土は2層に分層でき，上層は灰黄褐色粗砂～礫，下層は褐灰色細砂～粗砂で，両層とも人頭大の石材を多く含んでいる。断面形態は逆台形である。

出土遺物は第61図に掲載した。S11は流紋岩製の砥石である。全面に擦痕が残る。192は備前焼の擂鉢である。193は土師質土器の鍋である。外面タテハケ，内面ナデである。194は土師質土器の焙烙である。外面指頭圧，内面ヨコハケのち指頭圧である。195は瓦質土器の釜である。短く直立する口縁部をもち，体部上半に外耳がつく。外面指頭圧，内面ヨコハケである。196は肥前系陶器の京焼風碗である。出土遺物から18世紀前半頃の遺構と考えられる。

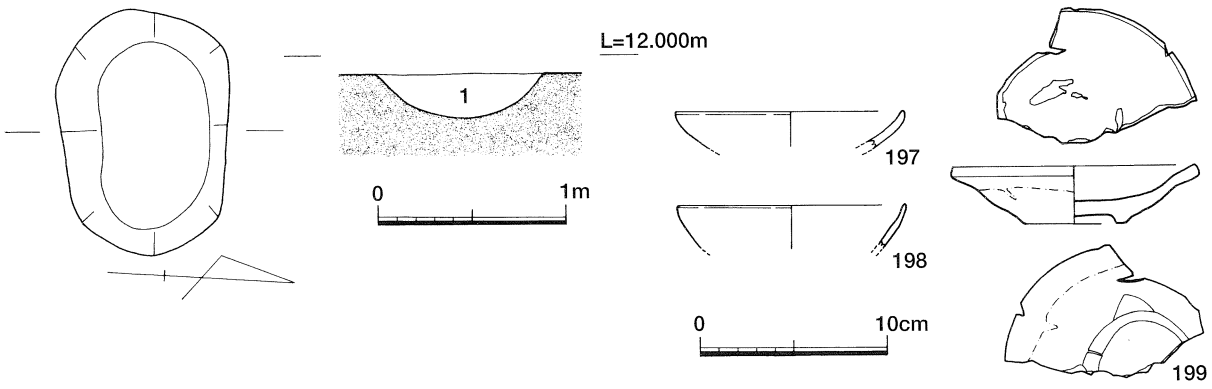
SK51031（第62図）

調査区東部で検出した土坑である。平面形態は卵形を呈し，長径1.2m，短径90cm，深さ25cmを測る。埋土は褐灰色の礫混シルトの単層で，断面形態はレンズ状の堆積である。

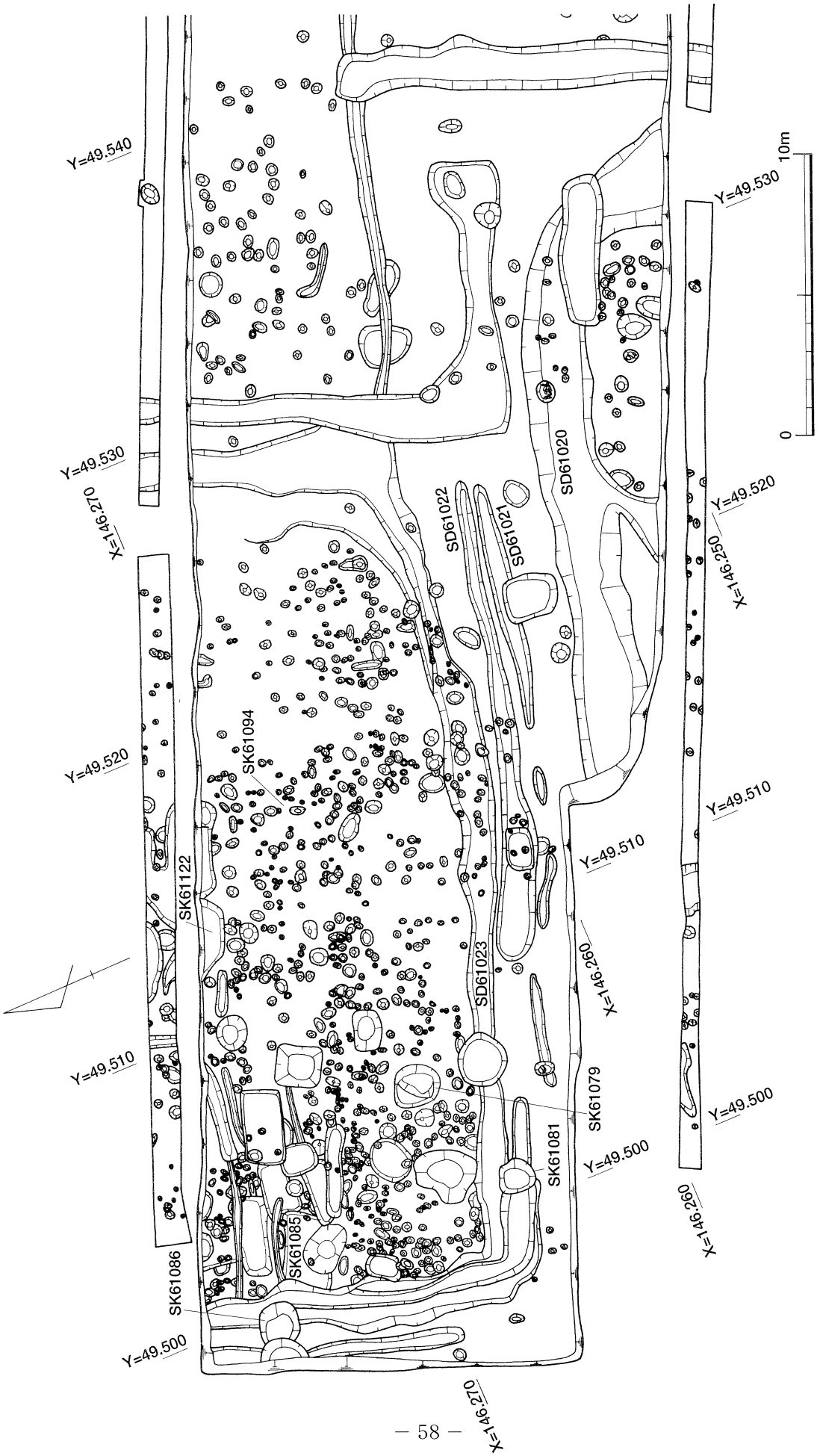
出土遺物は第62図に掲載した。197は肥前系陶器の皿である。198は土師器の坏である。199は肥前系陶器の皿である。高台無釉で，内外面に砂目が残る。出土遺物から17世紀前半の遺構と考えられる。



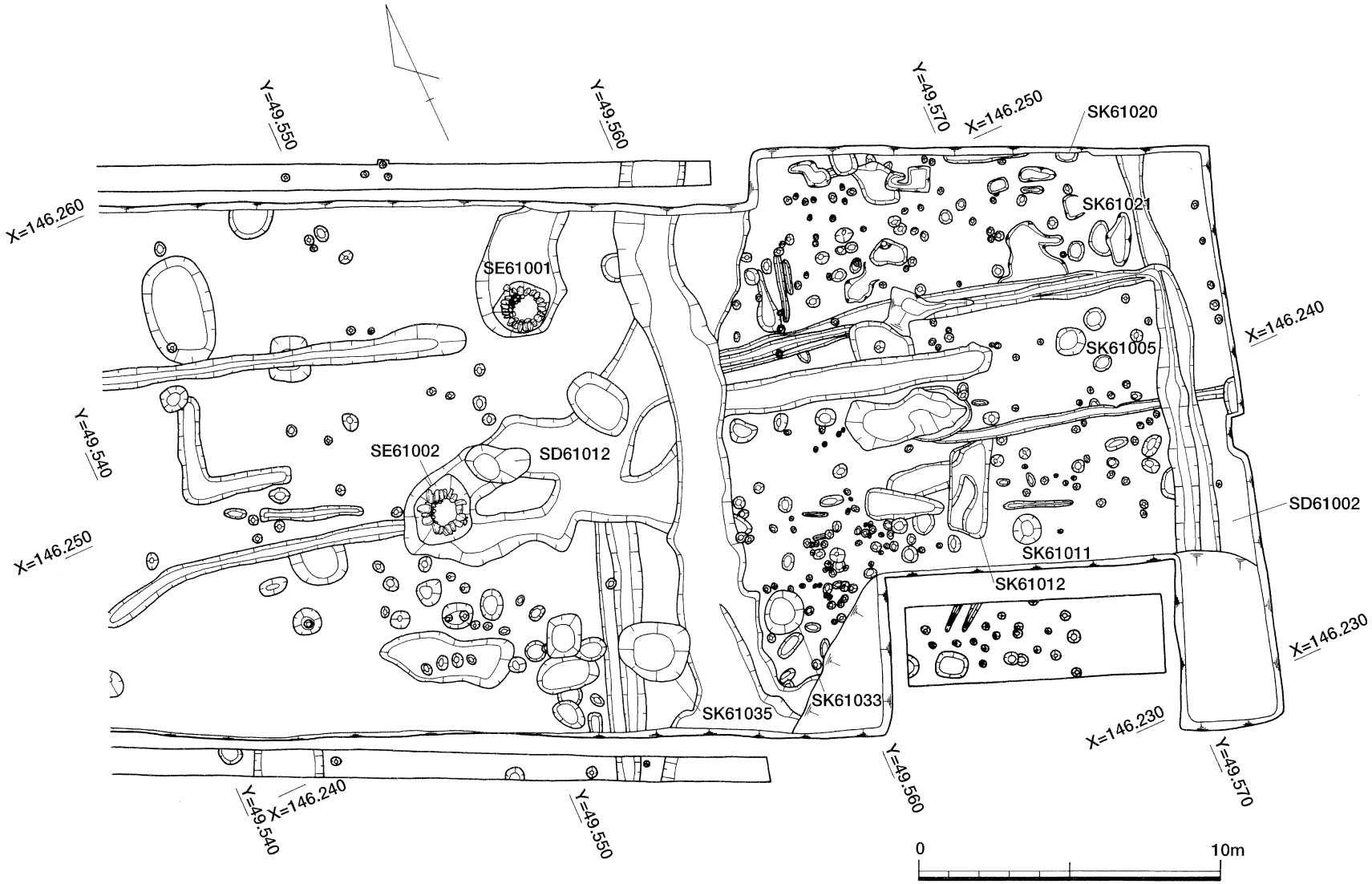
第61図　SK51030平・断面図及び出土遺物実測図



第62図　SK51031平・断面図及び出土遺物実測図



第 63 図　VI区平面図①


Y=49.550
Y=49.560
Y=49.570
X=146.250
SK61020
X=146.260
SK61021
SE61001
X=146.240
SK61005
Y=49.540
SE61002
SD61012
SD61002
X=146.250
SK61011
SK61012
X=146.230
SK61033
SK61035
X=146.230
Y=49.560
Y=49.570
Y=49.540
X=146.240
Y=49.550
0
10m

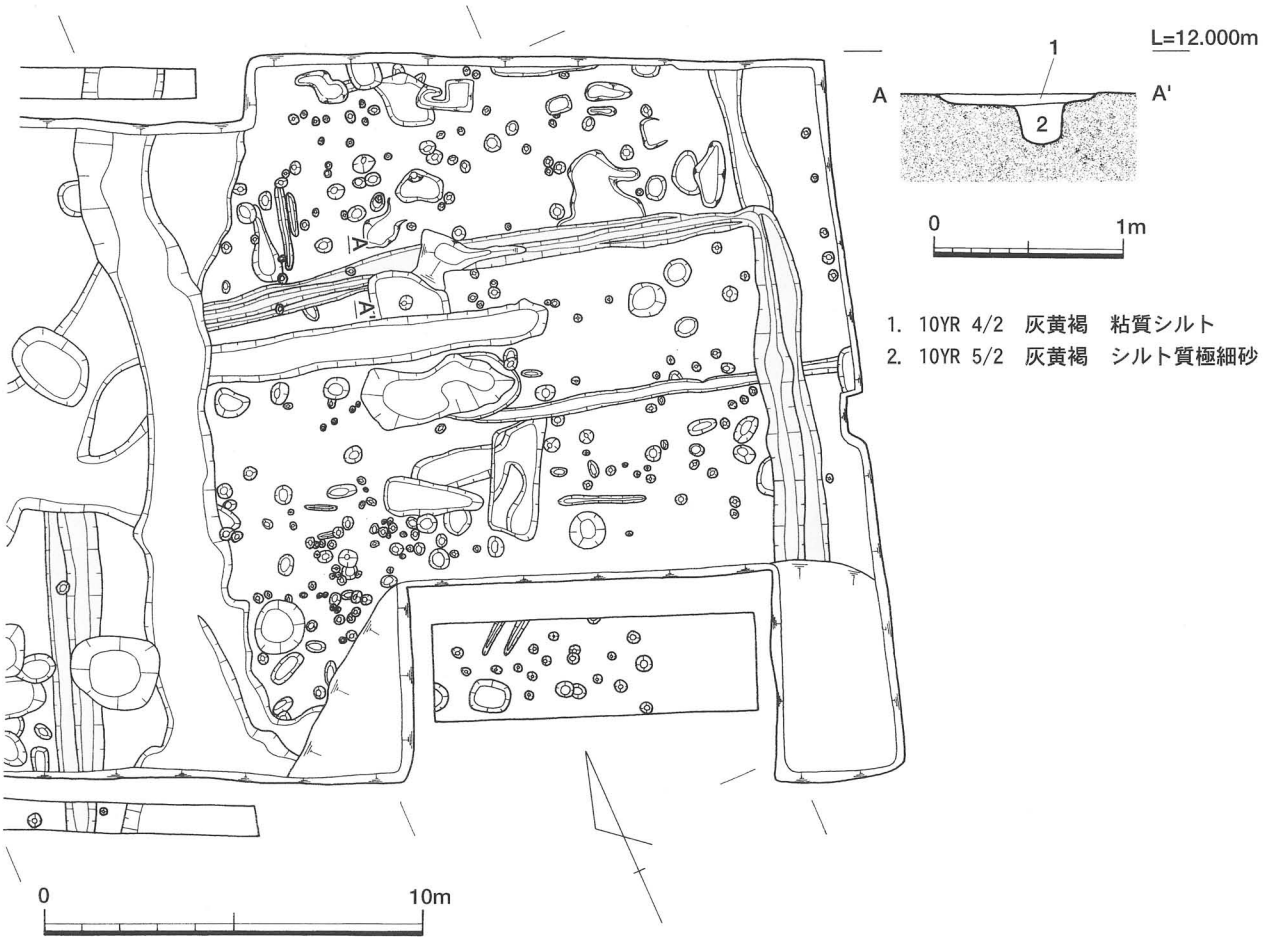
第 64 図　Ⅵ区平面図②

調査区の概要と基本層序（第 63・64 図）

Ⅵ区は調査地東半の中央にあたる。基本層序は厚さ 10 ～ 15cm の現代の耕作土層直下で遺物を含まない淡黄色シルト～細砂層が検出でき，この面を地山としてとらえた。このため，遺構面は地山上面の 1 面だけである。遺構は屋敷地を区画すると考えられる溝や土坑等を検出した。遺構出土遺物から概ね中世末～近世の遺構面と考えられる。

SD61002（第 65 図）

調査区の東部で検出した溝である。南側が調査区外へ延びるため不明であるが，東・北・西の 3 面をコの字に囲む溝である。最大幅 1.6m，深さ 30cm を測る溝である。断面形状は 2 段落ちとなっており，埋土も 2 層に分層できる。上層は灰黄褐色粘質シルト層，下層は灰黄褐色シルト質極細砂層である。溝で囲まれた内部からは柱穴や土坑を検出しており，屋敷地を区画する溝と考えられる。屋敷地の範囲は東西 18m，南北 14m 以上で，溝を含めた範囲は東西 20.8 m，南北 15m 以上である。遺物は図示できなかったが，胎土目を有する肥前系陶器の小片が出土しており，最終埋没は 17 世紀初頭頃の遺構と考えられる。



第 65 図　SD61002 平・断面図

SD61012（第 66・67 図）

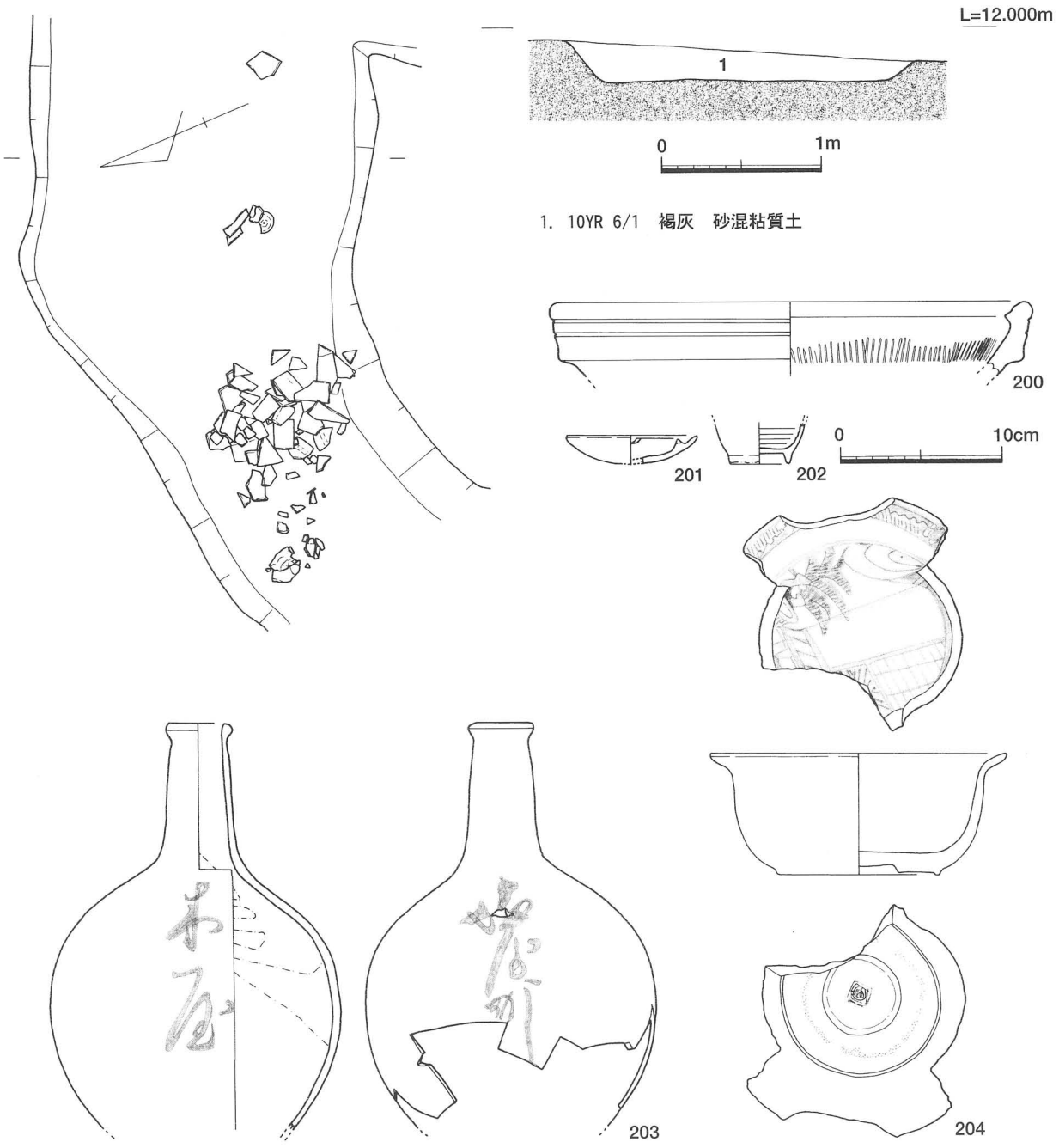
調査区の東部で検出した溝である。SE61002 から北東方向に流れ，検出長 16m，最大幅 3.5m 深さ 25cm を測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。

出土遺物は第 66・67 図に掲載した。200 は堺焼の擂鉢である。201 は備前焼の灯明皿である。202 は肥前系磁器の瓶で，内面無釉である。203 は京・信楽系陶器の徳利である。外面に文字を染付している。204

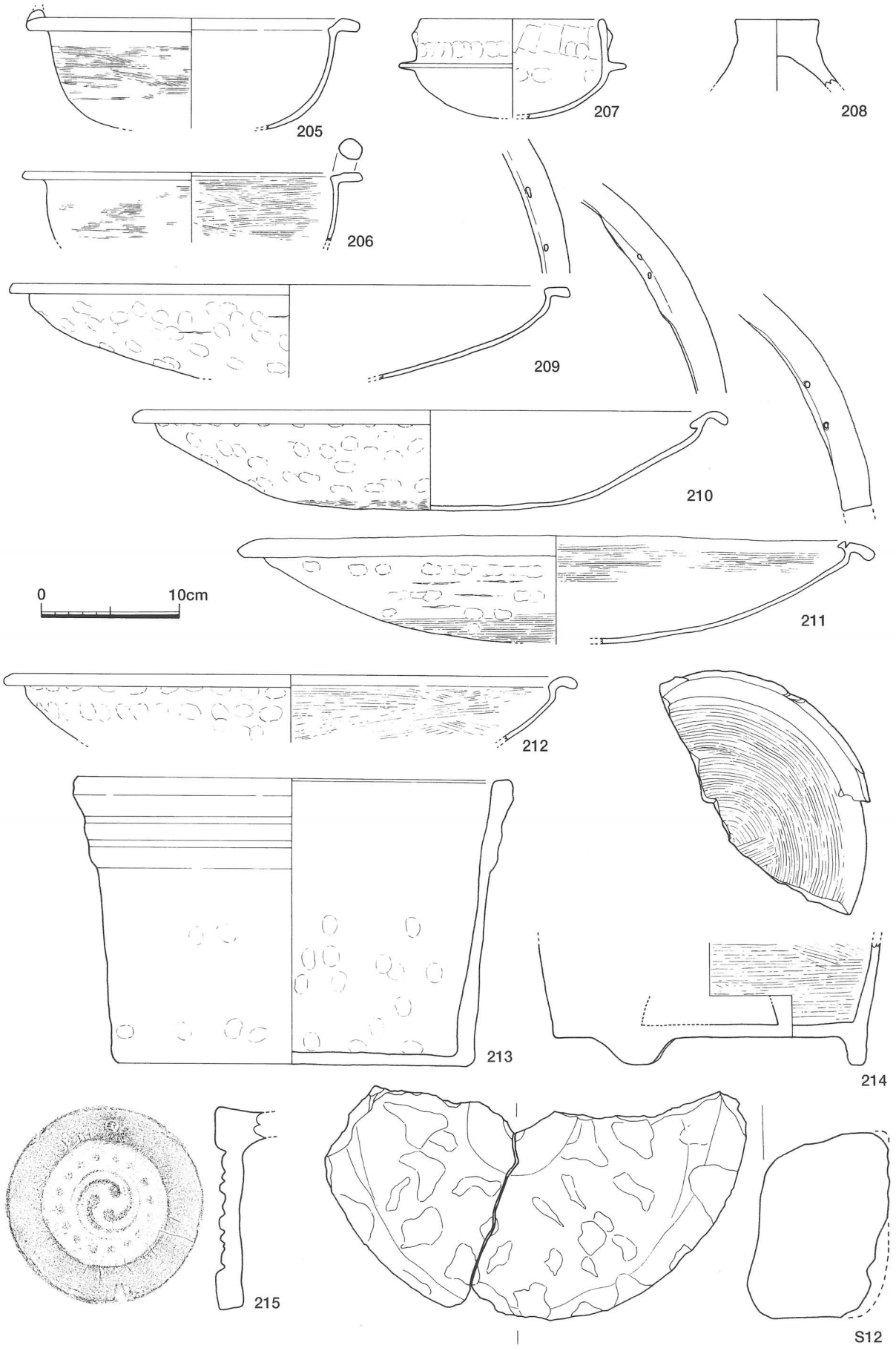
は肥前系磁器の鉢である。外面青磁釉で，蛇ノ目凹型高台内には渦福が見られ，内面は染付である。205・206は瓦質土器の鍋で，把手がつく。207は瓦質土器の釜である。外面指頭圧，内面板ナデ後指頭圧である。208は弥生土器の蓋で混入品である。209～212は土師質土器の焙烙である。外面は指頭圧，内面はヨコハケやナデが施されている。内耳の孔は貫通していない。213は土師質土器の鉢である。内外面とも指頭圧である。214は土師質土器の焜炉である。3方向に脚部及び体部に窓がつくと考えられる。215は軒丸瓦である。巴文の上部に㊦の刻印が見られる。S12は石臼である。この他図示しなかったが，平瓦が多量に出土した。出土遺物から18世紀後半～19世紀の遺構と考えられる。

SD61020（第68～71図）

調査区中央部南端で検出した溝である。東西方向の溝であるが，東端で南へ屈曲している。検出長は24m，最大幅2.6m，深さ60cmを測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土は2層に分層でき，上層は暗灰黄



第66図　SD61012平・断面図及び出土遺物実測図①



第 67 図　SD61012 出土遺物実測図②

色シルト質極細砂層，下層は黄灰色細砂～粗砂層である。L字にしか検出していないが，SD61002及びSD61023とほぼ同時期の溝であることから，屋敷地を囲う溝と推定した。屋敷地内の状況については調査区外になることから不明である。なお，調査区の西端が条里坪界となっており，SD61023で囲まれる屋敷地もこの部分を西端としていることから，SD61020で囲まれる屋敷地も坪界を西端とする可能性が考えられる。また，調査区の南に所在する東西の市道も坪界であり，ここを南端とする可能性が考えられる。検出したSD61020の屈曲部から坪界まではいずれも約44mを測ることから，44m四方の屋敷地を想定できる。

出土遺物は第69～71図に掲載した。216～220は土師器の皿である。221は肥前系磁器の青磁皿である。222・223は土師質土器の鍋である。224・225は土師質土器の鍋で，内耳がつくものである。226～229は土師質土器の鍋である。230～235は土師質土器の脚部である。236・237は土師質土器の釜である。外面指頭圧，内面ヨコハケである。238～245は土師質土器の擂鉢である。外面指頭圧及びナデで，内面はナデのものが多い。246・247は備前焼の擂鉢である。248～252は丸瓦である。凹面はコビキAと布目痕が見られる。253・254は平瓦である。255は丸瓦である。凹面はコビキAと布目痕及び吊り紐痕が見られ，凸面は板ナデで細かく整形されている。S13は石臼である。出土遺物から概ね16世紀の遺構と考えられる。

SD61021（第72図）

調査区西部で検出した溝である。東西方向の溝で全長は9m，最大幅80cm，深さ10cmを測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土は黄灰色粘質シルトの単層である。

出土遺物は第72図に掲載した。256は肥前系陶器の鉢である。外面無釉，内面施釉である。267は土師質土器の焙烙である。外面指頭圧，内面ヨコハケである。出土遺物から18世紀の溝と考えられる。

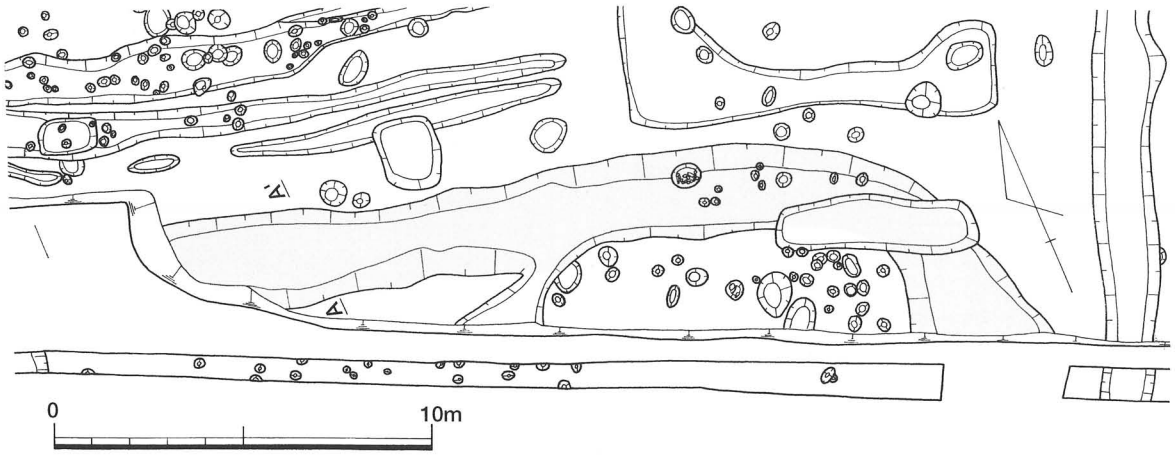
SD61022（第73図）

調査区西部で検出した溝である。東西方向の溝で全長は17.2m，最大幅1.2m，深さ28cmを測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土は黄灰色粘質シルトの単層である。

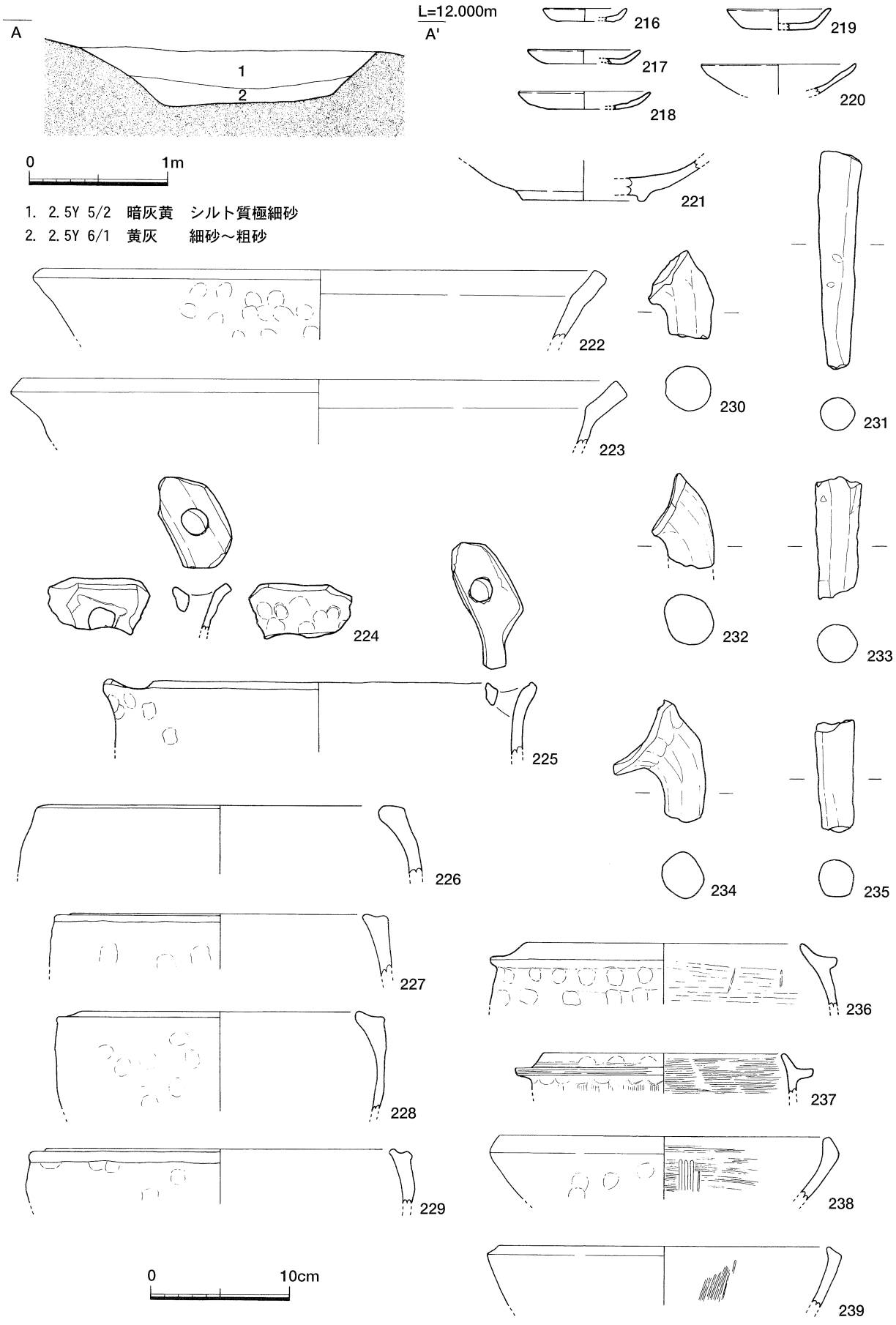
出土遺物は第73図に掲載した。258は備前焼の擂鉢で，重ね焼の痕が見られる。259は土師質土器の脚部である。260～265は肥前系陶器の皿である。いずれも高台を無釉とし，砂目が残る。S14は石臼である。出土遺物から17世紀前半の溝と考えられる。

SD61023（第74・75図）

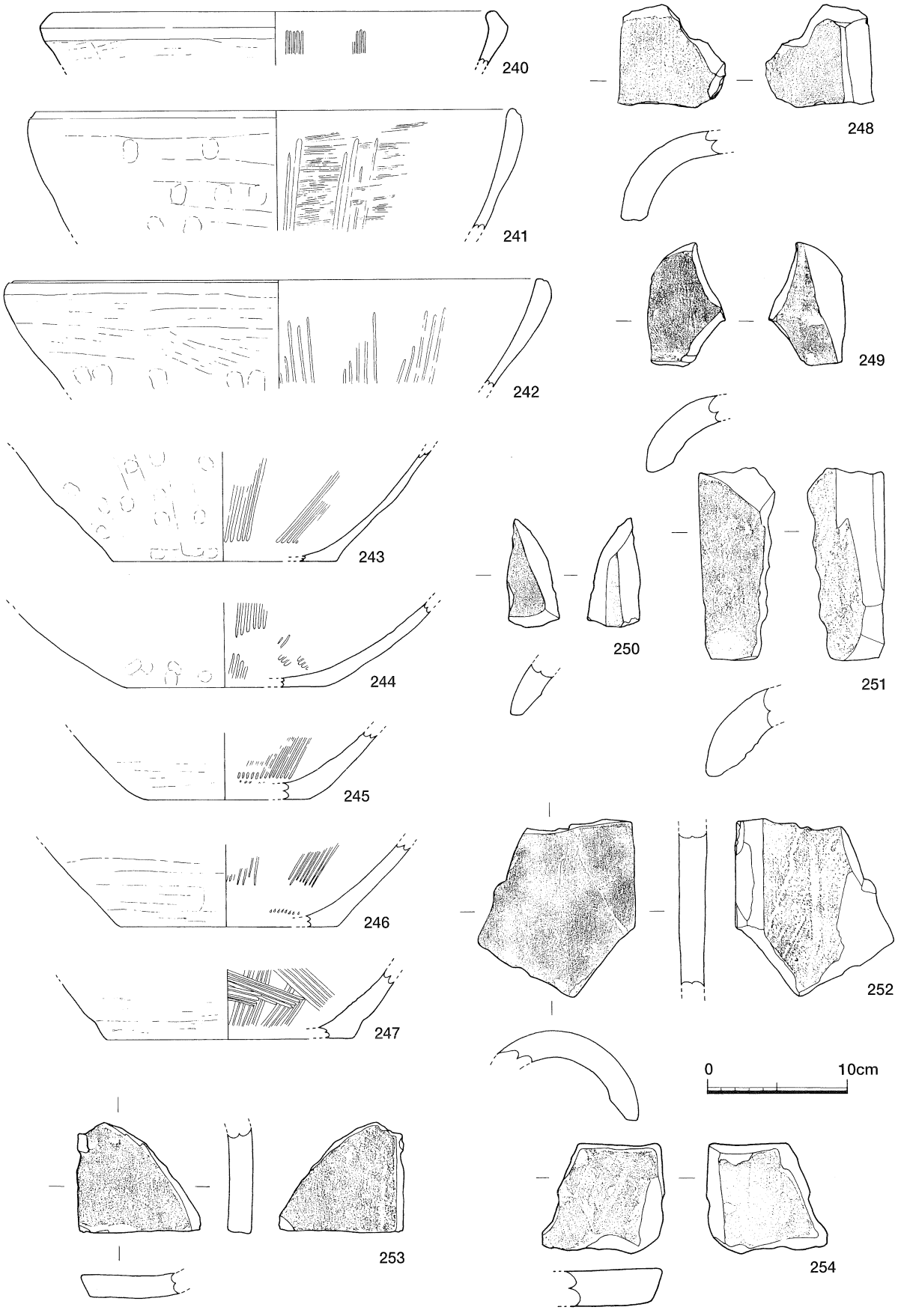
調査区の西部で検出した溝である。北側が調査区外へ延びるため不明であるが，東・南・西の3面をコの字に囲む溝である。最大幅2.5m，深さ40cmを測る溝である。断面形状は2段落ちとなっており，埋土は3層に分層できる。第1層は褐灰色シルト質極細砂層，第2層は灰黄褐色粘質シルト層，第3層は灰黄褐色粘質シルト層である。溝で囲まれた内部からは柱穴や土坑を多数検出しており，屋敷地を区画する溝



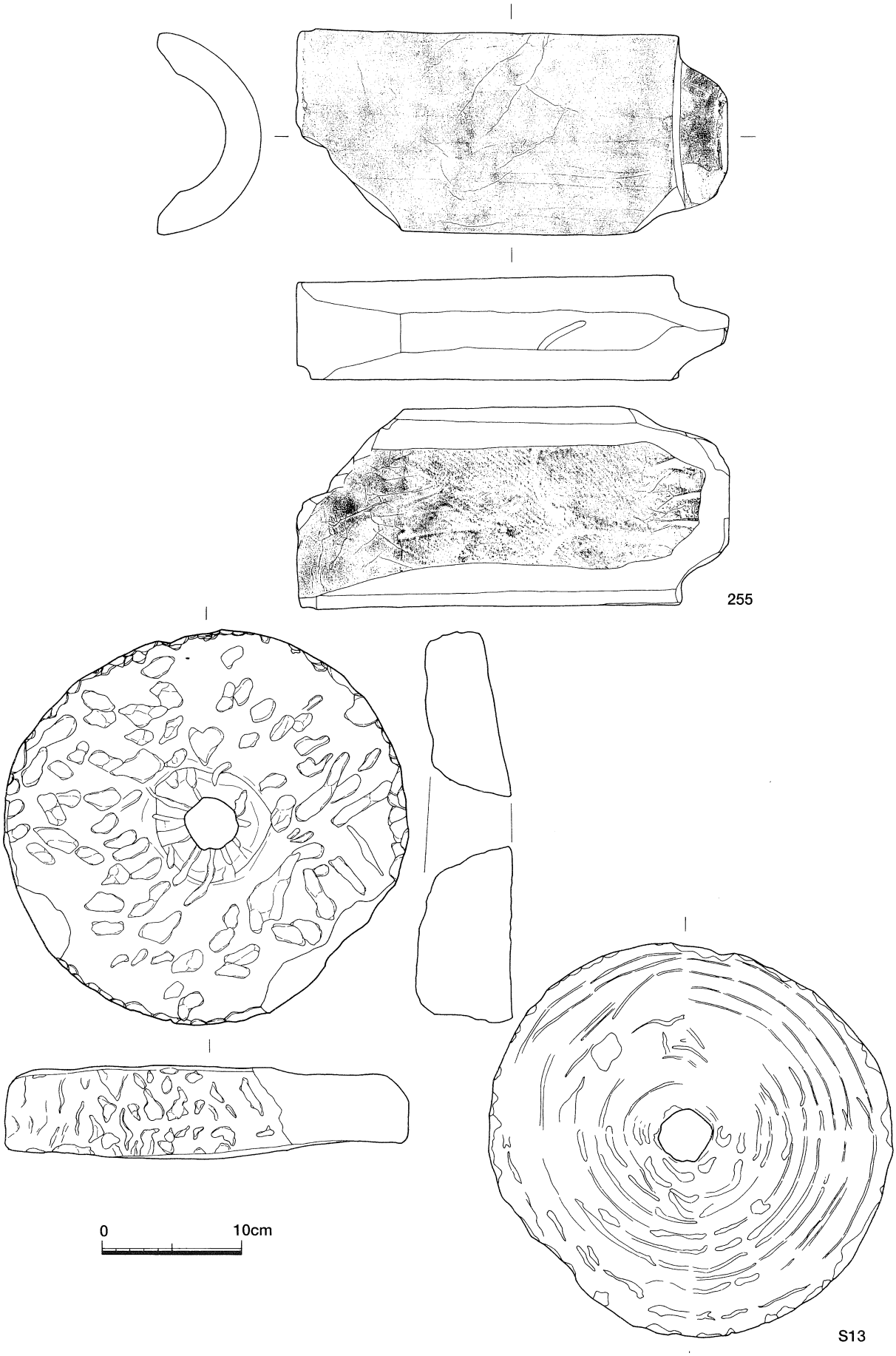
第68図　SD61020平面図



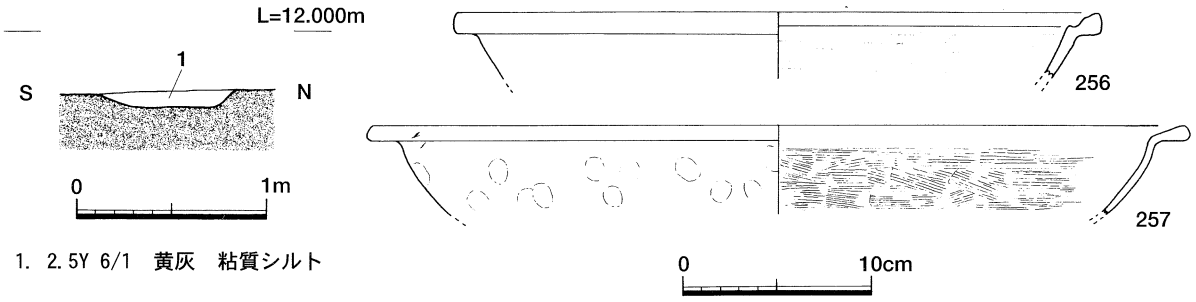
第 69 図　SD61020 断面図及び出土遺物実測図①



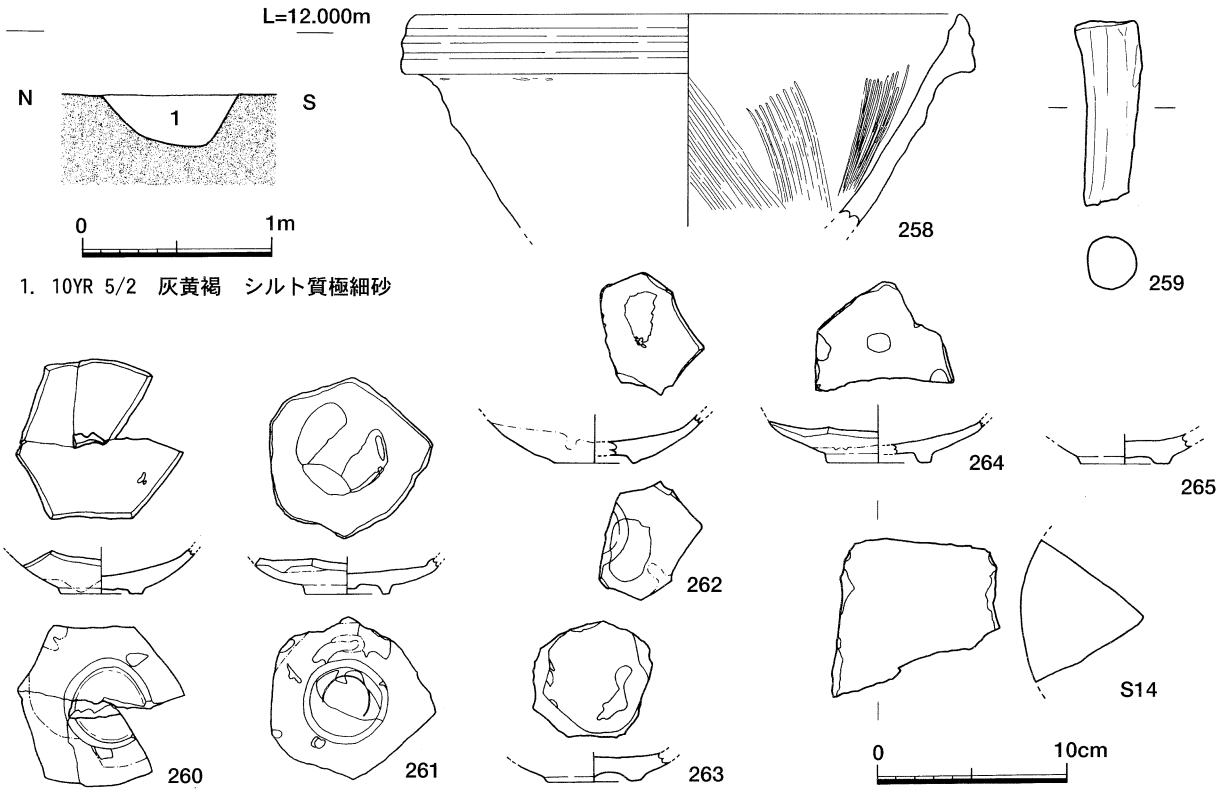
第 70 図　SD61020 出土遺物実測図②



第 71 図　SD61020 出土遺物実測図③



第 72 図　SD61021 断面図及び出土遺物実測図



第 73 図　SD61022 断面図及び出土遺物実測図

と考えられる。屋敷地の範囲は東西 26.5m，南北 11.5m 以上で，溝を含めた範囲は東西 32m，南北 12.5m 以上である。屋敷地内には多数の柱穴が錯綜し，建物を復元し得なかった。しかしながら，屋敷地南西部，中央部，南東部の 3 箇所に柱穴が集中することから，この 3 箇所付近に建物を想定できる。

出土遺物は第 75 図に掲載した。266・267 は土師質土器の鍋である。外面格子目タタキ，内面ヨコハケである。268 は土師質土器の釜で，内外面とも指頭圧である。269 は備前焼の擂鉢で，外面に重焼痕が見られる。270 ～ 272 は肥前系陶器の皿である。いずれも高台無釉で，270・271 には砂目が見られる。273 は肥前系陶器の鉢である。274 は土師質土器を打ち欠いた円盤である。275 は軒平瓦である。276 は土師質の平瓦で，古代のものと考えられる。K1 は鉄釘である。出土遺物から概ね 17 世紀前半の遺構と考えられる。

SE61001（第 76 図）

調査区北東部で検出した井戸である。平面形態は楕円形を呈し，長径 4.3m，短径 3.1m を測る。遺構の

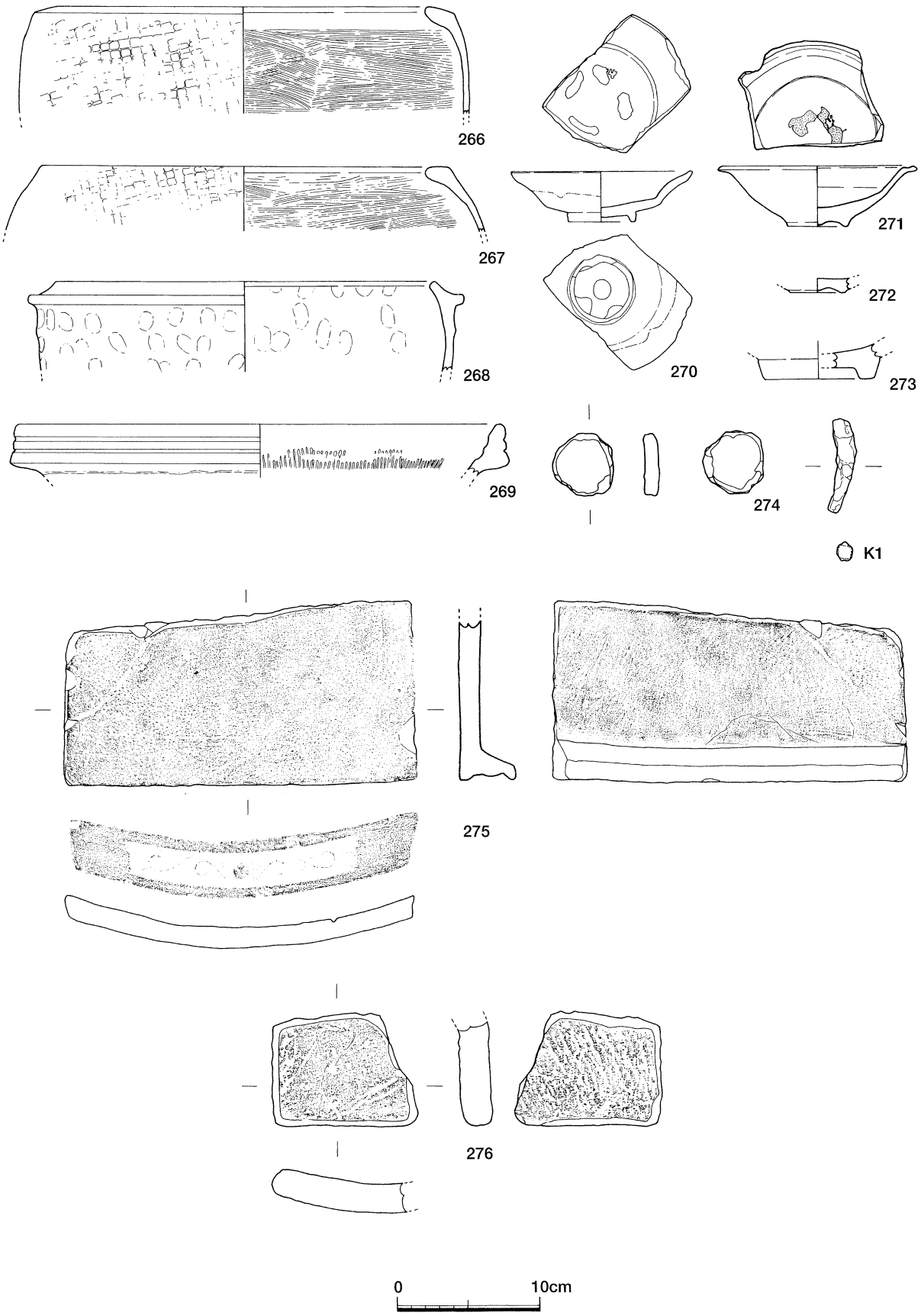
上部は井戸廃棄後の最終埋没層と見られ，遺構面より約10cm掘り下げたところで本来の井戸の掘方を検出した。掘方は直径1.65mの円形を呈する。井戸枠は石組みであり，検出面では長径1m，短径90cmの楕円形を呈するが，底面では50cm四方の正方形である。石組みは高さ1.1mまで残っている。井戸枠の石積みに使用された石材は砂岩が多く，一部安山岩が使用されている。また，石積み方法は，基底部の石材は長辺を井戸の中心に向けるものの，2段目以上の石は小口を井戸の中心に向けて積まれている。井戸の断面形態は逆台形を呈し，埋土は井戸枠内4層と掘方部分，そして廃棄後の最終埋没層1層の計6層に分層できる。第1層は最終埋没層で，褐灰色シルト質極細砂層である。第2層は暗灰黄色細砂～粗砂層，第3層は黄灰色粘質シルト層，第4層は暗灰黄色細砂～粗砂層で，この第2～4層には数cm～20cm程度の礫が多く混じるほか，井戸枠上部の石材が転落していた。第5層は黄灰色シルト質粘土層である。第6層とした掘方は灰白色の細砂～粗砂層である。断面の状況から井戸は第5層堆積後に上部石積みを破却され，さらに礫によって上部を埋め戻されたと考えられる。

遺物は人工的な埋め戻しの土と考えられる第2～4層から出土しており，第76図に掲載した。277は土師質土器の鍋である。内外面ともヨコハケである。278・279は土師質土器の脚部である。280は産地不明の陶器で，高台無釉としている。出土遺物から17世紀頃に井戸が埋め戻されたことがうかがえる。

SE61002（第77図）

調査区東部で検出した井戸である。SD61012掘削時に下部から検出したもので，井戸上部はかなり削平されている。平面形態は直径1.9mの円形を呈する。井戸枠は石組みで

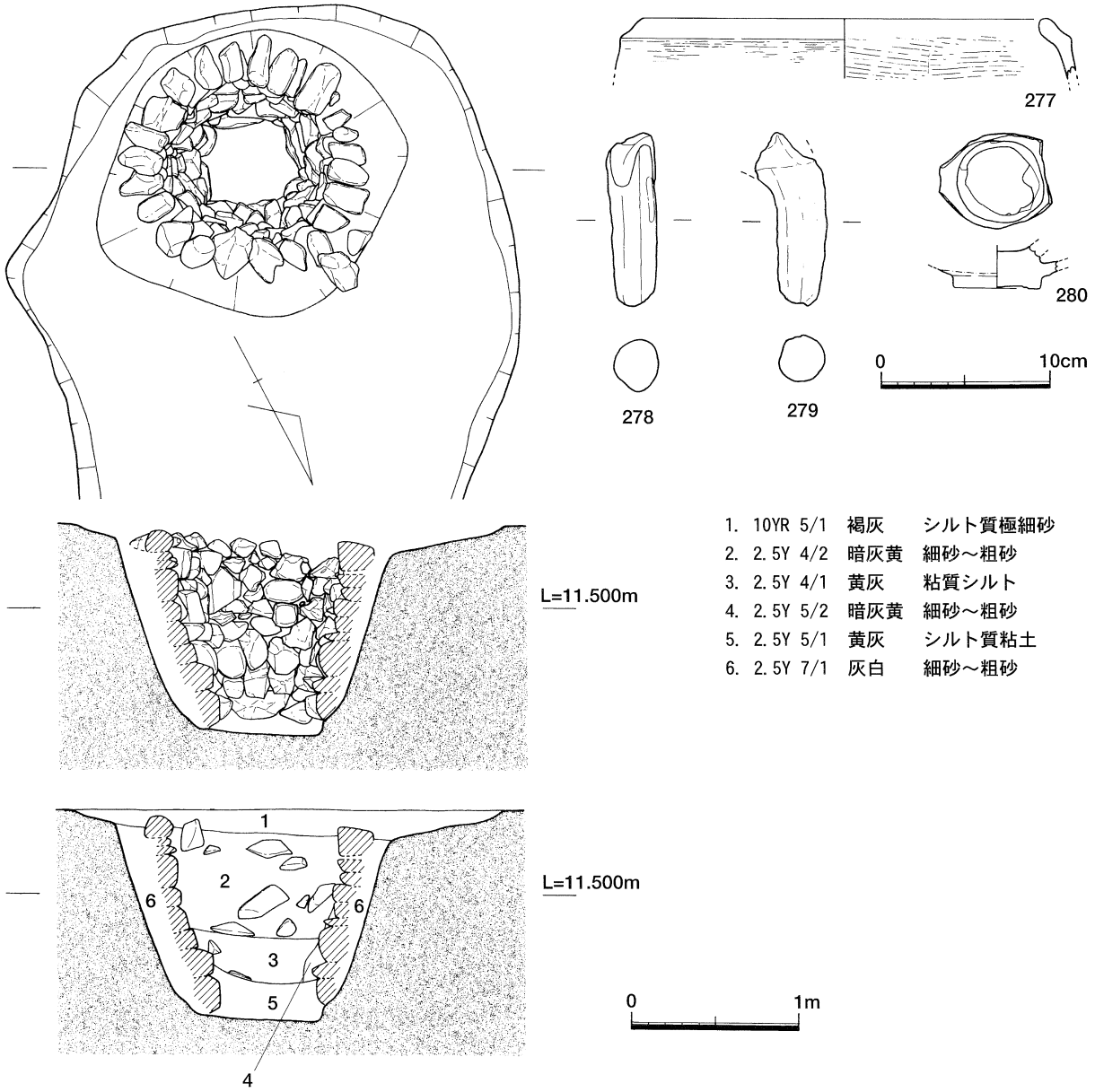
第74図　SD61023平・断面図



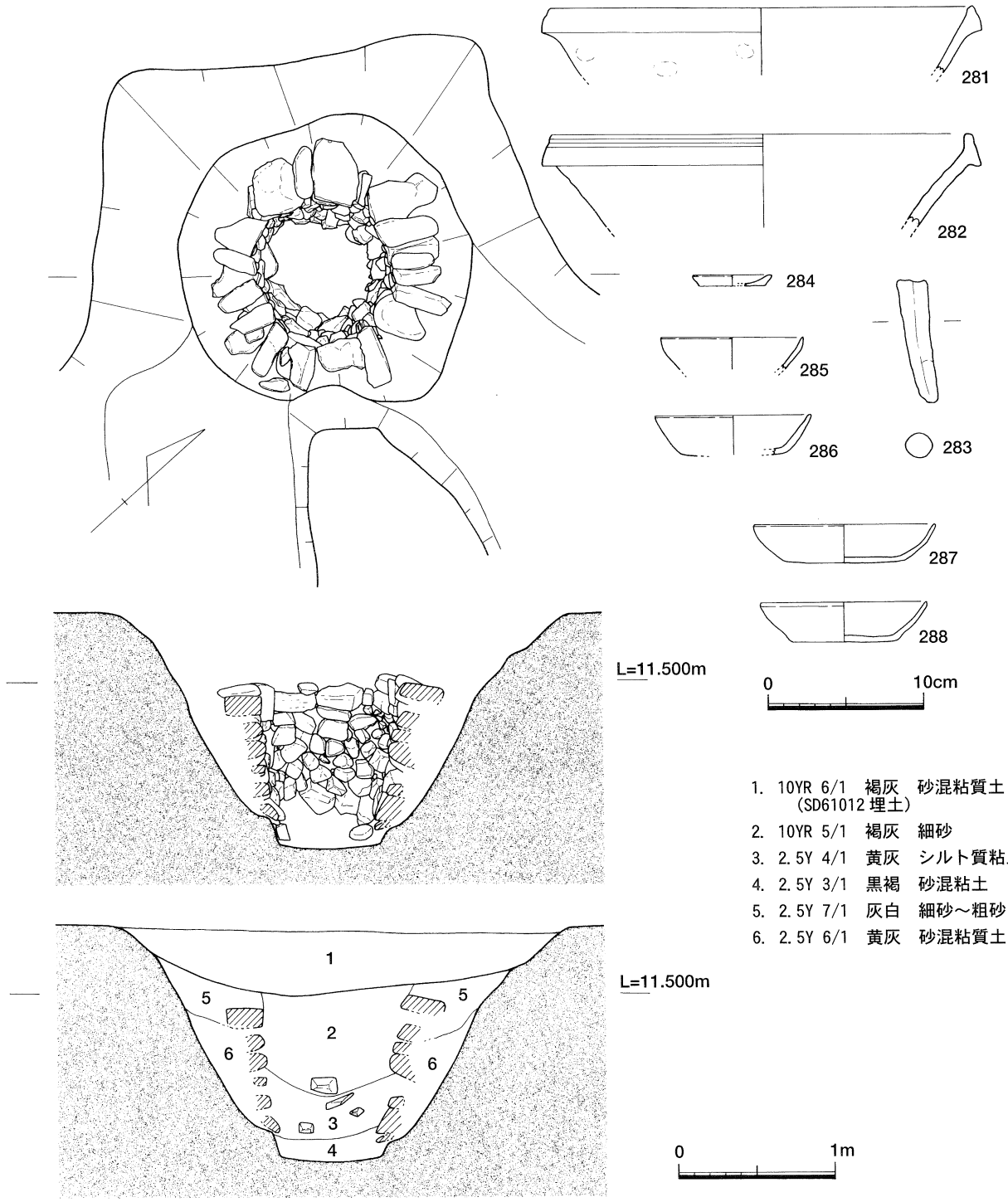
第 75 図　SD61023 出土遺物実測図

あり，検出面では直径 90cm の円形を呈するが，底面では長径 70cm，短径 50cm の楕円形である。石組みは高さ 1m まで残っている。井戸枠の石積みに使用された石材は砂岩が多く，一部安山岩が使用されており，小口を井戸の中心に向けて積まれている。井戸の断面形態は逆台形を呈し，埋土は井戸枠内 3 層と掘方部分 2 層の計 5 層に分層できる。井戸枠内の上層は褐灰色の砂層，中層は黄灰色シルト質粘土層で，両層には井戸枠上部の石材が転落していた。下層は黒褐色砂混粘土層である。掘方の上層は灰白色細砂～粗砂層，下層は黄灰色砂混粘質土層である。

遺物は下層から出土しており，第 77 図に掲載した。281・282 は須恵器のこね鉢である。283 は土師質土器の脚部である。284 は土師器の皿である。285 ～ 288 は土師器の坏で，いずれも井戸底より出土したものである。出土遺物から 16 世紀の遺構と考えられる。



第 76 図　SE61001 平・断面図及び出土遺物実測図



第 77 図　SE61002 平・断面図及び出土遺物実測図

SK61005（第 78 図）

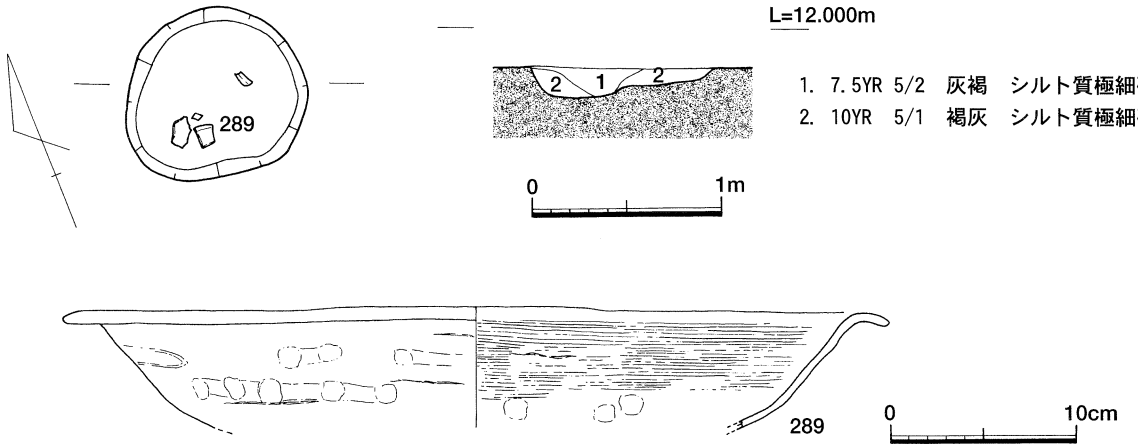
調査区東部で SD61002 に囲まれた屋敷地内北東部で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，直径 95cm，深さ 15cm を測る。断面形態は逆台形で，埋土は 2 層に分層できる。上層は灰褐色シルト質極細砂層，下層は褐灰色シルト質極細砂層である。埋土中には一辺 20cm 程度の角礫が数点含まれていた。

出土遺物は第 78 図に掲載した。289 は土師質土器の焙烙である。外面指頭圧，内面ヨコハケのち指頭圧である。口縁部の屈曲はなめらかであることから 17 世紀後半から 18 世紀前半のものと考えられる。屋敷地を区画する SD61002 は 17 世紀前半までに埋没することから屋敷に伴う可能性は低い。

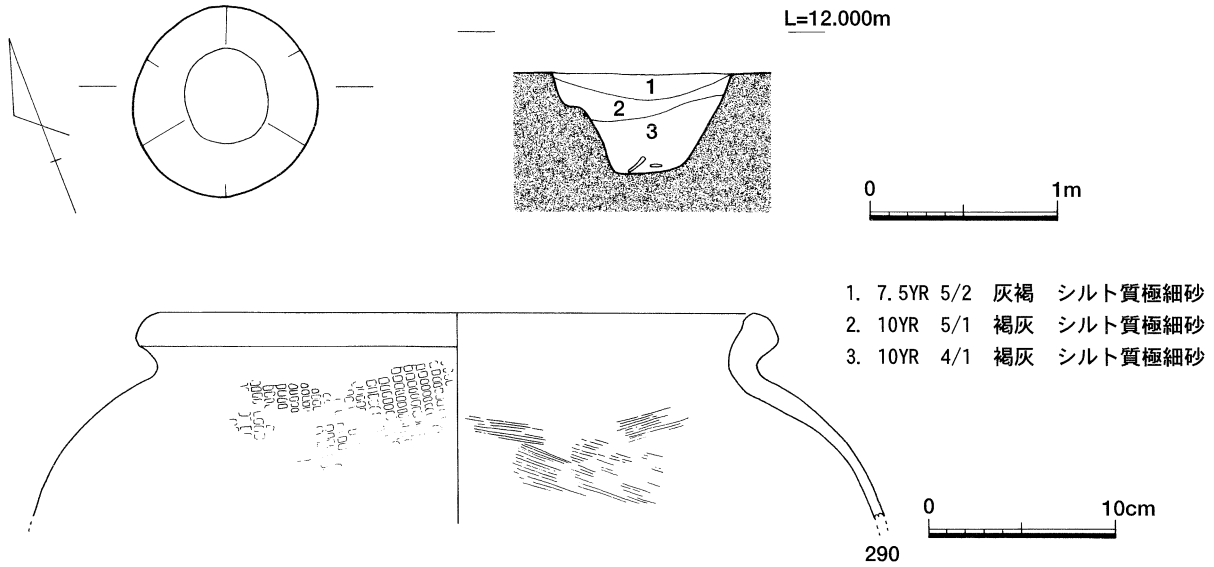
SK61011（第79図）

調査区東部でSD61002に囲まれた屋敷地内中央部で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，直径1m，深さ42cmを測る。断面形態は西側の一部が二段落ちになる他は逆台形で，埋土は3層に分層できる。上層は灰褐色シルト質極細砂層，中・下層は褐灰色シルト質極細砂層である。

出土遺物は第79図に掲載した。290は土師質土器の甕である。遺構底面から1点のみ出土した。外面格子目タタキ，内面ヨコハケである。口縁部は断面矩形に肥厚しており，15世紀前半のものと思われる。屋敷地を区画するSD61002の出土遺物については17世紀前半のものしか見られないが，屋敷地が15世紀代から存在した可能性も否定できない。



第78図　SK61005平・断面図及び出土遺物実測図



第79図　SK61011平・断面図及び出土遺物実測図

SK61012（第80・81図）

調査区東部でSD61002に囲まれた屋敷地内中央部で検出した土坑である。平面形態は長方形を呈し，長辺3.25m，短辺1.35m，深さ30cmを測る。遺構底面は凹凸が著しく，断面形状は不整形で，埋土は2層に分層できる。上層は灰黄褐色粘質シルト層で遺構上部に薄く堆積しており，下層は褐灰色粘質シルト層で

遺構の窪みに堆積している。遺構北東隅には最大25cm角程度の礫が集中して見られた。

出土遺物は第80・81図に掲載した。いずれも礫が集中する部分から出土している。S15は柱状片刃石斧である。弥生時代のもので，混入品である。S16は石臼である。S17は石製の竈である。円筒形の焼成部分の全面に方形の焚き口部分がついている。焼成部分の内面にはススが付着している。出土遺物は石器のみで土器片は1点も出土しておらず，詳細な遺構の時期は不明である。

SK61020（第82図）

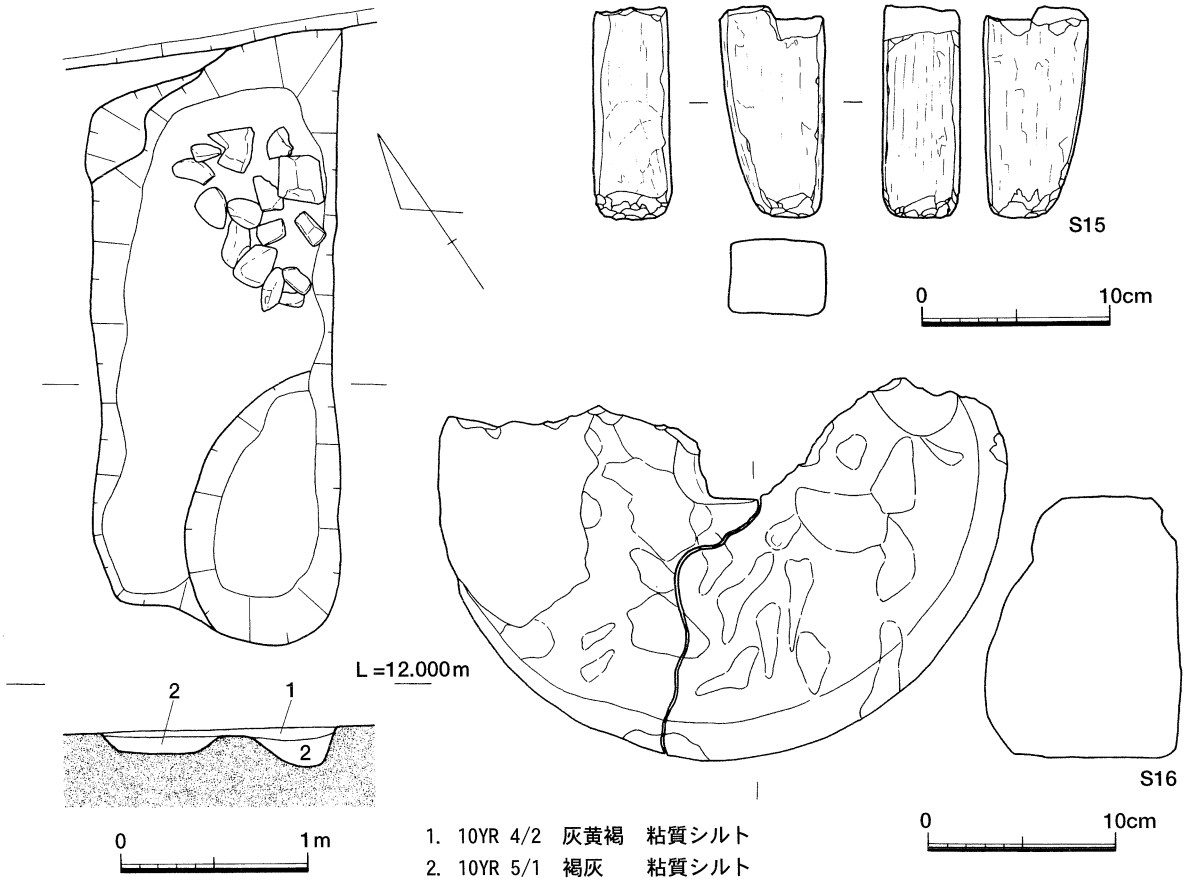
調査区北東部で検出した土坑である。北側が調査区外に延びるが，平面形態は楕円形を呈すると考えられ，長径85cm，短径30cm以上，深さ6cmを測る。断面形態は逆台形と考えられ，埋土は灰黄褐色シルト質極細砂層の単層である。

出土遺物は第82図に掲載した。291は土師質土器の脚部である。292は土師器の坏である。出土遺物から16世紀の遺構と考えられる。

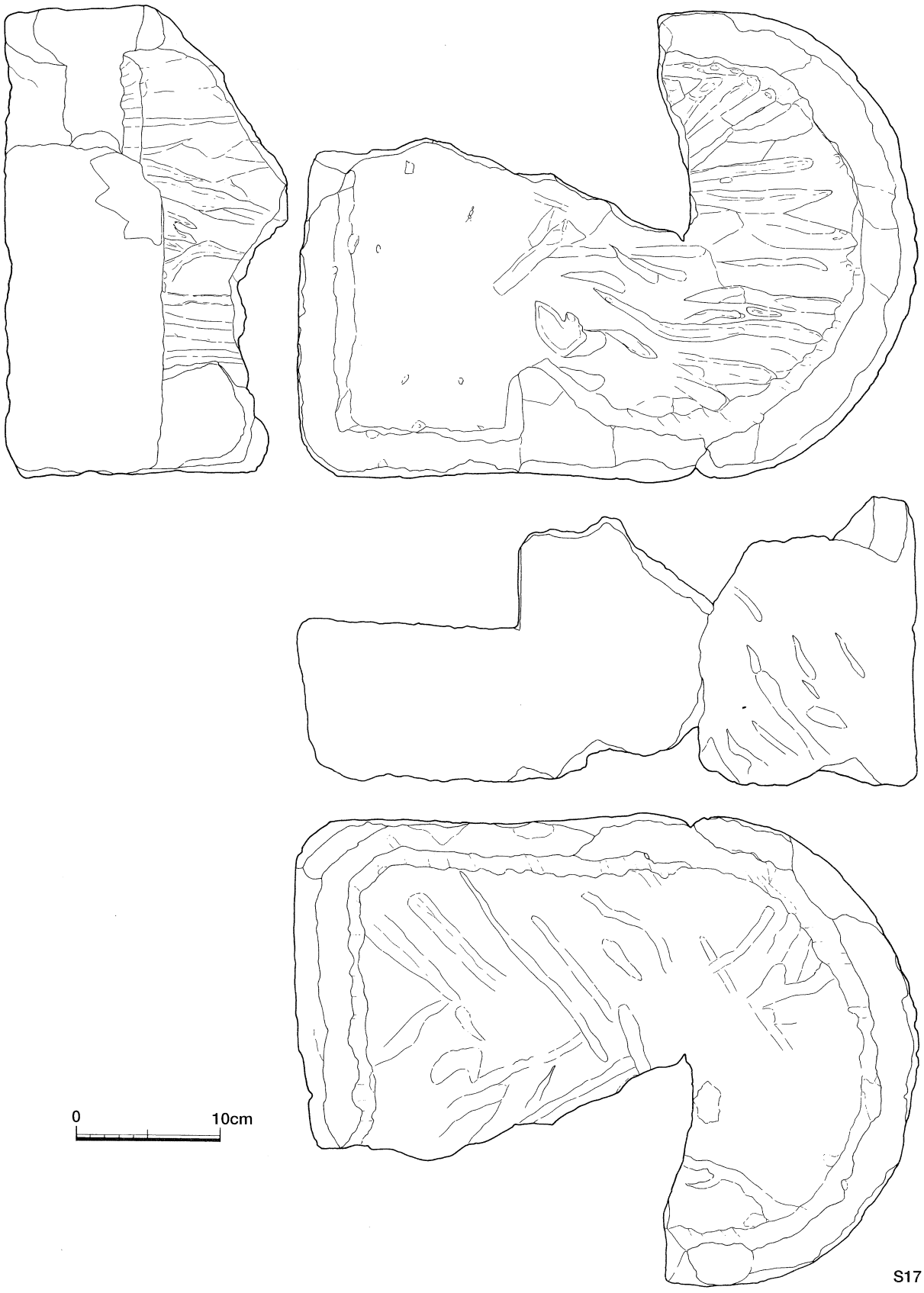
SK61021（第83図）

調査区北東部で検出した土坑である。一部撹乱を受けているが，平面形態は楕円形を呈し，長径85cm，短径70cm，深さ28cmを測る。断面はレンズ状の堆積を示し，埋土は3層に分層できる。上層は灰黄褐色粘質シルト層，中層は灰黄褐色シルト質極細砂層，下層は褐灰色シルト質極細砂層である。

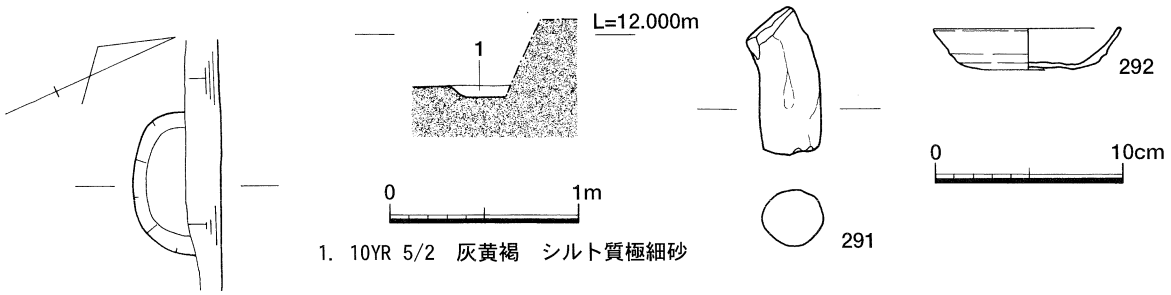
出土遺物は第83図に掲載した。293～297は肥前系陶器の皿である。293～296までは高台無釉とし，296の見込みには胎土目が残る。297は内面刷毛目文様で全面施釉され，砂目が残る。298は土師質土器の擂鉢である。出土遺物から17世紀前半頃の遺構と考えられる。



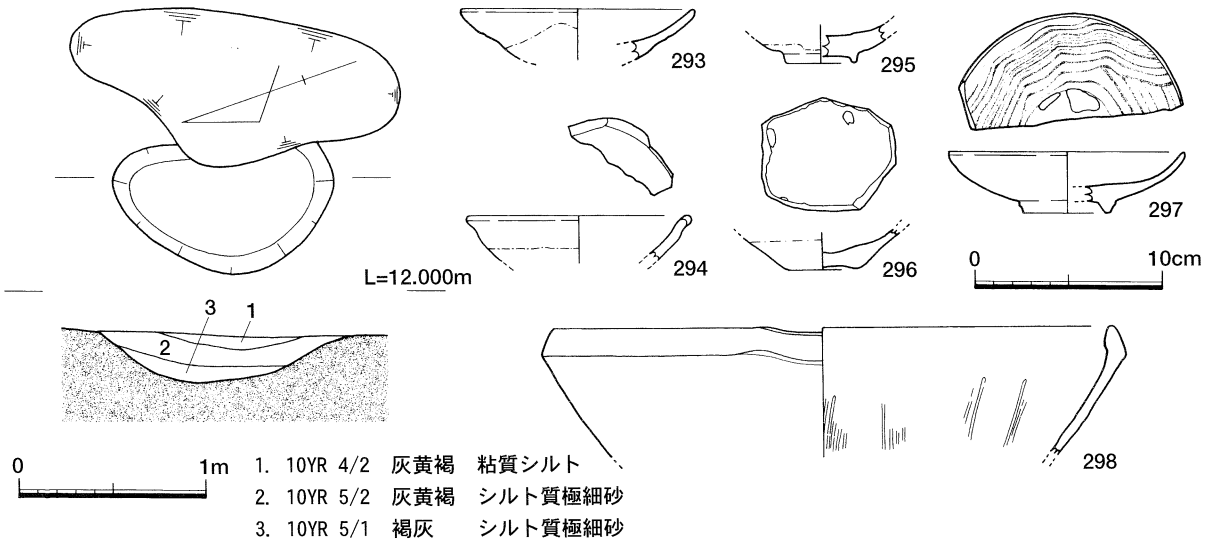
第80図　SK61012平・断面図及び出土遺物実測図



第 81 図　SK61012 出土遺物実測図②



第 82 図　SK61020 平・断面図及び出土遺物実測図



第 83 図　SK61021 平・断面図及び出土遺物実測図

SK61033（第 84 図）

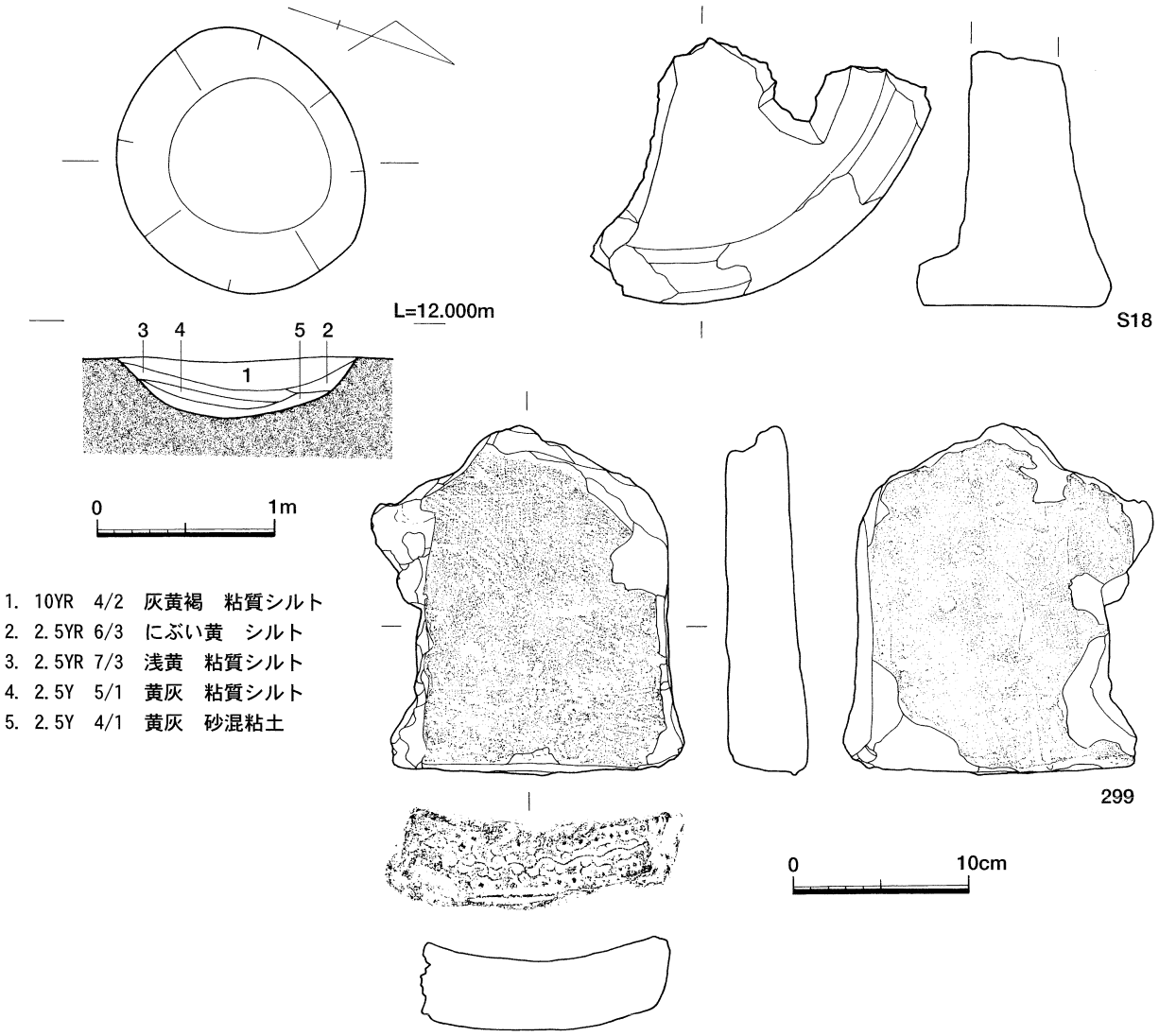
調査区東部で SD61002 に囲まれた屋敷地内西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径 1.5m，短径 1.35m，深さ 32cm を測る。断面はレンズ状の堆積を示し，埋土は 5 層に分層できる。第 1 層は灰黄褐色粘質シルト層，第 2 層はにぶい黄色シルト層，第 3 層は浅黄色粘質シルト層，第 4 層は黄灰色粘質シルト層，第 5 層は黄灰色砂混粘土層である。

出土遺物は第 84 図に掲載した。S18 は石臼である。299 は土師質の軒平瓦である。凹面には布目の痕跡が見られ，凸面は板ナデで調整されている。直線顎の瓦当面の均整唐草文は退化して樹木状になったもので，内外区の区別を設けず上下脇に珠文を配している。坂田廃寺や平安中期に同寺に瓦を供給していたとされる片山池 1 号窯跡出土瓦と同笵である。坂田廃寺や片山池 1 号窯跡からは直線距離にして 1.5km 以上離れており，偶然混入したとは考えられず，意図的に持ち込まれた可能性が有る。遺構の時期は供伴遺物が無く不明であり，屋敷地との関連も不明である。

SK61035（第 85 図）

調査区東部で SD61002 を切った状態で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径 2.35m，短径 1.95m，深さ 35cm を測る。断面はレンズ状の堆積を示し，埋土は 2 層に分層できる。第 1 層は灰黄褐色粘質シルト層，第 2 層は褐灰色細砂層である。

出土遺物は第 85 図に掲載した。300 は瀬戸美濃系の陶胎染付碗である。301 は土師質土器の擂鉢の片口部分である。302 は土師質土器の蓋である。303・304 は土師質土器の焜炉である。円筒形の器形で，窓が開いており，口縁部外面に押圧突帯を施し，内面はヨコハケである。305・306 は堺焼の擂鉢である。307・308 は土師質土器の焙烙である。309 は土師質土器の甕である。出土遺物から 19 世紀の遺構と考えられる。



第 84 図　SK61033 平・断面図及び出土遺物実測図

SK61079（第 86 図）

調査区西部で SD61023 に囲まれた屋敷地内南西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径 1.65m，短径 1.5m，深さ 50cm を測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は 2 層に分層できる。上層は黄灰色粘質シルト層，下層は暗灰黄色シルト質極細砂層である。

出土遺物は第 86 図に掲載した。310 は土師質土器の鍋である。311 は土師質土器の擂鉢である。内外面ともヨコハケである。312 は土師質の丸瓦で古代のものと考えられる。313 は瓦質の丸瓦である。凹面は布目と吊紐痕が残り，凸面は細かい板ナデで調整されている。出土遺物から概ね 16 世紀頃の遺構と考えられ，屋敷地に伴う可能性が有る。

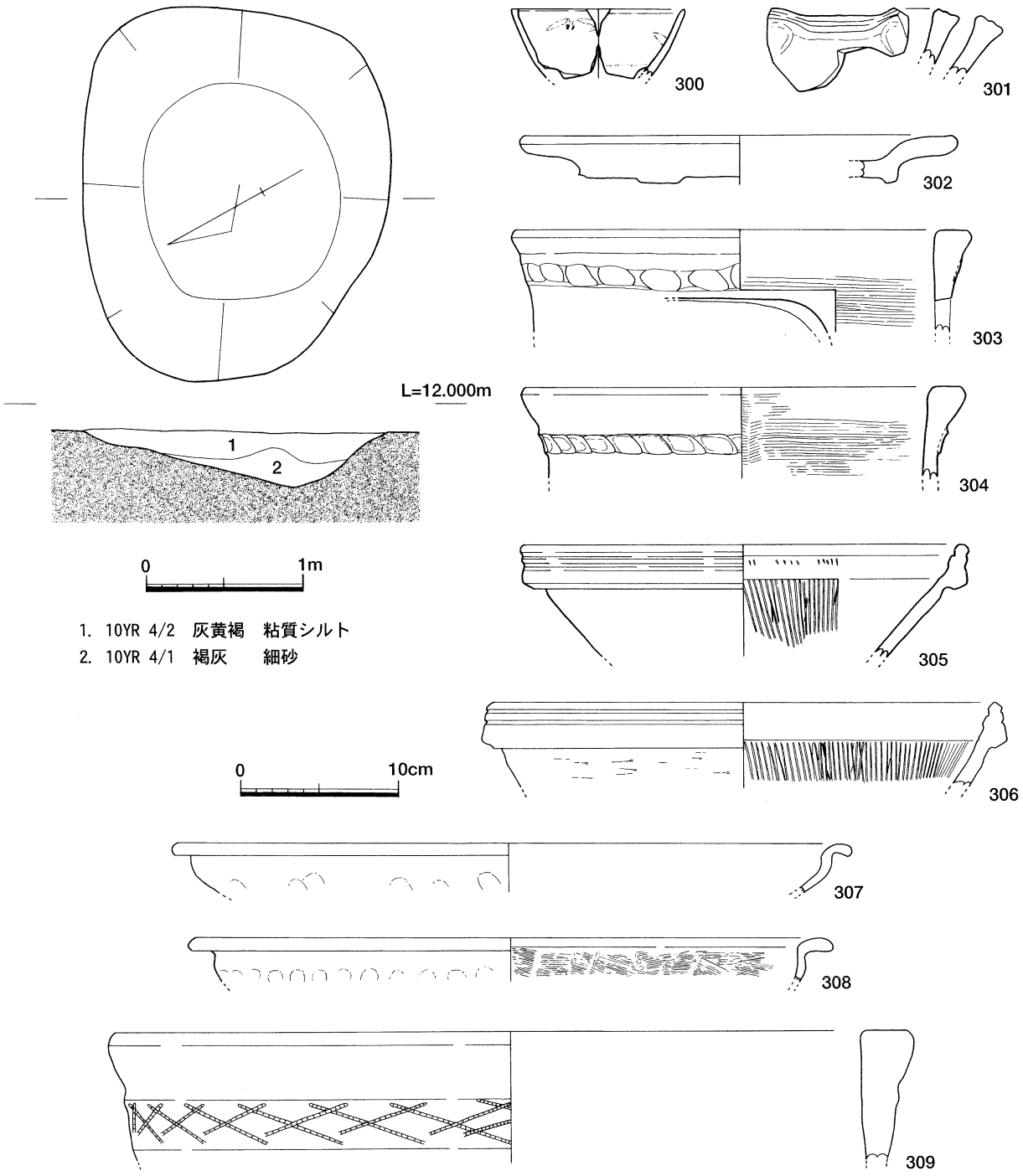
SK61081（第 87 図）

調査区西部で屋敷地を区画すると考えられる SD61023 を切った状態で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，直径 1.2m，深さ 30cm を測る。断面形態は半円形を呈し，埋土は褐灰色シルト質極細砂層の単層である。

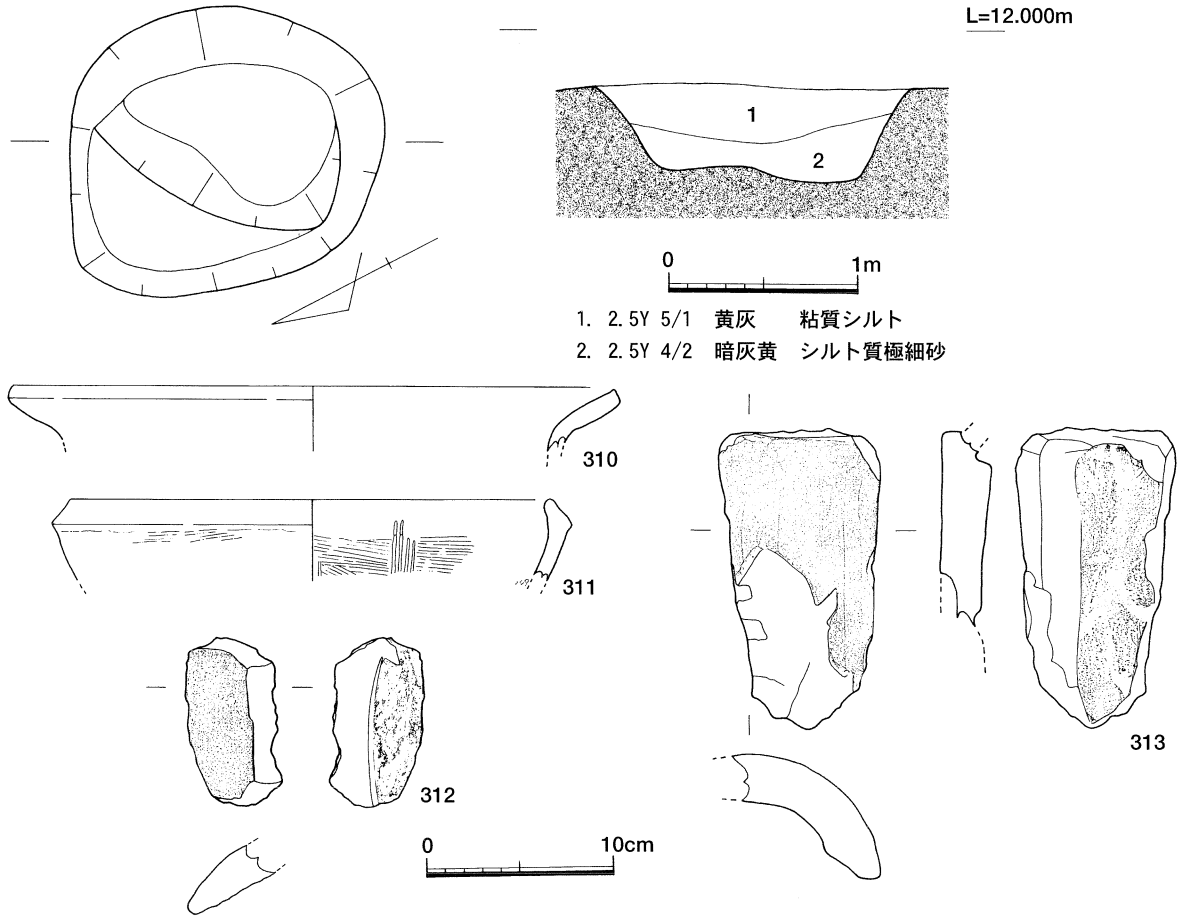
出土遺物は第87図に掲載した。314・315は肥前系陶器の皿である。314は口縁部で屈曲し鍔縁状になっている。315は高台無釉とし,内面に砂目や重ね焼き痕が残る。出土遺物から17世紀後半の遺構と考えられ,屋敷地の廃絶が17世紀前半までに限定されることがうかがえる。

SK61085（第88図）

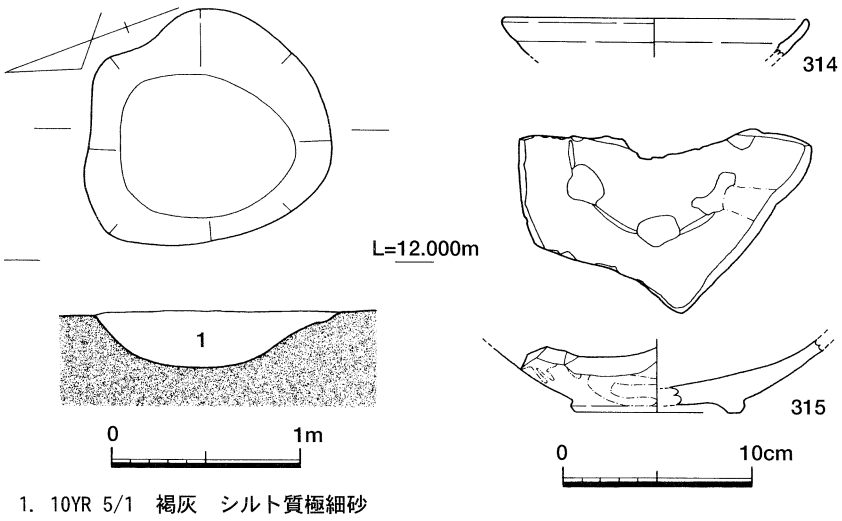
調査区西端でSD61023に囲まれた屋敷地内西部で検出した土坑である。南側の一部を他の遺構に切られるが，平面形態は楕円形を呈し，長径1.9m，短径1.2m，深さ32cmを測る。断面形態は半円形を呈し，埋



第85図　SK61035平・断面図及び出土遺物実測図



第 86 図　SK61079 平・断面図及び出土遺物実測図



第 87 図　SK61081 平・断面図及び出土遺物実測図

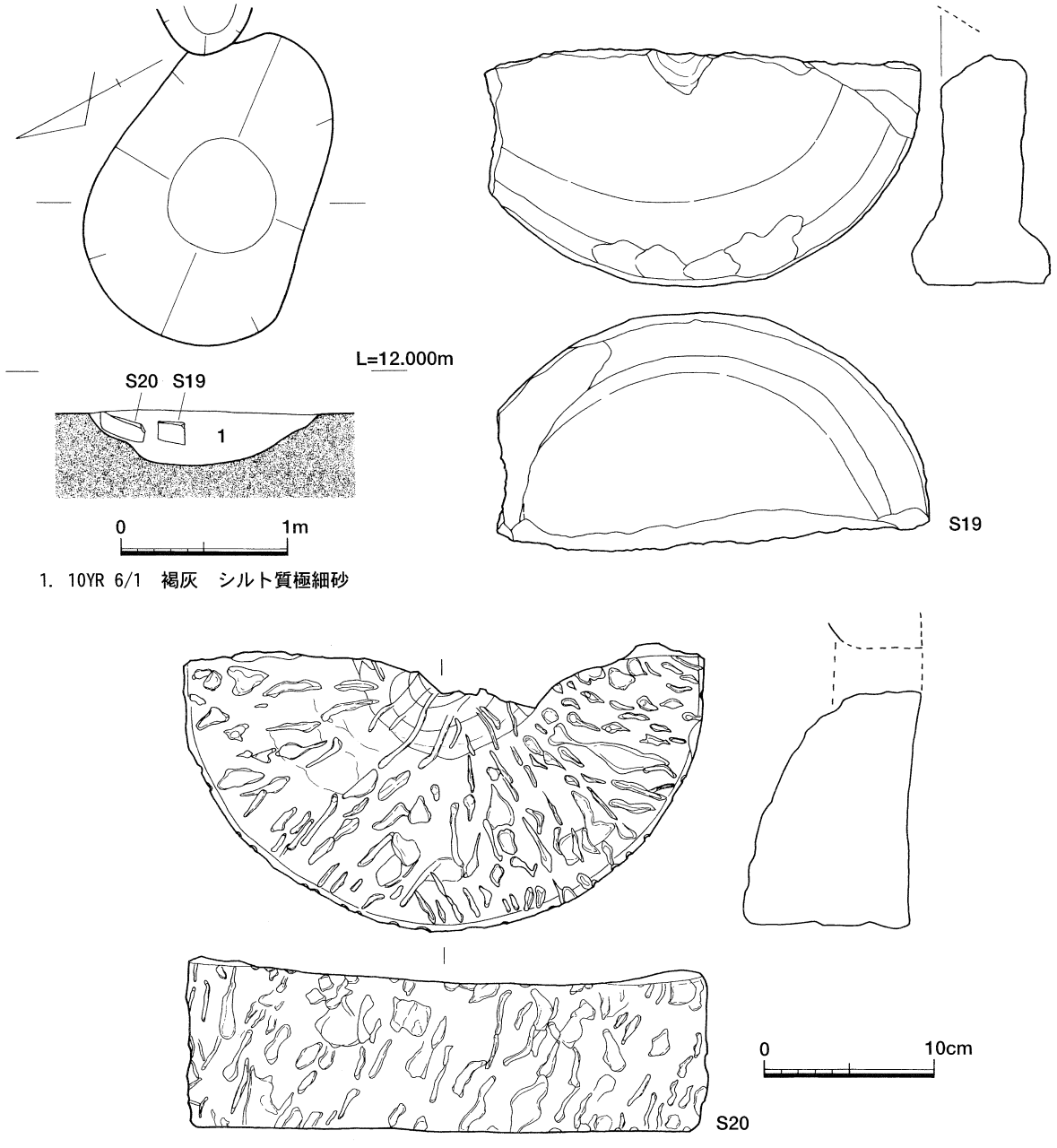
土は褐灰色シルト質極細砂層の単層である。

出土遺物は第88図に掲載した。S19・S20とも石臼である。土器片は出土しておらず，詳細な時期は不明である。

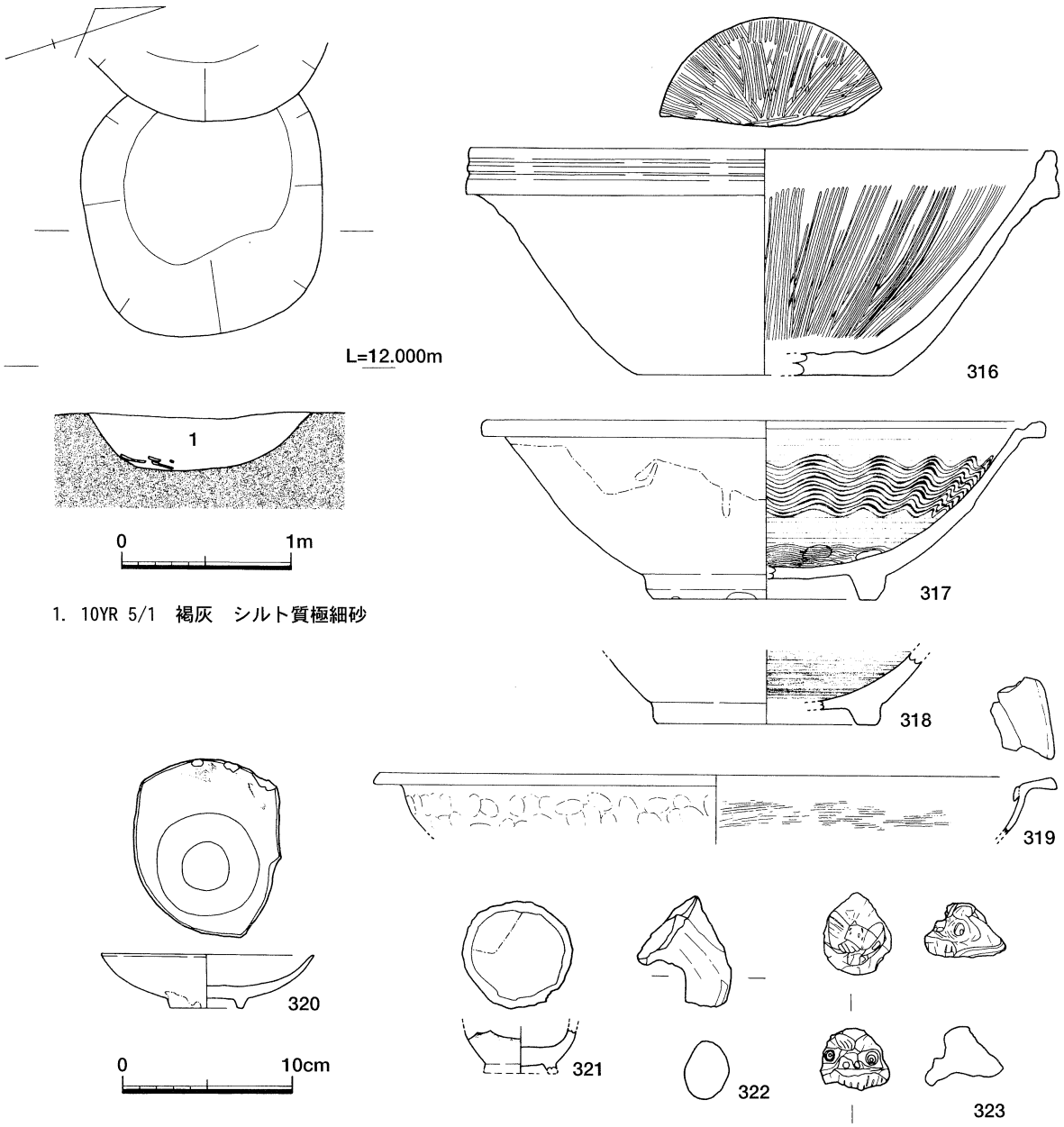
SK61086（第89図）

調査区西端で屋敷地を区画すると考えられるSD61023を切った状態で検出した土坑である。西側の一部を他の遺構に切られるが，平面形態は隅丸の長方形を呈し，長辺1.45m，短辺1.3m，深さ30cmを測る。断面形態は半円形を呈し，埋土は褐灰色シルト質極細砂層の単層である。

出土遺物は第89図に掲載した。316は備前焼の擂鉢である。317は肥前系陶器の鉢である。高台無釉で，内外面に砂目が残る。内面は刷毛目で，銅緑釉の掛流しが見られる。318も肥前系陶器の鉢である。外面無釉で内面刷毛目である。319は土師質土器の焙烙である。外面指頭圧，内面ヨコハケで内耳がつく。320



第88図　SK61085平・断面図及び出土遺物実測図



第 89 図　SK61086 平・断面図及び出土遺物実測図

は肥前系磁器の皿である。高台無釉で，見込みには蛇ノ目釉ハギが見られる。321 は瀬戸美濃系陶器の瓶である。内面無釉である。322 は土師質土器の脚部である。323 は瓦質土器である。獣頭を模したものであり，火鉢等の装飾の可能性が考えられる。出土遺物から 18 世紀の遺構と考えられる。

SK61094（第 90 図）

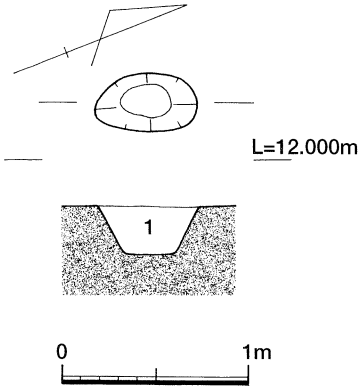
調査区西部で SD61023 に囲まれた屋敷地内中央部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径 55cm，短径 32cm，深さ 25cm を測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は黄灰色粘質シルトの単層である。

出土遺物は第 90 図に掲載した 324 は土師器の坏のみである。概ね 16 世紀の遺構と考えられ，屋敷地に伴うものと考えられる。

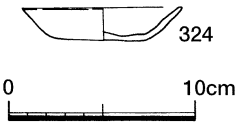
SK61112（第91図）

調査区西部でSD61023に囲まれた屋敷地内中央部で検出した土坑である。北側が調査区外に延びるため平面形態は不明であるが，長辺3m，短径95cm，深さ15cmを測る。断面形態は浅い逆台形を呈し，埋土は灰黄褐色細砂層の単層である。

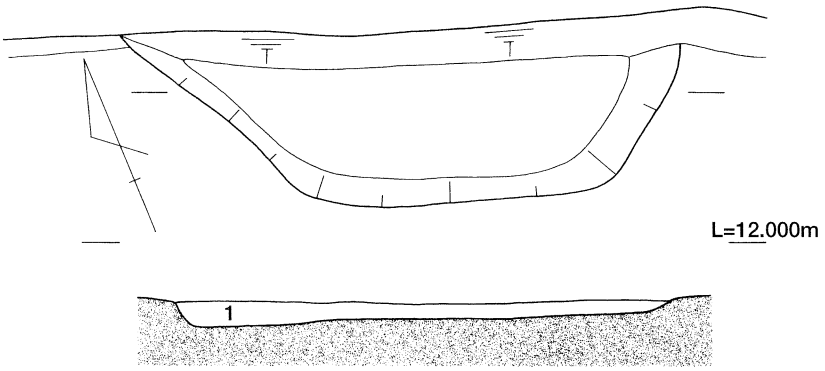
出土遺物は第91図に掲載した輸入磁器1点のみで，詳細な時期は不明である。



1. 2.5Y 5/1　黄灰　粘質シルト



第90図　SK61094平・断面図及び出土遺物実測図



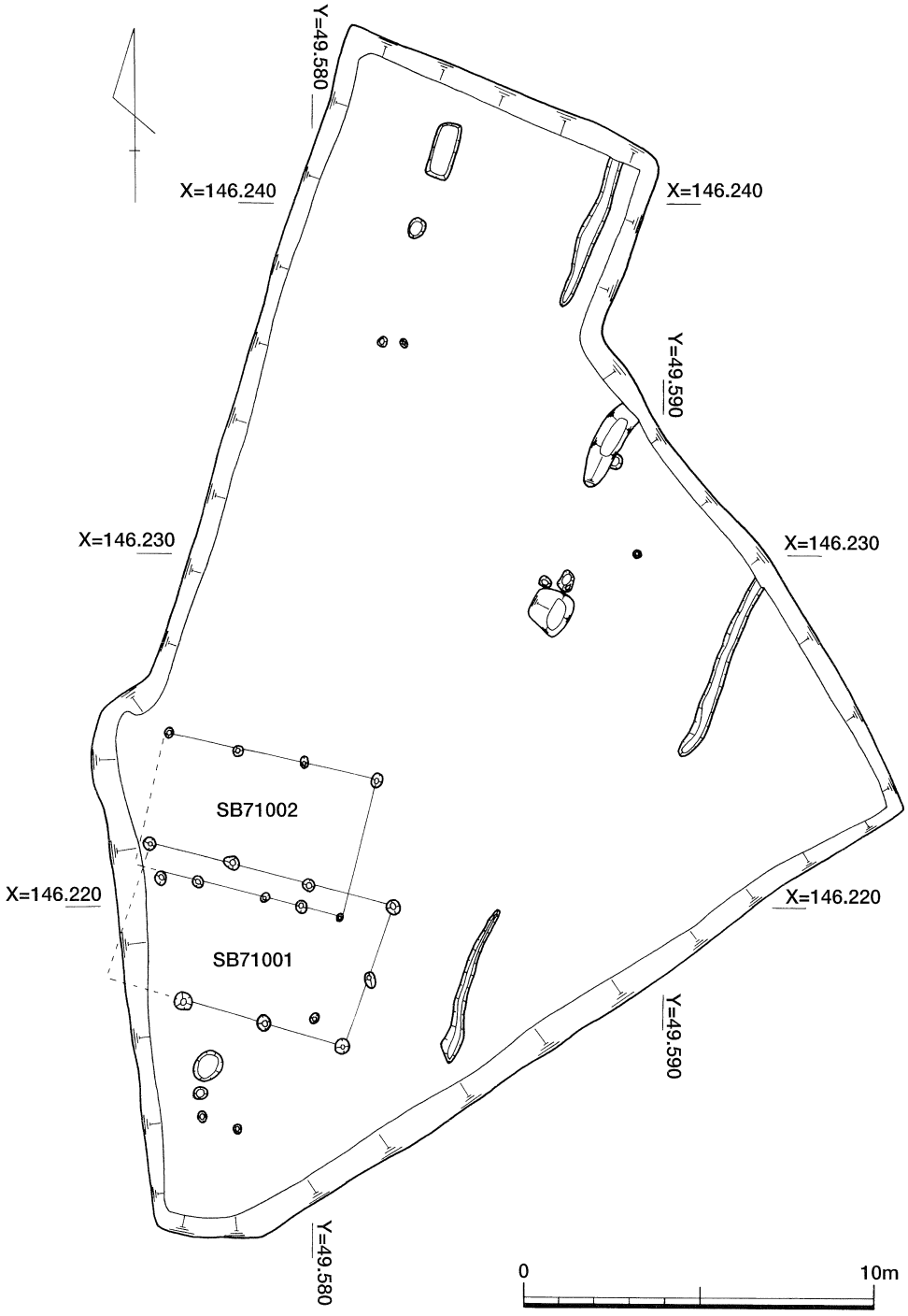
1. 10YR 4/2　灰黄褐　細砂

第91図　SK61122平・断面図及び出土遺物実測図

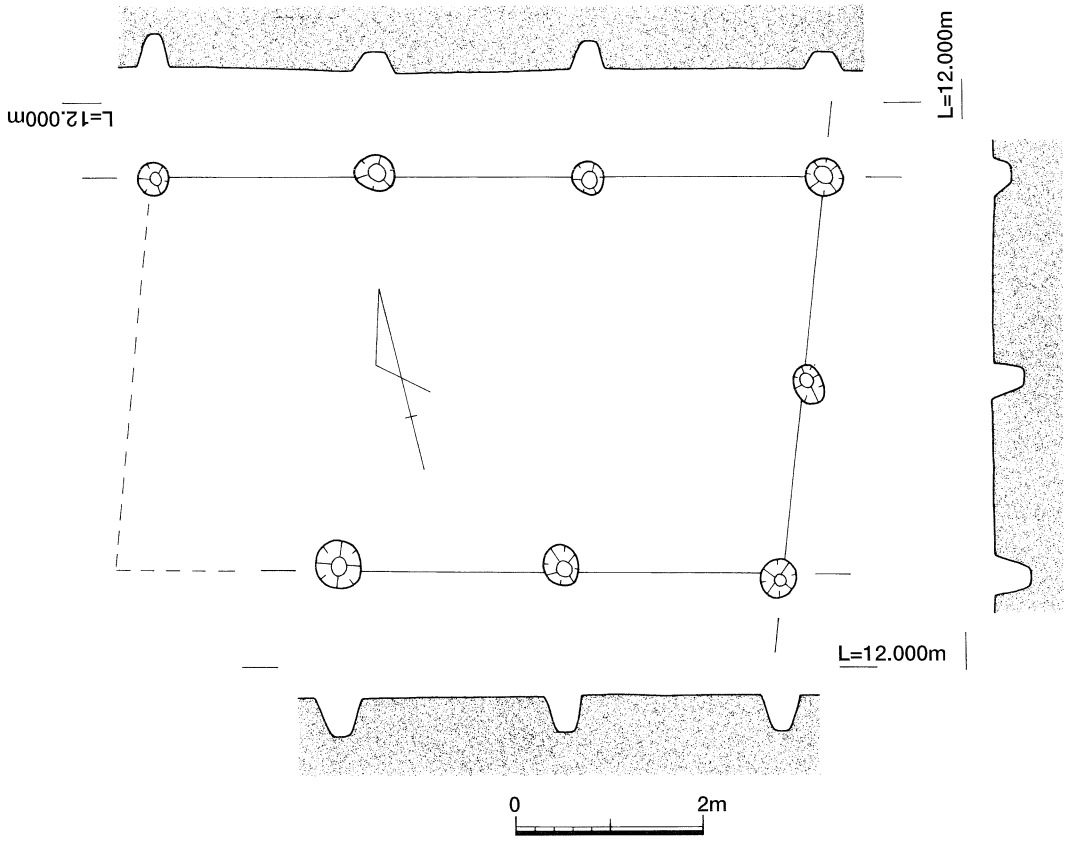
第7節　Ⅶ区の調査

調査区の概要と基本層序（第92図）

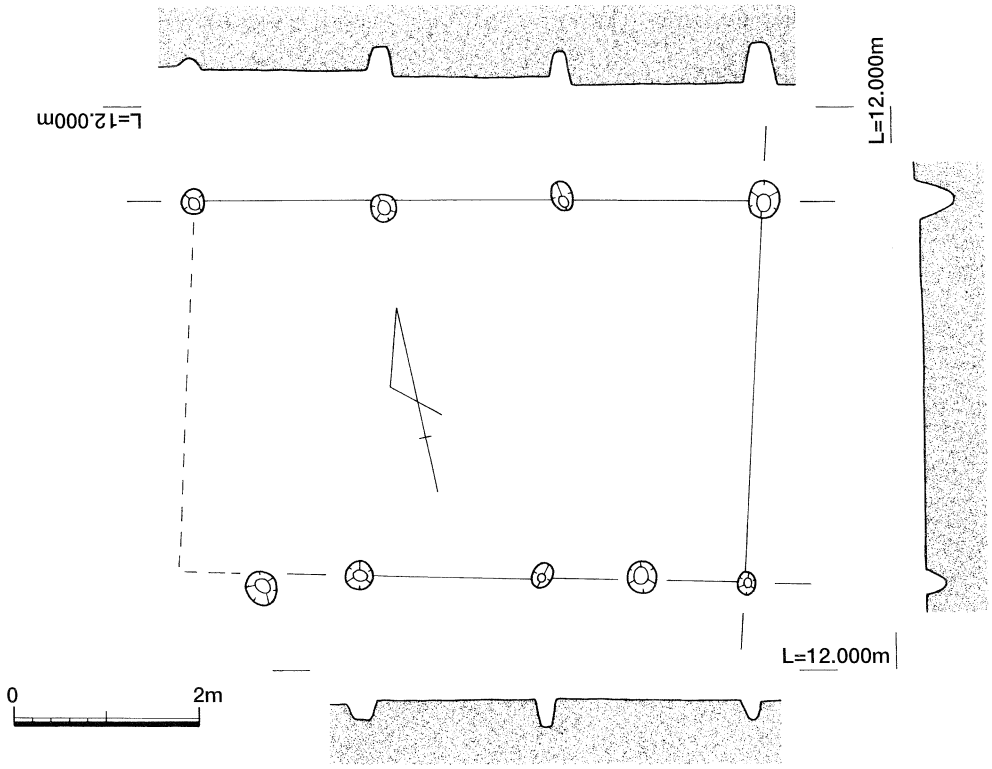
Ⅶ区は調査地の東端にあたる。現代の客土層約80cmを取り除くと地山の淡黄色シルト～細砂層が見られる。遺構面はこの地山上面の1面のみで，削平が著しく，遺構は散漫で，掘立柱建物2棟，溝3条等を検出したにすぎない。遺物は出土しておらず，遺構面の時期は不明であるが，隣接するⅥ区の遺構面と同一面であることから，中世末～近世の遺構面と考えられる。



第92図　Ⅶ区平面図



第 93 図　SB71001 平・断面図



第 94 図　SB71002 平・断面図

SB71001（第93図）

調査区の南部で検出した遺構である。南西隅の柱穴は調査区外のため検出できていないが，東西3間（3.6m），南北2間（2.1m），床面積7.56㎡で，主軸方位はN－76°－Wである。東西方向の柱間は1.2m，南北方向の柱間は1.05mでほぼ均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径15～25cmの円形で，深さは10～20cmを測る。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

SB71002（第94図）

調査区の南部で検出した遺構である。南西隅の柱穴は調査区外のため検出できていないが，東西3間（3.05m），南北1間（2m），床面積6.1㎡で，主軸方位はN－76°－Wである。東西方向の柱間は1m前後でほぼ均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～15cmの円形で，深さは5～20cmを測る。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

第4章　まとめ

第1節 遺構の変遷について

西ハゼ土居遺跡の発掘調査では弥生時代から近世に至るまでの遺構・遺物を検出した。調査地は東西に分断されており，西半は弥生時代～中世前半，東半は中世末～近世の遺構を多く検出した。各遺構の時期は，概ね弥生時代前期，弥生時代中期後半～後期初頭，弥生時代終末期～古墳時代初頭，古墳時代末～古代，古代末～中世前半，中世末～近世初頭，近世の7時期に大別できる。以下，その変遷を述べていきたい。なお，西側に隣接する松並・中所遺跡では既に遺構の変遷が検討されており（松本 2000），これを参照し，同遺跡との対応関係も考えていきたい。

弥生時代前期（第95図）

当該期の遺構は見られず，調査区西端で検出した自然河川 NR01 が該当すると考えられる。NR01 は隣接する松並・中所遺跡Ⅶ区 ASR01 から続くもので，同遺跡では弥生時代前期前半末の河川としている。西ハゼ土居遺跡で出土した遺物はわずかで時期決定が難しいが，櫛描文を施した甕の小片が見られることから，埋没は中期初頭まで下る可能性が考えられる。この自然河川に切られた状態で噴砂を検出しており，当該期以前に大地震があったことがうかがえる。

なお，松並・中所遺跡ではⅣ区 SD02 で区画された内部のみで当該期の遺構を検出していることから，Ⅳ区 SD02 を環濠の可能性がある溝としてとらえている。西ハゼ土居遺跡において弥生時代前期の遺構が見られないことは，同説を補強するものである。

弥生時代中期後半～後期初頭（第96図）

当該期の遺構としては，Ⅰ区全体が自然河川の最終埋没層として認識されており，その上面において小区画水田21筆を検出している。堆積状況からⅠ区全体に広がる自然河川最終埋没層は松並・中所遺跡Ⅲ・Ⅳ区 SR01 と同一河川である可能性が高い。なお，松並・中所遺跡では畦畔は検出されていないが，プラントオパール分析により SR01 上層において5,800個／gの稲のプラントオパールが検出されており，調査地ないし近傍で稲作が行われたことが検証されている。当該期には自然河川が機能しなくなり，湿地状になった SR01 上面の広範囲において稲作が行われたことが考えられる。

なお，当該期の居住遺構は西ハゼ土居遺跡では全く見られず，松並・中所遺跡で検出されており，集落域は SR01 の北西岸に位置するものと考えられる。

弥生時代終末期～古墳時代初頭（第97図）

当該期も遺構の密度は少なく NR02 及び NR03，NR05，NR06 の3本の旧河道がみられ，その旧河道の間のわずかな微高地において SK32001，SK32002 等の大型の土坑が掘削されているに過ぎない。なお，Ⅰ区西端で検出した掘立柱建物 SB12001 ～ SB12006 については，弥生終末期～中世前半のいずれかの時期の建物である。埋土の状況や建物主軸は後述する中世前半のものと全く異なり，遺構周辺では古墳時代末～古代の遺物が出土していないことから，とりあえず，当該期のものとした。松並・中所遺跡においては弥生中期末以降中世前半段階まで遺構が見られなくなる。

なお，当該期には遺跡の北西方向に鶴尾神社4号墳をはじめ，積石塚が多数築造されている。当該期の集落域は近隣では未発見であり，その造墓集団の集落の解明が待たれる。

古墳時代末～古代（第98図）

当該期も自然河川の埋土から土器が出土しているに過ぎない。NR04 及び NR02 の埋土から多量の土器が出土しており，当該期の埋没時期が考えられる。NR02 及び NR04 の延長部分と考えられる松並・中所遺跡Ⅶ区 SR03 は弥生時代中期末とされているが，当該期まで下る可能性が考えられる。また，遺物は出土していないが，NR04 と同一面で検出した NR07 も当該期のものと推定できる。居住遺構に関しては，西ハゼ土居遺跡，松並・中所遺跡とも検出していない。

古代末～中世初頭（第 99 図）

Ⅲ区において SB31001 ～ SB31011 までの 11 棟の掘立柱建物や SK31001 等の土坑を検出した。特にⅢ区西端に集中している。建物は切合っており，数時期に細分できると考えられるが，遺物はほとんど出土しておらず，時期決定は困難である。

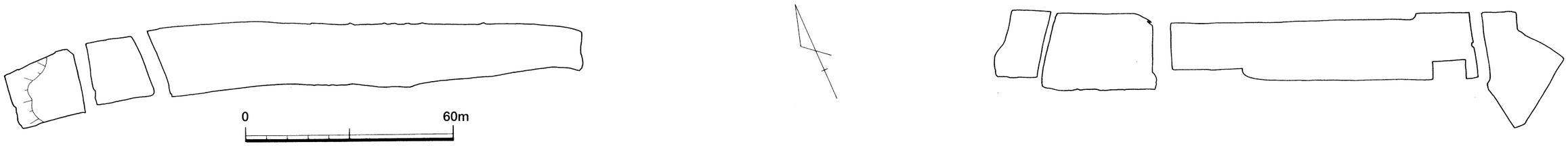
松並・中所遺跡では 12 世紀後半から 13 世紀中葉にかけて 4 時期に細分される遺構が検出されており，西ハゼ土居遺跡の遺構もこれとほぼ同時期のものと考えられる。特に 13 世紀前葉段階では遺構密度が最も高くなっており，屋敷地を区画する溝も確認されている。なお，中世の遺構は 13 世紀中葉で廃絶し，以後近世まで遺構は見られない。

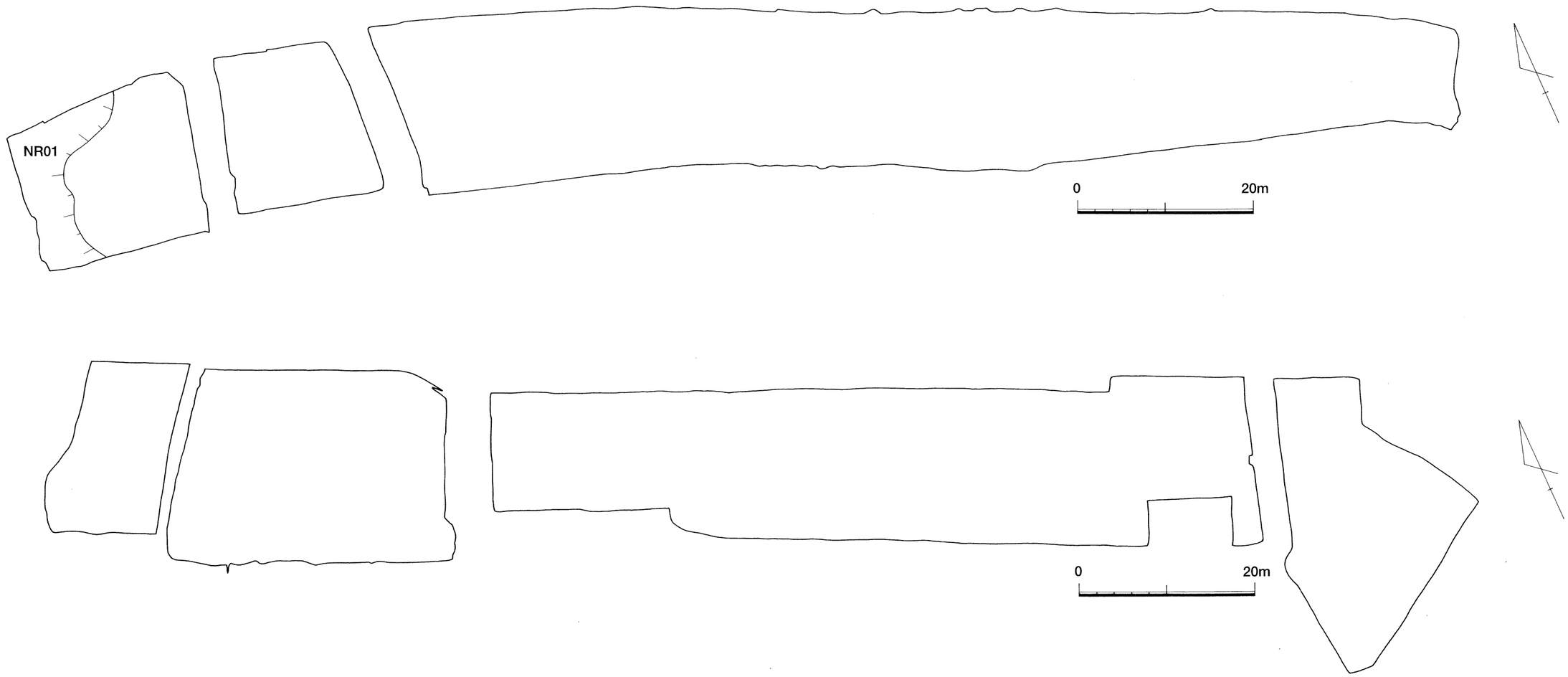
中世末～近世初頭（第 100 図）

当該期の遺構は遺跡の東半に集中する。溝で囲まれた屋敷地を 3 区画検出した。正方形の屋敷地と仮定すると SD61020 で囲まれた屋敷地は 44m 四方，SD61023 で囲まれた屋敷地は 33m 四方，SD61002 で囲まれた屋敷地は 22m 四方と推定される。いずれの屋敷地も 17 世紀前半に廃絶している。この他，SE51001，SE61001，SE61002 の 3 基の石組井戸や土坑を多数検出した。

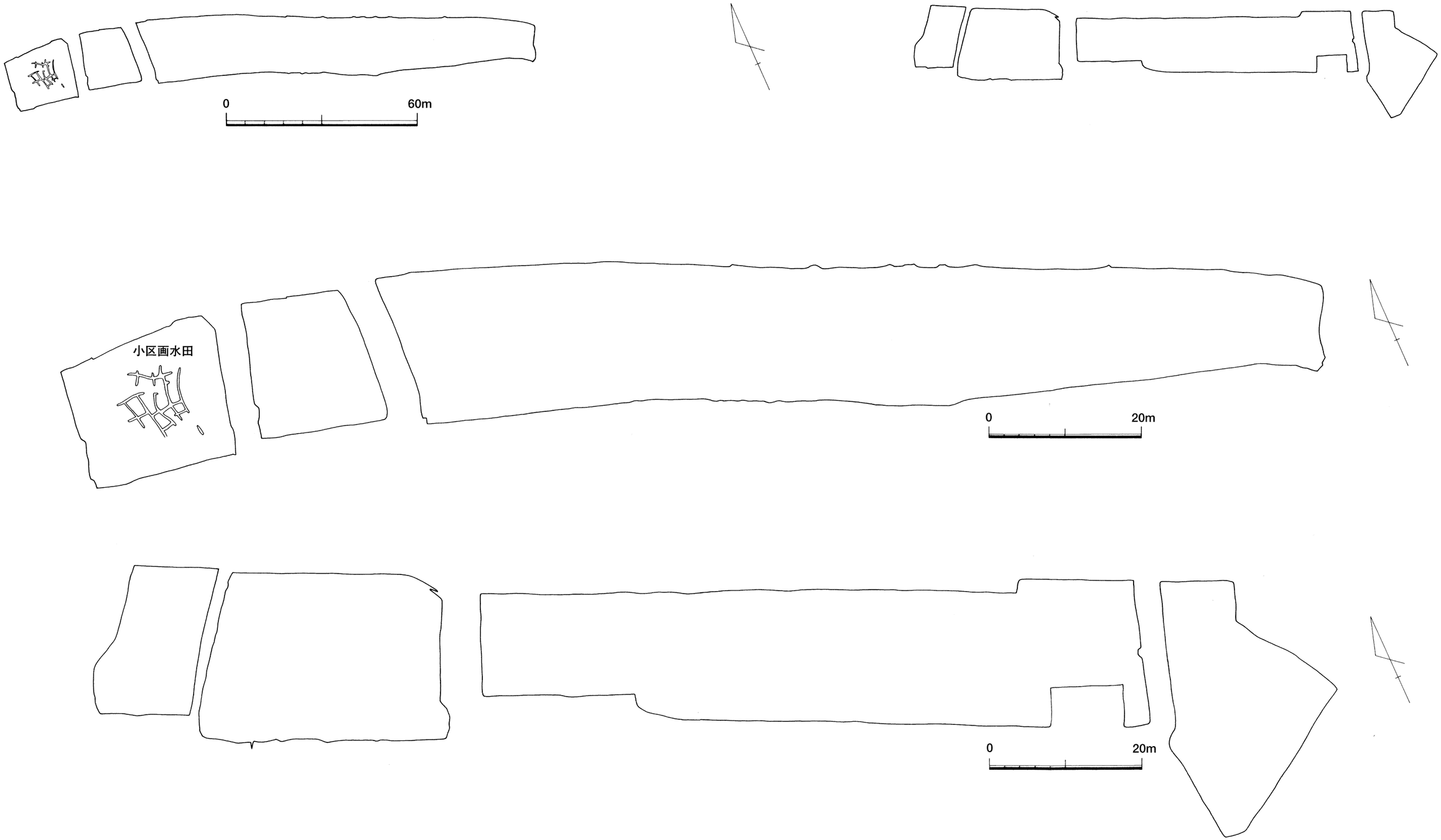
近世（第 101 図）

屋敷地廃絶後も近世の遺構は遺跡東半を中心に土坑・溝等が検出されている。遺構の時期は 18 世紀後半～ 19 世紀のものが多く見られる。なお，Ⅳ・Ⅴ区には自然河川 NR08・09 も見られる。

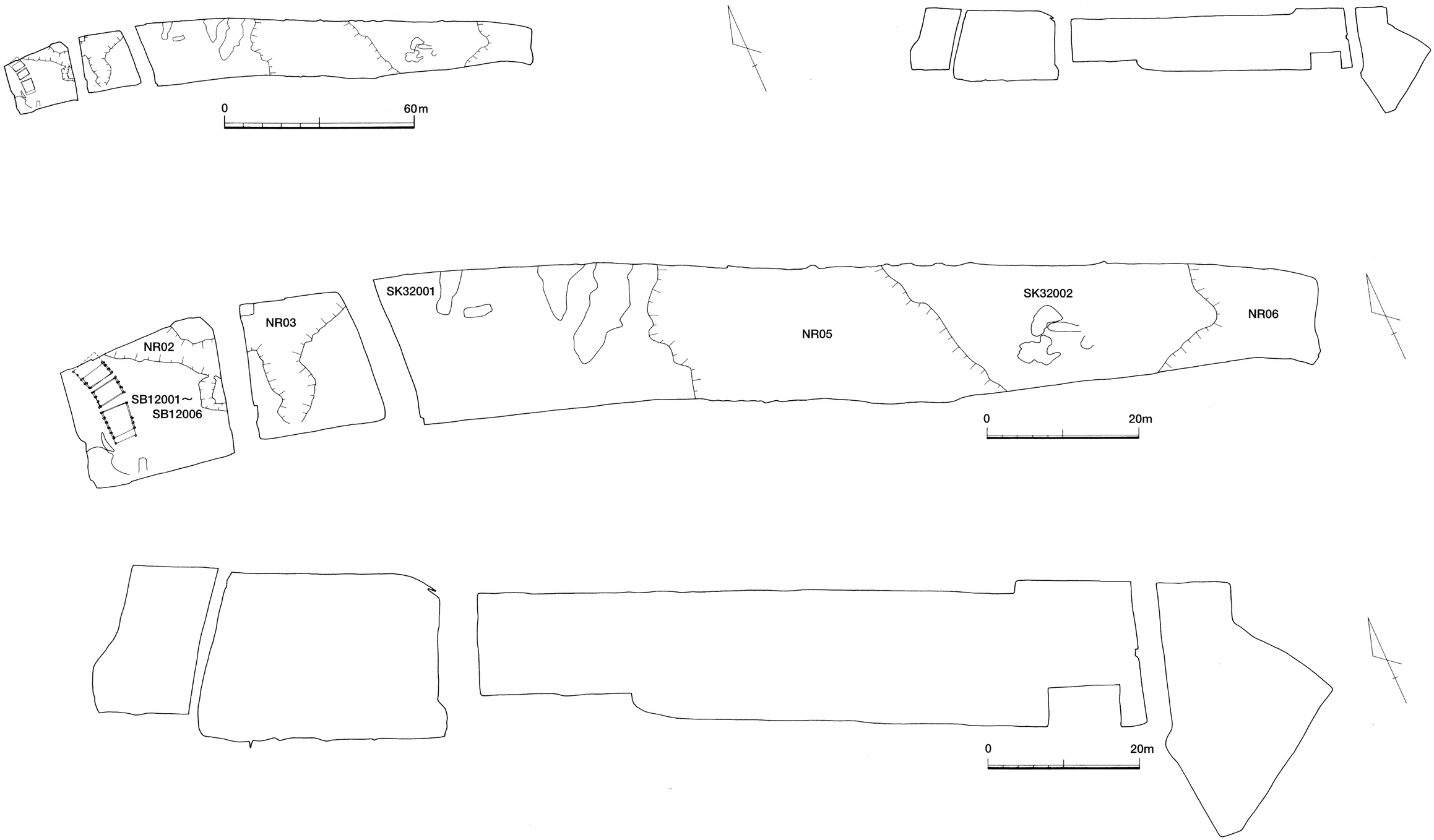




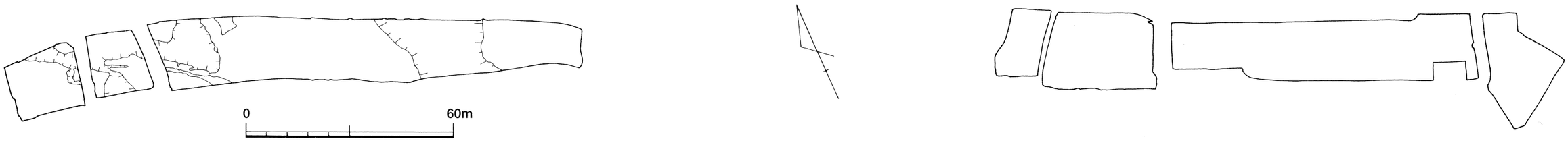
第 95 図　弥生時代前期の主要遺構

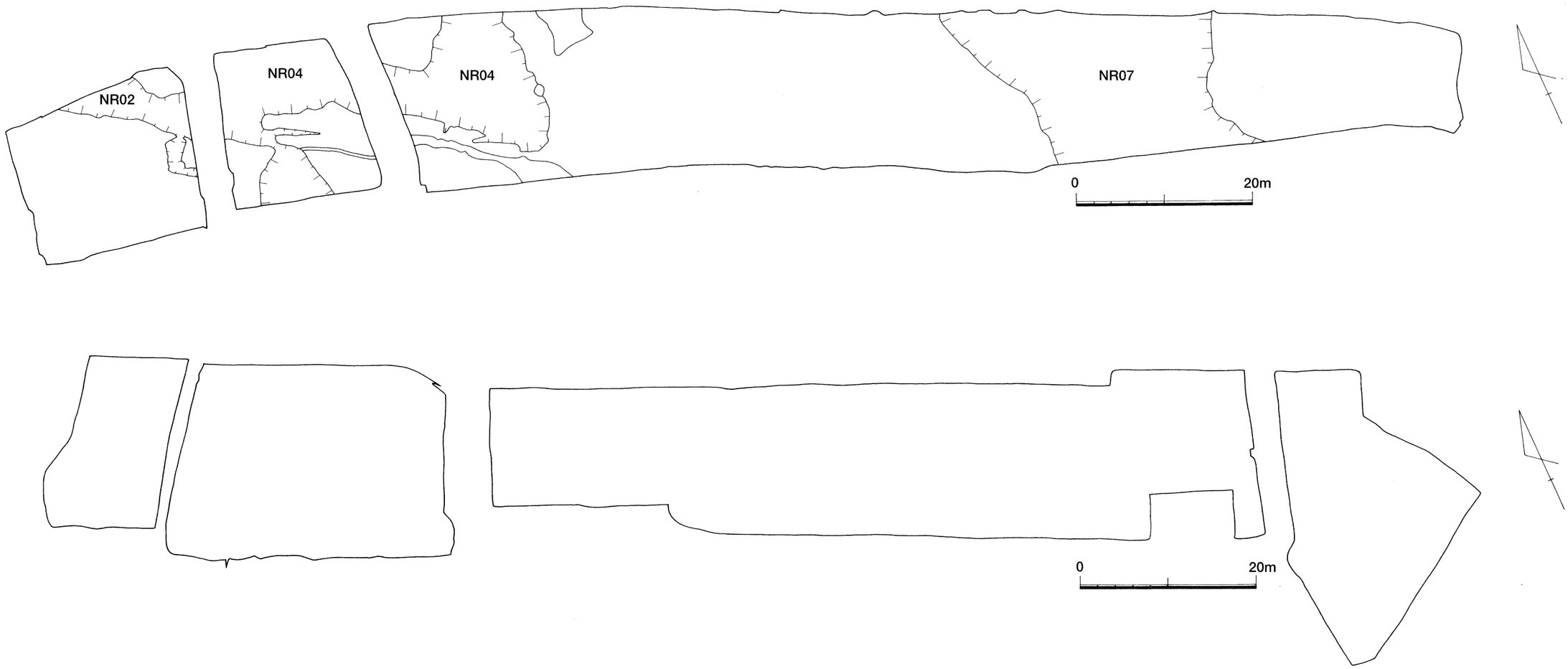


第 96 図　弥生時代中期後半～後期初頭の主要遺構

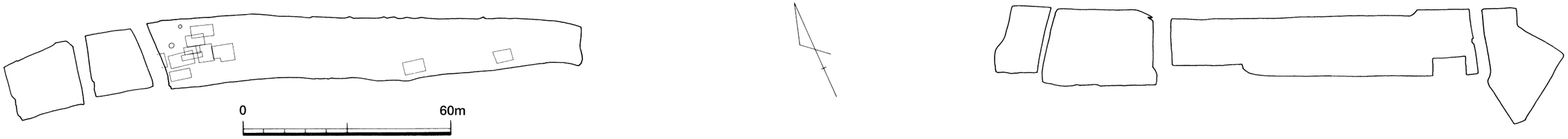


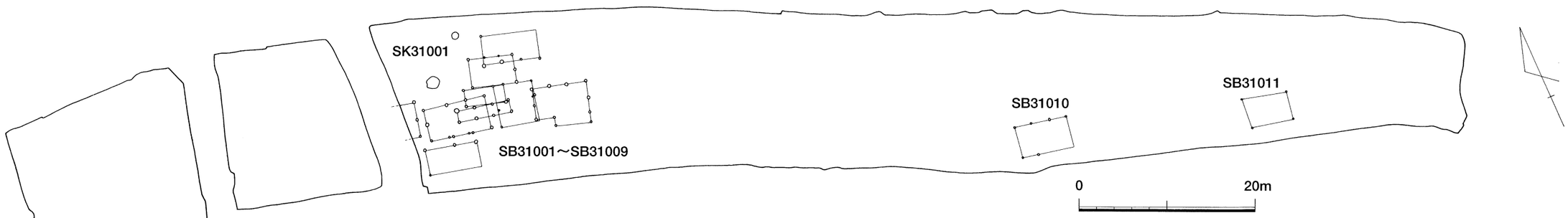
第 97 図　弥生時代終末期～古墳時代初頭の主要遺構

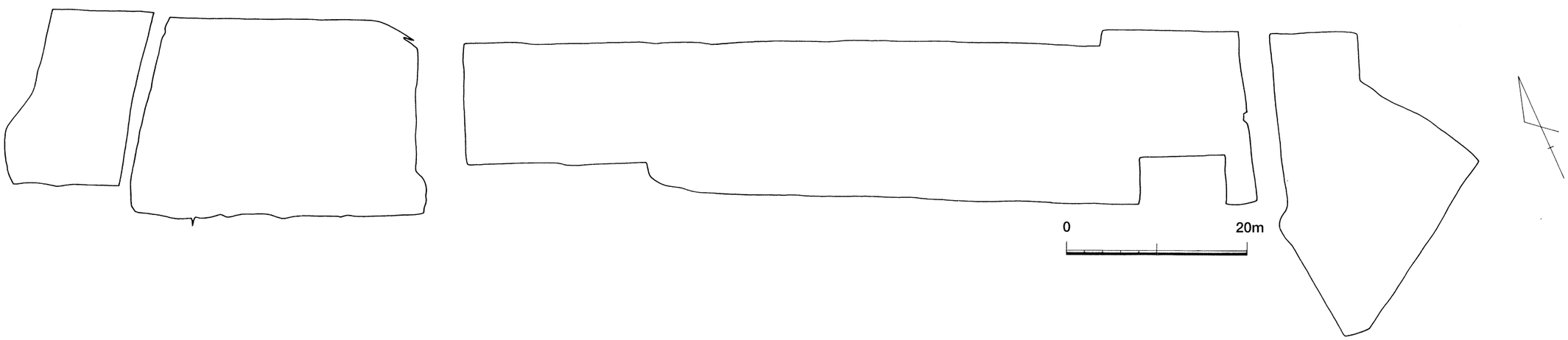




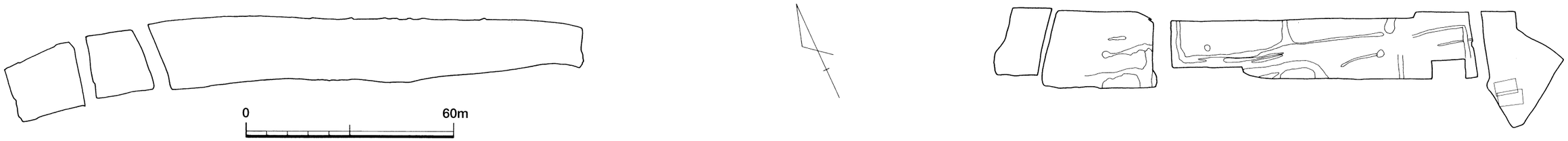
第 98 図　古墳時代末～古代の主要遺構

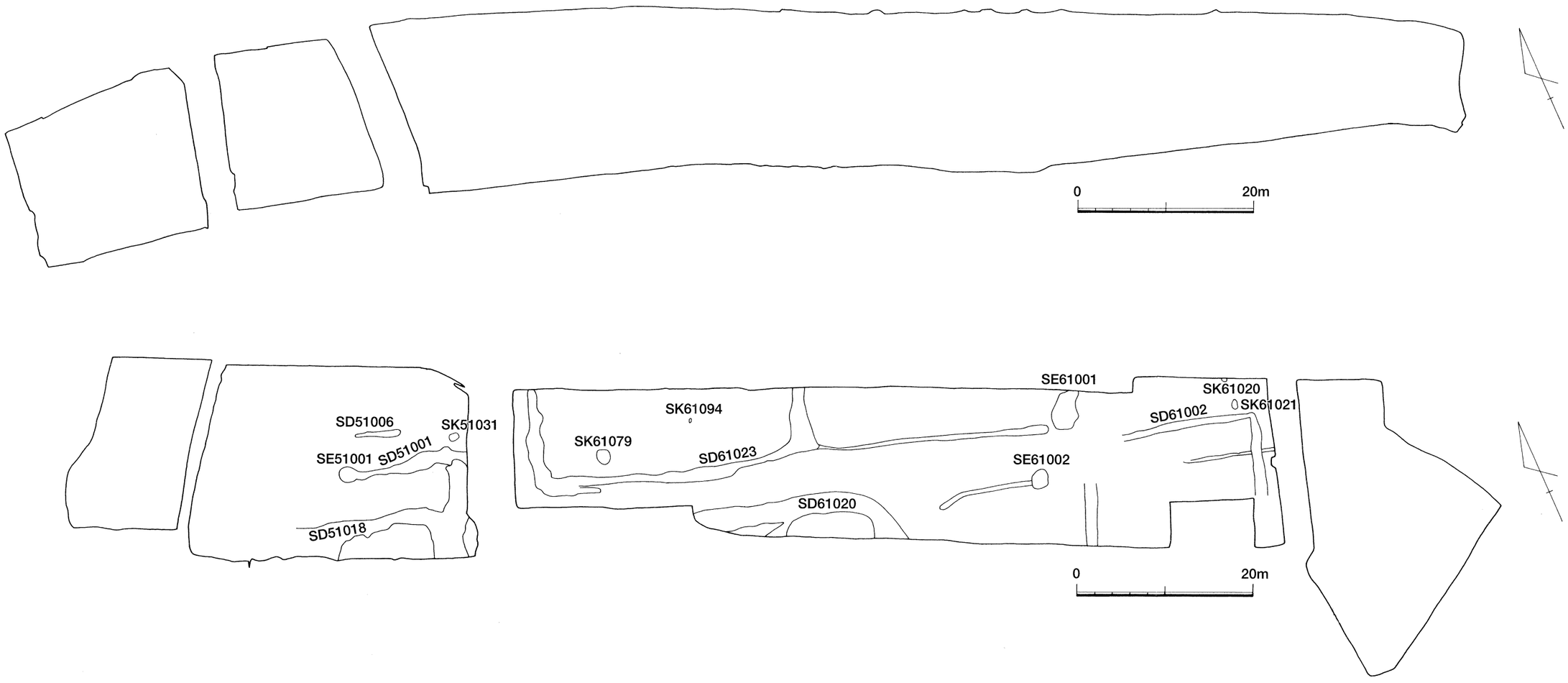




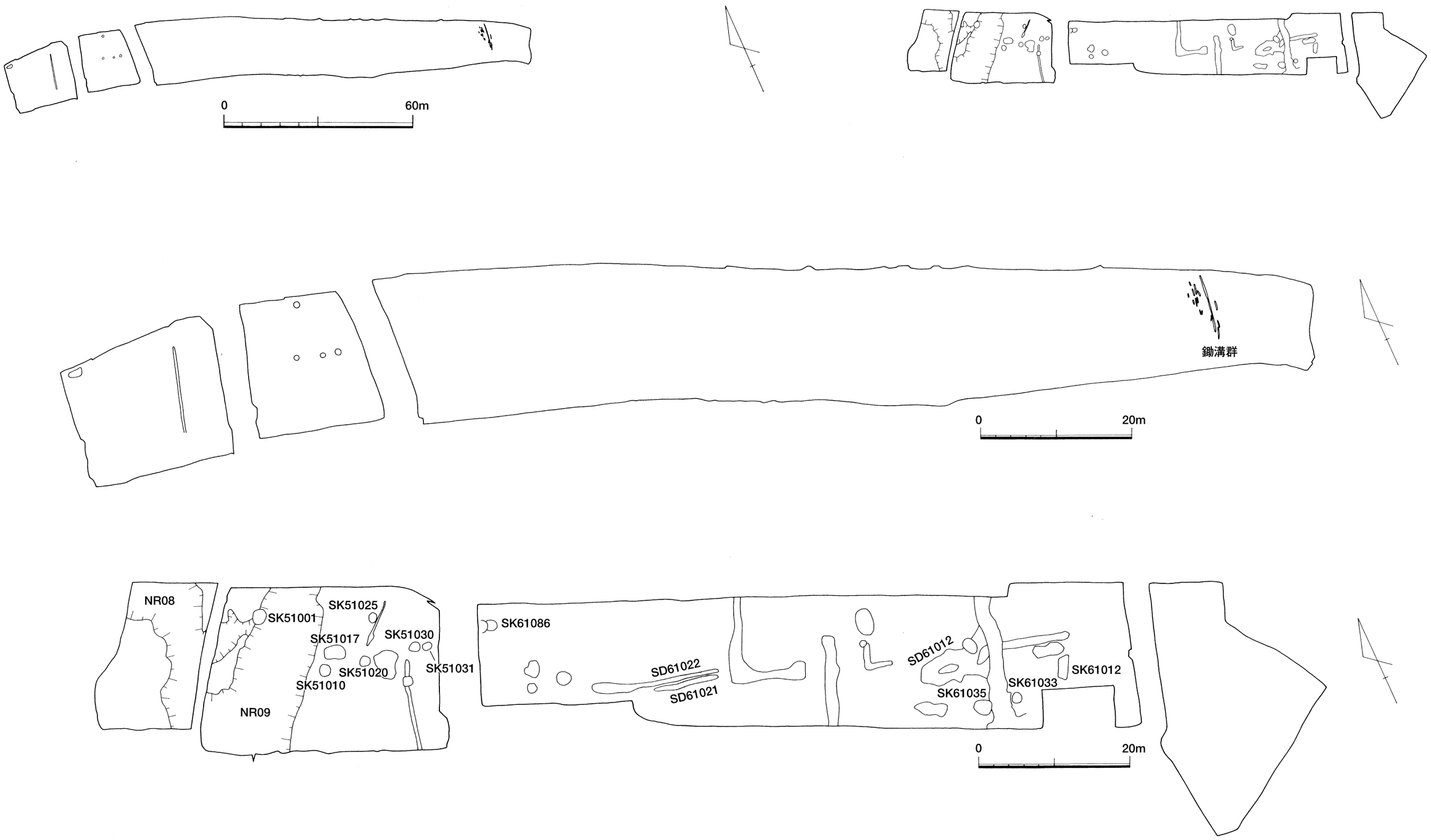


第 99 図　古代末～中世初頭の主要遺構





第 100 図　中世末～近世初頭の主要遺構



第 101 図　近世の主要遺構

第2節 屋敷地の居住者について

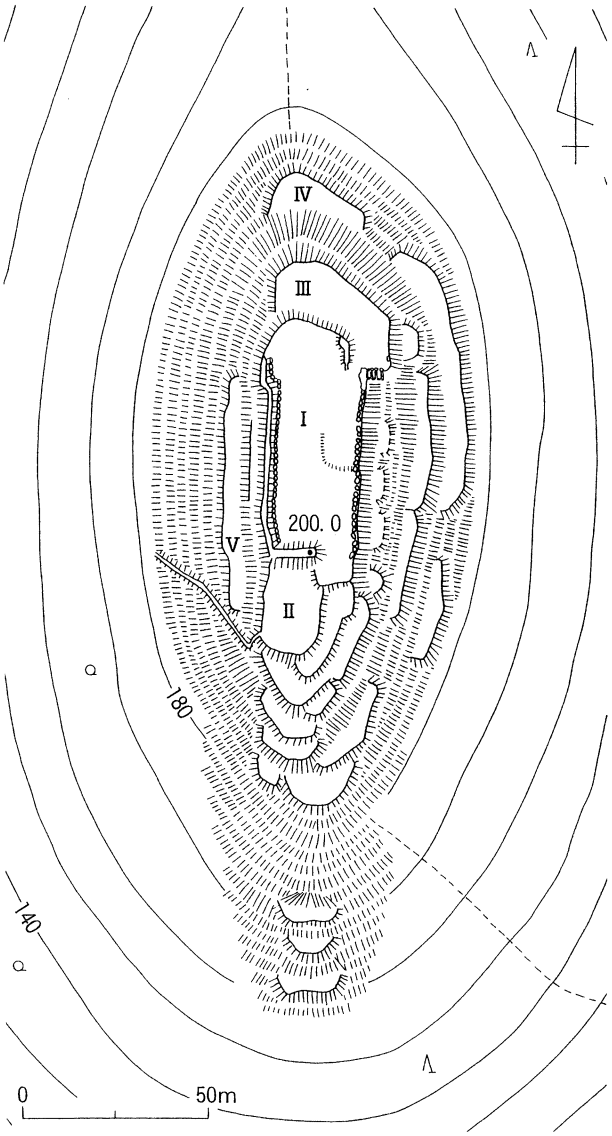
今回の調査では16世紀～17世紀前半の溝で囲まれた屋敷地を3区画検出した。この屋敷地の性格と居住者について考えてみたい。ここではSD61020に囲まれた範囲を屋敷地A，SD61023で囲まれた範囲を屋敷地B，SD61002で囲まれた範囲を屋敷地Cとした。なお，Ⅴ区SD51001で囲まれた部分については，旧河道との接点部分において18世紀の遺物を含んでいるが，その他の部分では概ね17世紀前半までの遺物しか出土していないことから屋敷地Dが想定できる。しかしながら，時期決定に不安があり，規模も不明であることから，屋敷地Dは参考程度にとどめたい。屋敷地の規模については，屋敷地B・Cについては発掘調査で溝の1辺が全域検出されており，中世城館の平面プランが正方形であることが多いことから正方形のプランを想定した。屋敷地Bは，溝内の屋敷地は約26.5m四方で，屋敷地面積は約700㎡，溝幅1.5mを含めた規模は約32m四方を想定できる。同様に，屋敷地Cは，溝内の屋敷地は約18m四方で，屋敷地面積は約324㎡，溝幅1.6mを含めた規模は約21m四方を想定できる。一方，屋敷地Aは北東隅しか検出されていないため，規模は不明である。しかしながら，屋敷地B・Cを区画する溝に比べ屋敷地Aを区画する溝SD61020は幅2.6m，深さ60cmと他の区画溝に比べ大規模であることから，屋敷地B・Cより大規模な屋敷地であることが想定される。一方，Ⅵ区の西端は坪界線で，現在も水路と道路により区画されていることから，この坪界線を越えて屋敷地が広がることは想定しにくい。同様に，調査区の南側にも坪界線が所在し，現在も水路と道路により区画されていることから，この坪界線を越えて屋敷地が広がることも想定しにくい。屋敷地Aの北東隅から西側と南側の坪界線まで約44mであり，溝幅を含めた屋敷地は約44m四方を想定できる。溝内は約40m四方で，屋敷地面積は約1600㎡を想定できる。なお，屋敷地Aと屋敷地Cはその北辺が直線状に並んでいる。また，屋敷地Bは屋敷地Aとは接せず，約4m幅の間を空け平行に築かれている。この4m幅の空地には屋敷地廃絶以降の遺構しか見られないことから，通路上の遺構が想定できる。以上から，通路状の施設を基準に屋敷地が企画的に配置されており，3つの屋敷地は互いに関係しあっていることがうかがえる。

検出された屋敷地は周囲を溝で区画しており，出土遺物中に瓦が存在することから，明らかに一般集落とは異なるものであり，中世城館や寺社の可能性が考えられる。城館や寺社とする決定的な遺物の出土はないが，寺社の伝承は無く，「土居」の地名が残ることから中世城館の可能性が考えられる。西ハゼ土居遺跡の所在する坂田郷は香西郡に属しており，中世では香西氏の勢力圏内である。このうち，坂田郷内には室山城，坂田城，片山城，斎藤城があったとされる。

では，坂田郷内の中世城館について記述した近世の軍記物と編纂物から検討してみたい。最も古い記述は寛文3年（1663）に記された『南海治乱記』である。これを補訂したものが，享保4年（1719）『南海通記』であり，坂田郷部分の記述に関して大差は無い。これらによると，坂田郷内の城については室山城の記述しかなく，その城主については一切触れられていない。宝永5年（1708）に記された『玉藻集』以降の諸文献では室山城主を太田犬養（六郎）とするものが多い。しかしながら，太田氏はその名の通り太田周辺の氏族と考えられており，文政11年（1821）に記された『全讃史』では太田城の欄に太田犬養，その子兼久，その子兼氏がいたという記述がある。また，『南海通記』においては「楠川太田ノ犬養」という記述が見られる。前後の文脈からすると「地名＋人名」の記述となっていることから「楠川と太田に城を持つ犬養氏」という意味に取れる。別の箇所でも「太田犬養」とあるが，これについても姓名なのか地名と人名を併記しているものか判断つきがたい。いずれにせよ太田周辺に勢力を持つ「太田犬養」なる人物が室山城と関係があったということになる。しかしながら，寛政4年（1792）に記された『香西記』では太田犬養について2人なのかという疑問（太田氏と犬養氏が居たという疑問なのか室山城と太田城の両方に同姓同名の太田犬養がいたという疑問なのかは不明）が出されており，明治中期『新撰讃岐国風土記』では室山城主に太田犬養がいたということを疑問視している。一方，室山城の城主を太田犬養以外とするものもある。江戸時代に香川郡西部の政所を代々勤めた御厩町の小比賀家には，延享5年（1748）に記された『(小比賀家）由緒書』が残っている。これによると天正10年に甲府から落ち延びた小比賀野甚助が伊予河野氏を頼り，その後坂田村の室山に城を築いたとしている。しかしながら，室山城については『南海治乱記』で天正2年（1574）の三好氏との戦いの際に「香西家ニ其聞へ有ケレハ香東郡ノ士民ノ子女ハ、坂田室山ノ城ニ入レ」という記述が有ることから，天正2年には既に室山城があったことが分かる。このことから『由緒書』に記載された築城は史実とは異なると考えられる。ただし，『全讃史』では太田六郎兼久の臣小比加

第 102 図　屋敷地復元図（地籍図と合成）

五郎四郎が居たという記述も見られる。なお，明和5年（1768）に記された『三代物語』においても小比賀桃千代に対して父親である五郎四郎の戦死について六郎から感状が出されている。六郎とは太田犬養六郎あるいは太田六郎兼久のことと考えられ，小比賀氏が太田氏の家臣的扱いを受けていたことがうかがえる。しかしながら，香西氏が三谷氏の大麻（王佐山城）を攻めたのは『南海治乱記』等によると永正5年（1508）8月のことであり，感状に記載された日付12月6日とは異なる。記録に残っていない戦があった可能性も考えられるが，感状の真偽が疑われる。この他，室山城主については『全讃史』に眞鍋權頭某とも記載されている。眞鍋權頭については他の文献に記述が無いが，『南海通記』で上ノ村眞鍋と記載された人物がおり，この人物が該当すると考えられる。以上，城主について諸説のある室山城であるが，その築城技術については，主郭の土塁裾の石積みや折れに勝賀城との類似性が指摘（香川県教育委員会2003）されている。また，「香西家ニ其聞へ有ケレハ香東郡ノ士民ノ子女ハ、坂田室山ノ城ニ入レ」や「坂田ノ室山モ國中ナレドモ要城也。」という記述からは，室山城に対して香西氏の直接的な介入が読み取れる。また，平野部であることから居館しか持ち得ない香西氏配下の香東郡諸将の最終防衛地であったことも読み取れる。このような理由から『南海治乱記』において城主の記載が無く，その他の文献においても多数の武将の名が挙げられていることが考えられる。なお，室山城については，現在も室山の山頂部に遺構が残っており，同地が比定地となっている。



第103図　室山城跡縄張り図
（香川県教育委員会2003より抜粋）

片山城については城の記載が無いものも多いが，城主に関しては片山氏であることはどの文献でも一致するところである。城の所在地については『翁嫗夜話』では坂田口橋詰，『香西記』『全讃史』では小山としており，さらに『讃岐国名勝図会』においては北山裏付近に描かれている。具体的な場所は不明であるが，これらの諸説は現在の松並・勅使・西春日町にあたり，浄願寺山の東麓に位置することとなる。

斎藤城については，『全讃史』にのみ記述が見られる。城主は齋藤荘兵衛行長と記述されており，『香西記』にみられる沖村の佐藤庄兵衛行長と同一人物と考えられる。城の所在地については上天神・田村町に馬場・堀の角・ミドロという地名が残っており，この周辺が比定地とされている（香川県教育委員会2003）が，実態は不明である。

坂田城に関しても記述が少ない。坂田城が文献上最初に見られるのは，『三代物語』であり，これには太田六兵衛兼久とその子の加兵衛兼氏としている。以降の諸文献もこれを参考にしたと思われ，ほぼ同様の記載が見られる。しかしながら，太田が本願地と考えられる太田氏が常に坂田城に居たとは考え難く，太田氏配下の人物や他の人物の居館であった可能性が考えられる。『香西記』では片山城に片山志摩俊秀，室山城に太田犬養，沖村に佐藤庄兵衛行長とあり，坂田郷内の坂田城以外の城主が書かれている。小比賀甚助は人名のみの記載であるが，他の城館の城主と併記されていることを考えれば，坂田城主と考えられる。なお，小比賀氏については先述の通り，太田氏配下の可能性が考えられる。また，『三代物語』以前の『南海通記』によれば坂田城の記述は無いが，「坂田庄官」や「坂田ノ河野、坂田ノ庄官」という記述が見られ

第３表　古記録に見る坂田郷内城主一覧

書名	出版年	室山城	坂田城	片山城	斎藤城
『南海治乱記』	寛文3年(1663)	室山城の記述はあるが，城主についての記述なし	坂田城の記述は無いが，坂田ノ庄官，坂田ノ河野の記述あり	片山氏の記述はあるが，片山城の記述なし	
『南海通記』	享保4年(1719)				
『玉藻集』	宝永5年(1708)	太田犬養	庄官の記述あり	片山氏の記述はあるが，片山城の記述なし	
『小比賀家由緒書』	延享5年(1748)	小比賀甚助が室山に城を築く			
『三代物語』	明和5年(1768)	太田犬養	太田六兵衛兼久 →加兵衛兼氏	片山玄蕃俊武 →志摩俊秀	
『翁嫗夜話』	18世紀後半	太田犬養→小比賀甚助	太田六兵衛兼久 →加兵衛兼氏	首藤(片山)玄蕃俊武 →志摩俊秀	
『香西記』	寛政4年(1792)	太田犬養	坂田郷に小比賀甚助の記述あり	片山志摩俊秀	佐藤庄兵衛行長
『全讃史』	文政11年(1828)	眞鍋權頭 太田犬養(六郎) 太田六郎兼久の臣 小比加五郎四郎		片山玄蕃俊武 →志摩俊秀	齋藤莊兵衛行長
『讃陽古城記』	弘化3年(1846)	太田犬養			
『讃岐国名勝図会』	嘉永7年(1854)	太田犬養	太田六兵衛兼久 →加兵衛兼武	片山志摩俊久	
『新撰讃岐国風土記』	明治30年以降	太田犬養は誤り?	細川定禅～太田兼久	片山志摩俊久	

る。先述のとおり「地名＋人名」の原則によれば，「坂田」は地名で，「庄官」や「河野」は人物名である。このうち河野氏については『南海通記』等によると，伊予の河野氏の一族で，坂田室山の麓に住み泉光寺という寺を建てていることが記載されている。一方，「庄官」は『玉藻集』でも記載されており，その実在の可能性は十分考えられる。しかし，「庄官」は荘園を管理する「荘官」の意味とも考えられ，その実態は不明である。いずれにせよ，坂田に「河野」や「庄官」の存在があり，これらの人物が城主であった可能性も考えられる。なお，建武２年（1335）に細川定禅が鷺田庄で挙兵した場所を坂田城としているものもあるが，実態は不明である。城の所在地については記載されているものは無く，不明である。坂田郷内ということでは，現在の西ハゼ・東ハゼ・松並・勅使・西春日・田村町付近に比定される。なお，坂田郷は近世には馬場・沖・勅使・万蔵・坂田村にわかれており，坂田村を土居村に改めていることから，字名「土居」のある西ハゼ町付近が坂田郷坂田村であり，比定地として最も有力と考えられる。

以上から，今回の調査地付近の西ハゼ町土居付近が坂田城の候補地として最も可能性が高く，今回検出した屋敷地が坂田城跡である可能性が考えられる。最大規模の屋敷地Ａは推定 44m 四方で，居館とするには小規模である。しかしながら，県内には半町四方程度を居館として推定される例は多々あり，中には檀紙城跡のように 40m 四方を推定地としている（香川県教育委員会 2003）ことから考えれば，屋敷地Ａを居館としても差し支えは無い。なお，屋敷地群が調査区外に延び，さらに大きい屋敷地の所在を想定すれば，今回検出の屋敷地群は坂田城の付属屋敷地群となることも考えられる。なお，坂田城は別の場所に存在し，坂田城とは全く関係なく記録にも残っていない屋敷跡の可能性も否定はできないが，現在のところ，坂田城を他の場所に比定する根拠が無い。

では，屋敷地の居住者について考えてみたい。坂田城の城主については先述のとおり，太田氏，小比賀氏，河野氏，「庄官」の４者が考えられる。現在，屋敷地Ａとして想定した範囲内には小比賀姓の家が所在し，周辺部を含めると，４軒が小比賀姓である。「小比賀」は高松においてそれほど多い姓ではなく，むしろ珍しい姓であり，小比賀姓の家がこれほど集中することは，屋敷地と小比賀氏の関係を示すものと考えられる。

小比賀氏の出自については不明な点が多々ある。『三代物語』や『香西記』においては小比賀五郎四郎という人物が香西氏の大麻（＝王佐城）攻めにおいて戦死したと記載された感状が記載されている。香西氏が王佐山城を攻めた記録は永正５年（1508）であり，これからすると，16 世紀前半には既に小比賀氏が太田氏配下として存在していたことになる。先述のとおり香西氏の王佐山城攻めは８月のことであり，感状の日付と異なることから，感状の真偽が疑われる。なお，この感状が本物とするならば，『南海通記』において王佐山城攻めに参加している中には，「坂田庄官」が見られ，小比賀氏が「庄官」の実態である可能性

第 104 図　周辺城跡分布図（S=1/30, 000）

も考えられる。一方，『由緒書』では初代七郎右衛門以前のこととして甚助信氏とその子甚兵衛信之についての記載がある。武田信玄の弟武田信連（＝武田信廉）の子である小比賀野甚助を祖としている。天正10年（1582）甲府没落（＝天目山の戦いの敗戦）により甲州の小比賀野村に隠れ住んでいたが，その後伊予河野氏を頼り，さらに坂田村室山に来て城を築いてそこに住み，天正13年（1585）には豊臣秀吉から朱印状を得ている。「室山ニ城ヲ築キ」と記されているが，先述のとおり『南海通記』には天正2年（1574）の香西氏と三好氏との戦いにも室山城は記されており，既に室山城が所在したことがうかがえる。また，その出自を示す史料については「御朱印并添状外ニ信玄公より千石之證文系図等近来迄致所持伝居申候へ共紛失仕候」とあり，やはり信憑性がない。しかしながら，『由佐家文書』の「前田清八方江之返答」において，天正5年（1577）以後，野原・坂田・多肥・木太の4郷に雑賀氏や宮脇氏など諸浪人が集まってきたという記載が見られる（野中2003）ことから，小比賀氏が浪人であった可能性も否定できない。

いずれにせよ，小比賀家については『由緒書』では小比賀氏が御厩町に移住した小比賀七郎右衛門（円念坊）を初代としている。第2代以降の当主については，過去帳等で実在の人物と判明しており（（財）文化財建造物保存技術協会 1977），御厩移住後の記録についてはほぼ正確なものであることがうかがえる。小比賀家第2代当主金太夫の没年は過去帳によると明暦元年（1655）であり，初代七郎右衛門の御厩移住が17世紀前半頃であったことを示唆するものである。なお，現在重要文化財に指定されている小比賀家住宅は家伝では慶長年間の創建とされており，解体修理時の報告においても慶長～元和頃の創建が推定されている（（財）文化財建造物保存技術協会 1977）。これは西ハゼ土居遺跡における屋敷跡の廃絶時期とほぼ同時期であり，屋敷地が小比賀氏のものであることを示す状況証拠として挙げられる。

以上，現在屋敷地上に小比賀姓の家が所在することと屋敷地廃絶年代が，現在御厩町に所在する小比賀家の創建年代と符合する点から，屋敷地は小比賀氏のものと考えた。今回の屋敷地は「城館」として小規模なものであることから坂田城の可能性は極めて高いが，断定はできない。しかしながら，坂田城のように後世の編纂物によって城として認識されたものについては，その規模の大小についてはそれほど問題にならないと考える。いずれにせよ，周辺の調査において新たな知見が得られることを望むものである。

≪主要参考文献≫

秋山　忠 1982『古城跡を訪ねて』高松市歴史民俗協会ほか
松本和彦 2000『都市計画道路錦町国分寺綾南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 松並・中所遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
野中寛文 2003「天正10・11年長宗我部氏讃岐国香川郡侵攻の記録史料」『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』香川県教育委員会
（財）文化財建造物保存技術協会 1977『重要文化財小比賀家住宅修理工事報告書』重要文化財小比賀家住宅修理委員会
香川県教育委員会 2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』

『南海通記』 享保四年（一七一九） 香西成資

・・永正五年八月香西豐前守元定、香東、香西、南條、北條四郡ノ兵二千五百人ヲ率シテ、山田郡ニ發向ス、相從フ人々ハ香西備前守清成、植松四郎資茂、北條香川民部少輔、瀧宮豐後守、瀧宮弥彌十郎福家七郎、羽床伊豆守、同大林氏、山田彌七、中間ノ久利三郎四郎、圓座ノ遠藤喜太郎、檀紙ノ植松刑部、河邊ニ成相、飯間、飯田ニ右衛門督、中飯田備中、下飯田筑城縫殿助、安原ニ國廣右衛門佐岩府某、井原ニ漆原、油佐、河東等一宮、大宮寺、大野名主、**太田犬養**、松繩手ノ宮脇氏族立石、伏石ニ佐藤孫七郎、木太眞部、上ノ村眞部、楠川、**坂田庄官**、野原ノ雜賀、岡本藤井等各々土居構ノ小城持也。・・・

・・・河野家祖ニ息方ト云人此人ニ附テ異傳アリ、往昔河野家ニ右衛門三郎トテ門戸ヲ守ル者アリ、其氣象強暴ニシテ哀愍ノ情スクナク、乞食人ヲ嫌テ門戸ニ入レス、四國邊路陪當シテ靈佛ヲ巡禮シ菩提ヲ祈ル、此陪當人ヲモ門内ニ入レス、右衛門三郎極テ臨終ノ時僧一人來テ曰ク汝障害強暴ニシテ慈悲ナシ、然レトモ潔白ニシテ正直也。何ニテモ未來ノ願アラハ叶テ取ラセント云フ、右衛門三郎カ曰ク我何ヲカ願ヒ何ヲカ憂ン我願コトナシ、若願テ叶ナラハ我君河野殿ノ子ニ生レンカ僧曰ク其願ヲ合ヘントテ、白玉ヲ出シテ左ノ手ニ握ラセ死ニ赴シム、果シテ河野子白玉ヲ握テ出生ス是ヲ息方ト云也。息方成長ノ後河野ノ家ヲ繼キ、不動ノ像ヲ造テ其白玉ヲ玉眼トシコレヲ崇信シテ氏ノ證トス。其後裔今度内亂シテ鄉里ヲ去ルトキ、其不動ノ像ヲ背ニシテ、**讃州坂田庄室山ノ下**ニ來リ一宇ヲ安置シテ、泉光寺ト號ス。是清泉アル故也。天正年中ニ大地震シテ天下惱亂シ、木地割テ白水ヲ出シ、大山崩テ鄉里ヲ埋ミ、平陸破テ海底ニ沈ムコトアリ、此時室山崩テ泉光寺地ノ底ニ埋ム、河野氏族深ク歎テ掘出サントスレトモ、力足スシテ止ヌ、是ニ於テ新ニ堂ヲ立テ不動ノ像ヲ造リ、奮ノ所ニ安置シテ、河野氏族の氏寺トシテ、其一宇今ニ在セリ、其部類猶多シ。

・・・香河、香西、阿野、南北四郡主香西氏居城ハ笠居鄉佐料也。要城ハ勝賀ノ山也。其下ノ城々ハ**坂田ノ室山**、飯田三ヶ所、中間ニ久利、福家同氏、新居ニ同氏、羽床ニ同氏、瀧ノ宮ニ同氏、柾木ニ瀧宮氏、鷲ノ峯ニ新名氏、北條、西庄ニ香川民部、松繩ニ宮脇氏、大熊ニ大熊備前、仲ノ村藤井、上ノ村眞部、其外追考ヘシ。・・・

・・・矢野駿河守ハ引田ノ城ヨリ寒川郡ニ打入り、晝寢ノ城ニ取向フ、阿波ノ撫養ニテ大船ヲ用意シ、糧米積テ來リ、森飛彈守引田ノ浦ニヵヽリ居ル、香西家ニ其聞ヘ有ケレハ**香東郡ノ士民ノ子女ハ、坂田室山ノ城ニ入レ**、資財雜物ハ地中ニ埋テ兵卒ハ佐料ノ城ニ集ム、西分ノ小城持ハ各我居城ヲ守テ來サルユヘニ、佐料ノ兵卒八百ニハ過キス敵大兵ナレハ里城ヲ守ルコトヲ得ベカラストテ城中ノ子女ヲハ垂水、乃生、木澤ヲ巢穴トシテ籠メヲキ、兵卒ノ手分シテ待ツ處ニ阿波ノ兵卒、三谷鄉ヨリ打テ出テ本道ヲ百相、一ノ宮、成合、小山ヲ經テ佐料城ニ押寄スル、城中ノ兵五段ニ分テ、押出シ陣ノ木ノ本マテ矢合アリ。・・・

・・・西光寺前先鋒ハ佐藤孫七郎居石五郎兵衛分一男也後ノ佐藤掃部頭舍兄也立石伏石流石ヲ我カ邑ニ築ク故ニ居石トモ云松繩手ノ宮脇彈正、其弟宮脇兵庫、中之村ノ藤井、同所ノ雜賀、西濱ノ岡田丹後、**坂田ノ河野**、**坂田ノ庄官**、高丸ノ眞部、楠川太田ノ犬養、一ノ宮ノ大宮司、飯沼成相、河邊民部五百餘人ヲ以テ先陣トス。・・・

・・・**坂田ノ室山**モ國中ナレドモ要城也。我カ城下ノ者ドモハ垂水、乃生、木澤、青海ノ奥ニ入ベシ。軍役百人連ツル者ハ二十人ヲ以テ軍ニ從フベシト定ラル、然シテ中飯田備中守ハ伊賀守ニ告テ曰ク、**我カ居城ハ平地ニテ用心惡クレバ子女ハ室山城ニ込ベシ**。・・・

『玉藻集』 宝永五年（一七〇八） 小西可春

脇備　安原　井ノ原　大野　多肥　**犬養**　本庄　藤井　楠川　**庄官**　雜賀

太田犬養　香川郡坂田の**室山の城**に居

『小比賀家由緒書』　延享五年（一七四八）

香川郡西御厩村政所金太夫由緒書
　御朱印之写
　堅紙ニテ
　禁制　讃岐内室山
一　軍勢甲乙人等乱妨狼藉之事
一　妻子并牛馬貪執之事
一　対百姓等相懸非分儀事付放火事
右条々堅令停止之訖若違犯輩在之者速可処厳科者也仍
天正十三年六月日秀吉
　御朱印
〆

右者新羅三郎義光十九代孫甲州武田信玄公舎弟ニ武田孫六郎入道逍遙軒信連ト申者信玄公より騎馬八十騎ヲ預り居申候所ニ天正十壬午年三月甲府没落之時織田信長公之ため討死仕其子甚助信氏ト申者同国之内小比賀野村ニ密ニ致住居氏ヲモ改テ**小比賀野甚助**ト申居カネテ豫州河野ヲ頼リテ伊豫へ渡リ候へ共其節土佐之長曽我部豫州へ乱入ニ付住居難成それより又当国香川郡西坂田村へ参リ**室山ニ城ヲ築キ**暫致住居候其節太閤秀吉公より右之御朱印厚キ紙ニ書被下置候を竹ニはさミ村辻ニ立候由其時蜂須賀彦右衛門尉殿よりも添状をくだされる奥に小比賀野甚助殿蜂須賀彦右衛門尉ト有候由右之御朱印并添状外ニ信玄公より千石之證文系図等近来迄致所持伝居申候へ共紛失仕候天正十三年仙石権兵衛秀久公当国入部之時室山之城没落仕甚助儀小比賀野常久と号し民間ニテ病死仕候其時所持之者
一　古キ小具足　壱領
一　鑓　壱束
一　矢ノ根　同
一　刀　関兼光　壱腰
一　脇指備前則光　壱腰
右之品は只今迄所持仕伝候右甚助子小比賀野甚兵衛信之と申者坂田之郷五千石之庄屋を久々相勤メ病死仕候尤右之年月は相知不候甚兵衛子小比賀野七郎右衛門法名円念坊ト申者坂田村より当村へ罷越候只今迄八代に罷成由申伝候
小比賀野甚兵衛子　七郎右衛門　法名円念坊
七郎右衛門子　金太夫
金太夫子　甚左衛門
甚左衛門子　久右衛門
久右衛門子　六左衛門
六左衛門子　七郎右衛門
七郎右衛門子　藤七郎
藤七郎子　金太夫

覚
金太夫子　七郎右衛門
七郎右衛門子　六吹七郎右衛門
右者天明五年己巳十一月五日ニ大膳様御玄関取次御役被仰付候依而其節より六吹と改名罷申候尤右小比賀を改正六吹改名罷候様は故有て六吹改名罷申候
一　天明七年丁未二月十五日御騎馬役ニ被仰付候
一　同年三月十九日御門方様七郎右衛門宅御成被遊候而其夜七ツ時分ニ御機嫌克御帰座被遊候其節銀貳百文頂戴仕候
一　寛政元己酉年七月十日御門方様御逝去被遊候同年九月鶴田平院様騎馬役無障相勤候間一代帯刀被仰付候尤代官池田角右衛門宅ニテ被仰渡候

『三代物語』　明和五年（一七六八）　増田休意

室山　在坂田　玉藻集曰　朱雀帝承平中　勅築寛平法皇陵於室山　与観賢墓相接　同七年十九日　寛平法皇第七年忌辰　六月十一日　観賢十七年忌故　兼有勅使　旧地名曰御室
簪筆録云　室山高数十丈　奸賊来襲里民陟此山　投木石以禦之　賊不敢進　天正十三年豊公賜朱印制書於此邑

讃岐内室山

禁　制

一　軍勢甲乙人等乱妨狼藉之事
一　妻子并牛馬貪執之事
一　対百姓等相懸非分儀事付放火事
右之条々堅令停止之訖若違犯輩在之者速可処厳科者也仍下知如件

天正十三年六月　日　　秀吉　御朱印

御朱印御所望之由に付　今度被下置也　宜可被致頂戴候

蜂須賀彦右衛門

小比賀甚助殿

去年十二月六日　至三谷弥五郎要害大麻　香西甚五郎取懸合戦時　父五郎四郎討死　尤神妙也
謹言

三月七日　　六郎　花押

小比賀桃千代殿

小比賀桃千代為僧称正賢　寛文二年建寺於坂田　曰西光寺　至其孫遷吉光　後又移由佐　由佐西光寺
桃千代九世孫也　故此寺有豊公制札　六郎感状

室山城　太田大蔵居之

片山城跡　片山玄蕃俊武　其子志摩俊秀居之　鎮守府将軍藤原秀郷九世孫　首藤左衛門尉親清長子　山内首藤刑部丞義通十一世之裔　日山内首藤弥六左衛門貞通　世々住勢州長島元弘　建武之後　列国兵争海内擾乱　其族或戦没或流移　文明中貞通仕将軍義政　食邑紀州　義政卒　後仕将軍義材　明応二年畠山弾正少輔義豊　拠河州誉田墨　以叛将軍義材　義材自将兵討之　以正覚寺（河内）為営　使管領畠山政長伐誉田墨　細川政元帥師援義豊
於是与偕伐将軍於正覚寺営　而破之　弥六左衛門貞通　力戦禦敵斬数級而後死　時年四十六　有二男　長曰織部正俊春　仕将軍義材同父戦没　次曰帯刀俊武　父兄死而後居熊野　是歳八月　畠山政長之族拠土丸城（紀州）　以叛将軍義澄　管領細川右京太夫政元　使香西備後守元定伐之　首藤帯刀素熟於其地利　因請為之嚮導　政元許之　乃命属香西氏　帯刀有余勇　務進先登　撃畠山政長勇士鈴木与一兵衛獲其首　於是羽床伊豆守励衆急攻之　城遂陥　香西元定嘉帯刀武功　厚賞細川氏賜之感状（在家）　乃従元定于讃州属香西氏　食邑於坂田郷　邑中有山焉　日片山構一城居之　因改首藤帯刀称片山玄蕃　其子志摩俊秀　襲其封邑世々属香西氏　同唐人弾正　真鍋弥屡々有戦功　及豊公征伐　授高松左馬助与城主左馬助　唐人弾正　偕戦死（墓在喜岡寺即高松城墟）
俊秀有三子　長曰九郎右衛門勝永　仕生駒家禄僅百五十石　次曰六衛門武治　棲遅《隠棲》坂田橋詰焉　季曰与三兵衛勝秀　招長兄勝永之後　生駒家群臣離散之後　之奥州白川仕本多能登守　秩三百石　為用事臣　有故而去　帰讃仕我先君英公賜禄百石　其子五左衛門以後世禄（系図甚長今略之）

坂田城　太田六兵衛兼久　其子加兵衛兼氏居之

鷲田荘之古跡　今坂田と云　建武年間　細川卿律師定禅　爰に立篭る　詫間　香西是に属がう故　高松三郎合戦に及び大に敗北すと云

『翁嫗夜話』 十八世紀後半　菊池武賢

香川西郡　**室山城**　**太田大養**居之。後**小比賀甚助**居ス。

同　坂田口橋詰　片山城　首藤玄蕃ト其子片山志摩居ス。

同　**坂田城**　**太田六兵衛兼久**´　其子**加兵衛兼氏**居之。

『香西記』 寛政四年（一七九二）　新居直矩（読み下し文を掲載）

一´ 坂田郷の室山には´ 寛平法皇の御陵がある。（弦打山につながっている山で有る。別陵ともいう）朱雀天皇の承平年間´ 天皇の命によって寛平法皇の第七年忌と´ 観賢の十七回忌を兼ねて勅使が立ち´ 坂田村室の無量寿院に来たのである。勅使の館の村というので´ のちに勅使村といった。また勅使の用に備える群馬を集めた村を後に御厩村といった。ある書に´ 室山を御山ともいうそうだ。思うに天正十三年六月´ 豊臣公の制書がこの里に届き´ 蜂須賀彦右衛門が添書をして´ これを小比賀甚助に賜った。小比賀の息子桃千代が持っていたが´ のち僧となって正賢といい´ 西光寺という寺を建てた。今の吉光村の西光寺がこれである。桃千代の子孫である。今にこの制書があるということだ。（それには讃岐内の室山では軍勢が乱暴狼藉をはたらくとか´ 人の妻子や牛馬をかすめ取ったり´ 百姓らが身分を越えた賭事をするとか´ 放火などを禁止するという御朱印状である）

坂田郷
一´ 片山城（また小山という）片山志摩俊秀。
一´ **室山城**（**太田大養**これは二人だろうか）
一´ 小比賀甚助。
一´ 沖村 佐藤庄兵衛行長。

『全讃誌』 文政十一年（一八二八）　中山城山

室山城　坂田村に在り。**眞鍋権ノ頭**某´ 之に居りき。或は云ふ**太田大養**´ 之に居りきと。今之を考ふるに´ 蓋し大養の後´ 此に移れるか。

太田城　太田村に在り。**太田大養**（六郎と稱す）之に居りき。其の子**兼久**あり´ 其の子に**兼氏**ありき。

齋藤城　沖村に在り。齋藤莊兵衛行長´ 之に居りき。

片山城　坂田村に在り。今は小山と曰ふ。片山玄蕃俊武´ 及び其の子志摩俊秀´ 之に居りき。鎮守府將軍秀郷の後なり。文明中´ 彌六左衛門貞通と云ふ者あり。邑を紀州に食みき。明應の時´ 畠山彈正少弼義豊は阿州譽田城に據りて以て叛せり。將軍義材自ら之を征し´ 彌六左衛門力戰して死せり。彌六左衛門に二男ありき。長を織部正俊春と曰ひ´ 父と同じく死せり。次を帶刀俊武と曰ひ´ 熊野に居りき。是の歲八月´ 畠山政長の黨土丸城に據りて叛せり。管領細河右京大夫政元´ 香西備後守元定をして之を征せしめき。首藤帶刀が地理に熟せるを向導と為せり。帶刀先登して功あり。遂に香西氏に從ひて此の地に來り。邑を坂田に食み´ 名を玄蕃と改めたり。其の子俊秀は´ 唐人彈正と´ 同じく高松城に戰死せり。實に天正十三年なりき。

室山城　**太田六郎兼久の臣小比加五郎四郎**´ 之に居りき。

『讃陽古城記』 弘化三年（一八四六） 片山駒次郎

一、同（香川郡）**坂田室山城跡　太田大養居**

一、山田郡三好筑前守長輝、永正三年三月築之。此時香西氏、大田村新城ヲ築。此處乃生纏殿助住ス。三好本城、阿州脇町ニ有。

『讃岐国名勝図会』 嘉永七年（一八五四） 梶原濫渠

室山城跡　同所（坂田村）にあり。**太田大養**これに居たり。
坂田城跡　同所（坂田村）にあり。往古鷺田の城と云ふ。**太田六兵衛兼久**およびその子**加兵衛兼武**これに居たり。この地は建武二年十一月二十六日、足利氏族細川律師定禅、詫間某・香西某に与して旗を挙げし所なり。委しくは山田郡喜岡城の所に出だせり
片山城跡　同所山にあり。片山志摩俊久ここに居たり。喜岡城にて討死せり。墓は喜岡寺にあり

『新撰讃岐国風土記』 明治中期　松岡調

細川定禅陣所　坂田城跡と云うは旧地ならむ

坂田城　細川定禅ゝ**太田兼久**　今此地さだかならず

片山城　片山志摩俊久　小山にあり

太田城　今此地さだかならず、全讃史に**太田大養**（称六郎）居之其子**兼久**其子**兼氏**と見えたり、此太田氏は中臣太田連の遺族ならむか、廃城考に**室山城太田大養と有は誤れるか**、猶考ふべし

『由佐家文書』「前田清八方江之返答」　一七〇〇年頃

私云、当国知行割御存なき故尓此御不審書与見へ申候、東西之儀書候へハ事なかく候間、香川両郡之儀許可申候、野原庄・**坂田郷**・多肥郷・木太郷此四郷ハ往古より国司領ニ而候故、外之者之領地いた口所ニ而ハ無之候、天神も当国之国司ニ御下之節、野原の庄へ御着香川元茂与申者罷出御挨拶申候由、無量寿院の縁起ニ見へ申候、此四郷ハ指尓て押候程も私領ハ無之候、当国ニ不限国々ニ国司領并公文与申所所ニ有之候、此公文之事ニハ入割有之候へとも事長候故不申候、尊氏将軍以来、細川頼之四国官領以後頼之領分成申候、当国ニ不限其所之領主之知行ニ而候、細川家之時分官代ハ安芸次郎左衛門与申候、細川没落以後、三好家ニ成而進野五郎兵衛与申候、何茂野原庄ニ居申候而国中之仕置をも取次申候、是も事長候へハ委者不被申候、鹿角・一宮・三名・行司・寺井・大所、此分ハ一宮之神領ニ而候、大野・百合より上ハ我等先祖之領分ニて頼之四国官領以後、取来候、細川右京大夫勝元・三好豊前守義堅・長曽我部宮内少輔元親感状証文所持いたし候、西郡ハ香西伊賀主領分ニて候、其内川辺大（道）より西ハ諏訪明神神領ニて候、簗下ニ（田井）民部か末、今ハ中井与申候、上円座城地有之、中間ハ久利又四郎、飯田ハ唐戸弾正、下飯田ハ筑都半右衛門（笠居）ニ佐藤与兵衛、此五人ハ簗下与申者ニて（香）西か家来ニてハなく候、それゝゝの居し所を領地いたし候、此簗下之事事長候故不申候、（天正五年以後三好没落後ハ緒方之浪人とも讃岐へ参候もの右四郷内へ参候与見申候、今の雑賀なとも其時分、当国へ被参候哉与存候、領主有之地へハ入不申候故、此四郷領主なしニて候故、諸浪人集候与見申候、宮脇氏も其時分ニ参候而、松縄居申候与見申候、）・・・

観　察　表

土器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量(cm)			外面	内面	色調（上＝外面，下＝内面）	胎土	焼成
				口径	底径	器高					
1	土師質土器 鍋	4	第4層	36.0		(3.8)	粗いタテハケ 接合痕	ナデ	5YR6/4 にぶい黄橙 2.5YR6/4 橙	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良好
2	白磁 碗	4	第4層		6.6	(3.3)	高台無釉		7.5Y8/1 灰白 7.5Y8/1 灰白	精良	良好
3	須恵器 杯	4	第4層		7.0	(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白 N6/0 灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
4	須恵器 杯蓋	4	第4層			(1.3)	回転ナデ	回転ナデ ヘラ記号	N7/0 灰白 N7/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
5	須恵器 杯	4	第4層		12.6	(0.9)	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白 N7/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
6	須恵器 壺	4	第4層		9.4	(5.5)	マメツ	マメツ	N7/0 灰白 N7/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
7	須恵器 高杯	4	第4層			(6.5)	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白 N7/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
8	須恵器 蓋	4	第4層	13.2		(1.4)	回転ナデ	回転ナデ	N7/1 明オリーブ灰 N7/1 明オリーブ灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
9	須恵器 杯	4	第4層		11.2	(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	N6/1 オリーブ灰 N5/1 オリーブ灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
10	須恵質 平瓦	4	第5層				布目	布目	N5/0 灰 N7/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
11	弥生土器 器台	4	第5層	24.6		(2.4)	ナデ 凹線3条，棒状浮文	ナデ 波状文	7.5YR7/4 にぶい橙 5YR6/6 橙	密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
12	弥生土器 甕	4	第6層	15.4		(5.4)	タテハケ	指頭圧	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 3mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
13	弥生土器 高杯	4	第8層		9.0	(6.2)	マメツ 沈線7条，鋸歯文	マメツ	7.5YR4/4 褐 2.5Y3/1 黒褐	やや密 3mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
14	弥生土器 甕	4	第10層			(5.6)	マメツ 櫛描直線文，刻目	マメツ	10YR8/3 浅黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
15	弥生土器 底部	4	第10層		8.6	(6.3)	ナデ	ナデ，指頭圧	10YR8/4 浅黄橙 2.5Y8/2 灰白	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
16	弥生土器 底部	4	第10層		14.0	(4.1)	指頭圧	ナデ	10YR6/1 褐灰 10YR5/1 褐灰	やや粗 3mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
17	土師器 甕	8	NR02	25.0		(3.4)	マメツ	マメツ	7.5YR7/6 橙 7.5YR6/6 橙	粗 2mm以下の石英・長石含む	良
18	弥生土器 底部	8	NR02		7.6	(3.0)	ナデ，指頭圧	マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙 2.5Y6/1 黄灰	粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
19	弥生土器 底部	8	NR02		7.2	(4.7)	タテヘラミガキ	指頭圧	7.5YR5/4 にぶい褐 10YR5/3 にぶい黄褐	粗 3mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
20	弥生土器 広口壺	8	NR02	15.8		(7.5)	ナデ 押圧突帯	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	粗 3mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良
21	弥生土器 甕	8	NR02	12.4		(7.0)	マメツ	タテヘラケズリ後指頭圧	10YR6/3 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
22	弥生土器 甕	8	NR02	18.0		(5.9)	マメツ	マメツ	5YR4/4 にぶい赤褐 5YR5/4 にぶい赤褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
23	弥生土器 甕	8	NR02	22.4		(3.5)	マメツ	マメツ	7.5YR6/6 橙 7.5YR2/1 黒	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
24	土師器 甕	8	NR02	13.6		(4.1)	マメツ	マメツ	7.5YR6/6 橙 10YR3/1 黒褐	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良
25	土師器 甕	8	NR02	13.5		(4.0)	マメツ	マメツ	10YR4/1 褐灰 10YR3/1 黒褐	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良
26	弥生土器 底部	8	NR02		5.4	(2.3)	マメツ	マメツ	2.5YR4/6 赤褐 10YR5/1 褐灰	粗 2mm以下の石英・長石含む	良好
27	弥生土器 底部	8	NR02		6.8	(4.4)	マメツ	マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐 10YR5/3 にぶい黄褐	やや密 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良
28	弥生土器 底部	8	NR02		4.9	(4.2)	マメツ	指頭圧	10YR6/2 灰黄褐 10YR5/4 にぶい黄褐	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
29	弥生土器 底部	8	NR02		7.4	(2.3)	マメツ	指頭圧	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
30	弥生土器 底部	8	NR02		5.4	(1.9)	マメツ	マメツ	5YR5/4 にぶい赤褐 7.5YR4/2 灰褐	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
31	弥生土器 底部	8	NR02		11.9	(3.8)	マメツ	マメツ	2.5Y4/1 黄灰 10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
32	弥生土器 底部	8	NR02		9.0	(2.4)	タテヘラミガキ	指頭圧	2.5Y3/1 黒褐 10YR6/3 にぶい黄橙	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良好
33	弥生土器 鉢	8	NR02	45.2		(6.8)	ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良
34	弥生土器 鉢	8	NR02	31.8		(3.5)	ナデ 凹線2条	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良好
35	弥生土器 高杯	8	NR02	27.8		(4.6)	ヨコヘラケズリ	ナデ	7.5YR4/4 褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
36	弥生土器 高杯	8	NR02	29.2		(3.4)	マメツ	マメツ	5YR6/6 橙 5YR7/6 橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
37	弥生土器 高杯	8	NR02	23.5		(3.6)	マメツ	マメツ	5YR6/6 橙 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良
38	弥生土器 甕	8	NR02	20.0		(1.7)	マメツ 凹線2条	マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
39	弥生土器 鉢	8	NR02	33.0		(3.6)	ナデ 凹線5条	ナデ	2.5YR5/4 にぶい赤褐 10YR2/1 黒	やや密 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
40	弥生土器 鉢	8	NR02	36.0		(4.1)	マメツ	マメツ	10YR7/2 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
41	弥生土器 細頸壺	8	NR02	10.8		(3.4)	ナデ 凹線2条	ナデ	10YR8/3 浅黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良
42	弥生土器 広口壺	8	NR02	18.4		(2.8)	ナデ	ナデ	7.5YR4/4 褐 7.5YR4/4 褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
43	龍泉窯系青磁 碗	16	第4層			(3.6)	施釉	施釉 沈線	5GY5/1 緑灰 5GY5/1 緑灰	精良	良好
44	弥生土器 広口壺	16	第5層	14.4		(5.7)	ナデ	指頭圧	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良
45	弥生土器 底部	16	第5層		9.6	(1.7)	指頭圧	指頭圧	2.5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
46	須恵器 蓋	17	NR04			(1.9)	回転ナデ	回転ナデ	N5/0 灰 N5/0 灰	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良好
47	須恵器 壺	17	NR04		8.4	(3.6)	回転ナデ	回転ナデ	N5/0 灰 N5/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
48	須恵器 蓋	17	NR04	14.0		(1.7)	回転ナデ	回転ナデ	N5/0 灰 N5/0 灰	密 2mm以下の石英・長石含む	良好

49	須恵器 蓋	17	NR04	14.9		(1.7)	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白 N6/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
50	須恵器 蓋	17	NR04	15.2		(1.7)	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白 N7/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
51	土師器 坏	17	NR04	16.4	13.6	(3.0)	マメツ	マメツ	5YR7/4 にぶい橙 5YR8/4 淡橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良
52	弥生土器 高杯	17	NR03	29.2		(5.2)	ヨコヘラケズリ	ナデ	5YR4/6 赤褐 5YR5/6 明赤褐	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良好
53	弥生土器 高杯	17	NR03	25.8		(4.8)	マメツ	マメツ	10YR5/4 にぶい黄褐 10YR5/3 にぶい黄褐	やや密 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
54	弥生土器 底部	17	NR03		10.9	(4.0)	ナデ	指頭圧	10YR5/4 にぶい黄褐 5YR5/3 にぶい赤褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
55	弥生土器 底部	17	NR03		10.2	(3.9)	指頭圧	指頭圧	N2/0 黒 N3/0 暗灰	やや粗 5mm以下の石英・長石含む	良好
56	弥生土器 底部	17	NR03		8.4	(3.0)	マメツ	マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙 2.5Y7/1 灰白	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
57	弥生土器 底部	17	NR03		9.3	(4.1)	マメツ	指頭圧	5YR6/6 橙 2.5YR6/6 橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
58	弥生土器 底部	17	NR03		6.0	(1.3)	マメツ	タテヘラケズリ	7.5YR4/4 褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
59	弥生土器 長頸壺	17	NR03	12.3		(6.8)	タテハケ	指頭圧	7.5YR5/4 にぶい褐 10YR6/3 にぶい黄橙	やや密 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
60	弥生土器 甕	17	NR03	15.8		(2.9)	マメツ	マメツ	5YR6/6 橙 7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
61	土師質土器 釜	18	包含層	30.6		(2.7)	ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 5mm以下の石英・長石含む	良好
62	土師器 皿	18	包含層	8.6	6.2	1.7	マメツ	マメツ	10YR8/3 浅黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良
63	土師器 皿	18	包含層	9.0	7.7	1.1	ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙 2.5YR5/6 明赤褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
64	瓦器 椀	18	包含層	13.8		(1.6)	マメツ	マメツ	5Y8/1 灰白 5Y8/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
65	黒色土器 椀	18	包含層		7.2	(1.5)	マメツ	マメツ	7.5YR7/3 にぶい橙 7.5YR7/3 にぶい橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良
66	黒色土器 椀	18	包含層		7.4	(1.4)	マメツ	マメツ	2.5Y6/4 にぶい橙 2.5Y4/1 黄灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良
67	弥生土器 底部	18	包含層		8.4	(3.7)	マメツ	マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙 5YR5/6 明赤褐	粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
68	須恵器 椀	18	包含層	16.6	7.3	5.1	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白 N7/0 灰白	密 2mm以下の石英・長石含む	良好
69	土師器 椀	18	包含層			(3.1)	ナデ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙 2.5Y7/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良
70	須恵器 壺	18	包含層		16.9	(6.2)	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白 N8/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
71	土師質土器 鍋	18	包含層	30.2		(2.2)	ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙 10YR5/1 褐灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
72	須恵器 坏	18	包含層	9.4		(2.1)	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白 N7/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
73	須恵器 坏	18	包含層		9.7	(1.1)	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰 N6/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
74	須恵器 坏	18	包含層	16.6	14.0	2.0	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白 N7/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
75	弥生土器 甕	18	包含層	19.6		(4.1)	マメツ	マメツ	5YR7/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
76	弥生土器 広口壺	18	包含層	18.4		(1.8)	マメツ	マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良
77	弥生土器 甕	18	包含層	9.4		(2.9)	マメツ	マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙 10YR5/4 にぶい黄褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
78	弥生土器 鉢	18	包含層	19.2		(5.6)	ナデ	ナデ	7.5YR4/6 褐 7.5YR4/6 褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
79	弥生土器 底部	18	包含層		12.1	(5.8)	マメツ	指頭圧	7.5YR7/3 にぶい橙 10YR7/3 にぶい黄橙	粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
80	弥生土器 ミニチュア壺	28	NR06		4.0	(5.5)	指頭圧後タテヘラミガキ 接合痕	指頭圧 接合痕	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR3/1 黒褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
81	弥生土器 底部	28	NR06		5.3	(4.5)	マメツ	指頭圧	7.5YR6/2 灰褐 5Y5/1 灰	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
82	弥生土器 底部	28	NR06		5.4	(2.2)	タテヘラミガキ	指頭圧	2.5YR4/2 灰赤 2.5YR5/4 にぶい赤褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
83	弥生土器 底部	28	NR06		6.9	(1.8)	ナデ	ナデ	2.5YR5/6 明赤褐 10YR5/2 灰黄褐	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
84	弥生土器 甕	28	NR06	18.0		(1.6)	ナデ	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐 7.5YR6/3 にぶい褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
85	弥生土器 甕	28	NR06	16.2		(5.9)	マメツ	指頭圧	7.5YR5/3 にぶい褐 10YR5/3 にぶい黄褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
86	弥生土器 細頸壺	29	SK32001	17.3		(3.1)	マメツ 凹線3条	マメツ	5YR5/4 にぶい赤褐 7.5YR5/3 にぶい褐	やや粗 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良
87	弥生土器 甕	29	SK32001	20.4		(3.7)	タテハケ	指頭圧	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
88	弥生土器 鉢	29	SK32001	36.0		(13.2)	ヨコヘラケズリ後ナデ	タテヘラミガキ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
89	弥生土器 底部	29	SK32001		4.2	(1.3)	ナデ	ナデ	10YR5/2 灰黄褐 7.5YR6/3 にぶい褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
90	弥生土器 長頸壺	30	SK32002	15.3		(13.5)	タテハケ 刺突文	ヨコヘラケズリ, 指頭圧 接合痕	5YR5/4 にぶい赤褐 7.5YR5/6 明褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
91	弥生土器 高杯	30	SK32002	17.0		(4.0)	マメツ	タテヘラミガキ	7.5YR4/6 褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
92	弥生土器 高杯	30	SK32002	16.0		(3.1)	マメツ	タテヘラミガキ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR6/6 橙	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
93	弥生土器 底部	30	SK32002		6.1	(4.1)	タテヘラミガキ	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐 5YR6/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
94	弥生土器 甕	32	NR04	14.7		(4.1)	マメツ	マメツ	5YR5/4 にぶい赤褐 5YR4/3 にぶい赤褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
95	弥生土器 甕	32	NR04	16.6		(2.9)	マメツ	マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
96	弥生土器 甕	32	NR04	19.2		(2.9)	マメツ	マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/3 にぶい褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
97	弥生土器 甕	32	NR04	17.2		(2.2)	マメツ	マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良
98	弥生土器 甕	32	NR04	16.8		(4.5)	マメツ	指頭圧	7.5YR4/6 褐 7.5YR4/6 褐	やや粗 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良

99	弥生土器 甕	32	NR04	16.0		(4.2)	マメツ	ヨコヘラケズリ後指頭圧	10YR5/3 にぶい黄褐 10YR6/3 にぶい黄橙	やや粗 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良
100	弥生土器 甕	32	NR04	15.0		(9.5)	マメツ	指頭圧	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/6 明褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
101	弥生土器 広口壺	32	NR04	23.0		(9.5)	粗いタテハケ	ナデ 接合痕	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
102	弥生土器 長頸壺	32	NR04	20.0		(3.2)	マメツ	マメツ	10YR5/4 にぶい黄褐 7.5YR5/6 明褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良
103	弥生土器 長頸壺	32	NR04	16.3		(3.0)	マメツ	マメツ	5YR5/4 にぶい赤褐 5YR5/6 明赤褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良
104	弥生土器 紡錘車	32	NR04			3.7	マメツ	マメツ	10R6/4 にぶい赤橙 10R6/4 にぶい赤橙	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良
105	弥生土器 高杯	32	NR04			(8.8)	マメツ ヘラ描沈線	ヨコヘラケズリ	5YR6/6 橙 2.5Y3/1 黒褐	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良好
106	弥生土器 底部	32	NR04		7.0	(4.4)	タテヘラミガキ	指頭圧	5YR5/4 にぶい赤褐 10YR3/1 黒褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
107	弥生土器 底部	32	NR04		5.5	(5.0)	タテヘラミガキ	タテヘラケズリ	5YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
108	弥生土器 底部	32	NR04		5.6	(4.2)	タテヘラミガキ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
109	弥生土器 底部	32	NR04		7.4	(5.0)	マメツ	指頭圧	5YR5/4 にぶい赤褐 5YR5/3 にぶい赤褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
110	弥生土器 底部	32	NR04		7.6	(3.0)	ナデ	ナデ	5YR6/3 にぶい橙 5YR6/4 にぶい黄橙	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
111	弥生土器 底部	32	NR04		5.9	(2.0)	マメツ	マメツ	7.5YR4/6 褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
112	弥生土器 底部	32	NR04		2.0	(5.8)	ナデ	板ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良
113	弥生土器 底部	32	NR04		0.6	(7.7)	ナデ 接合痕	ナデ	10YR6/2 灰黄褐 10YR5/3 にぶい黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
114	弥生土器 底部	32	NR04		5.0	(2.1)	マメツ	マメツ	10YR5/3 にぶい黄褐 5YR5/6 明赤褐	粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
115	弥生土器 底部	32	NR04		6.0	(3.2)	マメツ	マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	粗 3mm以下の石英・長石・角閃石含む	良
116	弥生土器 底部	32	NR04		5.6	(5.3)	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良
117	弥生土器 底部	32	NR04		2.5	(2.6)	指頭圧	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 10YR6/2 灰黄褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
118	弥生土器 鉢	32	NR04	29.0		(8.1)	ヨコヘラケズリ後タテハケ後指頭圧 接合痕	ナデ	2.5YR5/8 明赤褐 2.5YR4/8 赤褐	やや密 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
119	弥生土器 高杯	33	NR07		9.9	(2.4)	ナデ 円形スカシ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐 7.5YR6/3 にぶい褐	密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
120	弥生土器 高杯	33	NR07		16.4	(1.3)	ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
121	土師質土器 鍋	34	SK31001	34.8		(10.4)	粗いタテハケ後指頭圧	板ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐 10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 5mm以下の石英・長石含む	良
122	土師質土器 釜	34	SK31001	25.8		(6.3)	指頭圧 接合痕	ナデ	7.5YR3/2 黒褐 7.5YR4/1 褐灰	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良好
123	土師器 椀	40	SB31005		6.0	(2.3)	マメツ	マメツ	2.5Y8/1 灰白 2.5Y8/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良
124	土師器 椀	40	SB31005		5.0	(2.6)	マメツ	マメツ	2.5Y8/1 灰白 2.5Y8/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良
125	土師器 坏	40	SB31005		7.4	(2.3)	指頭圧	ナデ	2.5Y8/3 淡黄 2.5Y7/2 灰黄	密 1mm以下の石英・長石含む	良
126	土師器 坏	40	SB31005		8.2	(1.4)	マメツ	マメツ	10YR8/2 灰白 10YR6/1 褐灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良
127	瓦質 軒平瓦	50	NR09				ナデ 連珠文	板ナデ	5B5/1 青灰 5B5/1 青灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
128	瓦質 軒平瓦	50	NR09				ナデ 唐草文	板ナデ	5Y4/1 灰 5Y4/1 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
129	信楽焼陶器 甕	50	NR09		18.0	(7.9)	ナデ	格子目タタキ 接合痕	5YR4/2 灰褐 7.5YR4/1 褐灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
130	土師質土器 焙烙	50	NR09	37.0		(3.0)	指頭圧	ナデ	10YR3/1 黒褐 2.5Y4/2 暗灰黄	密 1mm以下の石英・長石含む	良
131	土師質土器 釜	50	NR09	35.0		(6.3)	指頭圧	ナデ	5YR6/4 にぶい橙 5YR7/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
132	土師質土器 擂鉢	50	NR09	29.6		(6.0)	指頭圧	ナデ	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
133	備前焼陶器 擂鉢	50	NR09		16.6	(9.9)	ナデ	ナデ 擂目	2.5YR5/3 にぶい赤褐 2.5YR7/3 淡赤橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
134	産地不明陶器 甕	50	NR09	27.2		(9.3)	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/2 灰褐 5YR6/4 にぶい橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
135	備前焼陶器 鉢	50	NR09		9.4	(8.3)	ナデ，ケズリ	回転ナデ	10R6/2 灰赤 10R5/4 赤褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
136	肥前系陶器 碗	50	NR09		4.4	(2.1)	施釉	施釉	2.5Y8/3 淡黄 2.5Y8/3 淡黄	精良	良
137	肥前系磁器 碗	50	NR09		4.0	(3.5)	施釉 圏線	施釉	5GY8/1 灰白 5GY8/1 灰白	精良	良好
138	龍泉窯系青磁 碗	50	NR09			(3.0)	青磁釉 鎬連弁	青磁釉	10Y5/2 オリーブ灰 10Y5/2 オリーブ灰	精良	良好
139	土師質土器 脚	50	NR09			(13.8)	板ナデ		7.5YR6/6 橙	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
140	土師質土器 鍋	51	SE51001	36.2		(7.6)	指頭圧	粗いヨコハケ	5YR6/2 灰褐 7.5YR7/3 にぶい橙	やや密 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
141	備前焼陶器 擂鉢	51	SE51001	29.0		(4.7)	ナデ 重ね焼き痕	ナデ	5YR5/2 灰褐 5YR5/1 褐灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
142	肥前系陶器 皿	51	SE51001		4.1	(1.9)	高台無釉，胎土目	施釉	5Y6/1 灰 5Y6/1 灰	精良	良好
143	肥前系陶器 皿	51	SE51001	10.8	3.6	2.7	高台無釉	施釉	5Y6/2 灰オリーブ 5Y6/2 灰オリーブ	精良	良好
144	肥前系陶器 皿	51	SE51001		4.2	(2.3)	高台無釉	施釉	5YR6/2 灰褐 5YR6/2 灰褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
145	瀬戸美濃系陶器 片口鉢	51	SE51001	17.6	7.4	10.2	高台無釉	施釉	5Y6/1 灰 5Y6/1 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
146	土師器 皿	51	SE51001		10.0	(0.6)	マメツ	マメツ	10YR8/1 灰白 10YR8/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
147	土師質土器 擂鉢	51	SE51001		9.0	(2.8)	板ナデ	ナデ 擂目	10YR8/2 灰白 10YR8/2 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
148	土師器 皿	53	SD51001	11.8	8.0	2.0	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好

149	土師器 皿	53	SD51001		10.0	(0.8)	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙 10YR7/2 にぶい黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
150	土師器 皿	53	SD51001		6.6	(1.0)	回転ナデ	回転ナデ	10YR8/2 灰白 10YR8/2 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
151	土師質土器 脚	53	SD51001			(9.1)	指頭ナデ		7.5YR6/3 にぶい褐	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
152	肥前系陶器 皿	53	SD51001	14.6	4.7	3.1	高台無釉，砂目	施釉，砂目 鉄絵	5Y6/3 オリーブ黄 5Y6/3 オリーブ黄	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
153	肥前系陶器 皿	54	SD51006		4.5	(1.5)	高台無釉，砂目	施釉，砂目	10Y6/1 灰 10Y6/1 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
154	肥前系陶器 皿	55	SD51018		5.5	(2.1)	高台無釉	施釉，胎土目	5Y7/1 灰白 5Y7/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
155	肥前系磁器 皿	55	SD51018		5.8	(1.6)	施釉	施釉 染付	7.5GY8/1 明緑灰 7.5GY8/1 明緑灰	精良	良好
156	肥前系陶器 皿	55	SD51018		3.6	(2.3)	高台無釉	施釉	5Y4/1 灰 5Y4/1 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
157	肥前系磁器 瓶	55	SD51018		5.6	(2.3)	施釉	無釉	10GY8/1 明緑灰 2.5YR6/6 橙	精良	良好
158	肥前系磁器 盃	55	SD51018	6.8	2.8	2.0	施釉 雨降文，圏線	施釉	10GY8/1 明緑灰 10GY8/1 明緑灰	精良	良好
159	土師質土器 甕	55	SD51018	19.6		(4.4)	ナデ	ヨコヘラケズリ 接合痕	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/3 にぶい褐	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
160	土師質土器 鍋	55	SD51018	22.0		(8.9)	指頭圧 接合痕	板ナデ	10YR5/2 灰黄褐 10YR7/3 にぶい黄橙	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良
161	土師質土器 甕	55	SD51018		24.0	(15.5)	ナデ	指頭圧	5YR7/4 にぶい橙 5YR6/4 にぶい橙	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
162	備前焼陶器 擂鉢	55	SD51018	32.3		(7.1)	ナデ	ナデ 擂目	10R6/3 にぶい赤橙 10R4/4 赤褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
163	堺焼陶器 擂鉢	55	SD51018	38.1		(5.8)	ナデ	ナデ 擂目	2.5YR6/6 橙 2.5YR7/6 橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
164	備前焼陶器 擂鉢	55	SD51018		15.9	(4.7)	ナデ	ナデ 擂目	2.5YR5/3 にぶい赤褐 2.5YR5/3 にぶい赤褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
165	備前焼陶器 鉢	56	SK51001		7.6	(6.9)	ナデ 底面窯記号	ナデ	10R4/2 灰赤 10R4/2 灰赤	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
166	備前焼陶器 擂鉢	56	SK51001	27.8		(6.6)	ナデ	ナデ 擂目	7.5R5/2 灰赤 7.5R5/3 赤褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
167	堺焼陶器 擂鉢	56	SK51001		11.0	(7.7)	回転ヘラケズリ後ナデ	ナデ 擂目	10R4/4 赤褐 10R5/4 赤褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
168	土師質土器 焙烙	56	SK51001	34.4		(2.3)	指頭圧	ナデ	10YR4/1 褐灰 2.5Y5/2 暗灰黄	密 1mm以下の石英・長石含む	良
169	土師質土器 焙烙	56	SK51001	31.6		(2.6)	指頭圧	ナデ	10YR3/1 黒褐 10YR5/1 褐灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良
170	土師質土器 焙烙	56	SK51001	36.0		(2.2)	指頭圧	ナデ	10YR3/2 黒褐 2.5Y8/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
171	土師質土器 焙烙	56	SK51001	40.0		(3.5)	指頭圧	ナデ	10YR3/1 黒褐 10YR4/2 灰黄褐	密 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良
172	土師質土器 焙烙	56	SK51001	42.0		(2.3)	指頭圧	ナデ	10YR5/2 灰黄褐 2.5Y7/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
173	土師質土器 焙烙	56	SK51001	39.0		(2.8)	指頭圧	ヨコハケ	2.5Y4/2 暗灰黄 5Y5/1 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
174	土師質土器 焙烙	56	SK51001	38.0		(4.2)	指頭圧	粗いヨコハケ	10YR3/1 黒褐 10YR6/2 灰黄褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良
175	土師質土器 焙烙	56	SK51001	38.0		(1.3)	指頭圧	ナデ	2.5Y5/2 暗灰黄 2.5Y3/2 黒褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良
176	土師質土器 焙烙	56	SK51001	35.5		(2.9)	指頭圧	ナデ	2.5Y2/1 黒 10YR3/1 黒褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良
177	肥前系磁器 小盃	57	SK51010		3.2	(2.5)	施釉 染付，圏線2条	施釉	10GY8/1 明緑灰 10GY8/1 明緑灰	精良	良好
178	肥前系磁器 碗	57	SK51010		3.6	(2.1)	施釉 菊花散らし	施釉	7.5GY8/1 明緑灰 7.5GY8/1 明緑灰	精良	良好
179	瀬戸美濃系磁器 仏飯具	57	SK51010		3.7	(2.1)	施釉	施釉	N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
180	産地不明陶器 皿	57	SK51010	9.6		(1.7)	無釉	施釉	5YR3/3 暗赤褐 2.5Y6/1 黄灰	精良	良好
181	信楽焼陶器 鉢	57	SK51010		9.8	(3.8)	ナデ	ナデ	10YR8/1 灰白 10YR7/3 黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
182	土師質土器 火鉢	58	SK51017		18.4	(3.2)	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良
183	土師質土器 火鉢	58	SK51017		32.6	(30.1)	ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	やや粗 5mm以下の石英・長石含む	良
184	肥前系陶器 皿	59	SK51020	16.0		(2.2)	高台無釉	施釉	N8/0 灰白 N8/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
185	肥前系陶器 皿	59	SK51020	13.5		(1.7)	高台無釉	施釉	5Y6/3 オリーブ黄 5Y6/3 オリーブ黄	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
186	肥前系磁器 碗	59	SK51020	11.0		(3.2)	施釉	施釉	7.5GY8/1 明緑灰 7.5GY8/1 明緑灰	精良	良好
187	肥前系磁器 碗	59	SK51020		3.6	(1.7)	施釉 圏線3条	施釉	2.5Y8/1 灰白 2.5Y8/1 灰白	精良	良
188	京信楽系陶器 碗	59	SK51020	12.6		(3.2)	施釉	施釉	2.5Y8/3 淡黄 2.5Y8/3 淡黄	精良	良好
189	備前焼陶器 壺	59	SK51020	11.0		(5.0)	ナデ	ナデ	7.5R5/1 赤灰 7.5R6/2 灰赤	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
190	堺焼 擂鉢	59	SK51020		14.6	(5.0)	ナデ	ナデ 擂目	2.5YR6/6 橙 2.5YR6/4 にぶい橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
191	肥前系磁器 皿	60	SK51025		9.0	(1.2)	施釉 圏線4条	施釉 草花文	5GY8/1 灰白 5GY8/1 灰白	精良	良好
192	備前焼陶器 擂鉢	61	SK51030	34.6		(5.4)	ナデ 重ね焼き痕	ナデ 擂目	2.5YR5/4 にぶい赤褐 2.5YR5/3 にぶい赤褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
193	土師質土器 鍋	61	SK51030	39.6		(4.4)	タテハケ	ナデ	5YR4/1 褐灰 7.5YR5/3 にぶい褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
194	土師質土器 焙烙	61	SK51030	37.0		(5.3)	指頭圧	ヨコハケ後指頭圧	5YR4/1 褐灰 10YR5/3 にぶい黄褐	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
195	瓦質土器 釜	61	SK51030	13.5		(14.8)	指頭圧 接合痕	ヨコハケ	N5/0 灰 N5/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
196	肥前系陶器 碗	61	SK51030		5.0	(2.2)	施釉	施釉	N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
197	肥前系陶器 皿	62	SK51031	12.2		(2.0)	施釉	施釉	2.5Y6/2 灰黄 2.5Y6/2 灰黄	精良	良好
198	土師器 坏	62	SK51031	12.2		(2.3)	回転ナデ	回転ナデ	5YR8/2 灰白 5YR8/2 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好

199	肥前系陶器 皿	62	SK51031	12.8	5.3	3.1	高台無釉 砂目	施釉 砂目	5YR5/2 灰褐 10R6/4 にぶい赤橙	精良	良好
200	堺焼陶器 擂鉢	66	SD61012	29.0		(4.6)	ナデ	ナデ 擂目	N5/0 灰 N5/0 灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
201	備前焼陶器 灯明皿	66	SD61012	8.0		(1.7)	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR4/2 灰褐 7.5YR4/2 灰褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
202	肥前系磁器 瓶	66	SD61012		3.6	(2.6)	施釉	無釉	N8/0 灰白 10YR8/2 灰白	精良	良好
203	京信楽系陶器 徳利	66	SD61012	3.8		(25.1)	施釉 染付	無釉	2.5Y7/3 浅黄 2.5Y7/3 浅黄	精良	良好
204	肥前系磁器 鉢	66	SD61012	18.2	10.0	7.5	青磁釉 渦福，蛇ノ目凹形高台	施釉 草花文	10G7/1 明緑灰 10GY8/1 明緑灰	精良	良好
205	瓦質土器 鍋	67	SD61012	21.4		(7.9)	ヨコハケ	ナデ	10YR4/1 褐灰 N4/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
206	瓦質土器 鍋	67	SD61012	24.0		(4.9)	ヨコハケ	ヨコハケ	N4/0 灰 N4/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
207	瓦質土器 釜	67	SD61012	13.0		(7.1)	指頭圧	板ナデ後指頭圧	2.5Y6/1 黄灰 10YR5/1 褐灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
208	弥生土器 蓋	67	SD61012		5.8	(4.7)	ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
209	土師質土器 焙烙	67	SD61012	40.0		(6.7)	指頭圧 接合痕	ナデ	2.5Y4/1 黄灰 2.5Y7/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
210	土師質土器 焙烙	67	SD61012	41.4	12.4	7.2	指頭圧，ヨコハケ	ナデ	10YR4/1 褐灰 2.5Y6/1 黄灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
211	土師質土器 焙烙	67	SD61012	26.0		(7.8)	ヨコハケ後指頭圧 接合痕	ヨコハケ	10YR6/2 灰黄褐 10YR6/2 灰黄褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
212	土師質土器 焙烙	67	SD61012	40.0		(4.7)	指頭圧	ヨコハケ	7.5YR4/1 褐灰 10YR5/1 褐灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
213	土師質土器 鉢	67	SD61012	31.0	25.0	20.5	ナデ，指頭圧	ナデ，指頭圧	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
214	土師質土器 焜炉	67	SD61012		22.0	(8.8)	ナデ 草花文	粗いヨコハケ	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
215	瓦質 軒丸瓦	68	SD61012				ナデ 三巴，刻印「玉」	指頭ナデ	N5/0 灰 N5/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
216	土師器 皿	69	SD61020	6.0	4.2	0.9	ナデ	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙 7.5YR8/3 浅黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
217	土師器 皿	69	SD61020	8.0	5.0	1.0	ナデ	ナデ	10YR8/2 灰白 10YR8/2 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
218	土師器 皿	69	SD61020	9.4	5.0	1.2	ナデ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙 7.5YR7/3 にぶい橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
219	土師器 皿	69	SD61020	7.4	5.0	1.5	ナデ	ナデ	10YR8/2 灰白 10YR8/2 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良
220	土師器 皿	69	SD61020	11.0		(1.8)	ナデ	ナデ	10YR8/2 灰白 10YR8/2 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
221	肥前系磁器 皿	69	SD61020		9.0	(3.0)	青磁釉	青磁釉	10Y5/2 オリーブ灰 10Y5/2 オリーブ灰	精良	良好
222	土師質土器 鍋	69	SD61020	40.0		(5.0)	指頭圧	ナデ	10YR5/1 褐灰 10YR6/2 灰黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
223	土師質土器 鍋	69	SD61020	43.0		(4.6)	ナデ	ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙 10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
224	土師質土器 鍋	69	SD61020			(3.5)	指頭圧	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙 7.5YR8/3 浅黄橙	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
225	土師質土器 鍋	69	SD61020	24.0		(5.4)	指頭圧	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙 5YR7/6 橙	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良好
226	土師質土器 鍋	69	SD61020	23.6		(4.9)	ナデ	ナデ	10YR7/1 灰白 10YR8/2 灰白	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良好
227	土師質土器 鍋	69	SD61020	24.0		(4.5)	指頭圧	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
228	土師質土器 鍋	69	SD61020	20.0		(7.3)	指頭圧	ナデ	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
229	土師質土器 鍋	69	SD61020	25.0		(4.0)	指頭圧	ナデ	5YR6/4 にぶい橙 5YR6/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
230	土師質土器 脚	69	SD61020			(6.3)	板ナデ	ヨコハケ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
231	土師質土器 脚	69	SD61020			(16.7)	板ナデ		5YR5/6 明赤褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良好
232	土師質土器 脚	69	SD61020			(6.9)	板ナデ		5YR4/6 赤褐	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
233	土師質土器 脚	69	SD61020			(8.8)	板ナデ		10YR6/4 にぶい黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
234	土師質土器 脚	69	SD61020			(7.8)	指頭ナデ	ナデ	2.5Y8/3 淡黄 2.5Y8/3 淡黄	やや粗 5mm以下の石英・長石含む	良好
235	土師質土器 脚	69	SD61020			(8.1)	ナデ		7.5YR6/3 にぶい褐	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良好
236	土師質土器 鍋	69	SD61020	20.0		(4.5)	指頭圧	板ナデ	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良好
237	土師質土器 鍋	69	SD61020	17.6		(2.9)	ハケ後指頭圧	ヨコハケ	10YR5/2 灰黄褐 10YR5/2 灰黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
238	土師質土器 擂鉢	69	SD61020	23.8		(4.6)	ナデ，指頭圧	ヨコハケ 擂目	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
239	土師質土器 擂鉢	69	SD61020	24.0		(4.3)	ナデ	ナデ 擂目	5YR7/3 にぶい橙 10YR7/3 にぶい黄橙	密 3mm以下の石英・長石含む	良好
240	土師質土器 擂鉢	70	SD61020	32.0		(3.8)	ナデ	ナデ 擂目	10YR7/3 にぶい黄橙 7.5YR6/4 にぶい橙	密 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
241	土師質土器 擂鉢	70	SD61020	34.2		(8.5)	指頭圧後ナデ	ヨコハケ 擂目	5YR7/4 にぶい橙 5YR7/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
242	土師質土器 擂鉢	70	SD61020	37.0		(6.7)	指頭圧後板ナデ	板ナデ 擂目	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
243	土師質土器 擂鉢	70	SD61020		16.0	(7.8)	指頭ナデ	板ナデ 擂目	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
244	土師質土器 擂鉢	70	SD61020		15.0	(6.0)	指頭圧	マメツ 擂目	7.5YR7/3 にぶい橙 10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
245	土師質土器 擂鉢	70	SD61020		12.0	(4.8)	ナデ	ナデ 擂目	2.5Y6/1 黄灰 10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗 5mm以下の石英・長石含む	良好
246	備前焼陶器 擂鉢	70	SD61020		15.6	(5.9)	ナデ	ナデ 擂目	5YR6/3 にぶい橙 7.5YR6/3 にぶい褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
247	備前焼陶器 擂鉢	70	SD61020		17.6	(5.0)	ナデ	ナデ 擂目	2.5Y6/6 橙 2.5Y6/6 橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
248	瓦質 丸瓦	70	SD61020				縄目	布目，コビキA	N6/0 灰 N6/0 灰	やや粗 5mm以下の石英・長石含む	良好

249	瓦質 丸瓦	70	SD61020				ナデ	布目	N4/0 灰 N4/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
250	瓦質 丸瓦	70	SD61020				ナデ	布目	N4/0 灰 N4/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
251	土師質 丸瓦	70	SD61020				縄目	紐痕	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
252	瓦質 丸瓦	70	SD61020				縄目，ナデ	布目，コビキA	N4/0 灰 N4/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
253	瓦質 平瓦	70	SD61020				布目	ナデ	N5/0 灰 N5/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
254	瓦質 平瓦	70	SD61020				ナデ	ナデ	N6/0 灰 N6/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
255	瓦質 丸瓦	71	SD61020				板ナデ	布目，コビキA，紐痕	N5/0 灰 N5/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
256	肥前系陶器 鉢	72	SD61021	34.0		(3.5)	無釉	施釉	7.5YR4/2 灰褐 2.5Y8/1 灰白	精良	良好
257	土師質土器 焙烙	72	SD61021	43.0		(4.7)	指頭圧	ヨコハケ	10YR4/1 褐灰 10YR5/2 灰黄褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良
258	備前焼陶器 擂鉢	73	SD61022	29.0		(11.3)	ナデ 重ね焼き痕	ナデ 擂目	10YR6/1 褐灰 10YR6/2 灰黄褐	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
259	土師質土器 脚	73	SD61022			(9.8)	指頭ナデ		5YR5/3 にぶい赤褐	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良好
260	肥前系陶器 皿	73	SD61022		4.4	(2.4)	高台無釉 砂目	施釉 砂目	5Y8/1 灰白 5Y8/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
261	肥前系陶器 皿	73	SD61022		4.4	(1.8)	高台無釉 砂目	施釉 砂目	2.5Y8/1 灰白 2.5Y8/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
262	肥前系陶器 皿	73	SD61022		4.0	(2.6)	高台無釉 砂目	施釉 砂目	7.5YR6/3 にぶい褐 5Y7/1 灰白	精良	良好
263	肥前系陶器 皿	73	SD61022		4.8	(1.4)	高台無釉 糸きり	施釉 砂目	7.5YR6/3 にぶい褐 2.5Y8/1 灰白	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良好
264	肥前系陶器 皿	73	SD61022		5.4	(2.3)	高台無釉	施釉 砂目	2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	精良	良好
265	肥前系陶器 皿	73	SD61022		4.6	(1.6)	高台無釉	施釉	2.5Y6/2 灰黄 5Y7/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
266	土師質土器 鍋	75	SD61023	26.0		(7.5)	格子目タタキ	ヨコハケ	5Y6/1 灰 5Y6/1 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良
267	土師質土器 鍋	75	SD61023	28.4		(4.5)	格子目タタキ	ヨコハケ	5Y6/1 灰 5Y6/1 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良
268	土師質土器 釜	75	SD61023	26.6		(6.3)	指頭圧	指頭圧，ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐 5YR6/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
269	備前焼陶器 擂鉢	75	SD61023	34.0		(3.7)	ナデ 重ね焼き痕	ナデ 擂目	5YR5/2 灰褐 7.5YR6/2 灰褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
270	肥前系陶器 皿	75	SD61023	12.4	4.4	3.5	高台無釉 砂目	施釉 砂目	2.5Y7/1 灰白 5Y6/2 灰オリーブ	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
271	肥前系陶器 皿	75	SD61023	14.0	4.1	4.2	高台無釉	施釉 砂目	2.5Y7/3 浅黄 2.5Y7/3 浅黄	精良	良好
272	肥前系陶器 皿	75	SD61023		3.8	(1.0)	高台無釉	施釉	10YR6/3 にぶい黄橙 2.5Y5/4 黄褐	精良	良好
273	肥前系陶器 鉢	75	SD61023		7.4	(2.4)	高台無釉	施釉	5YR6/4 にぶい橙 10Y7/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
274	土師質土器 円盤	75	SD61023			(4.3)	マメツ	マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
275	瓦質 軒平瓦	75	SD61023				マメツ 唐草文	マメツ	2.5Y4/1 黄灰 2.5Y4/1 黄灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良
276	土師質 平瓦	75	SD61023				布目	縄目	5YR5/6 明赤褐 5YR5/6 明赤褐	粗 5mm以下の石英・長石含む	良好
277	土師質土器 鍋	76	SE61001	24.0		(3.6)	ナデ	粗いヨコハケ	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
278	土師質土器 脚	76	SE61001			(10.1)	ナデ		7.5YR5/4 にぶい褐	粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
279	土師質土器 脚	76	SE61001			(10.1)	ナデ		7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
280	産地不明陶器	76	SE61001		5.0	(2.5)	高台無釉	施釉	2.5Y8/1 灰白 10YR3/3 暗褐	精良	良好
281	須恵器 こね鉢	77	SE61002	27.0		(4.3)	指頭圧，ナデ	ナデ	10YR6/1 褐灰 10YR6/1 褐灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
282	須恵器 こね鉢	77	SE61002	27.2		(5.9)	ナデ	ナデ	2.5Y8/1 灰白 2.5Y8/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
283	土師質土器 脚	77	SE61002			(7.8)	ナデ		5YR5/4 にぶい赤褐	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良好
284	土師質土器 皿	77	SE61002	5.0	4.3	0.7	ナデ	ナデ	10YR8/2 灰白 10YR8/2 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
285	土師器 坏	77	SE61002	9.0		(1.3)	マメツ	マメツ	7.5YR8/3 浅黄橙 7.5YR8/3 浅黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
286	土師器 坏	77	SE61002	10.0	6.6	(2.6)	マメツ	マメツ	7.5YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
287	土師器 坏	77	SE61002	11.6	7.6	2.5	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
288	土師器 坏	77	SE61002	10.8	6.7	2.5	ナデ	ナデ	10YR8/2 灰白 10YR8/2 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
289	土師質土器 焙烙	78	SK61005	44.0		(6.5)	指頭圧 接合痕	ヨコハケ後指頭圧	10YR3/2 黒褐 10YR4/2 灰黄褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良
290	土師質土器 甕	79	SK61011	32.0		(11.0)	格子目タタキ	ヨコハケ	10YR7/2 にぶい黄橙 10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良
291	土師質土器 脚	82	SK61020			(7.8)	ナデ		2.5Y8/2 灰白	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
292	土師器 皿	82	SK61020	10.0	4.8	2.2	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
293	肥前系陶器 皿	83	SK61021	13.2		(2.7)	高台無釉	施釉	2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良好
294	肥前系陶器 皿	83	SK61021	9.6		(2.5)	高台無釉	施釉	2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
295	肥前系陶器 碗	83	SK61021		3.6	(2.0)	高台無釉	施釉	7.5YR6/4 にぶい橙 5Y5/1 灰	精良	良好
296	肥前系陶器 皿	83	SK61021		3.6	(2.0)	高台無釉	施釉 胎土目	10YR7/3 にぶい黄橙 2.5Y7/1 灰白	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
297	肥前系陶器 皿	83	SK61021	12.6	4.6	3.3	施釉	施釉 砂目，刷毛目	5Y8/1 灰白 5Y8/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
298	土師質土器 擂鉢	83	SK61021	28.8		(6.9)	マメツ	マメツ 擂目	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良

299	土師質 軒平瓦	85	SK61033				布目 唐草文(片山池1号窯同笵)	板ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐 7.5YR6/3 にぶい褐	粗 5mm以下の石英・長石含む	良好
300	瀬戸美濃系陶器 碗	84	SK61035	11.0		(4.4)	施釉 笹文染付	施釉 圏線染付	2.5Y8/2 灰白 2.5Y8/2 灰白	精良	良好
301	土師質土器 擂鉢	85	SK61035			(4.1)	指頭圧, ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙 5YR7/3 にぶい橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
302	土師質土器 蓋	85	SK61035	27.4	20.2	3.0	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
303	土師質土器 煨炉	85	SK61035	28.6		(6.5)	ナデ 凹圧突帯	ヨコハケ	5YR4/2 灰褐 5YR4/2 灰褐	やや密 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良
304	土師質土器 煨炉	85	SK61035	27.6		(5.8)	ナデ 凹圧突帯	ヨコハケ	7.5YR5/4 にぶい褐 10YR4/2 灰黄褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良
305	堺焼陶器 擂鉢	85	SK61035	28.0		(7.1)	ナデ	ナデ 擂目	7.5R4/4 にぶい赤 2.5YR3/4 暗赤褐	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良好
306	堺焼陶器 擂鉢	85	SK61035	32.0		(4.7)	回転ヘラケズリ	ナデ 擂目	2.5YR6/4 にぶい橙 2.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
307	土師質土器 焙烙	85	SK61035	42.0		(3.2)	指頭圧	ナデ	10YR3/1 黒褐 2.5YR5/1 黄灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
308	土師質土器 焙烙	85	SK61035	40.0		(2.8)	指頭圧	ヨコハケ	7.5YR4/1 褐灰 10YR7/3 にぶい黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
309	土師質土器 甕	85	SK61035	60.4		(8.2)	ナデ 斜格子文	ナデ	5YR5/6 明赤褐 5YR5/6 明赤褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良
310	土師質土器 鍋	86	SK61079	32.0		(3.4)	マメツ	マメツ	2.5YR5/6 明赤褐 2.5YR5/6 明赤褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良
311	土師質土器 擂鉢	86	SK61079	25.6		(4.3)	ヨコハケ	ヨコハケ 擂目	10YR8/3 浅黄橙 2.5Y8/3 淡黄	密 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
312	土師質 丸瓦	86	SK61079				マメツ	マメツ	5Y6/1 灰 2.5Y6/2 灰黄	粗 5mm以下の石英・長石含む	良好
313	瓦質 丸瓦	86	SK61079				板ナデ	布目, 紐痕	2.5Y7/2 灰黄 7.5Y6/1 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
314	肥前系陶器 皿	87	SK61081	16.0		(2.0)	施釉	施釉	5Y6/2 灰オリーブ 5Y6/2 灰オリーブ	精良	良好
315	肥前系陶器 鉢	87	SK61081		8.8	3.9	高台無釉	施釉 砂目, 重ね焼き痕	7.5YR6/3 にぶい褐 5Y5/2 灰オリーブ	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
316	備前焼陶器 擂鉢	89	SK61086	34.8	15.4	13.3	ナデ	ナデ 擂目	10R5/6 赤 10R5/6 赤	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
317	肥前系陶器 鉢	89	SK61086	33.0	13.4	10.5	高台無釉 砂目	施釉 砂目, 刷毛目, 銅緑釉掛流し	7.5YR5/4 にぶい褐 2.5Y8/2 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
318	肥前系陶器 鉢	89	SK61086		13.0	(4.3)	無釉	施釉 刷毛目	5YR3/1 黒褐 2.5Y8/1 灰白	精良	良
319	土師質土器 焙烙	89	SK61086	40.0		(3.4)	指頭圧	ヨコハケ	7.5YR4/1 褐灰 10YR6/3 にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
320	肥前系磁器 皿	89	SK61086	12.4	4.2	(3.2)	高台無釉	施釉 蛇ノ目釉ハギ, 染付	10Y7/1 灰白 10Y7/1 灰白	精良	良好
321	瀬戸美濃系陶器 瓶	89	SK61086			(2.5)	施釉 染付	無釉	2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	精良	良好
322	土師質土器 脚	89	SK61086			(6.5)	指頭ナデ		7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 5mm以下の石英・長石含む	良好
323	瓦質土器 獣頭	89	SK61086						10Y5/1 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
324	土師器 皿	90	SK61094	8.6	4.0	1.8	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
325	輸入磁器 皿	91	SK61122			(1.9)	施釉 草花文	施釉 草花文	10Y8/1 灰白 10Y8/1 灰白	精良	良好

木器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量(cm)			特　　徴
				長	幅	厚	
W1	建築部材	28	NR06	13.1	13.1	3.9	先端部に切断痕。
W2	板材	28	NR06	48.5	23.6	2.2	突出部および抉りあり。表面に線状の鉄工具痕あり。突出部のみ炭化。

鉄器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量(cm)			特　　徴
				長	幅	厚	
K1	釘	75	NR06	6.5	1.3	1.3	先端部に切断痕。

石器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量(cm)			重量(g)	石材	特　　徴
				長	幅	厚			
S1	石庖丁	4	第8層	2.2	2.6	0.3	4.1	サヌカイト	刃部から側縁部にかけて残る。抉りあり。
S2	石庖丁	4	第8層	3.6	3.5	0.6	12.0	サヌカイト	半分残る。抉りあり。刃部は両面より調整。
S3	石庖丁	17	NR03	6.4	2.5	0.3	10.8	サヌカイト	抉りあり。刃部は両面より調整。
S4	削器	29	SK32002	7.1	4.2	1.6	51.8	サヌカイト	両面より細かく調整。側縁部の1辺が抉り状に凹む。
S5	石鏃	31	NR04	12.6	6.7	1.2	186.1	サヌカイト	完形。側縁部に自然面を残す。
S6	石庖丁	31	NR04	4.1	10.3	0.7	56.1	サヌカイト	完形。抉りあり。刃部は両面より調整。
S7	剥片	31	NR04	6.9	11.6	1.6	241.9	サヌカイト	背部と側縁部に自然面を残す。
S8	剥片	31	NR04	8.4	10.4	1.2	183.3	サヌカイト	両面より調整し, 刃部をつくる。側縁部は自然面を残す。
S9	削器	33	NR07	4.5	3.6	1.1	19.5	サヌカイト	側縁部は切断面を残す。刃部は両面より調整。
S10	石臼	52	SE51001	27.5	12.2	7.5	−	凝灰岩	半分のみ残る。中央から放射状に線刻あり。円孔あり。
S11	砥石	62	SK51031	10.2	3.9	0.6	72.0	流紋岩	長方形を呈する。全面に擦痕あり。
S12	石臼	67	SD61012	30.1	16.9	10.2	−	凝灰岩	半分のみ残る。円孔あり。
S13	石臼	71	SD61020	29.0	28.9	6.7	−	凝灰岩	完形。同心円状の線刻あり。円孔あり。
S14	石臼	73	SD61022	8.9	8.6	6.4	387.7	凝灰岩	一部のみ残る。円孔あり。
S15	柱状片刃石斧	80	SK61012	5.6	2.8	2.1	69.3	緑泥片岩	先端部のみ残る。
S16	石臼	80	SK61012	30.0	20.0	10.2	−	凝灰岩	半分のみ残る。円孔あり。
S17	竈	81	SK61012	42.9	32.4	4.3	−	凝灰岩	内面に工具痕あり。内面に被熱痕・煤痕あり。
S18	石臼	84	SK61033	14.3	19.0	10.9	−	凝灰岩	一部のみ残る。円孔あり。
S19	石臼	88	SK61085	25.6	14.3	7.2	−	凝灰岩	半分のみ残る。円孔あり。
S20	石臼	88	SK61085	31.0	17.3	9.7	−	凝灰岩	半分のみ残る。円孔あり。

写　真　図　版

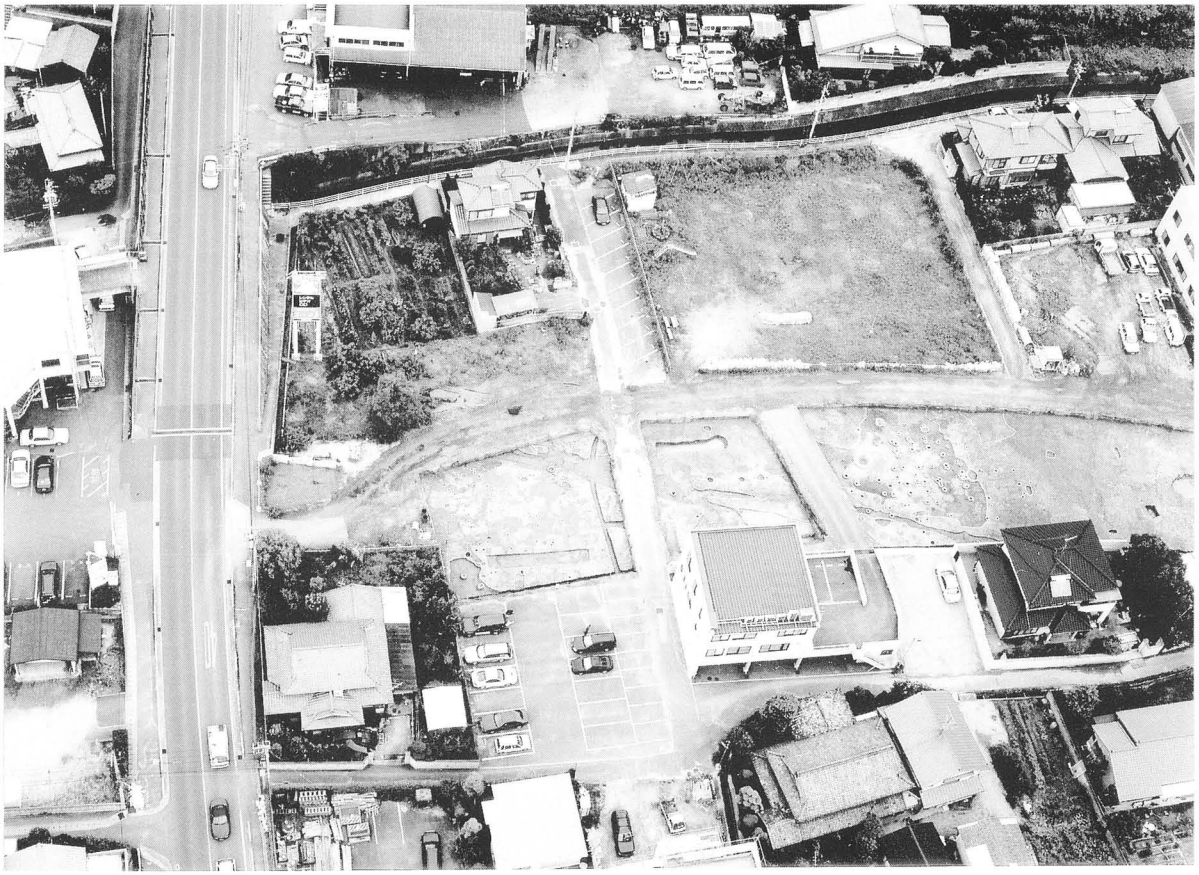


写真１　Ⅰ・Ⅱ区全景（南から）

写真２　Ⅰ～Ⅲ区全景（南から）

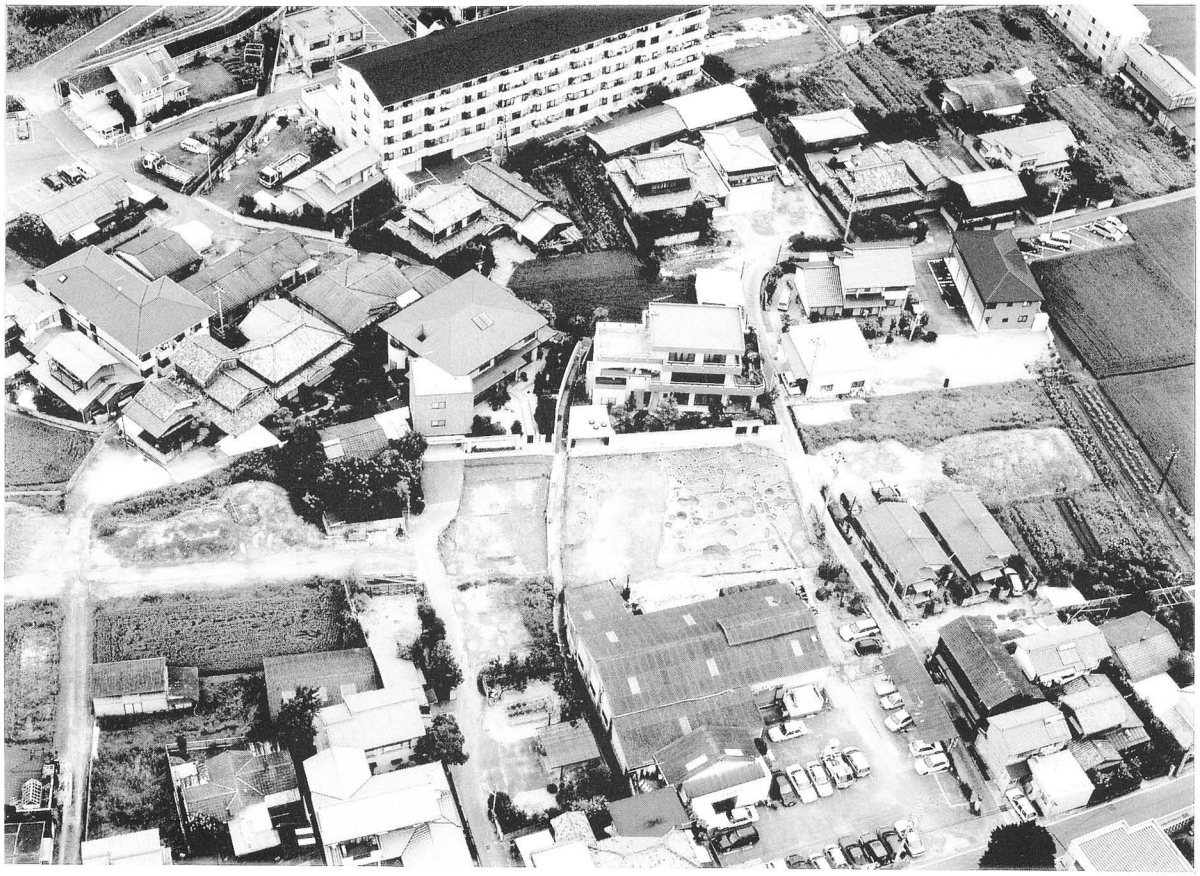


写真３　Ⅳ・Ⅴ区全景（南から）

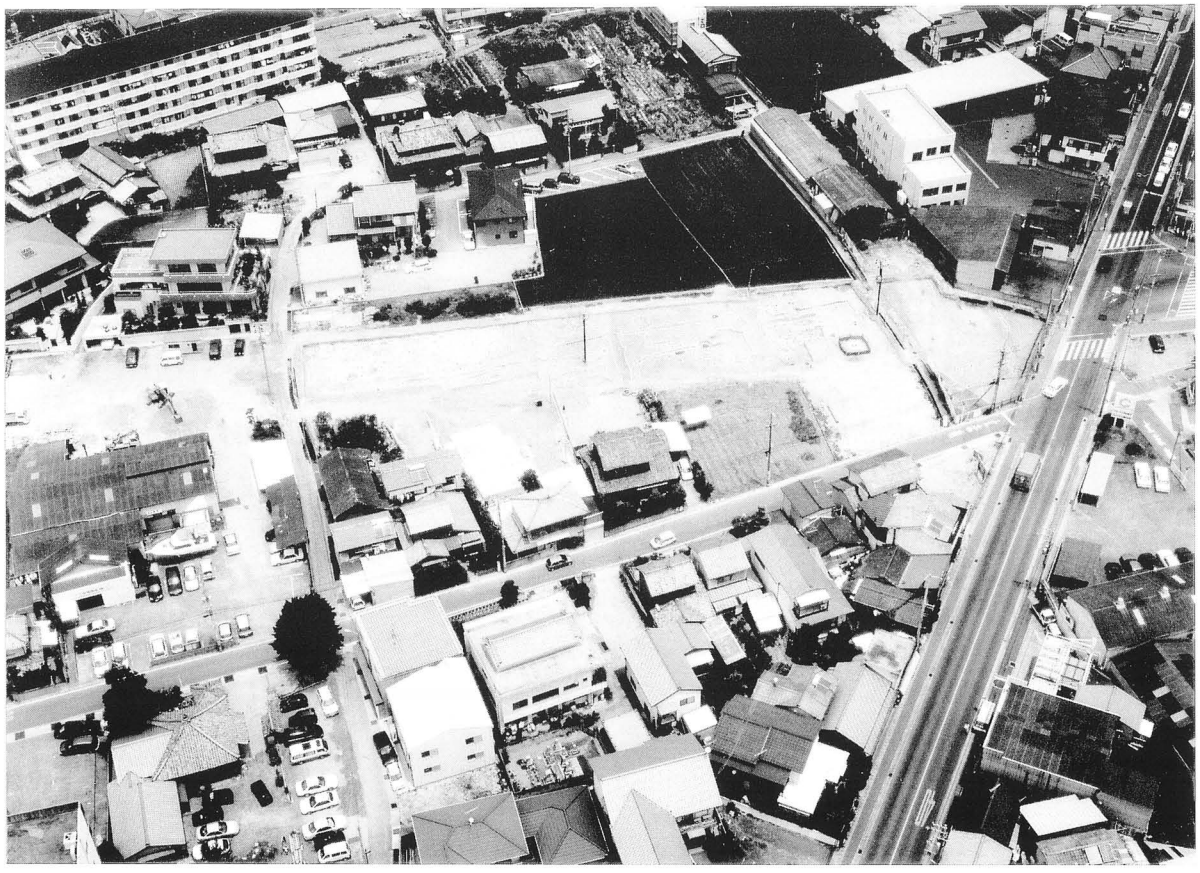


写真４　Ⅵ・Ⅶ区全景（南から）

写真５　作業風景（Ⅲ区東から）

写真６　Ⅰ区南壁土層（東から）

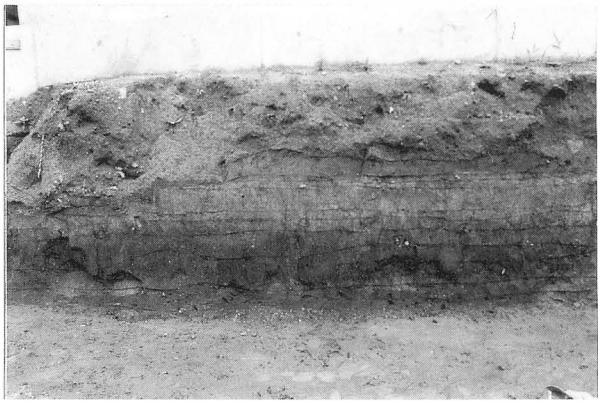


写真７　Ⅰ区南壁土層（北から）

写真８　Ⅰ区　第２遺構面完掘状況（西から）

写真９　Ⅰ区小区画水田（南から）

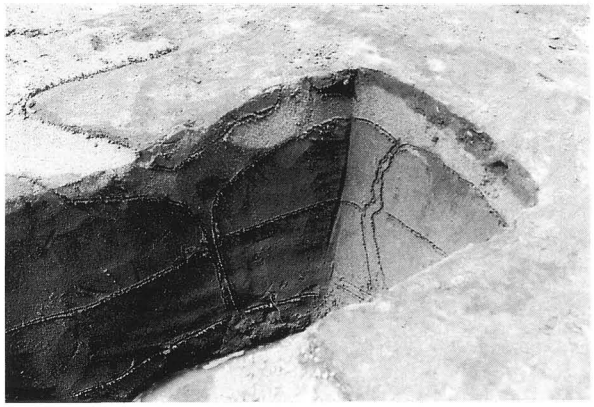


写真 10　Ⅰ区検出噴砂（西から）

写真 11　Ⅰ区　検出噴砂（北から）

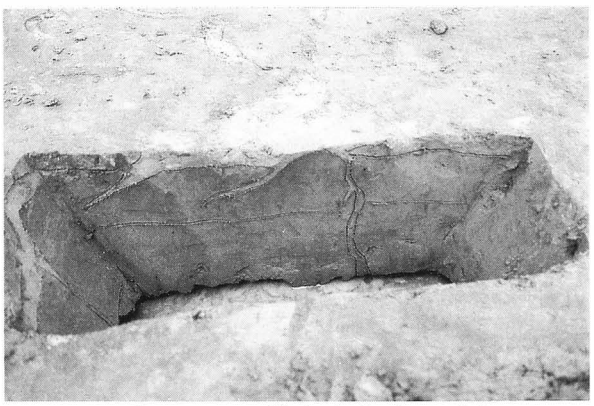


写真 12　Ⅰ区検出噴砂（西から）

写真 13　Ⅱ区第Ⅰ遺構面完掘状況（東から）

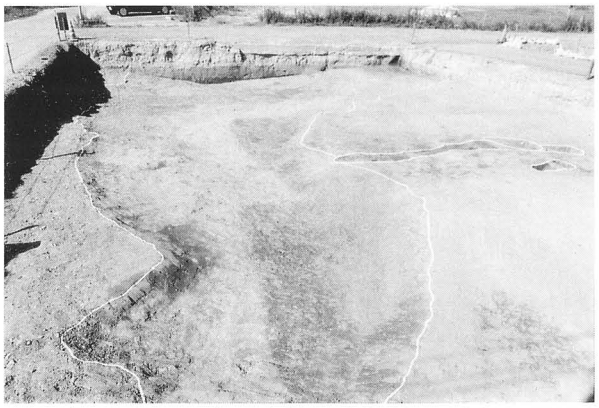


写真 14　Ⅱ区第 2 遺構面完掘状況（南から）

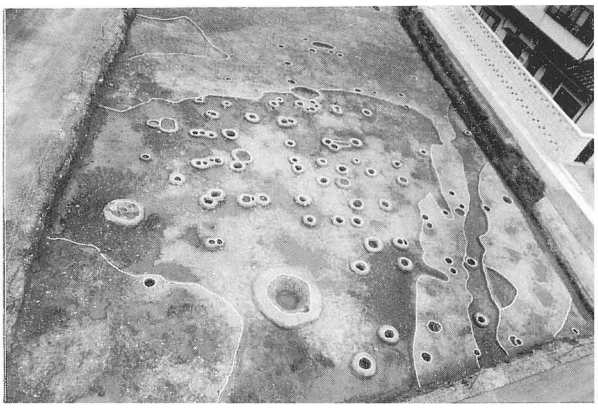


写真 15　Ⅲ区 NR04 及び掘立柱建物群（西から）

写真 16　Ⅲ区 NR06 西肩（北から）

写真 17　Ⅲ区 NR05 西肩（南から）

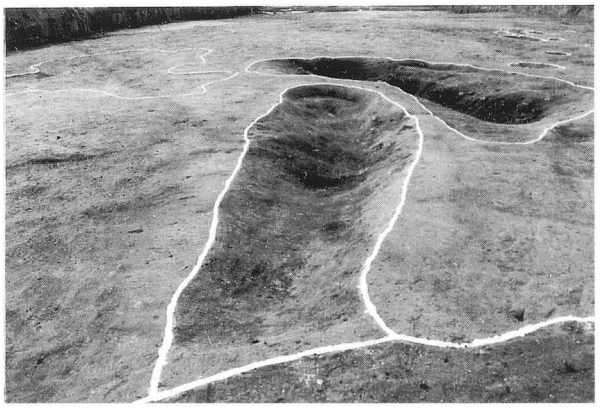


写真 18　Ⅲ区 SK32004（東から）

写真 19　Ⅲ区 SK32002（東から）

写真 20　Ⅲ区検出噴砂（西から）

写真 21　Ⅲ区 NR06（南から）

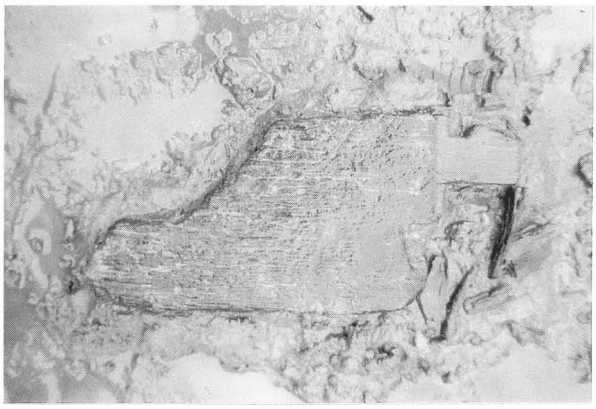


写真 22　Ⅲ区 NR06 木器出土状況（北から）

写真 23　Ⅲ区 NR06 木器出土状況（北から）

写真 24　実測風景（南から）

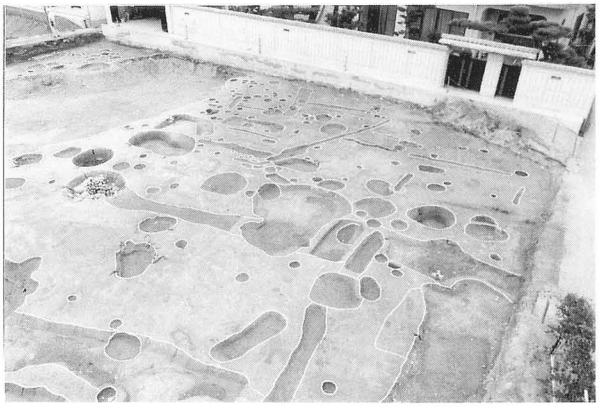


写真 25　Ⅴ区完掘状況（南から）

写真 26　Ⅴ区 SE51001 上面（東から）

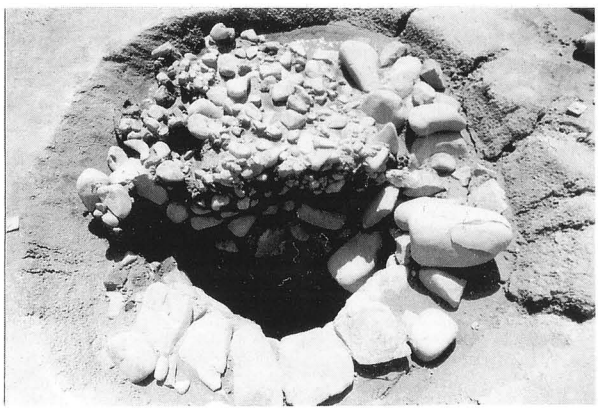


写真 27　Ⅴ区 SE51001 断面（西から）

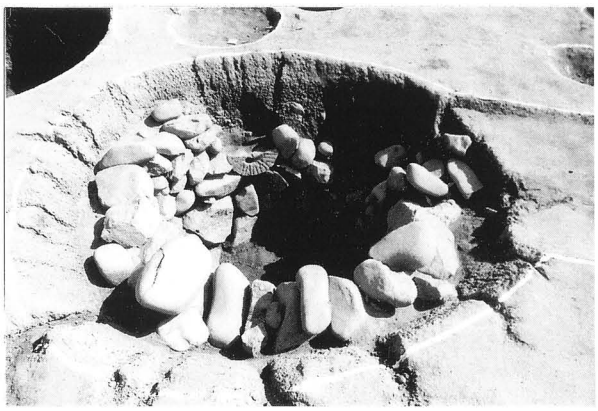


写真 28　Ⅴ区 SE51001 完掘状況（南から）

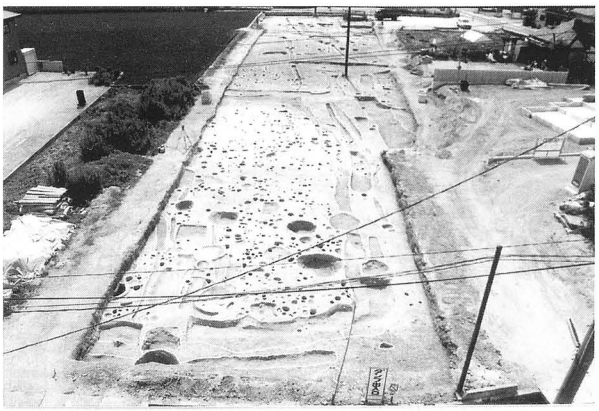


写真 29　VI区完掘状況（西から）

写真 30　VI区 SD61020（西から）

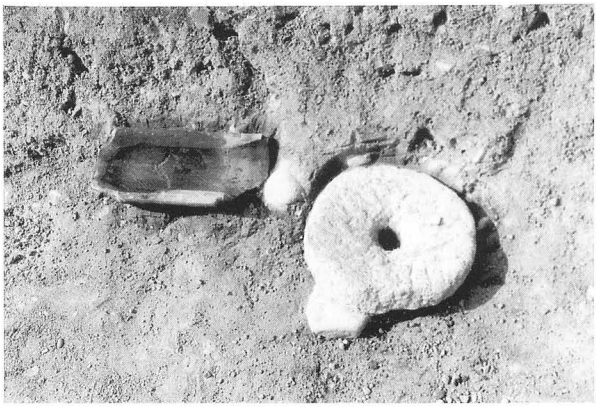


写真 31　VI区 SD61020 遺物出土状況（北から）

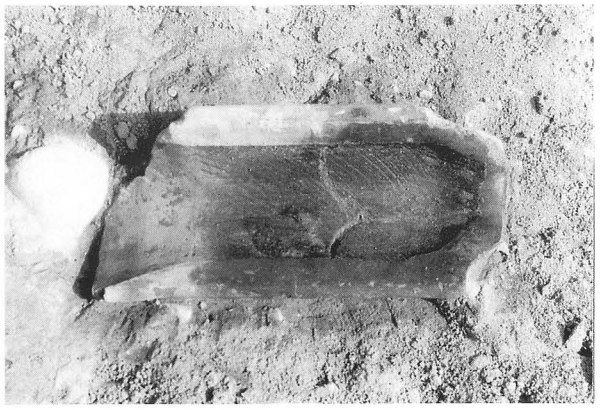


写真 32　VI区 SD61020 遺物出土状況（南から）

写真 33　VI区 SD61020（西から）

写真 34　VI区 SD61023（西から）

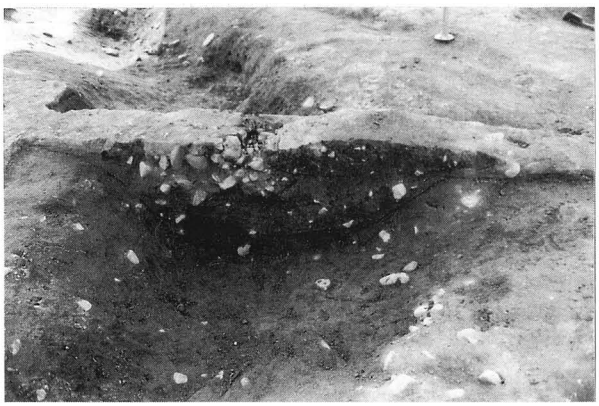


写真 35　VI区 SD61023 断面（北から）

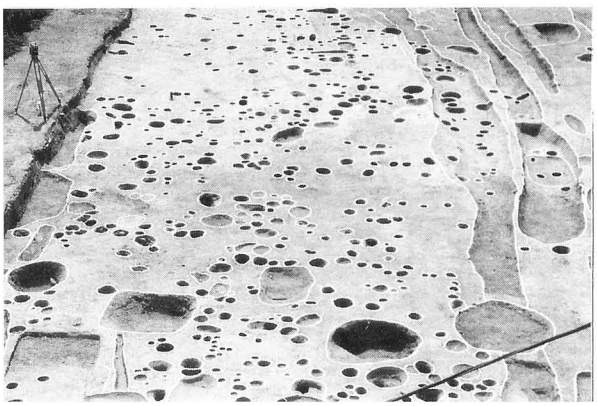


写真 36　VI区 SD61023 内ピット群（西から）